

# 古代王権の成長と韓日関係

—任那問題を含んで—

金泰植

## 序論

### 第1章 高句麗と百済の争覇および新羅・加耶・倭の動向

#### 第1節 高句麗・百済の発展と加耶・倭の交流

1. 高句麗王権の成長と楽浪の併合
2. 前期加耶と倭の交流
3. 百済王権の成長と中央集権体制の整備
4. 神功紀49年条の解釈と七支刀

#### 第2節 高句麗と百済の争覇およびその結果

1. 高句麗の中央集権体制の整備および新羅との連結
2. 広開土王陵碑に見える倭軍の性格
3. 百済の大敗および前期加耶連盟の解体

### 第2章 高句麗の南進と百済・加耶・新羅・倭の抵抗

#### 第1節 5世紀前半の朝鮮半島と日本列島

1. 高句麗と百済の国際交流網の構築
2. 新羅6部体制の形成と対外関係
3. 加耶地域の勢力構図の変化
4. 日本列島の文化変動とその性格

#### 第2節 高句麗の膨脹と朝鮮半島南部の動向

1. 高句麗の南進と百済の南遷
2. 大加耶の台頭と対倭交流
3. 高句麗に対する新羅の対応
4. 顕宗紀3年是歳条の解釈

#### 第3節 倭の5王の爵号と百済の湖南西部地域の経略

1. 高句麗王・百済王・倭王の將軍号
2. 倭の5王の諸軍事号の実効性の可否

3. 倭王武の上表文と首長統合体の形成
4. 湖南西部地域の前方後円墳の問題

### 第3章 百済・倭の連結と新羅の加耶併合

#### 第1節 加耶をめぐる百済と新羅の競争

1. 百済の復興と湖南東部地域の併合
2. 新羅王権の成長と中央集権体制の整備
3. 大加耶の古代国家形成と南部地域の一部の喪失
4. 磐井の乱と交流パターンの変化

#### 第2節 新羅の膨脹と加耶の消滅

1. 加耶の南北分裂
2. 百済の統治体制の再整備と外交的成功
3. 新羅の漢江流域併合
4. 加耶の滅亡

#### 第3節 所謂‘任那日本府’の性格

1. ‘任那日本府’理解の基準
2. 任那支配説の4種
3. 外交交易説の4種
4. 安羅倭臣館の性格とその官人たちの行跡

#### 第4節 三国の鼎立と倭

1. 三国の安定と統治体制の補完
2. 百済の文化の伝授と倭王権の成長
3. いわゆる‘任那調’の問題

### 結論

#### (要旨)

4から6世紀は、朝鮮半島と日本列島を含む東北アジアの歴史において非常に活発に成長した時代であった。高句麗と百済は中国の南北朝時代の国際条件を利用して成長し、新羅・加耶・倭は高句麗と百済から文化をもう一度受容して成長した。この時期に対する韓日関係史は加耶史の展開過程を中心にして新たに定立されるべきである。

4世紀に入り、高句麗と百済は律令と仏教などを土台に中央集権的な古代国家体制を完成し、朝鮮半島の覇権を勝ち取るために軍事的対決を起こし、朝鮮半島南部の新羅と加耶はそれに付随的に連動した。日本列島では河内を中心にした倭王権が、加耶を媒介にして百済と交流するようになった。

広開土王陵碑文に見える‘倭賊’または‘倭寇’とは日本畿内の大和勢力の派遣軍だが、これは加耶および百済の意図により対新羅戦線や、あるいは高句麗との戦争に投入されており、実像は加耶一倭

の連合軍であった。しかし、戦争で高句麗が勝利すると百済は洛東江流域を仲介基地とする対倭交易網を喪失するようになり、金海の金官加耶中心の前期加耶連盟は大きな打撃を被り解体した。

5世紀に高句麗は東北アジアの中核的仲介交易者に成長して漢江以南に対する南進政策を推進し、百済は新羅、加耶などと同盟を結びこれを防ぎ、その過程で新羅は古代国家を成立させた。加耶地域は高句麗－新羅連合軍の任那加羅征伐以後、大きな打撃を受け弱化した。高霊の伴跛国は鉄鉾山を開発しつつ発展し、大加耶へと国名を変え、後期加耶連盟を建立した。

5世紀以後、日本列島には加耶から援助工人と流亡民、すなわち加耶系移住民が来て、鉄製の甲冑、馬具、陶質土器などの先進文物が普及し変化が起き、朝鮮半島と倭の交易は金海の代わりに高霊の大加耶を中心に続けられた。『宋書』倭国伝に見える倭の五王の七国諸軍事号からは、朝鮮半島南部を軍事力で統率可能な権利を中国から認められるようにしたと考えられるが、それは倭王の意図に過ぎず、実効性を持たない行為であった。

6世紀になり、百済は漢江に及ぶ領土を回復し、加耶勢力圏にあった‘任那4県’、すなわち湖南東部の蟾津江流域を占領し、新羅は律令の頒布、仏教の公認などを通じて中央集権体制を完備した。大加耶は百済との対決の過程で中央集権的支配体制を整備し、初期の古代国家を成立させたが、結局は新羅に併合された。

百済は倭に五経博士と僧侶を送り儒学と仏教などを伝えたので、この時期を前後して古代韓日交流のパターンは、既存の百済－加耶－九州倭－近畿倭を経る形式から、百済－近畿倭へ直結する形式に転換した。『日本書紀』に見える‘任那日本府’の性格については任那支配説が退潮し百済や加耶との外交や交易を中心とする説へ変化しており、その用語も事実に近い安羅倭臣館に交替するのが妥当といえる。

(キーワード)

高句麗、百済、新羅、加耶、倭、広開土王陵碑文、倭の五王、任那日本府

## 序論

4～6世紀は、朝鮮半島と日本列島を含む東北アジアの歴史において非常に活発な成長を遂げた時代であった。この時期に中国は五胡十六国時代を経て南北朝時代へと整備され、万里の長城の内側で中国人である漢族と異邦人である胡族が共存し民族的、文化的な融合を成した。北側では新たな統治者として台頭した胡族が、漢族の体制と文化を受容しつつ中国化され、南側では北側から移動した中国系僑民たちが新たな地域へ中原文化の拡散を試みた<sup>1</sup>。

その時期に北魏は南側では南朝諸国家と対決し、北側では遊牧帝国である柔然と対立する過程で東方の強国である高句麗の独自の勢力圏を認識し、相互交易を通じた共存を模索した。南朝の東晋・

<sup>1</sup> 朴漢濟、1988『中國中世胡漢體制研究』、一潮閣。

宋・済・梁などは北魏と対決しながら百済と活発に交易しつつも、時には高句麗との交渉も厭わなかった。高句麗と百済はこうした国際環境を最大限利用して成長したのであり、その外郭の新羅・加耶・倭もまた高句麗と百済の対決の過程で両国から文化を伝授され国家的成長を遂げた。

この時期には朝鮮半島に高句麗・百済・加耶・新羅という4個の文化の中心が根付いており、朝鮮半島のように明確ではないものの日本列島にも多角的な諸文化の中心が成立していたため、‘韓日関係’という単純な用語のもとで諸国間の国際関係を説明するのは容易ではない。特に韓国史の研究者は平素に日本列島を念頭に置いた研究の伝統がほとんど存在しないので、4～6世紀の韓日関係史を体系的に叙述することは不可能に近いと言わざるをえない。

一方で日本史の研究者の場合は、状況がやや違うようである。日本古代史を叙述することは、中国史書の倭人伝や『三国史記』に見える倭人たちの活動を研究することにあつたので、日本古代史学界では韓日関係史に対する研究の伝統が深い。また、史料的な信憑性の問題はあるとしても『日本書紀』の該当時期の諸記事は相当数が朝鮮半島諸国との関係を基準にしているため、これに関する研究も豊富である。つまり、日本の古代史研究はそれ自体が韓日関係史に基礎をおくものであったといえよう。

しかし日本での古代韓日関係史研究がいくら深いとしても、これは多分に自国民だけのための説明体系であつて、それが相手国である他国民にまで説得しうる客観的なものであるかは疑問の余地がある。その中で過去の一部の研究は朝鮮半島南部地域を支配、または経営の対象として古代から日本の優越性を宣揚することもあつた<sup>2</sup>。近來になり、日本古代史は考古学的発掘と金石文・木簡研究などの証拠資料を通じて、漸進的に客観性を高めているが、過去の片鱗はいまだに日本の様々な概説書と教科書に残っている。

それに比べ韓国での古代韓日関係史研究は、分量も絶対的に不足しているだけでなく体系的でもない。幾らかの研究は存在するとしても、いわゆる‘任那日本府説’の説明体系を克服するために、わけも無く、否定を繰り返したり、あるいは『日本書紀』記事の主語を大部分倭王ではなく、百済王へ変えて考えなければならないとしたり<sup>3</sup>、そこに見える百済・新羅・加耶などは朝鮮半島ではない日本列島の分国として考えるべきである<sup>4</sup>というような極端な前提条件を主張する場合が多かつた。

特に古代韓日関係史で最も問題になることは、4～6世紀の加耶に対する先入観である。今や韓日両国の古代史研究者の間には任那日本府説を容認すると公言する人は極めて稀である<sup>5</sup>。任那日本府説は20世紀前半期にかけて『日本書紀』、『宋書』倭人伝、広開土王陵碑文などの検討を通じて傍証された当時の学問的成果のようであるが、同時にそれは日本の朝鮮侵略および植民地主義の肯定に寄与しようとする目的が存在したのであり<sup>6</sup>、よってこれが21世紀の現在において説得力を失うのは当然である。

ところで詳細に考察すれば、すべての人が合意して否定したものは、結局、4世紀後半に倭軍が加

<sup>2</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、大八洲出版;1956再版、吉川弘文館。

<sup>3</sup> 千寛宇、1977-1978「復元加耶史」上・中・下、『문학과 지성(文学と知性)』28-29-31;1991『加耶史研究』、一潮閣。

<sup>4</sup> 金錫亨、1966『초기조일관계연구(初期朝日関係研究)』、社會科學出版社;1988『초기조일관계사(하)(初期朝日関係史(下))』、社會科學出版社。

<sup>5</sup> 具体的な研究史については、本稿第3章第3節参考のこと。

<sup>6</sup> 山崎雅稔、2002「広開土王時代の高句麗の南進と倭王権の展開」、『広開土太王과 高句麗 南進政策(広開土太王と高句麗の南進政策)』、高句麗研究会編、學研文化社、97頁。

耶地域を軍隊で征伐した後にこれを支配し、その統治機関として任那日本府が存在したという論理のみである。その仮説を否定したと公言しても、それに似た基調を土台に加耶を考える視角、すなわち加耶を軽視する諸論理がいまだに多く存在しているのである<sup>7</sup>。

こうして最近の研究でも倭軍は4世紀後半に加耶を征伐しなかったが、6世紀前半に加耶は百済と新羅などに威嚇され、倭国に救援を要請したので、その後加耶は倭の強い影響力下に置かれるようになった<sup>8</sup>、あるいはその以前にも加耶地域はこうした論理の延長で、ある程度倭の影響力下にあったとみる見解が存在する<sup>9</sup>。これらの諸認識を整理すれば、加耶は鉄資源を生産していたが、諸小国で分立し、また弱体でもあり、よって日本の大和朝廷に対して依存関係を結んでいたというのである。

このようにすでに加耶支配機構としての任那日本府の存在を認める研究はほぼ存在しないが、にもかかわらず倭王権が加耶に強い影響力を及ぼしていたとする。人はみな主体的に世界を見るのでこれを責めることはできない。史料が少ない古代史の特性上、周辺のある地域をスケープゴート(scapegoat)とすれば、歴史の展開状況を説明するのは容易である。しかし、それが歴史的事実に違背したとなれば問題である<sup>10</sup>。

ある人々は、加耶は諸小国が分立し中央集権体制を完成できず弱体であり、一つの国家として扱うことはできないという。しかし、西洋中世の封建諸国家は中央集権化を遂げられなかったが、その時代の歴史を認めないと言えるであろうか。また、ギリシャが小国に分立していたので、周辺の諸勢力の強い影響力または支配下にあったのは当然であると言えるであろうか。より重要なのはその勢力の実体と与件および機能である。

遅くとも3世紀以後に加耶連盟は高句麗・百済・新羅と関係を結ぶ時、対外的に一つの政治体としての役割を果たし、長期間に渡り文化的な蓄積を土台に対外的には古代国家と同じ様相を見せ、479年に中国南齊から冊封を受けもし、後述のように510年代の大加耶は北部加耶地域を包括する初期古代国家を形成した。加耶連盟がいくら中央集権的な古代国家体制を完成させていないとしても、朝鮮半島のこの存在を除いては、少なくとも4世紀から6世紀まで300年間の歴史を正しく構成することはできない。

かくして実際に古代史分野では、加耶史をめぐる韓日関係史の相互の反省および研究の振興のために韓日歴史共同研究委員会が成立したのではないかと思うのである。第1期の3年間の研究は非常に活発で、また真摯なものであった。互いに相手方の研究者の存在を意識しながら、4～6世紀の韓日関係に対して学説史を整理し、その問題点を論じる長編の諸研究が発表された<sup>11</sup>。古代史を担当する第1分科の第1期の研究では、足りない部分が多いとはいえ、既存の韓日関係に対する偏見を一部払拭し、若干の進展を見せたのは明白である。つまり、4～6世紀に倭軍の加耶征服や支配は無く、昨今

<sup>7</sup> 金泰植、2004「加耶史軽視論への批判」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集、佐倉:国立歴史民俗博物館、566頁。

<sup>8</sup> 大山誠一、1980「所謂'任那日本府'の成立について」上・中・下、『古代文化』32-9-11-12、京都:古代学協会;1999『日本古代の外交と地方行政』、東京:吉川弘文館。

<sup>9</sup> 鈴木英夫、1996『古代倭国と朝鮮諸国』、青木書店。

<sup>10</sup> 金泰植、2004、前掲論文、566～567頁。

<sup>11</sup> 韓日歴史共同研究委員会、2005『韓日歴史共同研究報告書第1巻』、ソウル:韓日歴史共同研究委員会;日韓歴史共同研究委員会、2005『日韓歴史共同研究報告書第1分科篇』、東京:日韓歴史共同研究委員会。

の専門の研究者で任那日本府説を主張、信用するような人はいないという点を再同意したのである<sup>12</sup>。

しかしその諸研究は非常に専門的かつ複雑なものであったので、教科書や概説書執筆者のための指針にならなかったようである。こうした反省を踏まえ、第1分科の第2期の研究委員はもう少し広い時期にわたり概説的な叙述に基盤を据えた韓日関係史を執筆しようと努力した。それでも両国の研究状況を忠実に反映する専門性も失わず、執筆者自身の判断を明確に提示する必要がある。本稿はこうした趣旨のもとで作成されている。

これは実に至難の課題と言わざるをえない。韓国古代史で4～6世紀は高句麗・百済・新羅・加耶の4国の王権が相互の葛藤の中で段階的に成長していく力動的な時代であり、そうした点は倭の王権とも変らないと思う。この時期には諸支配層の古墳に副葬品を多く埋葬した時期なので、各地域で出土した諸遺物も非常に多い。さらにこの時期には国境を越え、往来したり居住地を移す移民者も少なくなかったと判断される。完全な韓日関係史なら、このすべてのものを総合・整理しなければならないであろうが、これは非常に膨大な作業であり、また筆者の能力にはそのような余力もない。よって本稿では4～6世紀の朝鮮半島と日本列島の各地域勢力の間の関係を王権の成長と関連付け概観することを主要課題としたい。そして4～6世紀韓日関係で主要な争点を占める任那問題は史料上の問題のみならず学説の研究動向まで包括しようと思う。

本稿の第1章では4世紀の韓日関係を整理する。この時期は中国を除いた東北アジアにおいて、成長が最も著しかった、高句麗と百済が王権強化により中央集権体制を完成させ、両国が4世紀後半に覇権を争い、それによって新羅、加耶、倭などの周辺勢力が巻き込まれていく状況を検討するものである。加えて任那問題と関連して『日本書紀』神功49年条の記事および広開土王陵碑文の解釈に対する研究成果を含む。

続いて第2章では大体5世紀の韓日関係を整理する。この時期には高句麗が東北アジアの絶対的強者として君臨して南下政策を推進し、これにより百済・加耶・新羅が連合して対抗する国際関係を考察したい。高句麗の南下の危機のさなかにおいて、百済が一度挫折の危機を経験し、新羅と加耶がその渦中で王権の強化を成し遂げる過程も検討する必要がある。この当時の倭は加耶の諸勢力と交易も行い、朝鮮半島南部からの流亡民を受容し古代国家形成のための物的な土台を積み重ね、一層王権が強化された。倭の五王が中国の宋に要求した諸軍事号と倭王武の上表文に関する理解の問題もここに含まれる。

最後に第三章では、6世紀の韓日関係を整理したい。この時期には百済が復興して周辺地域に対する外交を主導し、新羅がその間の文化的蓄積をもとに中央集権体制を整備し、本格的に膨張することが展開の核心であったと思われる。それにより、加耶諸国が一時的な制度の整備を行ったが結局没落し、倭が高級精神文化を受容して国家体制を整備し出す過程を考察したい。この時期の『日本書紀』欽明朝の記録に見えるいわゆる‘任那日本府’の性格に対する論乱は、否定的な韓日関係史といえる任那問題の最も重要な争点である<sup>13</sup>。

<sup>12</sup> 前掲書、437～443頁;日本語版、311～313頁。

<sup>13</sup> 本稿の序言を除いた第1章から第3章までの内容は、2007年6月から2009年11月まで行われた第2期日韓歴史共同研究委員会で発表した諸内容を総合したものである。第1章は同委員会第1分科第6次合同会議(宮崎:2008.1.26.)と、第7次合同会議(全州:2008.3.15.)で発表し、第2章は第14次合同会議(済州:2009.5.16.)で発

## 第1章 高句麗と百済の争覇および新羅・加耶・倭の動向

### 第1節 高句麗・百済の発展と加耶・倭の交流

#### 1. 高句麗王権の成長と楽浪の併合

4世紀は、東アジアにおいて中国漢族中心の国際秩序が崩れ東北アジアの様々な種族の運動力が拡散していく時期であった。中国では291年西晋の洛陽で八王の乱が起きたのち北方の匈奴と鮮卑が様々な契機を理由に長城の中に混入していき、関中の氏族と羌族の独立がこれに続いた。それにつれて西晋は支配力が急激に弱化し滅亡し、317年にその一族である司馬睿が揚子江以南に亡命政権の東晋を建てた。

華北では匈奴族の劉淵が303年に漢(後の前趙)を建国し、混乱の五胡十六国時代が始まった。その後、羯族の石勒が319年に後趙を建てて力を蓄え、329年に前趙を滅亡させ華北一帯を掌握した。遼東では慕容廆が307年に鮮卑大単于を自称して勢力を築き、321年には襄平と平郭を拠点に軍事力を増強して、337年には燕王を自称するほどに強勢を誇った<sup>14</sup>。

高句麗は3世紀後半に、西晋の混乱に乗じ、東沃沮および東濊地域を回復し<sup>15</sup>、西川王代には各地域に温存した那部支配勢力を首都の王都へ集結させ、中央行政単位である方位部への編成を完了することで<sup>16</sup>、5部体制を質的なものへと転換させ連邦制的な初期古代国家から離れ、王と中央貴族による中央集権的な統治体制を整備した。こうした、王権の成長を土台にして高句麗の美川王は313年に楽浪郡を、314年に帯方郡を滅亡させる成果をあげた。よって400余年の間、朝鮮半島の西北部を有していた中国郡県勢力を一掃した。

---

表し、第3章は第12次合同会議(岡山:2009.1.31.)で発表した。そして結論は全体の委員が集まったシンポジウム(東京:2008.12.29.)で発表した要旨である。もちろんこの報告書で載せられた内容は分科会議での質疑、討論とその後に追加した研究を経て文章を一部修正したものである。

<sup>14</sup> 余昊奎、2000「4세기 동아시아 국제질서와 고구려 대외정책의 변화 —對前燕關係를 중심으로—(4世紀東アジア国際秩序と高句麗対外政策の変化—對前燕關係を中心に—)」、『역사와 현실(歴史と現実)』36、ソウル:歴史批評社。

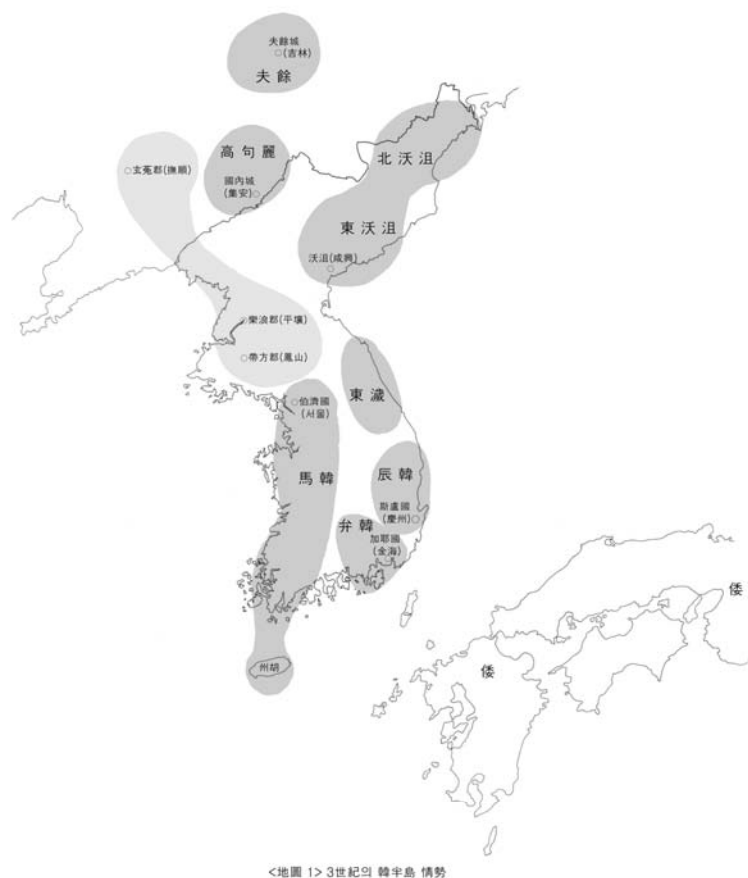
<sup>15</sup> 林起煥、2004「고구려와 낙랑의 관계(高句麗と楽浪の關係)」、『韓國古代史研究』34、156頁。

<sup>16</sup> 林起煥、1995「高句麗 集權體制 成立過程의 研究(高句麗集權體制成立過程の研究)」、慶熙大學校大學院博士學位論文、57頁;2004『고구려 정치사 연구(高句麗政治史研究)』、ソウル:한나래(ハンナレ)、104～105頁。

余昊奎、1995「3세기 고구려의 사회변동과 통치체제의 변화(3世紀高句麗の社会變動と統治体制の變化)」、『역사와 현실(歴史と現実)』15、韓國歷史研究會。

윤성용、1997「고구려 귀족회의의 성립과정과 그 성격(高句麗貴族會議の成立過程とその性格)」、『韓國古代史研究』11、韓國古代史研究會。

盧泰敦、1999『고구려사 연구(高句麗史研究)』、ソウル:四季節、167～168頁。



しかし高句麗の膨張は遼東地方に勢力を築いていた鮮卑族との対決を不可避のものとした。そして319年と320年に東夷校尉・平州刺史の崔毖と鮮卑の段部・宇文部などと連合して前燕を攻撃したがすべて失敗した。330年以後には華北の後趙と和親を結んで前燕を牽制し、342年に慕容皝の攻撃を受け丸都城が陥落、王母の周氏と男女5万名が捕虜として捕まるという敗北を味わった<sup>17</sup>。その後高句麗の故国原王は343年に平壤の東黄城へ移り、ほぼ30年にわたりこの地域に対する支配体制の整備に力を注ぎ、その間に前燕は352年に後趙を滅亡させて華北一帯まで掌握するなど中原経営に専念し、高句麗と軍事的衝突なく小康状態を維持した。

## 2. 前期加耶と倭の交流

朝鮮半島南部の洛東江流域では、3世紀末以後金海地方を中心にして加耶小国連盟体が独占的に領導し始めた。この時加耶国の中心は金海市西側の酒村面一帯にあり、その後現在の金海市の市内側に移動したが、その最初の古墳は金海市大成洞29号墳<sup>18</sup>である。この古墳は大形の木槨墳で硬い陶

<sup>17</sup> 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 故国原王12年「十一月 皝自將勁兵四萬 出南道 以慕容翰・慕容霸爲前鋒 別遣長史王寓等 將兵萬五千 出北道以來侵。(中略) 諸軍乘勝 遂入丸都 王單騎走入斷熊谷。將軍慕輿 泥(泥+土) 追獲王母周氏及王妃而歸。會王寓等 戰於北道 皆敗沒。由是 皝不復窮追 遣使招王 王不出。(中略) 皝從之 發美川王墓 載其尸 收其府庫累世之寶 虜男女五萬餘口 燒其宮室 毀丸都城而還。」

<sup>18</sup> 慶星大學校博物館、2000『金海大成洞古墳群 I』、釜山:慶星大學校博物館、141~153頁。



質土器を大量に副葬して殉葬し、またオールドス銅鍍、鉄製甲冑、騎乗用馬具などの北方文化の要素を副葬しており、強力かつ富裕な支配者の様相を見せていた<sup>19</sup>。北方文化の要素は金海地方の加耶国が朝鮮半島西北地域と円滑な交易活動を行っていた2世紀後半から見られ始めるが、3世紀末、4世紀初めの中国北部を中心に東北アジアの世界へ伝わった外部の衝撃により集中的に現われたものである<sup>20</sup>。つまり4世紀の加耶は北方の遊牧民族の騎馬武装を一部受け入れる一方で、彼らの鉄製の札甲に刺激を受け、長い鉄板などを皮や釘で繋ぐ鉄製縦長板革綴・釘結板甲と冑を開発した<sup>21</sup>。一部の学者はこれを典型的な騎馬武装ではないと否認する場合もあるが、いくら重装騎兵が組織的で体系化されていないとしても加耶に騎兵が存在し、加耶の一部のエリート層は重装騎馬戦術を受容したという点は容認されるべきである<sup>22</sup>。

しかし高句麗による楽浪一帯方郡の滅亡は朝鮮半島東南部で、其処と遠距離貿易を通じて発展していた金海加耶国の領導力に大きな支障をもたらした。よって馬山西側の固城、泗川などにある浦上八国が盟主国である金海加耶国を攻撃するなど乱調をきたし、その後の加耶連盟は咸安の安羅国中心の西部地域と金海の加耶国中心の東部地域に分裂した<sup>23</sup>。4世紀の古式陶質無蓋高杯が分化し、筒形高杯は主に馬山西部から晋州まで現われ、外反口縁無透窓高杯が主に昌原東部から金海・釜山地方まで現われることはこの分裂の様相を反映するものである<sup>24</sup>。

一方、4世紀の日本列島は小国連盟体の社会構造を形成していた。この時期の連盟体は、主導勢力が一つに固定されていなかった。紀元前1世紀から3世紀までは主に北部九州勢力が鉄器製作に使われた加耶の板状鉄斧を独占したが<sup>25</sup>、古墳時代前期が始まる3世紀後半になると畿内の邪馬台国が近畿各地と瀬戸内海沿岸各地の諸勢力を結集し、朝鮮半島の南部、特に弁辰であるが、加耶と鉄資源をめぐる相互作用の主体として台頭した<sup>26</sup>。しかし鉄は加耶地域で生産されたとしても、相当数の先進文物は中国方面で生産されたものを加耶が朝鮮半島西北地域を通じて仲介したので、その交易関係は

<sup>19</sup> 申敬澈、2000「金官加耶의 성립과 연맹의 형성(金官加耶の成立と連盟の形成)」、『加耶 各國史의 재구성(加耶各国史の再構成)』、釜山大學校韓國民族文化研究所編、ソウル:慧眼、45～72頁。

<sup>20</sup> 宋桂鉉、2000「토론 요지: 金官加耶의 성립과 연맹의 형성(討論要旨:金官加耶の成立と連盟の形成)」、『加耶 各國史의 재구성(加耶各国史の再構成)』、釜山大學校韓國民族文化研究所編、ソウル:慧眼、85～87頁。

<sup>21</sup> 申敬澈、1994「加耶 초기마구에 대하여(加耶の初期馬具について)」、『釜大史學』18;2000「金官加耶의 성립과 연맹의 형성(金官加耶の成立と連盟の形成)」、『加耶 各國史의 재구성(加耶各国史の再構成)』。

<sup>22</sup> 李蘭暎・金斗喆、1999「韓國의 馬具(韓國の馬具)」、『果川:韓國馬事會馬事博物館、219～220頁。

<sup>23</sup> 金泰植、1994「咸安 安羅國의 成長과 變遷(咸安安羅國の成長と変遷)」、『韓國史研究』86、ソウル:韓國史研究會、60頁。

<sup>24</sup> 安在皓・宋桂鉉、1986「古式陶質土器에 관한 약간의 고찰 —義昌 大坪里出土品을 통하여—(古式陶質土器に関する若干の考察—義昌大坪里出土品を通じて—)」、『嶺南考古學』1、大邱:嶺南考古學會、50～53頁。

趙榮濟、1986「西部慶南 爐形土器에 대한 一考察(西部慶南の爐形土器に対する一考察)」、『慶尙史學』2、晉州:慶尙大學校、24頁。

朴升圭、1993「慶南 西南部地域 陶質土器에 대한 研究(慶南西南部地域陶質土器に対する研究)」、『慶尙史學』9、晉州:慶尙大學校、4～5頁。

金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史1卷)』、ソウル:푸른역사(プルンヨクサ)、134～137頁。

<sup>25</sup> 武末純一、2002「日本の九州および近畿地域における韓国系遺物—土器・鉄器生産関係を中心に—」、『古代東亞細亞와 三韓・三國의 交渉(古代東亞細亞と三韓・三國の交渉)』、釜山:福泉博物館、88頁。

<sup>26</sup> 白石太一郎、2000『古墳と古墳群の研究』、塙書房;2002「倭国誕生」、『倭国誕生』(日本の時代史1)、吉川弘文館;2006「倭国の形成と展開」、『古代史の流れ』(列島の古代史8)、岩波書店、29頁。

東アジア全般の形勢により連動して動くという側面が強かった。

4世紀前半には中国の西晋の混乱に起因する東部都尉の没落、中国東北部および朝鮮半島北部の高句麗による楽浪・帯方郡の併合、これに伴う加耶連盟の東西分裂などのせいで一元的な文化の流れが継続しなかった。よってこの時期には3世紀に成立した畿内の大和中心の連盟体もあまり大きな機能を発揮できず、各自で朝鮮半島南部の諸勢力と個別的な交渉を行った。

鉄製の板甲の分布で見ると、4世紀前半の国際交易体系は高句麗—新羅—加耶(釜山・金海)—倭へつながるものであったとし<sup>27</sup>、また当時の咸安の安羅国様式である縄蓆文両耳附打捺壺の類例が対馬の朝日山古墳、福岡県東下田遺跡、西新町遺跡、島根県上長浜貝塚、鳥取県青木稲場遺跡などで発見されており<sup>28</sup>、金官加耶様式の土器は日本列島で主に大阪を中心とした近畿地方と東海地方でよく出土しているという<sup>29</sup>。これは東西に区分された前期加耶連盟が、各々別の経路で日本列島と交流する様相を見せるものだといえる。一方、4世紀前半の日本列島の近畿地方では、既存の文化蓄積を土台に奈良南部中心の勢力が銅鏡、碧玉製鋏形石と車輪石などのような宗教的性格の威勢品の普及体系を備えていた。

<sup>27</sup> 李賢恵、1988「4세기 加耶社會의 交易體系의 變遷(4世紀加耶社会の交易体系の変遷)」、『韓國古代史研究』1、韓國古代史研究會、175頁。

<sup>28</sup> 朴天秀、2002「考古資料를 통해 본 古代 韓半島와 日本列島の 相互作用(考古資料を通じて見る古代朝鮮半島と日本列島の相互作用)」、『韓國古代史研究』27、韓國古代史學會、59頁;2007『새로 쓰는 고대 한일교섭사(新しい古代日韓交渉史)』、ソウル:社會評論、51頁。

<sup>29</sup> 朴天秀、2007『새로 쓰는 고대 한일교섭사(新しい古代日韓交渉史)』、ソウル:社會評論、78頁。



### 3. 百済王権の成長と中央集権体制の整備

百済は3世紀後半に該当する古爾王後期に中国郡県の干渉と馬韓小国連盟体の枠から外れ、独自に部体制を施行する初期古代国家へと成長した<sup>30</sup>。古爾王以後の百済は楽浪と持続して敵対関係を維持し、298年と304年には責稽王と汾西王が楽浪との対決過程で殺害されるという事件もあった<sup>31</sup>。しかし百済は4世紀前半に肖古系の比流王が40余年の間在位しつつ、王権を強固にした後、4世紀中後半の近肖古王代に至っては中央集権化を完備したので、対外的な膨張へと動き出すことができた。百済王室の古墳群であるソウル石村洞古墳群では4世紀後半に基壇式の積石塚が新たに現われ、その中に

<sup>30</sup> 盧泰敦、1975「三國時代の '部'에 관한 研究 —成立과 構造를 中心으로—(三國時代の '部'に関する研究—成立と構造を中心)—」、『韓國史論』2、ソウル:ソウル大學校國史學科、14頁。

盧重國、1988『百濟政治史研究』、ソウル:一潮閣、98頁。

金泰植、2003「初期古代國家論」、『강좌 한국고대사(講座韓國古代史)』第2卷、駕洛國史蹟開發研究院、50頁。

<sup>31</sup> 『三國史記』卷24、百濟本紀2 古爾王13年8月「魏幽州刺史毋丘儉與樂浪太守劉茂・朔方太守王遵 伐高句麗。王乘虛遣左將眞忠 襲取樂浪邊民。茂聞之怒。王恐見侵討 還其民口。」

責稽王13年9月「漢與貊人來侵 王出禦爲敵兵所害薨。」

汾西王7年「春二月 潛師襲取樂浪西縣。冬十月 王爲樂浪太守所遣刺客賊害薨。」

最初にして最大(一辺の長さ50m)の石村洞3号墳は近肖古王陵と推定される<sup>32</sup>。

漢江下流流域で出土した4世紀東晋の遺物としては青銅鏃斗、晋式の金銅鈎帯金具などがあり、百済と東晋の間の交渉を確認できる。加えて東晋の青磁は、百済地域に属する風納土城、夢村土城、石村洞古墳群をはじめとする京畿道抱川自作里、江原道原州法泉里、忠清南道天安花城里古墳などから多数出土した。これは高句麗や新羅、加耶、倭などと違い、百済には樂浪郡と帶方郡の逐出以後、中国系移住民が多数自らの領域に入って支配階級の一部を構成し、東晋の青磁のような中国本土文化の需要層として作用したためと推定される<sup>33</sup>。その結果、馬韓地域内で漢江流域を占有した百済の優位性は大きく目立ちはじめた。

よって百済の近肖古王は366年と368年にかけて新羅に使臣を送り友好を強固なものとする事で南方を安定させ、369年には雉壤(黄海道延白郡銀川面)で高句麗2万の兵と戦い、5千余名を殺害・捕獲し、371年には軍兵3万を率いて高句麗の平壤城を攻撃して故国原王を殺害した<sup>34</sup>。369年と371年の戦闘は百済の対高句麗戦争で絶頂を極めた勝利であり、377年にも百済3万の郡が平壤城を討つなど百済の優勢は一時持続した<sup>35</sup>。

こうした形勢を基に百済の近肖古王(餘句)は372年に東晋へ使臣を派遣し、‘鎮東將軍領樂浪太守’として冊封を受け<sup>36</sup>、その後にも東晋との交流を継続し<sup>37</sup>、これと前後して博士の高興に国史である『書記』を編纂させるようにした<sup>38</sup>。しばらく後の枕流王が384年と385年にかけて仏教を公認したことから考えるに<sup>39</sup>、当時百済の中央集権的古代国家体制が完備されたと見ることができる。4世紀後半から5世紀後半の間にソウル石村洞古墳群が整備され、地方の主要な諸古墳群が消えていく現象は<sup>40</sup>、地方の諸勢力家が没落して中央集権化が飛躍的に強化される姿の反映である。

百済はこうした成長を背景に、一方では南部で馬韓の残余勢力を抑圧して領域拡大に乗り出し、ま

<sup>32</sup> 金元龍・李熙濬、1987「서울 石村洞 3호분의 연대(ソウル石村洞3号墳の年代)」、『斗溪 李丙燾博士九句記念 한국사학논총(斗溪李丙燾博士九句記念韓国史学論叢)』。

<sup>33</sup> 權五榮、2003「백제의 對中交渉의 進展과 文化變動(百済の対中交渉の進展と文化變動)」、『강좌 한국고대사(講座韓国古代史)』第4巻、駕洛國史蹟開發研究院、6～11頁。

<sup>34</sup> 『三国史記』卷24、百済本紀2 近肖古王21年3月「遣使聘新羅。」

同王23年3月「遣使新羅 送良馬二匹。」

同王24年9月「高句麗王斯由帥步騎二萬 來屯雉壤 分兵侵奪民戶。王遣太子以兵徑至雉壤 急擊破之 獲五千餘級 其虜獲分賜將士。」

同王26年「高句麗舉兵來 王聞之 伏兵於泚河上 俟其至急擊之 高句麗兵敗北。冬 王與太子帥精兵三萬 侵高句麗 攻平壤城。麗王斯由力戰拒之 中流矢死。王引軍退 移都漢山。」

<sup>35</sup> 前掲書、近仇首王3年10月「王將兵三萬 侵高句麗平壤城。」

<sup>36</sup> 前掲書、近肖古王27年正月「遣使入晉朝貢。」

『晋書』卷9、帝紀9 簡文帝 咸安2年「春正月辛丑 百濟林邑王各遣使貢方物。(中略) 六月 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍領樂浪太守。」

<sup>37</sup> 『三国史記』卷24、百済本紀2 近肖古王28年2月「遣使入晉朝貢。」

近仇首王 5年3月「遣使朝晉 其使海上遇惡風 不達而還。」

枕流王元年7月「遣使入晉朝貢。」

<sup>38</sup> 前掲書、近肖古王30年「冬十一月 王薨。古記云『百済開國已來 未有以文字記事 至是得博士高興 始有書記』然高興未嘗顯於他書 不知其何許人也。」

<sup>39</sup> 前掲書、枕流王元年9月「胡僧摩羅難隨自晉至 王迎之致宮内 禮敬焉 佛法始於此。」

同王2年2月「創佛寺於漢山 度僧十人。」

盧重國、前掲書、115頁。

<sup>40</sup> 朴淳發、1997「漢城百済의 中央과 地方(漢城百済の中央と地方)」、『백제의 중앙과 지방(百済の中央と地方)』、忠南大學校百済研究所、151頁。

た一方では東晋から輸入した先進文物を土台にして、加耶および倭へ繋がる交易路を開拓した<sup>41</sup>。当時、百濟の攻勢によって領域に含まれる範囲は全羅北道の西側方面までに及んだ<sup>42</sup>。また百濟は全羅南道海岸の海南・康津方面の勢力の対外交渉権を剥奪し、勢力拡張のための橋頭堡を整備し<sup>43</sup>、海岸から離れた靈巖や羅州などの榮山江流域勢力には武力的な制裁なしに貢納的支配を行った<sup>44</sup>。

#### 4. 神功紀49年条の解釈と七支刀

任那日本府説と関連して4世紀韓日関係史の争点は日本第14代仲哀天皇の王妃である神功が新羅を征伐したのかの可否にある。その根拠になる史料は、『古事記』中巻と『日本書紀』神功摂政前紀に見える。

その諸記事では、神功皇后が乗った船を魚達が背負って運ぶ<sup>45</sup>、またその船を支えていた波が遠く新羅の土地の半ばまで浸し<sup>46</sup>、これを見て新羅王が恐れてすぐさま降伏し、みずから馬を飼育する場となり貢物を献上すると誓ったという点<sup>47</sup>が共通している。結果、『古事記』では新羅国を‘御馬甘’とし、百濟国を‘渡屯家’と定めたとするが<sup>48</sup>、『日本書紀』では新羅を‘飼部’とし、高麗・百濟の二つの国を‘内宮家屯倉’と定めてこれを‘三韓’と呼んだといい<sup>49</sup>、両者には若干の相違がみられる。

いわゆる‘神功皇后の新羅征討’あるいは‘神功皇后の三韓征伐’とも呼ばれるこの記事は、上記のように事実性が希薄であり、説話の様相を呈する。この観念は663年に百濟復興軍を助けた倭軍が白村江の戦いで新羅軍に敗北したのち、実際にこれを主導した女王である斉明天皇をモデルとして造作され<sup>50</sup>、712年に編纂された『古事記』と720年に編纂された『日本書紀』に記録されたものと推定される。これはその説話が新羅に対する強い復讐の念を表しており、高句麗・百濟・新羅を‘三韓’と呼ぶ7世紀後

<sup>41</sup> 金泰植、1997「百濟의 加耶地域 關係史: 交渉과 征服(百濟の加耶地域關係史:交渉と征服)」、『백제의 중앙과 지방(百濟の中央と地方)』、忠南大學校百濟研究所、48～51頁。

<sup>42</sup> 前掲論文、51頁。

<sup>43</sup> 權五榮、1999『복암리고분군(伏岩里古墳群)』、全南大博物館、310頁。

<sup>44</sup> 李賢惠、2000「4～5세기 영산강 유역 토착세력의 성격(4～5世紀榮山江流域土着勢力の性格)」、『歴史學報』166、30頁。

文安植・イ・デソク、2004『한국고대의 지방사회 —영산강유역의 역사와 문화를 중심으로—(韓国古代の地方社会—榮山江流域の歴史と文化を中心に—)』、慧眼、107頁。

<sup>45</sup> 『古事記』中巻、仲哀天皇「故 備如教覺 整軍雙船 度幸之時 海原之魚 不問大小 悉負御船而渡。」  
『日本書紀』卷9、神功皇后 摂政前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔 辛丑「從和珥津發之。時飛廉起風、陽侯舉浪、海中大魚、悉浮扶船。」

<sup>46</sup> 『古事記』中巻、仲哀天皇「爾 順風大起 御船從浪 故 其御船之浪瀾 押騰新羅之國 既到半國。」  
『日本書紀』卷9、神功皇后 摂政前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔 辛丑「則大風順吹 帆船隨波 不勞櫓楫 便到新羅。時隨船湖浪 遠逮國中 即知 天神地祇悉助歟。」

<sup>47</sup> 『古事記』中巻、仲哀天皇「於是其國王畏惶奏言 自今以後 隨天皇命而爲御馬甘 每年雙船 不乾船腹 不乾柁檣 共與天地 無退仕奉。」  
『日本書紀』卷9、神功皇后 摂政前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔 辛丑「新羅王 於是 戰戰慄慄 厝身無所。(中略) 因以叩頭之曰 從今以後 長與乾坤 伏爲飼部。其不乾船柁 而春秋獻馬梳及馬鞭。復不煩海遠 以每年貢男女之調。」

<sup>48</sup> 『古事記』中巻、仲哀天皇「故是以新羅國者 定御馬甘 百濟國者 定渡屯家。」

<sup>49</sup> 『日本書紀』卷9、神功皇后 摂政前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔 辛丑「乃解其縛爲飼部 遂入其國中 封重寶府庫 收圖籍文書。(中略) 於是 高麗・百濟二國王 聞新羅收圖籍 降於日本國 密令伺其軍勢 則知不可勝 自來于營外 叩頭而款曰 從今以後 永稱西蕃 不絕朝貢。故因以 定内宮家屯倉。是所謂之三韓也。皇后從新羅還之。」

<sup>50</sup> 直木孝次郎、1988「神功皇后伝説の成立」、『古代日本と朝鮮・中国』、講談社學術文庫。

半以後の用語<sup>51</sup>を踏襲している事から理解できよう。



神功皇后の新羅征伐、および任那支配というものは、すでに江戸時代の『古事記』および『日本書紀』に対する国学研究の時から既定事実として容認された状態であった。江戸時代のある研究によれば、崇神天皇の末年に任那王に赤絹を与えたが、新羅がこれを横取りしたため、結局神功皇后が任那のために新羅を征伐し韓の地に日本府を置き、宰に任せて統治した。しかし、新羅が日本の恩恵に反して、欽明天皇23年に任那を侵略して滅ぼしたので、神功皇后以来593年間任那は存続したことになるといふものであった<sup>52</sup>。江戸時代の研究は『日本書紀』の編年をそのまま認め、崇神末年(B.C.30)から欽明23年(562)までを任那支配期間として設定したのである。

しかし、日本近代の史学ではもう少し合理的な姿勢を取り、崇神紀と垂仁紀の任那関係記事は‘任那朝貢の伝説’として史実の記載ではなく、神功紀の決末部のあたりからは事実の記載がなされているが、

<sup>51</sup> 盧泰敦、1982「三韓에 대한 認識의 變遷(三韓に対する認識の変遷)」、『韓國史研究』38、韓國史研究會。

<sup>52</sup> 松下見林、1688『異称日本伝』卷下、東国通鑑卷之一 新羅始祖八年条 註釈「仍齋赤絹一百疋 賜任那王 然新羅人遮之於道而奪焉 其二國之怨 始起於此際矣 終至神功皇后得征之 蓋爲任那征之也 (中略) 於是 韓地置日本府 任宰以治之 新羅當親戴我與天地不變 而時逆天昔孟 違我恩義 數侵任那 至欽明天皇二十三年 新羅遂滅任那 自神功皇后以來五百九十三年 任那之存如此永久也 此非神功皇后之大神餘烈乎。」

年代は引き下げる必要があると把握した<sup>53</sup>。神功紀の摂政前紀と違い、その後半部には、神功皇后が直接出征したのではなく、諸将軍を送り、新羅を征伐したとされるが、こうした主張以後に『日本書紀』神功49年(369)条の記事が任那支配開始の‘史実’として注目され始めた。

その史料の大意は神功49年に倭が諸将軍を派遣し、新羅を討った結果、比自林(慶尚南道昌寧)、南加羅(慶尚南道金海)、喙国(慶尚南道昌寧郡靈山面)、安羅(慶尚南道咸安)、多羅(慶尚南道陝川)、卓淳(慶尚南道昌原)、加羅(慶尚北道高靈)などの7つの国を<sup>54</sup>平定し、西側に回り南蛮の枕弥多礼(全羅南道海南)を捕らえて百済に与え、これにその王である肖古と王子の貴須も軍を率いて集来したので、比利(全羅北道群山)、辟中(全羅北道金堤)、布弥支(全羅南道潭陽)、半古(全羅南道羅州市潘南面)の四つの邑がおのずと降伏したというものである<sup>55</sup>。

こうして『日本書紀』を他の諸史料と比較し合理的に説明しようとした研究者たちは、この記事の年代を百済の近肖古王の時と比較して369年と確定し、4世紀後半の倭の任那征伐を事実として認識した<sup>56</sup>。これは、七支刀と広開土王陵碑の銘文研究を通じて、日本の学界において広く事実として認められ、日本古代史叙述の基準として位置付けられるようになった。

しかし現代日本史学の発展により1970年代以後では、日本でもこの記事及び事実のすべてを否定する方向に転換している<sup>57</sup>。すなわち『日本書紀』では、6世紀の事実を述べる継体紀および欽明紀以後の史料になってようやく事実性を容認でき、それ以前の史料は認めがたいという論旨である。

一方、上記の神功紀49年条記事に見える百済将軍木羅斤資が『三国史記』百済本紀蓋鹵王末年(475)条に出てくる木菟満致の父親なので、木羅斤資の生存年代と関連させ、この記事の一部が西暦429年のものであるという三運引下論<sup>58</sup>が提起されて注目を引いた。しかし、三運引下論やこれを基盤に据えた記事分解論<sup>59</sup>も、木氏の問題のみ除けば加耶七国の平定に対して否定一辺倒であった。

韓国の研究者たちは神功紀49年条記事が‘倭の加耶征伐’と容認する場合はほとんどなく、これを4世紀後半の百済の馬韓残余勢力征伐としてのみ捉えようとする見解があったが<sup>60</sup>、1980年代以後にはそれぞれ他の視角が現われるようになった。すなわち、この記事の注釈に‘百済将軍木羅斤資’が出てくることを糸口に、加耶七国平定の主体を倭から百済に交替させて369年の百済による加耶征伐とみる

<sup>53</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』大八洲出版;1956再版、吉川弘文館、21～22頁。

<sup>54</sup> 比自林などの7つの国’はその位置がすべて加耶連盟に属する諸小国であるので、以後‘加耶七国’と称する。

<sup>55</sup> 『日本書紀』卷9、神功皇后摂政49年3月「以荒田別鹿我別爲將軍 則與久氏等 共勒兵而度之 至卓淳國 將襲新羅。時或曰 兵衆少之 不可破新羅。更復奉上沙白蓋盧 請增軍士。即命木羅斤資沙沙奴跪[是二人 不知何姓人也。但木羅斤資者 百濟將也。] 領精兵 與沙白蓋盧共遣之。俱集于卓淳 擊新羅而破之。因以平定比自林南加羅喙國安羅多羅卓淳加羅七國。仍移兵 西廻至古奚津 屠南蠻枕彌多禮 以賜百濟。於是 其王肖古及王子貴須 亦領軍來會。時比利辟中布彌支半古四邑 自然降服。」

<sup>56</sup> 末松保和、1949、前掲書、58～63頁。

三品彰英、1962『日本書紀 朝鮮関係記事 考証』上巻、東京:吉川弘文館。

<sup>57</sup> 井上秀雄、1973『任那日本府と倭』、東出版。

請田正幸、1974「六世紀前期の日朝関係—任那’日本府’を中心として—」、『朝鮮史研究会論文集』11。

大山誠一、1980「所謂’任那日本府’の成立について」上・中・下、『古代文化』32-9-11-12、京都:古代学協会。

鈴木英夫、1987「加耶・百済と倭—任那日本府’論—」、『朝鮮史研究会論文集』24。

<sup>58</sup> 山尾幸久、1983『日本古代王権形成史論』、岩波書店。

<sup>59</sup> 田中俊明、1992『大加耶連盟の興亡と’任那’』、吉川弘文館。

<sup>60</sup> 李丙燾、1937「三韓問題の 新考察(三韓問題の新考察)」(六)、『震檀學報』7;1976『韓國古代史研究』、ソウル:博英社。

見解が出されたが<sup>61</sup>、またその年代を429年として遅らせる必要はあるけれども、それはやはり木羅氏家系伝承の誤った主張にすぎないとみる見解も出され<sup>62</sup>、さらに記事全体を後代の事実の反映として全面的に否定することもあった<sup>63</sup>。

一方、『日本書紀』において、その存在事実が明らかな6世紀前半の欽明紀2年(541)条の記事に見える百済の聖王(聖明王)の言及によれば‘先祖である速古王と貴首王の代に安羅、加羅、卓淳の早岐らが使臣を送り、互いに親しく交わった’<sup>64</sup>という。史料としては、この記録が4世紀後半の百済と加耶の関係を示すより重要なものといえよう。

よって、神功紀49年条記事と欽明紀2年条の記事を繋げて考えると、4世紀後半に百済や倭が加耶に軍を送り平定して支配したのではなく、百済が加耶と初めに親交をはじめ、これを土台に加耶と密接な交易を行っていた倭と繋がったことがわかる<sup>65</sup>。今まで知られていた考古学的な遺跡、遺物の存在状態からもこうした想定は適合するのである。よって神功紀49年条記事はいわゆる‘任那日本府’という用語はもちろんのこと、その成立ともまったく関係のない記事である。

一方、上記の加耶七国平定の記事の後に続いて神功紀52年条には、倭国が海の西側[海西]を切つて百済に与えた返礼として、百済が倭国へ使臣を送り七枝刀と七子鏡を授けた<sup>66</sup>という記事が見られる。ところで、1874年に日本の奈良県天理市布留町にある石上神宮の宮司(菅政友)により七支刀が発見され、ついでこれがいわゆる『日本書紀』神功紀に見える‘七枝刀’であるという研究結果が発表された<sup>67</sup>。

七支刀の銘文<sup>68</sup>と関連して最も重要な問題は製作年代である。製作年代を明らかにする際に、重要

<sup>61</sup> 千寛宇、1977・1978「復元加耶史」上・中・下、『문학과 지성(文学と知性)』28・29・31;1991『加耶史研究』、一潮閣。

金鉉球、1985『大和政権の対外関係研究』、吉川弘文館;1993『任那日本府研究』、一潮閣。

朱甫暎、1995「序説—加耶史의 새로운 정립을 위하여(序説—加耶史の新しい定立のために—)」、『加耶史研究』、慶尚北道。

盧重國、1995「大加耶의 정치·사회구조(大加耶の政治・社会構造)」、『加耶史研究』、慶尚北道。

<sup>62</sup> 李根雨、1994「日本書紀에 인용된 百濟三書에 관한 연구(日本書紀に利用された百濟三書に関する研究)」、韓国精神文化研究院韓國学大学院文学博士学位論文。

<sup>63</sup> 李永植、1995「百濟의 加耶진출과정(百濟の加耶進出過程)」、『韓國古代史論叢』7、駕洛國史蹟開發研究院。

延敏洙、1998『고대한일관계사(古代日韓關係史)』、慧眼。

<sup>64</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月「聖明王曰 昔我先祖速古王·貴首王之世 安羅·加羅·卓淳早岐等 初遣使相通 厚結親好 以爲子弟 冀可恒隆。」

<sup>65</sup> 金泰植、1994「廣開土王陵碑文의 任那加羅와 ‘安羅人戍兵’(廣開土王陵碑文の任那加羅と‘安羅人戍兵’)」、『韓國古代史論叢』6、駕洛國史蹟開發研究院。

李鎔賢、1999「加耶と東アジア諸国」、國學院大學大学院博士論文。

南在祐、2003『안라국사(安羅國史)』、慧眼。

白承玉、2003『가야 각국사 연구(加耶各國外史研究)』、慧眼。

白承忠、2005「日本書紀 神功紀 소재 한일관계 기사의 성격(日本書紀神功紀所在日韓關係記事の性格)」、『광개토대왕비와 한일관계(廣開土大王碑と日韓關係)』、韓日關係史研究論集編纂委員會編、景仁文化社。

<sup>66</sup> 『日本書紀』卷9、神功皇后52年9月 丁卯朔 丙子「久氏等從千熊長彦詣之 則獻七枝刀一口·七子鏡一面 及種種重寶。仍啓曰 臣國以西有水 源出自谷那鐵山。其邈七日行之不及。當飲是水 便取是山鐵 以永奉聖朝。乃謂孫枕流王曰 今我所通 海東貴國 是天所啓。是以垂天恩 割海西而賜我。由是 國基永固。汝當善脩和好 聚斂土物 奉貢不絕 雖死何恨。自是後 每年相續朝貢焉。」

<sup>67</sup> 星野恒、1892「七枝刀考」、『史学雜誌』37、東京。

<sup>68</sup> [前面] 泰□四年五月十六日丙午正陽造百練(鐵)七支刀(出)辟百兵宜供侯王□□□□(祥)

[後面] 先世以來未有此刀百濟王世(子)奇生聖音故爲倭王旨造傳示後世



な鍵である年号の最初の文字に対して七支刀発見初期の研究者たち<sup>69</sup>は、たいてい‘泰初’と判読して七支刀製作年度も西晋の泰始4年(268)と考えた。しかし神功紀の紀年の干支を二運引き下げるのが妥当であるという修正論<sup>70</sup>が広まり、これを‘泰和’と判読して七支刀製作年度を東晋太和4年(369)とみる研究結果<sup>71</sup>が出された後は、大部分の研究者<sup>72</sup>がこれにしたがっている。

反面、韓国側ではこれを百濟固有の年号と見るのが一般的である。そこでは、‘泰和’を百濟の近肖古王の年号として西暦372年のことと見る場合もあり<sup>73</sup>、百濟の年号が失伝し具体的な年代は分からないものの、5世紀頃であると推定されたりもした<sup>74</sup>。あるいは日干支を重視し、泰和4年を腆支王代の408年としたり<sup>75</sup>、あるいはより綿密に考察し百濟固有の年号である‘奉□’と考え、武寧王4年である504年としたりもした<sup>76</sup>。日本でも中国史の観点からこの問題を検討し、東晋の太和4年説を否定して南宋の泰始4年(468)説が出されたこともある<sup>77</sup>。

また、考古学的に見て七支刀は鉄製三叉鉞、鉄製蛇行劍、有棘鉄器(=有棘利器)などと形態的に類似し、その遺物などは6世紀前半に盛行したものであることを明らかにした論考<sup>78</sup>も存在し、また、『日本書紀』に百濟の使臣が七支刀とともに持って行ったといわれる七子鏡は百濟の武寧王陵出土の七獣

<sup>69</sup> 菅政友、1907「大和国石上神宮宝庫所藏七支刀」、『菅政友全集』雑稿1。

高橋健自、1914「京畿旅行談」、『考古学雑誌』5-3。

喜田貞吉、1918「石上神宮の神宝七枝刀」、『民族と歴史』1-1。

大場磐雄、1929『石上神宮宝物誌』、吉川弘文館。

末永雅雄、1941「象嵌銘文を有する鉞—七支刀」、『日本上代の武器』、弘文堂。

<sup>70</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、大八洲出版;1956再版、吉川弘文館。

<sup>71</sup> 福山敏男、1951「石上神宮の七支刀」、『美術研究』158;1951「石上神宮の七支刀補考」、『美術研究』162;1952「石上神宮の七支刀再補」、『美術研究』165;1969『日本建築史研究』再収録;1971『論集日本文化の起源』第二卷、平凡社再収録。

<sup>72</sup> 榎本杜人、1952「石上神宮の七支刀と其銘文」、『朝鮮学報』3、天理:朝鮮学会。

西田長男、1956「石上神宮の七支刀の銘文」、『日本古典の史的的研究』、理想社。

三品彰英、1962「石上神宮の七支刀」、『日本書紀朝鮮関係記事考証』上、吉川弘文館。

藤間生大、1968「七支刀」、『倭の五王』、岩波新書。

栗原朋信、1970「七支刀の銘文よりみた日本と百濟・東晋の關係」、『歴史教育』18-4。

上田正昭、1971「石上神宮と七支刀」、『日本なかの朝鮮文化』9。

古田武彦、1973『失われた九州王朝』、朝日新聞社。

佐伯有清、1977『七支刀と広開土王碑』、吉川弘文館。

坂元義種、1978「古代東アジアの日本と朝鮮—大王の成立をめぐる—」、『古代東アジアの日本と朝鮮』、吉川弘文館。

神保公子、1981「七支刀銘文の解釈をめぐる」、『東アジア世界における日本古代史講座』3。

鈴木靖民、1983「石上神宮七支刀銘についての一試論」、『坂本太郎頌寿記念日本史学論集』上。

木村誠、2000「百濟史料としての七支刀銘文」、『人文学報』第306号、東京都立大学人文学部。

濱田耕策、2005「4세기의 일한관계(4世紀の日韓關係)」、『한일역사공동연구보고서(日韓歴史共同研究報告書)』第1卷、韓日歴史共同研究委員會。

<sup>73</sup> 李丙燾、1974「百濟七支刀考」、『震檀學報』38、ソウル:震檀學會;1976『韓國古代史研究』、博英社、再収録。

<sup>74</sup> 金錫亨、1963「삼한 삼국의 일본열도 내 분국에 대하여(三韓三国の日本列島内分国について)」、『歴史科學』1963-1;1966『초기조일관계연구(初期朝日關係)』、社會科學出版社。

<sup>75</sup> 孫永鐘、1983「백제 7지도의 명문해석에서 제기되는 몇 가지 문제(百濟七支刀銘文解釈で提起された幾つかの問題)」(1)、『歴史科學』1983-4。

<sup>76</sup> 延敏洙、1994「七支刀銘文の再検討—年号の問題と製作年代を中心に—」、『年報朝鮮学』第4号。

<sup>77</sup> 宮崎市定、1982「七支刀銘文試釈」、『東方学』64;1983。『謎の七支刀—五世紀の東アジアと日本—』、中央公論社;1992『謎の七支刀』(文庫版)、中央公論社。

李進熙、1987「日本にある百濟の金石史料」、『馬韓百濟文化研究の成果と課題』(第九回馬韓百濟文化國際學術會議)、圓光大學校馬韓百濟文化研究所。

<sup>78</sup> 村上英之助、1978「考古学から見た七支刀の製作年代」、『考古学研究』25-3。

帯鏡を指すという見解<sup>79</sup>も存在する。そうであるなら、七支刀は武寧王陵の築造時期である525年頃、あるいはそれよりもやや前の時期に作られたものと見なければならず、したがって七支刀の存在は神功紀の史料価値を保証できなくなるのである。

## 第2節 高句麗と百済の争覇およびその結果

### 1. 高句麗の中央集権体制の整備および新羅との連結

高句麗は371年に故国原王が百済の攻撃を受け、平壤城で戦死するという困難を経験し<sup>80</sup>、たび重なる外患の中、周辺国家に対する巨視的外交と安定した支配秩序の創出の必要性を切実に感じていた。そこで小獸林王は前秦王の苻堅と交流して仏教を受け入れ太学を立て、373年に律令を頒布することで成熟した古代国家体制を完成させた。これに続く故国壤王は後燕と対決しつつその一方で、韓半島東南部の新羅に使臣を送り修好した。この際高句麗が新羅を支援しつつ、王族の実聖を人質として受けたことは<sup>81</sup>、大がかりな百済の征伐を目前に控え、新羅が百済と繋がることを封鎖するための外交戦略であった。

こうした対内的な整備によって、高句麗は391年に広開土王が王位についてから契丹と後燕および百済に対して攻勢を取った。南側では即位初年から百済を攻撃し始め10城を奪い、関弥城(京畿道坡州市炭峯面?)<sup>82</sup>を陥落させ、396年には百済58城700村を奪い、百済王の弟と大臣10人を捕らえて戻ったことで漢江以北地域をすべて占領した<sup>83</sup>。また、西北では402年まで遼東の主要拠点を取得し、後燕と攻防を重ね<sup>84</sup>、407年馮跋のクーデターで慕容王室が崩れる事により遼河一帯を安定的に確保するようになった。

新羅は訖解尼師今を最後に昔氏王統が断絶し、356年に奈勿尼師今が王位について以後外交に積

<sup>79</sup> 樋口隆康、1972「武寧王陵出土鏡と七子鏡」、『史林』55-4。

<sup>80</sup> 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 故国原王39年「秋九月 王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績。」  
同王41年「冬十月 百濟王率兵三萬 來攻平壤城。王出師拒之 爲流矢所中。是月二十三日 薨。葬于故國之原。」

<sup>81</sup> 前掲書、故国壤王8年「春 遣使新羅修好 新羅王遣姪實聖爲質。」

<sup>82</sup> 尹日寧、1990「關彌城位置考 — 廣開土王碑文・三國史記・大東地誌를 바탕으로 — (関弥城位置考— 廣開土王碑文・三國史記・大東地誌をもとに)」、『北岳史論』2、國民大史學科、103~164頁。

<sup>83</sup> 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王元年「秋七月 南伐百濟 拔十城。」

同王2年「秋八月 百濟侵南邊 命將拒之。」

同王3年「秋七月 百濟來侵 王率精騎五千 逆擊敗之 餘寇夜走。八月 築國南七城 以備百濟之寇。」

同王4年「秋八月 王與百濟戰於湏水之上 大敗之 虜獲八千餘級。」

『廣開土王陵碑文』永樂6年「丙申 王躬率水軍 討伐殘國。(中略) 於是 得五十八城 村七百 將殘主弟并大臣十人 旋師還都。」

<sup>84</sup> 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王元年「九月 北伐契丹 虜男女五百口 又招諭本國陷沒民口一萬而歸。」

同王9年2月「燕王盛 以我王禮慢 自將兵三萬襲之 以驃騎大將軍慕容熙爲前鋒 拔新城・南蘇二城 拓地七百餘里 徙五千餘戶而還。」

同王11年「王遣兵攻宿軍 燕平州刺史慕容歸 棄城走。」

同王13年「冬十一月 出師侵燕。」

同王14年「春正月 燕王熙來攻遼東城 且陷 熙命將士 ‘毋得先登 俟剗平其城 朕與皇后乘輦而入。’ 由是城中得嚴備 卒不克而還。」

同王15年「冬十二月 燕王熙襲契丹 至陘北 畏契丹之衆 欲還。遂棄輜重 輕兵襲我。燕軍行三千餘里 士馬疲凍 死者屬路 攻我木底城 不克而還。」

極的な姿勢を見せた。377年に新羅が前秦に使臣を派遣する際、高句麗の使臣と同行したこと<sup>85</sup>、381年(あるいは382年)に新羅が高句麗を通じて使臣の衛頭を前秦に派遣したこと<sup>86</sup>、392年に高句麗との友好の対価として実聖を人質として送ったこと<sup>87</sup>はこれを反映するものである。これは、新羅としては国家発展に対する危機であると同時に好機でもあった。

ここで注目すべき事は、4世紀後半の30余年にかけて旧帯方地域の所有権をめぐり、高句麗と百済の間に長々とした争奪戦が起きていたという点である。百済側から見れば、近肖古王、近仇首王、辰斯王、阿莘王にわたる期間であり、高句麗側から見れば故国原王、小猷林王、故国壤王、広開土王にわたる期間であった。戦闘が起きた主要地域は雉壤(黄海道延白郡銀川面)、湞河(礼成江)流域、平壤城(平壤市)、水谷城(黄海道新溪郡多栗面)、都坤城、石岷などの10余城、関弥城、青木嶺(京畿道開城付近)などであった<sup>88</sup>。すなわち369年から399年までの30年間にかけて、黄海道および京畿道北部地域では10回あまりの戦争が起きたということである。初期には百済が黄海道南部および礼成江流域を黄海道南部を有していた状態から、黄海道北部および平壤城を窺うまでになったが、392年以後には戦況が逆転し、高句麗が礼成江流域まで占拠し、漢江以南までを窺う状態であった。

高句麗と百済の間の争覇は単純な領域争いに終わるものではなく、古代国家運営に必要な高級文化に対する所有権の争いでもあった。旧楽浪郡と帯方郡の地域は起源上としては古朝鮮の遺民たちが生活していたが、後漢初期以後中国化が急速に進行し、当代の中原文化をタイムラグなしに受容してきた貴族層が広範囲に存在していた<sup>89</sup>。それで高句麗はこの地域を無理に直接統治するよりも、4世紀中

<sup>85</sup> 『資治通鑑』卷104、晋紀26 太元2年「春 高句麗・新羅・西南夷 皆遣使入貢于秦。」

<sup>86</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿尼師今26年(381)「遣衛頭入苻秦 貢方物。苻堅問衛頭曰 卿言海東之事 與古不同 何耶。答曰 亦猶中國 時代變革 名號改易 今焉得同。」

『太平御覽』卷781、東夷新羅条に引用された『秦書』には同内容の記事が苻堅建元18年(382)条に見える。

<sup>87</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿尼師今37年「春正月 高句麗遣使。王以高句麗強盛 送伊淩大西知子實聖爲質。」

<sup>88</sup> 『三国史記』卷24、百済本紀2 近肖古王24年(369)「秋九月 高句麗王斯由帥步騎二萬 來屯雉壤 分兵侵奪民戶 王遣太子以兵徑至雉壤 急擊破之 獲五千餘級 其虜獲分賜將士。」

同王26年(371)「高句麗舉兵來。王聞之 伏兵於湞河上 俟其至急擊之 高句麗兵敗北。冬 王與太子帥精兵三萬 侵高句麗 攻平壤城。麗王斯由力戰拒之 中流矢死。王引軍退 移都漢山。」

同王30年(375)「秋七月 高句麗來攻北鄙水谷城陷之。王遣將拒之 不克 王又將大舉兵報之。」

近仇首王2年(376)「冬十一月 高句麗來侵北鄙。」

同王3年(377)「冬十月 王將兵三萬 侵高句麗平壤城。十一月 高句麗來侵。」

『三国史記』卷25、百済本紀3 辰斯王3年(387)「秋九月 與靺鞨戰關彌嶺不捷。」

同王5年(389)「秋九月 王遣兵侵掠高句麗南鄙。」

同王6年(390)「九月 王命達率眞嘉謨 伐高句麗 拔都坤城 虜得二百人。」

同王8年(392)「秋七月 高句麗王談德 帥兵四萬 來攻北鄙 陷石岷等十餘城。王聞談德能用兵 不得出拒。漢水北諸部落多沒焉。冬十月 高句麗攻拔關彌城。」

阿莘王2年(393)「秋八月 王謂武曰 關彌城者 我北鄙之襟要也。今爲高句麗所有 此寡人之所痛惜 而卿之所宜用心而雪恥也。遂謀將兵一萬 伐高句麗南鄙。武身先士卒 以冒矢石 意復石岷等五城 先圍關彌城。麗人嬰城固守 武以糧道不繼 引而歸。」

同王3年(394)「秋七月 與高句麗戰於水谷城下 敗績。」

同王4年(395)「秋八月 王命左將眞武等 伐高句麗。麗王談德 親帥兵七千 陣於湞水之上拒戰。我軍大敗 死者八千人。冬十一月 王欲報湞水之役 親帥兵七千人 過漢水 次於青木嶺下 會大雪 士卒多凍死 廻軍至漢山城 勞軍士。」

同王7年(398)「秋八月 王將伐高句麗 出師至漢山北柵。其夜 大星落營中有聲。王深惡之 乃止。」

同王8年(399)「秋八月 王欲侵高句麗 大徵兵馬。民苦於役 多奔新羅 戶口衰減。」

<sup>89</sup> 尹龍九、1989「樂浪前期 郡縣支配勢力의 種族系統斗 性格(樂浪前期の郡県支配勢力の種族系統と性

葉から5世紀初にかけて平東將軍・楽浪相冬寿、帯方太守張撫夷、幽州刺史鎮などの中国亡命客を代表者として立て、彼らの幕府組織を通じて間接統治をしたのである<sup>90</sup>。百済が奪おうとしたものも、高句麗が防ごうとしたものも、まさにこうした先進文化と技術者たちであった。

4世紀後半に朝鮮半島をめぐる国際的交渉および戦争の内側には、高句麗と百済の間の旧帯方地域の領域と文化の人力に対する所有権の争いが基調を成していた。このように4世紀後半の朝鮮半島関連国際情勢の基本は、高句麗と百済の二つの強大国の対決構図であった。それに比べると朝鮮半島南部の新羅と加耶はそれに付随的に連動して行く側面が強かった。

## 2. 広開土王陵碑に見える倭軍の性格

4世紀後半の金海中心の東部加耶は、帯方—加耶—倭の交易路の帯方が消えた状態であったので、倭との交易によりいっそう熱を入れざるをえなかった。4世紀後半に属する金海大成洞2号墳、13号墳、23号墳から日本系の威勢品である巴形銅器が出土することは、これを反映するものである。こうした時期に百済の近肖古王が加耶と交流を望むや、加耶諸国はこれを良い機会と捉え、楽浪—帯方の代わりとして百済と交易を始めた<sup>91</sup>。

ここでの加耶の仲介能力は、富と技術と武力をすべて兼ね備えたことから出てくるものであって、単純に百済・倭間の交易のための地理的便宜性からのみ生まれたものではなかった。金海の加耶国の優越性は、鉄生産と鉄器製作技術と武力の側面からも確認する事ができ、金海大成洞古墳群から出土した多量の鉄鋌と鉄製縦長板釘結板甲および騎馬武装関連遺物などは、これを示すものである。これは加耶が百済を通じて旧帯方地域、すなわち黄海道方面と交易できるようになり、さらに高句麗—百済間の戦争の余波として発生したこの地域の流移民を受容するという要因により可能であった<sup>92</sup>。

それに加えて百済との交易が始まるや、東西に分裂していた加耶連盟は4世紀後半にもう一度金海の加耶国を中心に一元的に統合し、百済と倭の間の仲介基地としての安定的な交易体系を形成するようになった。広開土王陵碑文や『三国史記』強首伝に見える‘任那加羅(任那加良)’という名称は、金海の加耶国を中心とした前期加耶連盟の4世紀後半当時の名前であり、また存在方式でもあって、その名称の起源は昌原の任那国と金海の加耶国を合わせたものであった<sup>93</sup>。

一方日本列島における4世紀中葉から後半までの巨大古墳の造営状況から、最大古墳などの中心地が既存の奈良盆地東南部から北部の佐紀古墳群に移動したり、そのほかの地域でも墳丘の全長が200mをこえる巨大な前方後円墳が各地に出現している点が注目される<sup>94</sup>。そしてその時までも古墳の副

---

格)、『歴史學報』126、歴史學會、140頁。

<sup>90</sup> 林起煥、1995「4세기 고구려의 樂浪·帶方地域 경영 (4世紀高句麗の樂浪・帶方地域経営)」、『歴史學報』147、歴史學會、42頁。

<sup>91</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月条「聖明王曰 昔我先祖速古王貴首王之世 安羅加羅卓淳旱岐等 初遣使相通 厚結親好 以爲子弟 冀可恒隆。」

<sup>92</sup> 金泰植・宋桂鉉、2003『韓國의 騎馬民族論 (韓國の騎馬民族論)』、果川:韓國馬事會・馬事博物館、193~196頁。

<sup>93</sup> 金泰植、1994「廣開土王陵碑文의 任那加羅와 ‘安羅人戍兵’ (廣開土王陵碑文の任那加羅と‘安羅人戍兵’)」、『韓國古代史論叢』6、ソウル:駕洛國史蹟開發研究院、86頁。

<sup>94</sup> 白石太一郎、2006「倭国の形成と展開」、『古代史の流れ』(列島の古代史8)、岩波書店、50頁。すなわち、この時期に奈良盆地西南部の葛城地方では広陵町の巢山古墳や川西町の島の山古墳が、南河内の古市古墳群でも津堂城山古墳が作られている。

葬品は4世紀前半と同様に呪術的・宗教的農耕儀礼の物品が主流を占めるに過ぎず、新しい発展の機運は見られなかった。この事実は朝鮮半島との交流で不振な状態が続き、倭国首長連合盟主の統合力が極めて不安定であったことを示している。

しかし4世紀末葉から5世紀初めの日本列島では、河内羽曳野市・藤井寺市の古市古墳群と堺市の百舌鳥古墳群を築造した新興勢力が突如台頭した。これは、交易や対外交渉を重視し、加耶の鉄の交易体系を掌握し、鉄製甲冑を供給する新しい威勢品体制を構築する事で、政権を掌握したものだ<sup>95</sup>という。しかし同じ時期の古墳の規模として見れば、当時の吉備地方もそれに類似した動きを見せており、競争としては、対外交渉と勢力拡大に熱中してたと見えるので、畿内勢力の‘掌握’という表現はもう少し後代の事実として遅らせる必要がある。日本列島の二つの地域にこうした新しい機運が生まれたことは、日本列島の事情よりも朝鮮半島の事情により触発された蓋然性が高い。

伝統的に加耶と倭は、物的資源である鉄素材と先進文物および人的資源である労働力<sup>96</sup>を交換する緊密な交易関係を維持しており、4世紀以後は先進文物供給の不振を原因に両者の交流は小康状態を維持したが、4世紀末葉になって朝鮮半島の状況が緊迫化し、両者の交流関係は加耶の軍需物資輸出および工人の支援<sup>97</sup>と、倭の軍事力動員<sup>98</sup>の問題が重要視されるようになった。その時期に河内地方を中心とした倭王権は、吉備地方をはじめとする周辺地域の首長たちとの主導権競争のための加耶の鉄と技術の必要性から重視し、また金海の加耶国を中心とした任那加羅王権は、洛東江流域をめぐる新羅との争覇および百済との交流過程で倭の人力、特に軍隊が必要であったためである。

西暦391年に高句麗の広開土王が王位につくや、百済中心に再編されていた朝鮮半島の情勢は大きな変化を起こし、百済の阿莘王は396年に高句麗軍の都城包囲から逃れるために永遠に‘奴客’になろうと誓約までした<sup>99</sup>。百済の阿莘王は397年、倭国と友好を結ぼうと太子腆支を送ったのだが、ここには任那加羅、すなわち金官加耶の協調が必須であった。こうして百済は加耶を媒介にして倭軍を引き入れたのである<sup>100</sup>。百済が4世紀末高句麗との戦争に任那加羅と倭を引き入れた措置は、西晋が3世紀末4世紀初めの甚大な内乱の中で兵力補給のために五胡を引き入れたのと同様の行為であった。

<sup>95</sup> 田中晋作、1990「百舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」、『古代学研究』122、古代学協会；2000「巴形銅器について」、『古代学研究』151。

<sup>96</sup> 申敬澈、2000、前掲論文、73～77頁。

<sup>97</sup> 4世紀末葉以後日本列島の新しい武器と馬具は、洛東江下流の金官加耶のものが導入された、またはその影響下で作られたものである。これについては、田中晋作、橋本達也、宋桂鉉、小林謙一、金斗喆、千賀久などの研究があり、それに対する研究史の整理は金泰植・宋桂鉉、2003『韓國의 騎馬民族論(韓國の騎馬民族論)』、韓國馬事會・馬事博物館、161～164頁を参照。

<sup>98</sup> 鈴木靖民、2002「倭国と東アジア」、『日本の時代史2 倭国と東アジア』、東京：吉川弘文館、15頁。

<sup>99</sup> 『広開土王陵碑文』永樂六年丙申「王躬率水軍 討伐殘國。軍□□首 攻取壹八城 白模盧城 各模盧城 幹氏利城 □□城 閣弥城 牟盧城 弥沙城 □舍蔦城 阿旦城 古利城 □利城 雜珍城 奧利城 勾牟城 古模耶羅城 莫□□□□城 □而耶羅城 瑑城 於利城 農□城 豆奴城 沸□□利城 弥鄒城 也利城 大山韓城 掃加城 敦拔城 □□□城 婁賣城 散那城 那旦城 細城 牟婁城 于婁城 蘇灰城 燕婁城 析支利城 巖門□城 □城 □□□□□□利城 就鄒城 □拔城 古牟婁城 閏奴城 貫奴城 多穰城 曾□城 □□盧城 仇天城 □□□□□其國城。殘不服義 敢出迎戰。王威赫怒 渡阿利水 遣刺迫城 □□歸穴 □便圍城。而殘主困逼 獻□男女生口一千人 細布千匹 跪王自誓 從今以後 永爲奴客。太王恩赦先迷之愆 録其後順之誠。於是 得五十八城 村七百 將殘主弟并大臣十人 旋師還都。」

<sup>100</sup> 金泰植、2005「4世紀의 韓日關係史 —廣開土王陵碑文의 倭軍問題를 中心으로—(4世紀の日韓關係史—廣開土王陵碑文の倭軍問題を中心に—)」、『한일역사공동연구보고서(日韓歴史共同研究報告書)』第1卷、韓日歴史共同研究委員會、70～74頁。



良されており、防護具もこれに対応して鉄製縦長板釘結板甲へ転換し、木心鉄板被輪鍔子と心葉形杏葉も保有し、重装騎馬戦術を駆使することが可能な水準であった<sup>110</sup>。

一方、倭の武装体系は短剣、短刀、薄い両刃槍[鉞]と鉄鍔などで構成され、薄い両刃槍[鉞]と鉄鍔はある程度の甲と盾さえあれば、致命傷を負うことができない程度に軽く、実戦的な武器としてよりも誇示的な威信財としての性格が強かった<sup>111</sup>。また、4世紀後半に一部にみられる日本列島の堅矧板革綴短甲と方形板革綴短甲は、朝鮮半島南部の縦長板釘結板甲の影響を受けて作られたものであったが、加耶の板甲をそのまま具現できず、全体構造や製作技法に相当な差のある未熟なものであった<sup>112</sup>。

結果、加耶を媒介にして動員された倭軍などは、上記のような武装の水準差によって、朝鮮半島内で独自の行為をするというよりは、加耶軍隊の下級単位として編成され活用されたと考えられる<sup>113</sup>。彼らは加耶のの意図によって対新羅戦線に投入されたり、百濟と加耶との交渉によって高句麗との戦争に投入されましたが、実際、広開土王陵碑に見える‘倭賊’あるいは‘倭寇’は、加耶軍を主力としつつ倭の援軍が一部加勢した加耶-倭の連合軍であった。

### 3. 百濟の大敗および前期加耶連盟の解体

400年、すなわち庚子年の戦闘は高句麗側の碑文の記述によれば、高句麗軍と倭軍が行ったようになっているが、実状は該当地域である洛東江流域をめぐる二大勢力、つまり新羅と加耶の間の覇権競争であったと見るのが正しい。高句麗の歩騎5万の大軍は少数の倭軍を狙った軍隊ではなく、新羅の要請によってその背後の加耶連盟の核心部を討つため動員されたものと見なければならぬ。高句麗は加耶征伐を通じて百濟と倭を牽制する効果を持ったのみならず、新羅からも一定の反対給付を取ったのであろう。

任那加羅で合流した加耶-倭の連合軍は追撃してきた高句麗-新羅連合軍が城に至るやすぐに降伏した。加耶自体の全般的な軍備や戦闘能力は新羅に比べて遜色の無いものであったが、新羅を救援するという名目で南下して来た高句麗の大軍に比べ劣勢だったために降伏したのである。その直後に高句麗は平定した任那加羅に‘羅人’、すなわち巡邏兵を置いて守らせるようにした。もちろん、この‘安羅人戍兵’という句節を咸安の安羅国の守備隊を示す名詞として見る見解もあるが、そうすると文脈が合わない。しかし高句麗が巡邏兵を置いたとしても、この地域は高句麗に隣接した場所ではなかったため、高句麗が新羅軍を排除して独自でこれを維持することは不可能だったであろう<sup>114</sup>。

<sup>110</sup> 金斗喆、2003「武器・武具 및 馬具를 통해 본 加耶의 戰爭(武器・武具および馬具を通じてみた加耶の戦争)」、『加耶考古學의 새로운 照明(加耶考古學の新しい照明)』、韓國民族文化研究所編、ソウル:慧眼、145頁。

<sup>111</sup> 松木武彦、1999「古墳時代の武装と戦闘」、『戦いのシステムと対外戦略』、東京:東洋書林。

<sup>112</sup> 橋本達也、2002「古墳時代甲冑の系譜—朝鮮半島との関係—」、『第5回歴史博国際シンポジウム古代東アジアにおける倭と加耶の交流発表要旨』、佐倉:国立歴史民俗博物館、115～118頁。

<sup>113</sup> 金斗喆、2005「4세기 후반~5세기 초 고구려·가야·왜의 무기·무장체계 비교(4世紀後半~5世紀初高句麗・加耶・倭の武器・武装体系の比較)」、『광개토대왕비와 한일관계(広開土大王碑と日韓関係)』、韓日關係史研究論集編纂委員會編、景仁文化社。

金泰植、2005、前掲論文、73頁。

<sup>114</sup> 金泰植、1994「廣開土王陵碑文의 任那加羅와 ‘安羅人戍兵’ (廣開土王陵碑文の任那加羅と‘安羅人戍兵’)」、『韓國古代史論叢』6、99～100頁。



<地図 4> 4世紀末 5世紀初の東아시아 情勢

ところで広開土王陵碑文によると永樂14年甲辰条にも‘倭’が現われる。そこでは、倭軍が帯方界、すなわち黄海道方面に侵入し、高句麗の平壤から動き出した広開土王が率いる軍隊に討伐されたという概要が明白に現われる<sup>115</sup>。しかし、この碑文のみでは、倭と百濟の連係が確実でないため、この記事をただ倭軍の反撃としてのみ把握し<sup>116</sup>、あるいは百濟との結託による共同作戦と見たりもした<sup>117</sup>。404年には倭軍がどうして九州、加耶、百濟を過ぎ帯方界にまで現われ高句麗と戦ったのであろうか。帯方界は当時高句麗と百濟の境界地域であったのである。

ここで考えるべき事は、その倭軍が加耶を助けるための軍隊であるか、あるいは百濟を助けるための軍隊であるかと言う点である。397年に阿莘王が倭国と友好を結び<sup>118</sup>、その後広開土王が399年に百濟と倭が和通したと言う事を聞き、平壤城に下ったということ<sup>119</sup>を見るに、一旦百濟の援兵であったと考えら

<sup>115</sup> 『広開土王陵碑文』永樂十四年甲辰条「而倭不軌 侵入帶方界 □□□□石城 □連船□□□。王躬率□ □ 從平穰 □□□鋒相遇。王幢要截 蕞刺 倭寇潰敗 斬煞無數。」

<sup>116</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、75頁。

<sup>117</sup> 李丙燾、1976『韓國古代史研究』、博英社、384頁。

王健群、1984『好太王碑研究』、吉林出版社；王健群著、林東錫訳、1985『廣開土王碑研究』、역민사(ヨクミンサ)、ソウル、275頁。

鈴木靖民、1988「好太王碑の倭の記事と倭の実体」、『好太王碑と集安の壁画古墳』、読売テレビ放送編、東京：木耳社、63～64頁。

<sup>118</sup> 『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王6年「夏五月 王與倭國結好 以太子腆支爲質。」

<sup>119</sup> 『広開土王陵碑』永樂九年己亥「百殘違誓 与倭和通。王巡下平穰。而新羅遣使白王云 倭人滿其國境 潰破城池 以奴客爲民 歸王請命。太王恩慈 矜其忠誠 特遣使還 告以密計。」



れる。404年に帯方界に現われ(残兵と和通し?)船を繋げ攻撃したが壊滅したという‘倭寇’、すなわち加耶—倭連合軍は百済により動員されたものとする事ができよう。

399年と400年に新羅に侵入した倭軍は行動半径をみるに加耶のために行っていた。これまで、考古学的発掘成果や記録から見ても、倭軍は加耶のための軍隊であったと見るのが妥当である。当時の日本列島に加耶の文物は多くの影響を及ぼしたが、百済の文物と見られるものはほとんど現われない<sup>120</sup>からである。そうであるとしたら404年の倭兵も百済が危機意識を助長し引き入れたものであるが、やはり加耶を媒介にせずには不可能なことであった。

すなわち金海の加耶国は体内的に加耶連盟内で主導権を掌握し、対外的に新羅に対抗し、百済との先進文物交流に応じて倭の軍事力を動員したのである。よってこれは古代日本のいわゆる‘南韓経営’という次元ではなく、平常的な加耶と倭の間の人的・物的資源交易の伝統が百済の介入で増幅し、高句麗との戦争に投入されたということ、すなわち百済の異民族動員能力という次元で理解しなければなるまい。

『三国史記』新羅本紀にあらわれる新羅を侵攻した倭人・倭兵は時期的に制限されているので、史料の原典に対して追求する問題点があり、それでも大体、季節的に略奪を行う、海賊の性格を帯びていると見えるが<sup>121</sup>、その中で一部は加耶の支援を受けた倭軍が加耶領域に入り、新羅を攻略する場合もあったであろう<sup>122</sup>。

結局、高句麗—新羅連合軍の任那加羅征服地に対する巡邏兵設置をはじめとする一連の戦闘に基づき、4世紀以後本格化する嶺南地域の覇権競争で高句麗の武力を表に出した新羅は決定的に加耶より優位に立つ事ができるようになり、百済は旧帯方地域の領土と一緒に加耶地域を仲介基地とする対倭交易網を喪失するようになった<sup>123</sup>。この事件の余波で百済の右翼であり金海の加耶国を代表とする前期加耶連盟は幕を下ろした。高句麗軍の南征は前期加耶連盟を解体させつつ、朝鮮半島四国の勢力版図を、百済を頂点とするものから高句麗を頂点へと置き換え、その中で最も大きい犠牲を払ったのは加耶であった。

<sup>120</sup> 日本列島所在4世紀の百済系統文物としては兵庫県出合遺跡の窯と甕、甗、無文内拍子などの軟質土器にすぎず、長野県浅川端遺跡出土の馬形帯鉤も百済中央よりは天安を含んだ牙山湾一帯から移入されたものと思われる。この遺跡の馬形帯鉤は、同じ長野県の根塚遺跡から金海市良洞里古墳群出土品と同系統の蕨手紋装飾附鉄剣が出土しており、やはり金海地域の仲介で搬入された可能性が高い。朴天秀、2007『새로 쓰는 고대 한일 관계사(新しい古代日韓関係史)』、ソウル:社會評論、78～79頁。

<sup>121</sup> 旗田巍、1975「三国史記新羅本紀にあらわれた倭」、『日本文化と朝鮮』2。

<sup>122</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干6年(463)条(「春二月 倭人侵歆良城 不克而去。王命伐智・德智 領兵伏候於路 要擊大敗之。王以倭人屢侵疆場 緣邊築二城。」)の歆良城侵入記事がそうしたものの一つであるが、その前にもそうした性格のものが存在しうる。

<sup>123</sup> 金泰植、2005「4世紀의 韓日關係史 —廣開土王陵碑文의 倭軍問題를 中心으로—(4世紀の日韓關係史—廣開土王陵碑文の倭軍問題を中心に—)」、『한일역사공동연구보고서(日韓歴史共同研究報告書)』第1巻、韓日歴史共同研究委員會。

## 第2章 高句麗の南進と百済・加耶・新羅・倭の抵抗

### 第1節 5世紀前半の朝鮮半島と日本列島

#### 1. 高句麗と百済の国際交流網の構築

高句麗は4世紀末から5世紀初めの広開土王在位期間中に広大な領土を獲得した。西側は遼河まで及び、西北では契丹を討ち一部を帰属させ、北では北夫余を占領し、靺鞨族の大部分を服属させ、東に東夫余を併呑し、南は百済を討ち漢江以北を有した。長寿王はこれを基盤に、427年に平壤へ遷都し<sup>124</sup>、安定を図って436年には北燕王馮弘の無理を受け入れ<sup>125</sup>、また北魏と緊張関係を結んだ。

しかし、高句麗は概して中国の東晋、宋および北魏と朝貢関係を結び、友好的な交易を行った。5世紀の各種の国際関係の記録を通観すると<sup>126</sup>、5世紀当時、東アジア東北部の中核的な仲介交易者であった高句麗の位置がわかる。すなわち、高句麗は挹婁、南室韋、夫余、涉羅などの周辺民族に鉄器生活道具などを供給し、その対価として貂をはじめとする動物、家畜や天然の宝石類を受け取り南北朝に仲介交易をし、自分達が生産する銀や馬を中国に送り、その対価として中国の文物を輸入した。高句麗の成長の動力は、東北アジア一帯の広範囲な領域にわたり成長した互いに違う民族達の文化的差異を知り、またこれを総括する代表者になり、中国と仲介交易した能力にあったのである<sup>127</sup>。

一方で、397年に倭国に行き、405年に帰国して王位に上った百済の腆支王は<sup>128</sup>409年と418年に倭国と公式的に交渉して<sup>129</sup>、こうした性向は毗有王即位直後の428年まで続いた<sup>130</sup>。しかし毗有王はその後、倭国一辺倒の交渉から抜け出し高句麗に対抗する中国南朝および朝鮮半島南方諸国の同盟ネットワークを構成しようと努力した。彼が、429年、430年、440年、450年にかけて中国南朝の宋に使臣を送り<sup>131</sup>、朝鮮半島南部側にも、433年および434年に新羅に使臣を派遣し、良馬と白鷹を送り<sup>132</sup>、友好関係

<sup>124</sup> 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長寿王15年「移都平壤。」

<sup>125</sup> 前掲書、長寿王24年「夏四月 魏攻燕白狼城 克之。王遣將葛盧・孟光 將衆數萬 隨陽伊至和龍 迎燕王。」

<sup>126</sup> 『宋書』卷97、列伝57 夷蛮 東夷高句麗国「高句麗王高璉 晋安帝義熙九年(413) 遣長史高翼 奉表獻楮白馬。(中略) 璉每歲遣使 十六年(439) 太祖欲北討 詔璉送馬、璉獻馬八百匹。(中略) 大明三年(459) 又獻肅慎氏楛矢石柸。」

『北史』卷94、列伝82 室韋国(南室韋)「多猪・牛。(中略) 其國無鐵、取給於高麗。多貂。」

『建康實録』南齊 高麗伝「其官位加長史司馬參軍之屬。拜則申一脚 坐則跪 行則走 以爲恭敬。國有銀山 採爲貨 並人參貂皮。重中國綵纈 丈夫衣之。亦重虎皮。」

『魏書』卷100、列伝88 高句麗「後貢使相尋 歲致黃金二百斤 白銀四百斤。」

<sup>127</sup> 金昌錫、2004「高句麗 조・중기의 對中 교섭과 교역(高句麗初・中期の対中交渉と交易)」、『新羅文化』24、東國大學校新羅文化研究所、24頁。

金泰植、2006「韓國 古代諸國의 對外交易 —加耶를 中心으로—(韓國古代諸國の對外交易—加耶を中心に一)」、『震檀學報』101、6頁。

<sup>128</sup> 『三国史記』卷25、百済本紀3 腆支王即位年「阿莘在位第三年 立爲太子。六年 出質於倭國。十四年 王薨 王仲弟訓解攝政 以待太子還國。季弟磔禮殺訓解 自立爲王。腆支在倭聞訃 哭泣請歸。倭王以兵士百人衛送。既至國界 漢城人解忠來告曰 大王棄世 王弟磔禮殺兄自王 願太子無輕入。腆支留倭人自衛 依海島以待之。國人殺磔禮 迎腆支即位。」

<sup>129</sup> 前掲書、腆支王5年「倭國遣使 送夜明珠 王優禮待之。」

同王14年「夏 遣使倭國 送白綿十匹。」

<sup>130</sup> 前掲書、毗有王2年「倭國使至 從者五十人。」

<sup>131</sup> 『宋書』卷97、列伝57 夷蛮伝 百済国「(元嘉)七年 百済王餘毗 復修貢職 以映爵號授之。二十七年 毗上書獻方物 私假臺使馮野夫西河太守 表求易林・式占・腰弩 太祖並與之。」

に着手したことはこれを示すものである。

また、これと前後して百済は榮山江流域に対しても積極的な交渉意志を見せたが、5世紀中盤以降、羅州潘南古墳群の成長は、百済のこうした措置に影響をうけたものである。5世紀の中・後半のものと推定される羅州潘南面新村里9号墳の大形の甕棺墓から百済系統の金銅冠と金銅飾履などの服飾遺物、百済系統の銀象嵌単鳳文環頭大刀が出土した事は注目される<sup>133</sup>。百済系遺物の新たな登場は百済とのより直接的な交渉によるものであることは疑いない。甕棺という墓制はそのまま維持されているのを見るに、まだ、この地域の土着勢力が完全に解体していないようではあるが、5世紀中盤にはその首長が百済の官職を受け、対外的には‘百済の領土’と称された可能性も存在する。

一方、5世紀前半の百済が倭と交流をするためには、いまだ加耶勢力の仲介が必要だったであろう。ところで『日本書紀』神功紀と応神紀の記録には西暦262年に百済將軍である木羅斤資が倭王の命令を受け加羅の社稷を復旧させたが<sup>134</sup>、294年に彼の息子である木滿致が父の功績で任那を独占し百済と倭国を往来しつつ百済朝廷で大きな権勢を享受した<sup>135</sup>などの記録が見られる。この記事が文章そのままに信じる事はできないが、『三国史記』百済本紀蓋鹵王21年(475)条に木苧滿致と関連してその編年を三運引き下げて考え<sup>136</sup>、限られた事実を容認するとすれば、その時期を442年および474年と定めることができ、5世紀中葉以後に‘加羅’すなわち高靈の伴跋国を中心とした百済-倭の交流関係が存在した事を推定する事ができる。これは百済の貴族である木氏の活動を媒介にして<sup>137</sup>、高靈の伴跋国が百済の対倭交通に協調していたことを示すものではないかと考える<sup>138</sup>。多沙城を百済の‘往還路驛’として与えたことが神功紀50年条の記事にみえ<sup>139</sup>、430年以来、百済と伴跋によって慶尚南道河東方面が対倭交易の中間寄着地として利用されたことを推定できる。百済が加耶地域の中でも内陸の奥深いところ

『三国史記』卷25、百済本紀3 毗有王 3年「秋 遣使入宋朝貢。」

同王4年「夏四月 宋文皇帝 以王復修職貢 降使冊授先王映爵號。」

同王14年「冬十月 遣使入宋朝貢。」

<sup>132</sup> 『三国史記』卷25、百済本紀3 毗有王7年「遣使入新羅請和。」

同王8年「春二月 遣使新羅 送良馬二匹 秋九月 又送白鷹。」

<sup>133</sup> 李正鎬、1999「영산강유역의 고분 변천과정과 그 배경(榮山江流域の古墳の変遷過程とその背景)」、『榮山江流域의 古代社會(榮山江流域の古代社会)』、崔盛洛編著、學研文化社、114頁。

<sup>134</sup> 『日本書紀』卷9、神功皇后 撰政62年(262)「新羅不朝。即年 遣襲津彦擊新羅。[百済記云 壬午年 新羅不奉貴國。貴國遣沙至比跪 令討之。新羅人莊飾美女二人 迎誘於津。沙至比跪 受其美女 反伐加羅國。加羅國王己本早岐 及兒百久至・阿首至・國沙利・伊羅麻酒・爾汶至等 將其人民 來奔百済。百済厚遇之。加羅國王妹既殿至 向大倭啓云 天皇遣沙至比跪 以討新羅。而納新羅美女 捨而不討 反滅我國。兄弟人民 皆爲流沈。不任憂思 故以來啓。天皇大怒 即遣木羅斤資 領兵衆來集加羅 復其社稷。(下略)]」

<sup>135</sup> 『日本書紀』卷10、応神天皇25年(294)「百済直支王薨。即子久爾辛立爲王。王年幼。木滿致執國政 與王母相媿 多行無禮。天皇聞而召之。[百済記云 木滿致者 是木羅斤資討新羅時 娶其國婦而所生也。以其父功專於任那。來入我國 往還貴國。承制天朝 執我國政 權重當世。然天朝聞其暴 召之。]」

<sup>136</sup> 山尾幸久、1978「任那に関する一試論—史料の検討を中心に—」、『古代東アジア史論集』下卷(末松保和博士古稀記念会編)、吉川弘文館、198~202頁。

<sup>137</sup> 李道學、1995『백제 고대국가 연구(百済古代国家研究)』、一志社、195~197頁。

<sup>138</sup> 『宋書』卷97、夷蛮伝・百済国条の記録から、蓋鹵王4年(458)に王の推薦で宋から官爵を受けた11人の中に8人が百済の王族である餘氏であるが、彼らと肩を並べ木羅斤資と推定される木衿が龍驤將軍の爵号を受けたことは、蓋鹵王が彼のこうした功勞を大きく認めたおかげと思われる。

金琪燮、2000『백제와 근초고왕(百済と近肖古王)』、學研文化社、166頁。

<sup>139</sup> 『日本書紀』卷9、神功皇后 撰政50年(250)「夏五月 千熊長彦・久氏等 至自百済。於是 皇太后歡之 問久氏曰 海西諸韓 既賜汝國 今何事以頗復來也。久氏等奏曰 天朝鴻澤 遠及弊邑。吾王歡喜踊躍 不任于心。故因還使 以致至誠。雖逮萬世 何年非朝。皇太后勅云 善哉汝言。是朕懷也。增賜多沙城 爲往還路驛。」

であった高霊の伴跛国に注目しないわけにはいかなかった理由は、彼らの製鉄産業の基盤と対倭交易能力によるものだと考えられる。

百済系統の金銀象嵌の環頭大刀が5世紀2/4分期として編年される高霊池山里32NE-1号墳と、南原月山里M1-A号墳から出土したことは、百済貴族である木氏の活動結果を反映するものとみられる<sup>140</sup>。しかし、高霊池山里古墳群の該当時期の遺物に百済系文物の要素は環頭大刀のような一部の威勢品に過ぎず、土器をはじめとする大部分の生活遺物は在地基盤の独自のなものであった点を鑑みるに、この当時、木氏の媒介を通じて高霊地方へ及んだ百済の影響力は強圧的なものではなく、高霊勢力の選択による相互同盟的な性格のものであったことがわかる。

## 2. 新羅の6部体制形成と対外関係

新羅は4世紀末5世紀初に高句麗の軍隊の援助をうけ、加耶一倭連合軍を倒し、洛東江東側の加耶勢力を大部分服属させながら成長した。新羅の初期王陵である、積石木槨墳の出土品に青銅壺杆、銀盒をはじめとする各種の高句麗系統の漢式青銅容器のみならず中央アジアのペルシア、黒海沿岸、カザフスタン、スキタイ、中国北方の匈奴をはじめとする胡族の物品などが出土したことから<sup>141</sup>、新羅は高句麗を媒介にした交易を通じて活発な文化変革を遂げて行ったとわかる<sup>142</sup>。その対価として新羅は一時、高句麗の政治的影響力に苦しめられることとなった。

392年に高句麗に人質として行った実聖が401年に戻ってきた後<sup>143</sup>、その翌年に奈勿王が死に実聖が王位につき、417年に実聖王は高句麗軍を利用して訥祗を殺害しようとしたが、訥祗がこれを逆に利用し、実聖を殺害して王位についた<sup>144</sup>などということはこれを示すものである。しかし新羅は、一方では高句麗の影響力を背景にして、また一方では、自らを新羅地域統合の主体として浮上させることによって、大きな国家的成長を遂げ、初期古代国家に登りつめた。これは、新羅がいつ部体制を成立させたのかと同様に把握することができる。ここで部とは外交権と貿易権は剥奪されたが、自治権を維持している単位政治体であり<sup>145</sup>、古代国家完成段階以後としては、首都内の行政区域として転換する存在を示す<sup>146</sup>。

<sup>140</sup> 清州新鳳洞古墳群の出土遺物を基盤にして、百済貴族の木氏勢力の根拠地に清州地域を挙げる見解がある。朴淳發、2000「百濟의 南遷과 榮山江流域 政治體의 再編(百濟の南遷と榮山江流域政治体の再編)」、『韓國의 前方後圓墳(韓國の前方後円墳)』、忠南大學校出版部、130頁。

<sup>141</sup> 崔秉鉉、1992『新羅古墳研究』、一志社、347～351頁。

<sup>142</sup> 金泰植、2006「韓國 古代諸國의 對外交易 —加耶를 中心으로—(韓國古代諸國の對外交易—加耶を中心)」、『震檀學報』101。

<sup>143</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿麻立干37年「春正月 高句麗遣使。王以高句麗強盛 送伊?大西知子實聖爲質。」  
同王46年「秋七月 高句麗質子實聖還。」

<sup>144</sup> 前掲書、訥祗麻立干即位年「奈勿王三十七年 以實聖質於高句麗。及實聖還爲王 怨奈勿質已於外國 欲害其子以報怨 遣人招在高句麗時相知人 因密告 見訥祗則殺之。遂令訥祗往 逆於中路。麗人見訥祗 形神爽雅 有君子之風 遂告曰 爾國王使我害君 今見君 不忍賊害 乃歸。訥祗怨之 反弑王自立。」  
『三国遺事』第十八 實聖王条「王忌憚前王太子訥祗有德望 將害之 請高麗兵而詐迎訥祗。高麗人見訥祗有賢行 乃倒戈而殺王 乃立訥祗爲王而去。」

<sup>145</sup> 盧泰敦、2000「초기 고대국가의 국가구조와 정치운영(初期古代国家構造と政治運営)」、『韓國古代史研究』17、26頁。

<sup>146</sup> 既存説の推移を考察すると初期には新羅の6部の成立時期を5世紀後半以後と把握したが、(末松保和、1936「新羅六部考」;1954『新羅史の諸問題』、再収録;李丙燾、1937「三韓問題의 新考察(三韓問題の新考察)

新羅の場合は、古墳遺物からみると、威勢品を周辺の部と推定される親新羅系の地方の諸勢力に賜与する現象が典型的に現われる時期は、5世紀である。5世紀初から6世紀初にかけて江原道の三陟、慶尚北道の順興、安東、義城、善山、星州、漆谷、大邱、慶山、迎日、慶尚南道の昌寧、梁山、釜山などで、新羅系統の金銅冠、耳飾、帯装飾などが出土した<sup>147</sup>。そこで出土した新羅の冠の様式的な斉一性は、麻立干時期に着装形威勢品の分与を媒介に中央と地方の政治体の間に形成された間接支配の様相を基盤に据えている<sup>148</sup>。

こうした新羅の威勢品が出土する地方はいまだにその地域の支配層の統治基盤が新羅により完全に解体されていなかったとしても、すでに新羅の領域内に含まれ、新羅王権により一定の規制を受けていたと判断される<sup>149</sup>。のみならず、その地域の諸古墳は5世紀前半以後、新羅系遺物が流入し、規模も大きくなり、副葬品も増加する特徴があるので、これは彼らが新羅王権の支援を受けつつ発展していたことを示している<sup>150</sup>。よって新羅の六部体制は5世紀前半に成立し、その結果、善山、大邱、慶山、昌寧、梁山、釜山などの地域を合わせた初期古代国家を成立させたと見る必要がある。『三国史記』において、訥祗王が位号を尼師今から麻立干に直した最初の王と記録されていることは、こうした理由からである。

訥祗麻立干は高句麗軍隊の助けを得て、417年に王位についたが、その後、418年に水酒村干(慶尚北道醴泉)、一利村干(高靈郡星山面)、利伊村干(榮州)などを呼び議論して、歆良州干(梁山)の堤上を送り、高句麗と倭に人質として送った弟達を帰国させ<sup>151</sup>、433年と434年に続く、百濟の和親要請を受諾する事で<sup>152</sup>、高句麗の影響力を排除しようと努めた。

(六)、『震檀學報』7;金哲堉、1952「新羅 上代社會의 Dual Organization(新羅上代社会のDual Organization)」、『歴史學報』12)、部體制という名前で深化させた研究では5世紀前半の訥祗麻立干代に注目しているが、最近になるにつれて、その時期を少しずつ遡らせ3世紀中葉まで遡っており(全徳在、1992「新羅6部體制의 變動過程 研究(新羅6部礼制の變動過程の研究)」、『韓國史研究』77;1996「新羅六部體制研究」、一潮閣)、その中には1世紀初に遡る見解もある(李鍾旭、1980「新羅上古時代의 六村과 六部(新羅上古時代の六村と六部)」、『震檀學報』49;李文基、1981「金石文資料를 통하여 본 新羅의 六部(金石文資料を通じて見た新羅の六部)」、『歴史教育論集』2;崔在錫、1987「新羅의 六村·六部(新羅の六村·六部)」、『韓國古代社會史研究』、一志社;朱甫噉、1992「三國時代의 貴族과 身分制(三國時代の貴族と身分制)」、『韓國社會發展史論』、一潮閣)。研究初期には都城の行政区域を6部に区分して、その上に6部貴族制が運営する時期を6部制と称したため、その成立時期を5世紀後半以後と考えるのが当然である。しかし、部体制に対する新しい概念が導入される段階になってからは、連盟諸小国の外交権が王権により統制され、対外関係の窓口が単一化される時期を重視した。

<sup>147</sup> 李漢祥、1995「5~6세기 新羅의 邊境支配方式(5~6世紀新羅の辺境支配方式)」、『韓國史論』33、ソウル大 學校國史學科、63頁。

<sup>148</sup> 咸舜燮、2002「신라와 가야의 冠에 대한 序說(新羅と加耶の冠に対する序說)」、『大加耶와 周邊諸國(大加耶と周辺諸國)』、高靈郡·韓國上古史學會、146頁。

<sup>149</sup> 金泰植、1985「5세기 후반 大加耶의 발전에 대한 研究(5世紀後半大加耶の発展に対する研究)」、『韓國史論』12、47~49頁;2002『미완의 文明 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史 1卷)』、푸른역사(ブルンヨクサ)、162~163頁。

<sup>150</sup> 李熙濬、2007『신라고고학연구(新羅考古学研究)』、社會評論、243~244頁。

<sup>151</sup> 『三国史記』卷45、列伝5 朴堤上伝「及訥祗王即位 思得辯士 往迎之 聞水酒村干伐寶鞣·一利村干仇迺利 伊村干波老三人有賢智 召問曰 吾弟二人 質於倭·麗二國 多年不還 兄弟之故 思念不能自止 願使生還 若之何而可。三人同對曰 臣等聞歆良州干堤上 剛勇而有謀 可得以解殿下之憂。於是 徵堤上使前 告三 臣之言而請行。堤上對曰 臣雖愚不肖 敢不唯命祗承。(下略)」

『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干2年「春正月 親謁始祖廟 王弟卜好 自高句麗 與堤上奈麻還來。 秋 王弟未斯欣 自倭國逃還。」

<sup>152</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干18年「春二月 百濟王送良馬二匹。秋九月 又送白鷹。冬十月 王以 黃金明珠 報聘百濟。」

しかし、高句麗系統の青銅容器の出土が5世紀後半まで続くことから、新羅はまだ高句麗との断絶を推進する事はできなかった。それにもかかわらず、新羅内で反高句麗の雰囲気は成熟し、450年に新羅の何瑟羅城(江原道江陵)の城主が、悉直(三陟)などに入って狩りをした高句麗边境の将帥を殺害する事件が起きた<sup>153</sup>。しかし、高句麗が使臣と軍兵を出し、これに抗議するや新羅王が謙遜した言葉で謝ったという事から見るに<sup>154</sup>、新羅はいまだに高句麗を無視することができなかったのである。

### 3. 加耶地域の勢力構図の変化

前期加耶連盟の消滅と同時に、一時的に弱化した加耶地域は滅亡せずに、持続して存続していたが、それらが、国際関係の中でどのような位置にいたのかは文献で確認できない。考古学的遺跡の状況を土台に5世紀以後加耶地域内部の情勢を整理すると、洛東江東側の地域は離脱して新羅文化圏へと入り、洛東江西側の後期加耶文化圏はその内部が高霊圏、咸安圏、固城—晋州圏、金海圏などの四つの圏域に区分される。

第一に、新羅に自発的に投降したとみられる星州、昌寧、梁山、釜山の地域は5世紀内に大きく発展し、古墳の規模が大きくなり慶州系統の遺物が豊富に出土する。この地域は元来加耶連盟所属であったが、新羅に服属する対価として独立的な地域支配権を新羅から承認され、その後援を受けながら発展していったのである<sup>155</sup>。これらは金海の盟主国が弱化したのを契機に、対倭交易を主導しながら、新羅の文物を仲介したり、加耶諸国の膨張を牽制したりする役割を担った。

第二に、貝塚および大形の木槨墓などが大量に出土した金海を中心とする洛東江河口流域の海岸地帯では、5世紀に入り突然古墳遺跡の数が減少し、規模も小形の石槨墓程度に縮小し、一部新羅系統の遺物が複合する現象が現われた。こうした現象はその地域で隆盛した前期加耶連盟の消滅を直接反映するものである<sup>156</sup>。

第三に、咸安では、宜寧、漆原、馬山、鎮北、郡北を含む一帯に小形の群集墳と中小形の封土墳で組み合わせられた下位古墳群グループを率いる道項里古墳群が、飛躍的な発展を見せることが特徴的である。しかし、咸安様式土器文化圏は他の地域へ文化圏が延伸せず、また他の文化圏の侵犯をほとんど許容しなかったので<sup>157</sup>、孤立的で自給自足的な特性を見せていた。

第四に固城、泗川、晋州地方にかけて、固城様式土器の存在範囲は非常に広範囲にわたって見られ、それに隣接する居昌、咸陽、阿英地方の勢力圏や咸安、宜寧、漆原地方の勢力圏と活発に交流する様相を帯びていた<sup>158</sup>。しかし、この土器圏はそれらの間に土器様式が類似するという事が分かっても、

<sup>153</sup> 前掲書、訥祗麻立干34年「秋七月 高句麗邊將 獵於悉直之原 何瑟羅城主三直 出兵掩殺之。」

<sup>154</sup> 前掲書、訥祗麻立干34年条「麗王聞之怒 使來告曰 孤與大王 修好至歡也 今出兵殺我邊將 是何義耶。乃興師侵我西邊 王卑辭謝之 乃歸。」

<sup>155</sup> 金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史 1巻)』、푸른역사(プルンヨクサ)、168頁。

<sup>156</sup> 前掲書、169頁。

<sup>157</sup> 李盛周、1999「考古學을 통해 본 阿羅加耶(考古學を通じて見た阿羅加耶)」、『考古學을 통해 본 加(考古學を通じて見た加耶)』(제23회 한국고고학 전국대회 발표요지(第23回韓國考古學全國大會發表要旨))、韓國考古學會。

<sup>158</sup> 安在皓、1997「鐵鎌의 변화와 劃期(鐵鎌の変化と画期)」、『加耶考古學論叢』2、ソウル:駕洛國史蹟開發研究院、79～88頁。

朴天秀、1999「器臺를 통하여 본 加耶勢力의 動向(器台を通じて見た加耶勢力の動向)」、『加耶의 그릇

発展の主体を見出すことができない特異な存在様相を見せている。これは、連盟全体の発展を試みることのできる強大な力と経済力を兼備した存在を輩出する事ができないという限界が存在したことの反映である<sup>159</sup>。

第五に前期加耶時代に後進地域であった高霊、陝川、居昌、咸陽などの内陸山間地域は5世紀前半以来加耶の既存文化の内容が蓄積され、5世紀中葉以後には、大形の墳丘墓を築造しながら、発展する様相を見せた。墓制や遺物の性格の面でそれらは4世紀以前の辰弁韓共通文化基盤を継承しつつ、全般的な経済力、および支配権力が漸進的に成長した<sup>160</sup>。

こうしてみると、5世紀前半の加耶地域において国際交易の立地条件が最も良い、金海、昌原一帯の勢力は極度に衰退しなまある程度新羅の影響力下に入っていた。残りの慶尚南道の西南部地域や、慶尚の内陸山間地域の様々な小国は独立性を維持していたが、互いに分散した状態で存在しており、国際関係において以前より萎縮した姿を見せていた。

#### 4. 日本列島の文化変動とその性格

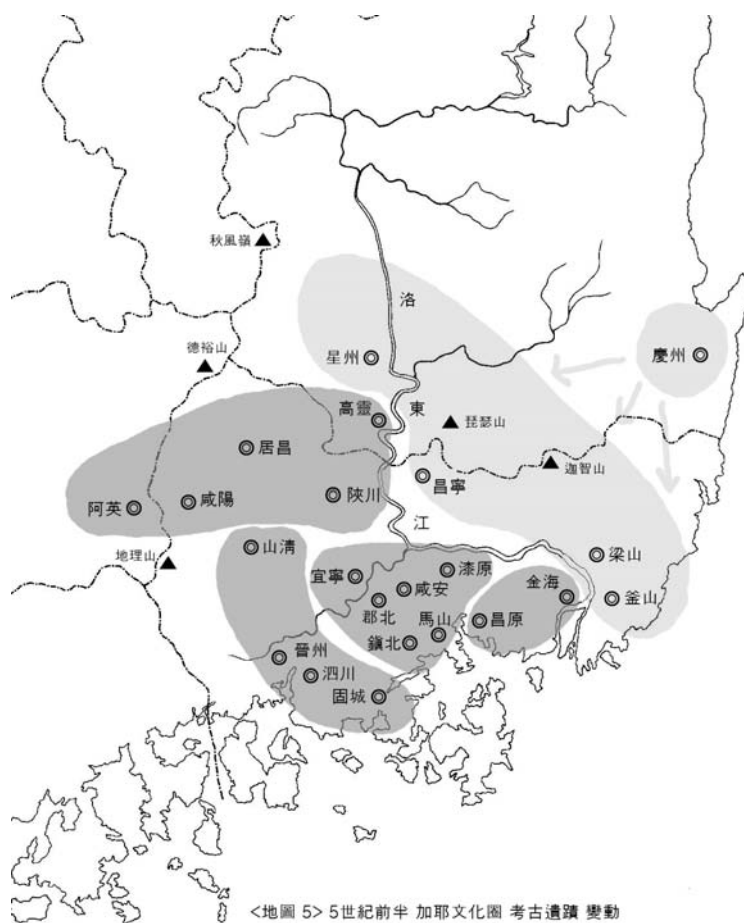
4世紀から5世紀に渡って、朝鮮半島南部と日本列島との対外交流には大きな変化が生じた。すなわち5世紀前半には、金海の加耶国が大きく弱化する事によって、日本列島の鉄や先進文化を輸出することのできる主導勢力が消えたため、その周辺の加耶小国と旧加耶の諸小国が各自の努力で小規模に倭と交渉したのである。

---

받침(加耶の器台)』、國立金海博物館、98頁。

<sup>159</sup> 金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 2권(未完の文明七百年加耶史2巻)』、푸른역사(ブルンヨクサ)、179～182頁。

<sup>160</sup> 金泰植、1993『加耶聯盟史』、一潮閣、88～90頁;2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史1巻)』、푸른역사(ブルンヨクサ)、170～171頁。



大阪府大庭寺遺跡のTG232廃棄場から出土した鉢形器台の文様構成は釜山福泉洞21-22号墳とほぼ一致し、続いて福泉洞10-11号墳系統の文様も現われる<sup>161</sup>。釜山福泉洞古墳群の築造勢力、つまり浣盧国は4世紀には加耶系統に属する勢力であったが、4世紀末5世紀初に新羅系統の文物が出土しはじめるので、これら金海の加耶国が弱化した時期にその代わりに一時期、日本列島の近畿地方との交渉を主導したと判断される

一方で、咸安様式の縄蓆文捺壺が長崎県大將軍山古墳や福岡県の東下田遺跡から出土したことを見るに<sup>162</sup>、咸安の安羅国は3～4世紀段階に続いて5世紀に日本列島との独自の交流をもう少し強化させたものと考えられる。筒形高杯を中心とする初期の須恵器は日本四国地方の香川県宮山窯と三谷三郎池窯および愛媛県古墳群などから出土しており、この地域には咸安の安羅国系統の工人が派遣され、活躍したことが分かる<sup>163</sup>。一方、固城様式の三角形透窓高杯と水平口縁壺などを見るに、福岡県朝倉窯と近隣の古寺古墳群および池の上古墳群の須恵器は固城の古自国との交流を通じて工人を受け入れたものと見える<sup>164</sup>。

<sup>161</sup> 朴天秀、2007『새로 쓰는 古代 韓日交渉史(新しい古代日韓交渉史)』、ソウル:社會評論、50頁。

<sup>162</sup> 前掲書、51頁。

<sup>163</sup> 前掲書、216～217頁。

<sup>164</sup> 前掲書、222頁。



このように見る時、5世紀前半の日本列島は近畿の倭王権と釜山の浣盧国との関係が主流を成していたとしても、四国の豪族、九州の豪族勢力たちも各地の加耶連盟の有力な小国である安羅国および古自国と別個の関係を結びながら独自の交渉活動を行っていたことが分かる。

韓日間の鉄と騎馬文物の交流に関しては、近來になって基礎的な資料の側面から大筋の共通点に到達した。すなわち、日本において製鉄が行われなかった5世紀までは交易を通じて加耶から鉄素材を入手し、これで鍛冶の過程を経て鉄器を生産したのであり、6世紀以後倭の鍛冶と製鉄の開始も加耶または百濟南部地方から渡来した人々により展開されたのである<sup>165</sup>。のみならず、4世紀ないし、5世紀前半の日本列島の騎馬に関連した武器と馬具は洛東江下流域の金官加耶のものが導入されたり、または、その影響下で作られたものであり、5世紀後半の日本の馬具は大加耶のものを受容し、在地化させたものであるという<sup>166</sup>。

またその中の一部はもう少し具体的に、日本畿内の新興勢力の武器と甲冑および馬具は、金海金官加耶から渡来した工人により導入されたものであり、5世紀後半の日本の甲冑と武器および馬具などは朝鮮半島の大加耶または百濟から渡来した工人により、新しい生産体制が作られ、すぐに在地化したと把握した<sup>167</sup>。4～5世紀に日本列島に渡来した朝鮮半島系移住民は主に港湾などに居住して、交易に従事し、あるいは、地方の首長や倭王権などにより工房に配置され、鉄器の製作、土器の製作などに従事したという。こうした交易従事者と各種の技術を備えた工人たちは、一種の価値の高い商品として、概して朝鮮半島側の政権の援助の下で交易したものとみられる<sup>168</sup>。

技術者の派遣、あるいは贈与は4世紀末以後からはじまり、6世紀前半までの時期に限定した加耶一倭の間の交易方式であったとすることができる。その援助工人の技術の水準や規模などの範囲は、加耶と倭の諸勢力の協議下で決定されたのであろう。このように5世紀日本列島の物質文化発展には援助工人が重要な役割を果たしたが、そのみを原因と見るには、その変革の速度が急激すぎるように見えるという問題がある。

韓日間の小規模交流による直接的な結果としては信じられないほどに、5世紀以後の日本列島の古

<sup>165</sup> 藤尾慎一郎、2004「弥生時代の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

東潮、2004「弁辰と加耶の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

穴澤義功、2004「日本古代の鉄生産」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

大澤正己、2004「金属組織学からみた日本列島と朝鮮半島の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

<sup>166</sup> 田中晋作、2004「古墳時代の軍事組織について」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

宋桂鉉、2004「加耶古墳の甲冑の變化と韓日関係」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

橋本達也、2002「古墳時代甲冑の系譜—朝鮮半島との関係—」、『第5回歴博国際シンポジウム古代東アジアにおける倭と加耶の交流発表要旨』、国立歴史民俗博物館、佐倉。

金斗喆、2004「加耶と倭の馬具」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

千賀久、2004「日本出土の'非新羅系'馬装具の系譜—大加耶圏の馬具との比較を中心に—」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。

<sup>167</sup> 田中晋作、前掲論文。

千賀久、前掲論文。

金泰植・宋桂鉉、2003『韓國의 騎馬民族論(韓國の騎馬民族論)』、韓國馬事會・馬事博物館、165頁。

<sup>168</sup> 彼らが朝鮮半島から伝わった交易の対象であったなら、倭王権は時により変わる相手方の政権、すなわち金官加耶、大加耶、または百濟に何を支払ったのか。その最も重要なものは軍事兵力、または労働の人員だったようである。そして彼らも朝鮮半島へ事が終えた後に戻るのではなく、大概、相手方側の処分任せて永久に居住するようになる場合が大部分ではなかったかと思う。金泰植・宋桂鉉、2003、前掲書、172頁。

墳文化は、4世紀までと5世紀以後の間に極めて大きな差異をみせる。埋葬施設については、それまでの堅穴系の埋葬施設とは別途に新しく朝鮮半島の影響を受け、横穴系の埋葬施設が4世紀末葉の九州地域で生まれ、西日本、東日本の各地に拡散する。副葬遺物では、それまでまったく見られなかった馬具が副葬されるようになり、武器・武具なども剣が次第に刀に代わり、弓矢でも殺傷力が優れた細身の鉄鏃が主流を占めるようになる。さらに甲冑でも新たに鋳留の技術で製作された強固な短甲や小札を縫ってあわせた活動的な挂甲が出現する。また、それまでは、あまり見られなかった金銅製の装身具類なども増加する。人々の生活でも従来の堅穴式住居にかまどが付設されるようになり、また土師器に加えて朝鮮半島の陶質土器の影響を受けた須恵器生産が始まり、広く使われるようになる<sup>169</sup>。

そうして4世紀末から5世紀初に日本列島に突然現われた各種の先進文物製作技術は平常の韓日間の文化交流の結果というより多数の移民と一緒に伝わったものと見る見解が多い<sup>170</sup>。4～5世紀に該当すると見られる『日本書紀』武烈紀以前の時期の日本の対外関係記事でも朝鮮半島から日本列島への大量移民を伝えている。その移住民を移住の原因別に分類すれば、自発的に倭国へ渡った場合として都怒我阿羅斯等の童女、天日槍とその従人、弓月君と120県、阿知使主・都加使主と17県、貴信、紀生磐宿禰などがある。次に朝鮮半島三国が倭国の要求に従った、あるいは朝貢として送った事例として、真毛津、阿直岐、王仁、木満致、能匠、新齊都媛と7婦女、池津媛＝適稽女郎、今来才伎、須流枳・奴流枳、斯我君などがある。また、戦争を通じて捕虜として捕まり渡った場合としては、草羅城の俘人、4邑の人民、韓奴6口などがある<sup>171</sup>。

その移民の性格に対する既存の説を見ると、渡来人の供給を安定化させるために朝鮮半島諸国を蕃国として隷属させた結果<sup>172</sup>、または任那経営の結果による韓国・中国系の住民の移動と見る見解<sup>173</sup>もあるが、騎馬民族の征服と見る見解<sup>174</sup>、金官加耶の解体による避難民の行列<sup>175</sup>、あるいは、金官加耶

<sup>169</sup> 白石太郎、2006「倭国の形成と展開」、『古代史の流れ:列島の古代史8』、岩波書店、45頁。

<sup>170</sup> 江上波夫、1984「日本における国家の形成—倭人の国から大和朝廷へ—」、『東洋研究』72:1992『江上波夫の日本古代史—騎馬民族説四十五年—』、大巧社、東京、256～257頁。

崔秉鉉、1992「考古學的으로 본 加耶와 日本의 관계(考古学的に見た加耶と日本の関係)」、『韓國史市民講座』11、一潮閣、ソウル、111～117頁。

中村潤子、1991「騎馬民族説の考古学」、『考古学その見方と解釈』、筑摩書房;森浩一編、1993『馬の文化叢書第一巻古代—埋もれた馬文化』、馬事文化財団、横浜、483頁。

酒井清治、2001「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」、『4～5世紀 東亞細亞 社會와 加耶(4～5世紀東亞細亞社會と加耶)』、제7회 加耶史 국제학술회의 발표요지(第7回加耶史国際会議発表要旨)、金海、99～101頁。

申敬澈、2000「금관가야의 성립과 연맹의 형성(金官加耶の成立と連盟の形成)」、『가야 각국사의 재구성(加耶各国史の再構成)』、釜山大學校韓國民族文化研究所編、慧眼、78頁。

<sup>171</sup> 金泰植、1998「日本書紀에 나타난 韓國古代史像(日本書紀に見える韓国古代史像)」、『韓國古代史研究』14輯、韓國古代史學會。

<sup>172</sup> 石母田正、1973『日本古代国家論』、岩波書店;1989『石母田正著作集』4

吉村武彦、2006「ヤマト王権と律令制国家の形成」、『列島の古代史8 古代史の流れ』、岩波書店、94頁。

<sup>173</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、264頁。

関晃、1956『帰化人』、至文堂;1996『古代の帰化人』(関晃著作集第三卷)、吉川弘文館、10～11頁。

上田正昭、1965『帰化人—古代国家の成立をめぐる—』、東京:中央公論社。

しかし上田の渡来人説は加耶地域に日本の大和政府の勢力が4世紀から6世紀まで存在したということは認めつつも、朝鮮半島から日本へ住民達が渡って来て日本古代文化建設に寄与したことを‘帰化’という言葉で一律的に表現することはできず、その渡来人の構成には中国系より韓国系が非常に重要な比重を占めていたと強調した点に意味がある。

<sup>174</sup> 江上波夫、1992、前掲書、256～257頁。

王権との交渉により畿内の倭王権に援助した加耶工人与前期加耶連盟の解体による流亡民、すなわち、加耶系移住民により形成されたとみる見解<sup>176</sup>などが存在する。

ここで、自発的な移民者の母国は朝鮮半島の高句麗・百済・新羅・加耶の四国に満遍なく分布しているとしたが、実際には大多数が高句麗と百済の境界地帯である旧楽浪・帯方郡地域と新羅と加耶の境界地帯である洛東江沿岸に居住していたものと推定される。この時期の朝鮮半島において戦争の勝者は高句麗と新羅であり、敗者は百済と加耶であった。よって戦争に苛まれり敗北した帯方系百済人たちと洛東江流域の加耶人たちの相当数が、日本列島へ大挙、避難したものと見ることができる。特にその時期は、金海中心の前期加耶と高霊中心の後期加耶の間の転換期に該当する。加耶の流亡民は慶尚南北道内陸の山間地域に逃避したりもしたが、身近に交流した日本列島へも相当数逃避したのである。

## 第2節 高句麗の膨脹と朝鮮半島南部の動向

### 1. 高句麗の南進と百済の南遷

5世紀後半に高句麗は東北アジア東北部の中核的仲介交易者として成長し、中国の南北朝との安定的な国際関係を基礎に周辺地域に対する領土拡張を図った。そうして高句麗は479年には、外蒙古地方の柔然と謀議して興安嶺山脈一帯の契丹族一派である地豆于の分割占領を試み<sup>177</sup>、南側では漢江以南に対する南進政策を推進した。『三国史記』の記録を見るに高句麗は450年、454年、468年、481年にかけて新羅を攻撃し<sup>178</sup>、455年と475年には、百済に侵攻した<sup>179</sup>。その当時、朝鮮半島南部の3国、すなわち、百済・新羅・加耶の成長および、共同の対応により高句麗の漢江以南の攻略は容易ではなかった。しかし、高句麗長寿王は結局475年に百済の首都である慰礼城(ソウル松坡区)を陥落させ、蓋鹵王を戦死させたので、これは、朝鮮半島の情勢の版図を揺るがす大きな事件であった。

百済蓋鹵王は毗有王に続いて積極的な外交政策を推進し、457年、458年、471年に中国南朝の宋に使臣を送り朝貢し<sup>180</sup>、472年には北魏に国書を送り<sup>181</sup>、461年には倭国に弟の昆支を送り、友好を修め

<sup>175</sup> 申敬澈、2000、前掲論文、78頁。

<sup>176</sup> 金泰植・宋桂鉉、2003『韓國의 騎馬民族論(韓國の騎馬民族論)』、果川: 韓國馬事會・馬事博物館、215~219頁。

<sup>177</sup> 『魏書』契丹国伝 太和3年(479)「高句麗竊與蠕蠕謀 欲取地豆于以分之。契丹懼其侵軼 其莫弗賀勿于率其部車三千乘・衆萬餘口 驅徙雜畜 求入内附 止於白狼水東。」

<sup>178</sup> 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長寿王38年(450)「新羅人襲殺邊將 王怒 將舉兵討之 羅王遣使謝罪 乃止。」

同王42年(454)「秋七月 遣兵侵新羅北邊。」

同王56年(468)「春二月 王以靺鞨兵一萬 攻取新羅悉直州城。」

『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干3年(481)「三月 高句麗與靺鞨入北邊 取狐鳴等七城 又進軍於彌秩夫 我軍與百済・加耶援兵 分道禦之 賊敗退 追擊破之泥河西 斬首千餘級。」

<sup>179</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干39年(455)「冬十月 高句麗侵百済 王遣兵救之。」

同書、慈悲麻立干17年(474)「秋七月 高句麗王巨連 親率兵攻百済。百済王慶 遣子文周求援。王出兵救之 未至百済已陷 慶亦被害。」

しかし新羅本紀の慈悲麻立干17年条記事は高句麗本紀および百済本紀と比較した時、紀年が1年相違する。

<sup>180</sup> 『宋書』卷97、列伝57 百済国「毗死 子慶代立 世祖大明元年 遣使求除授 詔許。二年 慶遣使上表曰「臣國累葉 偏受殊恩 文武良輔 世蒙朝爵。行冠軍將軍右賢王餘紀等十一人 忠勤宜在顯進 伏願垂愍 並聽賜除。」仍以行冠軍將軍右賢王餘紀 爲冠軍將軍。以行征虜將軍左賢王餘昆・行征虜將軍餘暈 並爲征虜將軍。

た<sup>182</sup>。また、遅くとも5世紀に百済は地方支配の拠点になる一部の城邑に子弟・宗族などの地方官を派遣し統治する檐魯制を実施していたと推定され<sup>183</sup>、5世紀中盤以後に羅州の潘南古墳群の築造勢力などに持続的に文物の支援を行い影響力を強化していった。しかし百済の内部では、急速な中央集権力の強化過程で、社会的内紛と民心の離反現象がみられるようになり、結局、475年に高句麗の侵攻を防げず首都の慰礼城が陥落した。これに文周王が熊津(忠清南道公州)に遷都し、收拾を図ったが、477年に兵官佐平の解仇の反乱が起き<sup>184</sup>、文周王と三斤王が在位3年だけで死去する<sup>185</sup>などの混乱を経験した。

ここで問題になるのは高句麗と百済の間の国境線である。なぜなら、475年の漢城(慰礼城)陥落にもかかわらず、『三国史記』には、その後の記事にもまるで高句麗と百済の間の国境線が黄海道方面であったかのように叙述してあるからである。そのためその以後にも百済が継続して漢江流域の漢城を領有したことを肯定する見解<sup>186</sup>、否定する見解<sup>187</sup>、一時回復した見解<sup>188</sup>などに分かれており、最近では漢江以南の錦江流域である大田月坪洞遺跡<sup>189</sup>と清源南城谷遺跡<sup>190</sup>から高句麗遺跡と遺物が確認されたことから、研究が新しい局面を迎えている。最近に出された総合的な見解としては、高句麗の最大の南限界線を礼山邑から天安を経て清源を過ぎ、大田を経て槐山へ至る一帯までとみる見解と<sup>191</sup>、概して京畿道と忠清南道の境界線に従って分かれているが、忠清北道一帯は大部分高句麗の領域に属するとみ

---

以行輔國將軍餘都・餘又 並爲輔國將軍。以行龍驤將軍沐衿・餘爵 並爲龍驤將軍。以行寧朔將軍餘流・麋貴 並爲寧朔將軍。以行建武將軍于西・餘婁 並爲建武將軍。太宗泰始七年 又遣使貢獻。」

<sup>181</sup> 『魏書』卷100、列伝88 百済国「延興二年 其王餘慶始遣使上表曰(下略)。」

<sup>182</sup> 『日本書紀』卷14、雄略天皇5年「夏四月 百済加須利君[蓋鹵王也] 飛聞池津媛之所播殺[適稽女郎也] 而籌議曰 昔貢女人爲采女 而既無禮 失我國名 自今以後不合貢女。乃告其弟軍君[昆支也]曰 汝宜往日本以事天皇。軍君對曰 上君之命不可奉違 願賜君婦而後奉遣。加須利君則以孕婦 既嫁與軍君曰 我之孕婦既當産月 若於路産 冀載一船 隨至何處速令送國。遂與辭訣 奉遣於朝。」

<sup>183</sup> 盧重國、1988『百済政治史研究』、一潮閣;1991「百済の 檐魯制 實施と 編制基準(百済の檐魯制の實施と編制基準)」、『啓明史學』2

金英心、1990「5~6세기 百済의 地方統治體制(5~6世紀百済の地方統治体制)」、『韓國史論』22

盧重國は檐魯制實施の起源を4世紀後半近肖古王代に置いており、金英心は5世紀中後半の蓋鹵王代に置いている。

<sup>184</sup> 『三国史記』卷26、百済本紀4 文周王3年「秋八月 兵官佐平解仇 擅權亂法 有無君之心 王不能制。九月王出獵 宿於外 解仇使盜害之 遂薨。」

<sup>185</sup> 前掲書、三斤王3年「冬十一月 王薨。」

<sup>186</sup> 千寛宇、1976「三韓의 국가형성(三韓の国家形成)」、『韓國學報』3、一志社、115頁。

김영관、2000「백제의 웅진천도의 배경과 한성경영(百済の熊津遷都の背景と漢城經營)」、『忠北史學』11、12号、75~91頁。

김병남、2002「백제 웅진시대의 북방 영역(百済熊津時代の北方領域)」、『白山學報』64、131~156頁; 2004「백제 웅진 천도 초기의 북방영역 관련 지명 분석(百済熊津遷都初期の北方領域関連地名の分析)」、『韓國上古史學報』52、5~23頁。

<sup>187</sup> 李基白、1978「웅진시대 백제의 귀족세력(熊津時代百済の貴族勢力)」、『百済研究』9、忠南大百済研究所、7頁。

盧重國、2006「5~6세기 고구려와 백제의 관계(5~6世紀高句麗と百済の關係)」、『北方史論叢』11、高句麗歴史財團、19~22頁。

<sup>188</sup> 朴燦圭、1991「백제 웅진초기 북경문제(百済熊津初期の北境問題)」、『史學志』24

梁起錫、2005「5~6세기 백제의 북계 —475~551 백제의 한강유역 영유문제를 중심으로—(5~6世紀百済の北界—475~551百済の漢江流域領有問題を中心に—)」、『博物館紀要』20、檀國大學校 昔宙善記念博物館、48頁。

<sup>189</sup> 國立公州博物館・忠南大學校博物館、1999『大田月坪洞遺蹟』。

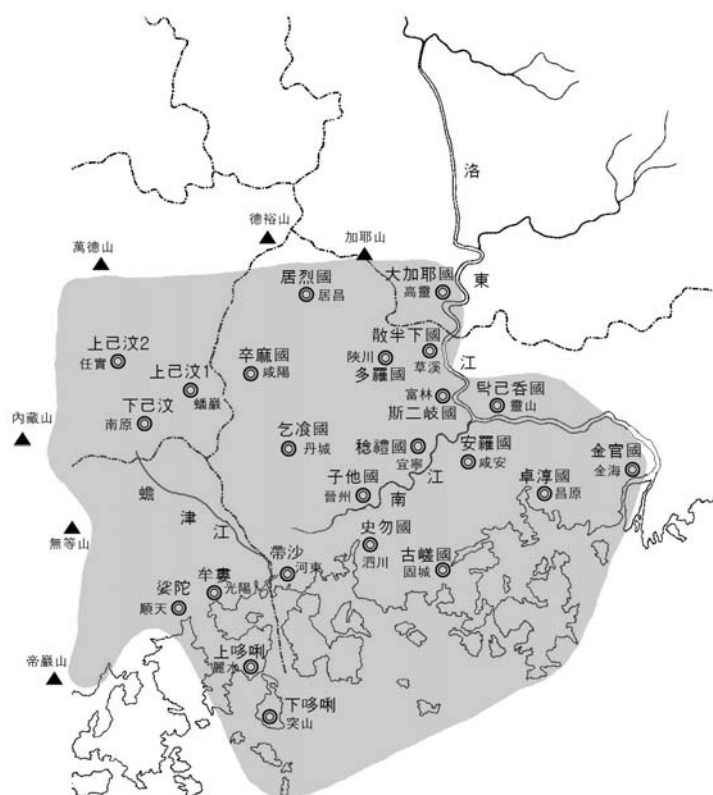
<sup>190</sup> 忠北大學校博物館、2004『清源 南城谷 高句麗遺蹟』。

<sup>191</sup> 盧重國、2006、前掲論文、30頁。

る見解などが<sup>192</sup>存在する。

## 2. 大加耶の台頭と対倭交流

加耶地域は5世紀中葉以後、高霊地方を中心にして再起するようになる。その基盤は、一つ目にこの地域の農業生産性が非常に高かった点を挙げることができ、二つ目にこの地域は戦争の被害を被らず、高霊の伴跋国が前期加耶の先進技術者達を受け入れ、加耶山の麓の鉄鉦山を開発し、独自の製鉄能力を備えるようになった点であり<sup>193</sup>、三つ目にこれらが百濟および倭と対外交流を活発にして加耶地域全体の交流の中心として浮上していた点を挙げることができる<sup>194</sup>。



<地圖 6> 後期加耶聯盟の最大版圖

高霊地方に伝わる大加耶伊珍阿跋王神話から考えると<sup>195</sup>、5世紀中葉に高霊の伴跋国は大加耶に国名を代え、後期加耶連盟を形成した。『宋書』倭人伝に見られる倭の五王の中の済が451年に‘使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍倭國王’という爵号を受けたことから、高霊の伴

<sup>192</sup> 金泰植外6人、2008『韓國 古代 四國의 國境線(韓国古代四国の国境線)』、書景文化社、31～32頁、89頁。

<sup>193</sup> 金泰植、1986「後期加耶諸國의 성장기반 고찰(後期加耶諸国の成長基盤の考察)」、『釜山史學』11、釜山史學會;1993『加耶聯盟史』、一潮閣、91～95頁。

<sup>194</sup> 金泰植、2007「加耶와의 관계(加耶との関係)」、『百濟文化史大系第9卷:百濟의 對外交渉(百濟の対外交渉)』、公州:忠清南道歴史文化研究院。

<sup>195</sup> 『新增東国輿地勝覽』卷29、高霊県 建置沿革「按崔致遠釋利貞傳云 伽倻山神正見母主 乃爲天神夷毗訶之所感 生大伽倻王惱室朱日・金官國王惱室青裔二人 則惱室朱日爲夷珍阿跋王之別稱 青裔爲首露王之別稱。」

跋国が加羅国として国号をかえたことは5世紀中葉以前に遡らせる必要がある<sup>196</sup>。また、大加耶は5世紀中葉から居昌、咸陽、阿英、雲峰を経て、蟾津江の下流へ通じる半月形の交易ルートを開削し<sup>197</sup>、小白山脈を西側に越えて、全羅北道の南原、任実、全羅南道の麗水、順天、光陽などの地の勢力を連合して、領域を拡張した。そうした開削に力を得て、加羅王荷知は479年に中国南齊に朝貢し、‘輔國將軍本國王’の爵号を受けた<sup>198</sup>。それに続いて、大加耶は481年には新羅に軍隊を送り、高句麗の南進を撃退するのにも協調し<sup>199</sup>、496年には新羅に白い雉を送り友好を修めた<sup>200</sup>。後期加耶連盟が最も隆盛を極めた5世紀後半および6世紀初に大加耶は湖南地域の7つの小国と嶺南地域の15の小国を合わせ、すべて22個の小国を合わせていた<sup>201</sup>。

これは、考古学的調査による竪穴式石槨墳、および加耶土器の分布圏とも一致する。高霊池山里古墳群をはじめとして、慶尚南道の陝川玉田古墳群、山清中村里古墳群、咸陽白川里古墳群、全羅北道の南原月山里古墳群、全羅南道の順天雲坪里古墳群などで出土する諸遺物の類似性はそうした状況を反映するものである。その中で高霊池山里古墳群の遺物は他の地域のものに比べ、質と量の側面において、優越性を維持していた。

5世紀後半から6世紀前半までにかけて発展した加耶王権の性格については、様々な見解がある。5～6世紀の後期加耶文化圏は高霊圏、咸安圏、固城—晋州圏、金海圏の4個の圏域に分かれ、各圏域は相互間に互いに他の特徴と発展過程を見せる。そして後期加耶文化圏の政治状況に対しては、分立的と見る見解が多く出されている。そうした見解としては、①加耶単一連盟体論<sup>202</sup>、②加耶小国分立論<sup>203</sup>、③大加耶連盟論<sup>204</sup>、④加耶地域連盟体論<sup>205</sup>などが存在する。こうした学説状況から鑑みるに、加耶地域は独立的な様々な小国を合わせた一つの連盟体と認める事ができるが、その諸小国は連盟体

<sup>196</sup> 李鎔賢、1999『加耶と東アジア諸国』、日本國學院大學大学院博士学位論文。

<sup>197</sup> 朴天秀、1997『政治體의 相互關係로 본 大伽耶王權(政治体の相互關係で見た大伽耶王権)』、『加耶諸國의 王權(加耶諸国の王権)』、仁濟大加耶文化研究所編、新書苑、186頁。

<sup>198</sup> 『南齊書』卷58、列伝39 東南夷伝 東夷「加羅國 三韓種也。建元元年 國王荷知使來獻。詔曰 量廣始登 遠夷洽化。加羅王荷知 款關海外 奉贄東遐。可授輔國將軍本國王。」

<sup>199</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干3年「三月 高句麗與靺鞨入北邊 取狐鳴等七城 又進軍於彌秩夫。我軍與百濟加耶援兵 分道禦之。賊敗退。追擊破之泥河西 斬首千餘級。」

<sup>200</sup> 前掲書、炤知麻立干18年「春二月 加耶國送白雉 尾長五尺。」

<sup>201</sup> 金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史 1卷)』、182～183頁；同書 2卷、205～207頁。

<sup>202</sup> 李丙燾、1976『加羅諸國의 聯盟體(加羅諸国の連盟体)』、『韓國古代史研究』、博英社。

金廷鶴、1982『古代國家의 發達(伽耶)(古代国家の發達(加耶))』、『韓國考古學報』12、韓國考古学会；1987『加耶의 國家形成段階(加耶の国家形成段階)』、『精神文化研究』32

金泰植、1993『加耶聯盟史』、一潮閣；2002『미완의 문명 7백년 가야사 1～3권(未完の文明七百年史加耶史1～3卷)』、『푸른역사(プルンヨクサ)』。

<sup>203</sup> 李永植、1985『加耶諸國의 國家形成問題 —加耶聯盟說의 再檢討와 戰爭記事分析을 중심으로—(加耶諸国の国家形成問題—加耶連盟說と戰爭記事の分析を中心に—)』、『白山學報』32；1993『加耶諸国と任那日本府』、吉川弘文館、東京。

白承玉、2003『加耶 各國史 研究』、慧眼。

南在祐、2003『安羅國史』、慧眼。

<sup>204</sup> 田中俊明、1992『大加耶連盟の興亡と任那』、吉川弘文館、158～159頁。

<sup>205</sup> 權鶴洙、1994『가야 제국의 상관관계와 연맹구조(加耶諸国の相関關係と連盟構造)』、『韓國考古學報』31  
白承忠、1995『가야의 지역연맹사 연구(加耶地域連盟史研究)』、釜山大學校博士学位論文。

金世基、盧重國、朴天秀、李明植、李熙濬、朱甫墩編、1998『加耶文化圖錄』、慶尚北道。

李炯基、2009『大加耶의 形成과 發展 研究(大加耶の形勢と發展の研究)』、景仁文化社。

に特有な分節体系の存在様相を帯び、3～4個の小地域連盟体に分かれていたとする事ができる。

また、多くの学者が5世紀後半を大加耶の古代国家形成時期と論じている<sup>206</sup>。ところで、部体制が形成される時期を初期古代国家と認めるのであれば、少なくとも王が各部の武力を統制できることと、王優位の官等の序列化が形成されることなどの基準が備わってなければならない<sup>207</sup>。しかし南齊に使臣を送り爵号を受けたという程度のみでは、証拠不足で、連盟体の強化とみななければならないのか、初期古代国家と見なければならないのか、判断しがたい。

5世紀中葉に加耶地域が高霊の大加耶を中心に再統合され、その以後には、大加耶が倭との交易を主導した。大加耶は大和をはじめとする日本列島各地の小さな勢力とも交流し、鉄鋌に、加えて装身具、馬具などの物品を輸出し、倭からは倭人兵力を引き入れ活用した。大加耶系統遺物は、5世紀中葉に愛媛県樹之本古墳で高霊様式の長頸壺が出土されて以後、日本全域に拡大し、福井県二本松山古墳、埼玉県稲荷山古墳、和歌山県大谷古墳、熊本県江田船山古墳などで高霊様式土器と大加耶の金銅冠、耳飾をはじめとする威勢品が出土した<sup>208</sup>。また、高霊、陝川、咸陽、南原、任実などの大加耶圏域から出土した踏鍬形、鉄鋤形、鉄斧形、鎌形などの縮小模型鉄製農器具が<sup>209</sup>6世紀初葉まで日本で盛行していた事実は<sup>210</sup>、高霊地方の伴跋国が倭と交流した事を反映するものである。

一方、加耶により倭の武力強化のための援助として、5世紀中盤から後半にかけての日本列島に馬を飼育する馬飼集団の集中的な移住が行われたが、大加耶の状況に比べると、倭の重装騎馬軍団は成立しなかったとみえ、6世紀になっては、武装より、装飾馬具の生産が盛行するようになった<sup>211</sup>。また、5世紀末葉には、日本列島で自主的に鉄生産も行われ始めたが、鉄生産技術は大加耶ではない他の加耶小国、または、栄山江流域の百濟系統小国から伝えられたとする見解もある<sup>212</sup>。

### 3. 高句麗に対する新羅の対応

新羅は5世紀前半に高句麗の保護及び支援を受け成長したが、危機状況を克服し、安定を取り戻す

<sup>206</sup> 李熙濬、1995「토기로 본 대가야의 권역과 그 변천(土器で見る大加耶の圏域とその変遷)」、『加耶史研究』、慶尚北道。

朴天秀、1996「大加耶의 古代國家 形成(大加耶の古代国家形成)」、『碩啓尹容鎮教授停年退任紀念論叢』。

金世基、1995「대가야 묘제의 변천(大加耶墓制の変遷)」、『가야사연구』、慶尚北道;1997「加耶의 殉葬과 王權」、『加耶諸國의 王權』、新書苑;2003『고분 자료로 본 대가야 연구』、學研文化社。

<sup>207</sup> 金泰植、2003「初期 古代國家論」、『강좌 한국고대사(講座韓國古代史)』2、가락국사적개발연구원、23～30頁。

<sup>208</sup> 朴天秀、1995「渡來系文物에서 본 加耶와 倭에서의 政治的 變動(渡來系文物から見た加耶と倭における政治的變動)」、『待兼山論叢』(史学編29)、大阪:大阪大学文学部;1996「日本 속의 加耶文化(日本の中の加耶文化)」、『加耶史의 새로운 理解(加耶史の新しい理解)』(發表要旨)、韓國古代史研究會。

<sup>209</sup> 金在弘、2006「大加耶地域の 鐵製農器具 —小形鐵製農器具와 살포를 중심으로—(大加耶地域の鉄製農器具—小形鉄製農器具とサルポを中心に—)」、『大加耶의 成長과 發展(大加耶の成長と發展)』、高霊郡韓國古代史學會。

<sup>210</sup> 都出比呂志、1967「農具鉄製化の二つの劃期」、『考古学研究』13卷3号。

<sup>211</sup> 千賀久、2002「加耶と倭の馬文化」、『第5回歴博国際シンポジウム古代東アジアにおける倭と加耶の交流發表要旨』、佐倉:国立歴史民俗博物館、171～174頁;2004「日本出土の'非新羅系'馬装具の系譜」、『国立歴史民俗博物館研究報告110—第五回歴博国際シンポジウム:古代東アジアにおける倭と加耶の交流—』、佐倉:国立歴史民俗博物館、283～307頁。

<sup>212</sup> 東潮、2004「弁辰と加耶の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告110—第五回歴博国際シンポジウム:古代東アジアにおける倭と加耶の交流—』、佐倉:国立歴史民俗博物館、31～54頁。

ことによってその内部で高句麗の影響力を排除しようとする社会的要求が高まるようになった。そうしてこれと関連して『日本書紀』雄略8年(464)条に新羅の地から高句麗軍と任那王が送った倭軍が対敵するという記事があり、その意味に関する解釈が問題になる<sup>213</sup>。ここで‘高句麗が軍士100人を新羅に駐屯させた’り、‘新羅が高句麗軍を鶏の雄に比喻して殺害した’、あるいは、‘高句麗が新羅の筑足流域を攻め寄せた’などの事実を表現しているの、ここには、新羅側の原典に基礎を置いた、相当な具体性が見られる<sup>214</sup>。

しかし、雄略紀8年条に見える‘日本府’関連の句節には新羅王が任那王に人を送り、日本府の行軍元帥などに救援を要請したという内容がみえ注目される。‘日本府’という名前は『日本書紀』でもこの題目としてはじめて現れるものである。しかし、ここで注釈の下線部分<sup>215</sup>は固有名詞を除外するとすべて『漢書』高帝紀と『三国志』魏書武帝紀の文章をほぼそのまま収録したものである<sup>216</sup>。その戦闘場面や新羅王の発言内容も『日本書紀』撰者の模倣作文である。これを除外して残ったものは、‘新羅王が任那王に日本府行軍元帥の救援を要請した’という事実と膳臣斑鳩など3人の日本人名に過ぎない。

よってこれは『日本書紀』撰者の編纂意図により、幾人かの日本人名と彼らの活躍の内容が追加され、原典が大きく変形したものと見るよりほかはない。その当時、加耶軍隊の中に倭人兵力がある程度含まれている可能性もあるが、事態の主役でない倭人の家伝に伝わる曖昧模糊とした叙述が『日本書紀』撰者をして操作させるようにしたのである<sup>217</sup>。よってこれをいわゆる‘任那日本府’関連資料と利用する事はできない。

これを除外して考えると新羅が任那王、すなわち加耶に救援を要請したと言う事実のみ残る。これは『三国史記』に481年、高句麗が新羅の狐鳴城(慶尚北道盈徳郡盈徳邑)など7つの城を奪い、弥秩夫(慶尚北道浦項市興海邑)に進軍したのだが、新羅軍が百済と加耶の救援兵と一緒にこれを防いだという記録<sup>218</sup>とかなり一致する。そうであるとしたら、新羅が加耶に救援を要請したと言う記事が、まったく根拠の無いもの見るのは難しいのである。

<sup>213</sup> 『日本書紀』卷14、雄略天皇8年「春二月 遣身狹村主青・檜隈民使博徳 使於吳國。自天皇即位 至于是歳 新羅國背誕 苞苴不入 於今八年。而大懼中國之心 脩好於高麗。由是 高麗王遣精兵一百人 守新羅。有頃 高麗軍士一人 取假歸國。時以新羅人爲典馬[典馬 此云于麻柯比] 而顧謂之曰 汝國爲吾國所破 非久矣。[一本云 汝國果成吾土 非久矣。] 其典馬聞之 陽患其腹 退而在後。遂逃入國 說其所語。於是 新羅王乃知高麗僞守 遣使馳告國人曰 人殺家内所養鷄之雄者。國人知意 盡殺國內所有高麗人。惟有遺高麗一人 乘間得脱 逃入其國 皆具爲說之。高麗王即發軍兵 屯聚筑足流域[或本云 都久斯岐城] 遂歌舞興樂。(中略) 二國之怨 自此而生。[言二國者 高麗・新羅也。] 膳臣等謂新羅曰 汝以至弱 當至強。官軍不救 必爲所乘 將成人地 殆於此役。自今以後 豈背天朝也。」

<sup>214</sup> 高寛敏、1996「五世紀、新羅の北辺」、『三国史記の原典的研究』、雄山閣出版;1997『古代朝鮮諸国と倭国』、雄山閣出版、146頁。

<sup>215</sup> 『日本書紀』卷14、雄略天皇8年2月「於是 新羅王 夜聞高麗軍四面歌舞 知賊盡入新羅地。乃使人於任那王曰 高麗王征伐我國。當此之時 若綴旒然。國之危殆 過於累卵。命之脩短 太所不計。伏請救於日本府行軍元帥等。由是 任那王勸膳臣斑鳩[斑鳩 此云伊柯屢俄]吉備臣小梨難波吉士赤目子 往救新羅。膳臣等未至營止。高麗諸將 未與膳臣等相戰 皆怖。膳臣等乃自力勞軍 令軍中 促爲攻具 急進攻之。與高麗相守十餘日 乃夜鑿險 爲地道 悉過輜重 設奇兵。會明 高麗爲膳臣等爲遁也 悉軍來追。乃縱奇兵 步騎夾攻 大破之。」

<sup>216</sup> 島憲之、1962『上代日本文学与中国文学』上、塙書房、325頁。

<sup>217</sup> 金泰植、2006「5~6세기 高句麗와 加耶의 관계 (5~6世紀高句麗と加耶の關係)」、『北方史論叢』11号、高句麗歴史財團、124~127頁。

<sup>218</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干3年「三月 高句麗與靺鞨入北邊 取狐鳴等七城 又進軍於彌秩夫。我軍與百濟・加耶援兵 分道禦之 賊敗退 追擊破之泥河西 斬首千餘級。」



また、高句麗と新羅に初めて隙間ができる状況としては、『三国史記』では450年に高句麗の辺境の將帥が悉直(江原道三陟市)の郊外で狩りをするのを、何瑟羅城主の三直が軍士を出し殺害し高句麗が新羅の西側の辺境へ侵入したという記事がみられ<sup>219</sup>、それに続いて454年に高句麗が新羅の北側の辺境を侵犯したという記事<sup>220</sup>、468年に高句麗が靺鞨と一緒に北側の辺境の悉直城を襲撃したという記事<sup>221</sup>などが見られる。高句麗軍が侵犯した筑足流域という地名に対しては、音韻上の比較により達句伐城、すなわち現在の大邱と見る見解がある<sup>222</sup>。しかし、‘筑足流’は‘達句伐’よりは、‘悉直’に似た語感を与え、悉直(江原道三陟)は450年と468年に新羅と高句麗の間で紛争が起きたところであった。

よって雄略紀8年条の朝鮮半島関連記事は464年の1年に過ぎない編年記事として扱うことのできるものではなく、450年に新羅と高句麗の間に紛争が起き、それに続く一連の事件の結果481年に新羅が加耶に救援を要請して加耶軍がそれに加担したことをすべて示したものとできよう。その当時に倭軍が加耶軍の一員として参与したかの可否は明確ではないが、伝統的に加耶と倭の間に形成された物的・人的資源交易の形態を基盤にしていた<sup>223</sup>加耶軍隊の中に倭人兵力がある程度含まれていた可能性は高い。

こうして見ると、高句麗は百濟のみならず新羅側へも領土拡張を図っており、450年以後悉直(江原道三陟)を征討し始め、468年に奪い、481年には弥秩夫(慶尚北道浦項市興海邑)まで進攻した。これに対して百濟の東城王は対内的に国力を回復させる一方で、対外的には481年に新羅を救援して高句麗軍の南進を撃退し493年に新羅に請婚し、結婚同盟を結ぶことで<sup>224</sup>安定を図った。また、加耶も481年に新羅を救援し、496年に新羅に白い雉を送った<sup>225</sup>ということから、両者の友好関係は相当な期間持続したとみられる。こうして5世紀後半の朝鮮半島情勢は高句麗の南進に対処して百濟－新羅－加耶が軍事同盟を結び防御する形勢であったと見る事ができる。この当時の史料に見える倭軍は高句麗の南進を防ぐ主力ではなく、加耶軍に所属した付随的な存在に過ぎなかった。

このように新羅は、5世紀後半に百濟および加耶との協力を土台にして高句麗の南進を処置し、小白山脈以北と江原道江陵一帯まで領土を保存したので<sup>226</sup>、これを土台にして慈悲麻立干は469年に首都の坊里名を定め<sup>227</sup>、炤知麻立干は487年に神宮を建て、四方に郵便駅を設置し官道を修理するなど<sup>228</sup>、中央統治の基盤を固めた。特に新羅が470年から474年の間に小白山脈秋風嶺方面の内外へ三年山城(忠清北道報恩)、苺老城(慶尚北道軍威郡孝令面)、一牟城(忠清北道清原郡文義面)、沙尸城(忠

<sup>219</sup> 前掲書、訥祗麻立干34年「秋七月 高句麗邊將 獵於悉直之原。何瑟羅城主三直 出兵掩殺之。麗王聞之怒 使來告曰 孤與大王 修好至歡也 今出兵殺我邊將 是何義耶。乃興師侵我西邊。王卑辭謝之。乃歸。」

<sup>220</sup> 前掲書、訥祗麻立干38年「八月 高句麗侵北邊。」

<sup>221</sup> 前掲書、慈悲麻立干11年「春 高句麗與靺鞨 襲北邊悉直城。」

<sup>222</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、大八洲出版;1956再版、吉川弘文館、86頁。

<sup>223</sup> 金泰植、2005「4世紀의 韓日關係史 一廣開土王陵碑文의 倭軍問題를 中心으로—(4世紀の日韓關係史— 廣開土王陵碑文の倭軍問題を中心)—」、『韓日歴史共同研究報告書第1巻』、韓日歴史共同研究委員會、72頁。

<sup>224</sup> 『三国史記』卷26、百濟本紀4 東城王15年「春三月 王遣使新羅請婚 羅王以伊飡比智女 歸之。」

<sup>225</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干18年「春二月 加耶國送白雉 尾長五尺。」

<sup>226</sup> 姜鍾薰、2008「5세기 후반 고구려와 신라의 국경선(5世紀後半高句麗と新羅の国境線)」、『韓國 古代 四國의 國境線(韓國古代四國の国境線)』、書景文化社、119～121頁。

<sup>227</sup> 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干12年「春正月 定京都坊里名。」

<sup>228</sup> 前掲書、炤知麻立干9年「春二月 置神宮於奈乙 奈乙始祖初生之處也。三月 始置四方郵驛 命所司修理官道。」

清北道沃川郡伊院面)、沓達城(慶尚北道尚州市化西面)、仇礼城(忠清北道沃川郡沃川邑)、坐羅城(忠清北道永同郡黄澗面)などを築城し<sup>229</sup>、486年に三年城(忠清北道報恩)と屈山城(忠清北道沃川)を改築したことは<sup>230</sup>印象的である。こうした一連の措置は当時の新羅が外に国境線を整備し、内には首都を整備しつつそれを通す通信網を構築する姿を反映するものである。<sup>231</sup>



<地圖 7> 482年 韓半島 四國의 國境線

#### 4. 顯宗紀3年是歲條の解釈

『日本書紀』顯宗3年(487)条に高句麗と百濟および加耶の関係を推定させる記事が見られる。問題も多く、解説も難しいこの記事を引用すれば次のようである。

この歳に紀生磐宿禰は任那に留まりつつ高句麗に交通し、西側では三韓の王になろうとし、官府を整備しみずから神聖であると称した。任那左魯那奇他甲背などの計策を使い、百濟の適莫爾解を爾林<爾林は高句麗の領土である。>で殺害し、帶山城を築き東道を防ぎ守り、糧穀を運搬する渡し場を遮断し、軍士たちを飢え疲れ果てるようにした。百濟王はひどく怒って領軍の古爾解と内頭の莫古解などを派遣し、群衆を率いて帶山に集まり攻撃した。これに生磐宿禰は軍隊を送り出し、迎撃したが、胆氣が一層旺盛になり向かうところどころですべて撃破し一人が百人に当たった。しかし時間が過ぎ兵士がみな力尽き成就できないことを知り、任那から戻った。そうして百濟国は佐魯那奇他甲背など300余名を

<sup>229</sup> 前掲書、慈悲麻立干13年「築三年山城。」

同王14年「春二月 築老城。」

同王17年「築一牟・沙尸・廣石・沓達・仇禮・坐羅等城。」

<sup>230</sup> 前掲書、炤知麻立干8年「春正月 拜伊滄實竹爲將軍 徵一善界丁夫三千 改築三年・屈山二城。」

<sup>231</sup> 金泰植外6人、『한국 고대 사국의 국경선(韓国古代四國の国境線)』、書景文化社、45頁。

殺害した<sup>232</sup>。

任那日本府説では、これを倭の豪族である紀生磐宿禰による任那支配が百濟の南進で衰退し始めたという観点から解釈する<sup>233</sup>。しかし、この記事で紀生磐宿禰は木氏系統の百濟貴族の中の一つとしてこの当時に倭国へ亡命した人物であり、那奇陀甲背は加耶在地の小君長として百濟と協力して来た武官と見なければならぬ<sup>234</sup>。

ここで重要な事は事件が発生した地域であるが、その爾林については、異説が多く、これを全羅北道任実郡としてみる見解<sup>235</sup>、全羅北道金堤郡青蝦面(旧地名乃利阿)と見る見解<sup>236</sup>、京畿道臨津(旧地名津臨城)と見る見解<sup>237</sup>、忠清北道陰城(旧地名仍忽県)または槐山(旧地名仍斤内郡)と見る見解<sup>238</sup>などがある。しかし綿密に調査して見ると爾林は忠清北道陰城に限定され、帶山城は槐山郡道安面の道薩城と同一視する事ができる<sup>239</sup>。そうであるならとりあえず5世紀後半に高句麗の領域が忠清北道一帯まで奥深く入り込んでいた事を『三国史記』以外の資料として確認できるという点に意義が存在する。

これを土台に記事を再解釈するなら、487年に百濟が高句麗の領土であった爾林(忠清北道陰城)を攻撃する過程で百濟軍の一員として参加した木氏勢力である紀生磐および加耶の那奇陀甲背一行が高句麗と内通して百濟の適莫爾解を殺したということになる。さらに彼らは帶山城(忠清北道槐山郡道安面)を築き、百濟軍の補給路を遮断することで百濟に対する敵対行為を行った。しかし、百濟軍の反撃により加耶の那奇陀甲背など300余名が殺され、那奇陀集団の一部は加耶南部の安羅へ亡命するようになり、紀生磐は倭国へ亡命したと推定される。

よって顕宗紀3年是歳条の記事は紀氏家伝を根拠とするものであるもので、倭人豪族の任那での軍事活動を見せるもののようにになっているが、実際は、百濟貴族の木氏の背反および倭国への亡命過程を歪曲して記述したものでできよう。こうしてみると、5世紀後半に百濟は加耶勢力と協力関係を結んでい

<sup>232</sup> 『日本書紀』卷15、顕宗天皇3年「是歳 紀生磐宿禰 跨據任那 交通高麗。將西王三韓 整脩官府 自稱神聖。用任那左魯那奇他甲背等計 殺百濟適莫爾解於爾林。[爾林 高麗地也] 築帶山城 距守東道 斷運糧津 令軍飢困。百濟王大怒 遣領軍古爾解・内頭莫古解等 率衆趣于帶山攻。於是 生磐宿禰 進軍逆擊 膽氣益壯 所向皆破 以一當百 俄而兵盡力竭 知事不濟 自任那歸。由是 百濟國殺佐魯那奇他甲背等三百餘人。」

<sup>233</sup> 末松保和、1949、前掲書。

<sup>234</sup> 金泰植、1993『加耶聯盟史』、ソウル:一潮閣、244～249頁。

李鎔賢、1997「五世紀末における加耶の高句麗接近と挫折」、『東アジアの古代文化』90;1999『加耶と東アジア諸国』、日本國學院大學大学院博士學位論文、42～43頁。

<sup>235</sup> 鮎貝房之進、1937「日本書紀朝鮮地名考」、『雜攷』7下卷、25～27頁。

延敏洙、1990「六世紀前半 加耶諸國을 둘러싼 百濟・新羅의 動向 一소위 '任那日本府'說의 究明을 위한 序章一(6世紀前半加耶諸國をめぐる百濟・新羅の動向—いわゆる'任那日本府'說の究明のための序章—)」、『新羅文化』7、東國大學校新羅文化研究所、106～112頁。

李永植、1995「百濟의 加耶進出過程(百濟の加耶進出過程)」、『韓國古代史論叢』7、韓國古代史會研究所編、ソウル:駕洛國史蹟開發研究院、207頁。

南在祐、2003『安羅國史』、ソウル:慧眼、211～212頁。

<sup>236</sup> 末松保和、1956、前掲書、76～77頁。

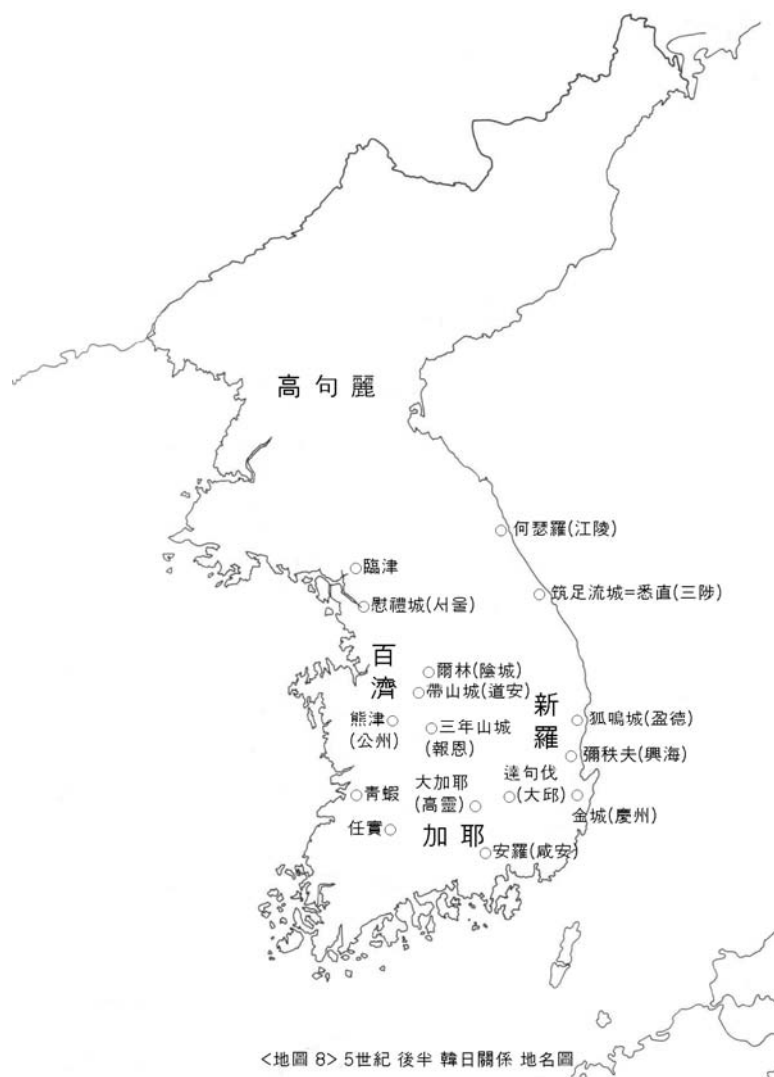
<sup>237</sup> 山尾幸久、1978「任那に関する一試論—史料の検討を中心に—」、『古代東アジア史論集』下卷(末松保和博士古稀記念会編)、吉川弘文館、218頁。

白承忠、1995『加耶地域聯盟史研究』、釜山大博士學位論文、262～263頁。

<sup>238</sup> 李鎔賢、1997「五世紀末における加耶の高句麗接近と挫折」、『東アジアの古代文化』90;1999『加耶と東アジア諸国』、日本國學院大學大学院博士學位論文、46～47頁。

<sup>239</sup> 金泰植、2006「5～6세기 高句麗와 加耶의 관계(5～6世紀高句麗と加耶の關係)」、『北方史論叢』11号、高句麗歴史財團、136～140頁。

たが、熊津遷都以後その権威が揺らぎ、貴族内部でも反乱行為が起きており、そこに発生した流亡民はまた加耶や倭へ流れて行った。また、加耶軍は場合によって、新羅を支援したり、百済を支援したりしつつ、間接的に高句麗と敵対的な立場を取ったが、これはすべて自国の利益を取るための行為であったことがわかる。そうして百済を支援し何かの対価を取り、場合によっては高句麗軍と内通して百済軍を背反したりもしたのである。



### 第3節 倭の五王の爵号と百済の湖南西部地域経略

#### 1. 高句麗王・百済王・倭王の將軍号

『宋書』倭国伝には、倭の五王、すなわち讃・珍・濟・興・武が宋に朝貢して爵号を取得した事情が伝わる。その記事を見るに421年と425年に倭讃の朝貢があり、438年には倭王珍が‘使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王’を自称したが、宋は‘安東將軍倭國王’のみを承認した。443年には倭王濟が朝貢し、‘安東將軍倭國王’を除授され451年には‘使持節都督倭新羅任那加

羅秦韓慕韓六國諸軍事’を加号し、安東將軍はそのままであった。462年には、世子の興が朝貢し‘安東將軍倭國王’を授与され、479年には倭王武が朝貢し‘使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王’を自称したが、百濟を除いて‘使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王’と任命された<sup>240</sup>。

ここで、倭の五王が自称したり除授された爵号は都督諸軍事号、將軍号、王号で構成されており、各国の王が除授された將軍号には各々差等があったようにみられる。『宋書』百官志によると、征東、鎮東、安東の3將軍号は、すべて第三品に該当し、定員は1名である。各国の諸王が中国南朝から受けた將軍号を比較すれば、以下のとおりである。

〈表1〉 4～5世紀各国王の將軍号

国名	高句麗王	百濟王	倭王	加羅王
將軍号	征東將軍(413、高璉)	鎮東將軍(372、餘句)	安東將軍(438、珍)	輔国
	征東大將軍(420、高璉)	鎮東將軍(416、餘映)	安東將軍(443、濟)	將軍
	征東大將軍(422、高璉)	鎮東大將軍(420)	安東將軍(451、濟)	(479、
	車騎大將軍(463、高璉)	鎮東大將軍(430、餘毗)	安東大將軍(478、武)	荷知)
	驃騎大將軍(479、高璉)	鎮東大將軍(?、牟大)	鎮東大將軍(479、武)	
	征東大將軍(493、高雲)			

〈表1〉で5世紀に中国南朝から受けた將軍号を他の国々と比較すると、高句麗王は征東(大)將軍、または車騎大將軍を除授され、百濟王は鎮東(大)將軍を除授され、倭國王は安東(大)將軍を除授されていたとみられる。ところで、これらはすべて正3品上位の官職であるが、その間には、征東將軍が最も高く、その次が鎮東將軍であり、その次の安東將軍は比較的下位という序列があったことが、基本的な認識である<sup>241</sup>。加羅王は479年に、はじめて朝貢し、比較的低い正3品下位の輔国將軍を除授された。そうであるなら、倭の五王が自分より序列の高い將軍号を保有した百濟を含む朝鮮半島南部地域の諸軍事号を自称するのは無理であったという点は自明になる。

しかし、高句麗王、百濟王、倭王の將軍号は序列の差ではなく、朝貢順序による差異であり、階級としては互いに対等であるという反論が起きもした<sup>242</sup>。しかし昇進事例をみると、その差異に序列は征東將

<sup>240</sup> 『宋書』卷97、列伝 第57 夷蛮伝 東夷「倭國 在高驪東南大海中 世修貢職。高祖永初二年 詔曰 倭讚萬里修貢 遠誠宜甄 可賜除授。太祖元嘉二年 讚又遣司馬曹達 奉表獻方物。讚死 弟珍立 遣使貢獻。自稱使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王。表求除正。詔除安東將軍倭國王。珍又求除正倭隋等十三人平西征虜冠軍輔国將軍號。詔竝聽。二十年 倭國王濟 遣使奉獻。復以爲安東將軍倭國王。二十八年 加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事 安東將軍如故。并除所上二十三人軍號。濟死 世子興 遣使貢獻。世祖大明六年 詔曰 倭王世子興 奕世載忠 作藩外海 稟化寧境 恭修貢職。新嗣邊業 宜授爵號 可安東將軍倭國王。興死 弟武立。自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王。(中略) 詔除武使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王。」

<sup>241</sup> 坂元義種、1978『古代東アジアの日本と朝鮮』、吉川弘文館。  
盧重國、2005「5세기 한일관계사 —“宋書”倭國傳의 검토—(5世紀の日韓關係史—“宋書”倭國傳の検討—)」、『한일역사공동연구보고서(日韓歷史共同研究報告書)』第1卷、韓日歷史共同研究委員會。

<sup>242</sup> 石井正敏、2005「5世紀의 日韓關係 —倭의 五王과 高句麗·百濟— (5世紀の日韓關係—倭の五王と高句麗)」

軍、鎮東將軍、安東將軍の順序であった。479年の南齊成立直後に高句麗王が車騎大將軍へ昇進し<sup>243</sup>、倭王が安東大將軍から鎮東大將軍へと昇進したこと<sup>244</sup>からこれを確認できる。よって征東將軍高句麗王が最も高く、その次が鎮東將軍百濟王であり、安東將軍倭国王が最も下位に位置していた。こうした將軍号は5世紀の当時、中国が付けた各国の実力を反映するものと見ることできる。

## 2. 倭の五王諸軍事号の実効性の可否

5世紀の韓日関係史の争点は、『宋書』倭国伝に見える倭王武らの五王が自称したり受けた爵号の中において、將軍号よりも都督諸軍事号にあった。ここでの都督諸軍事号は‘都督’と‘諸軍事’の間に入る地域に対して軍事権を持つという意味である。ところで倭の五王が中国の南朝と交渉をする過程で、その地域に倭のみならず朝鮮半島南部の国家を含んで要求した点が問題になるところである。

朝鮮半島南部と関連する諸軍事号のみをもう一度整理すると、倭は438年に百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓の軍事権を宋へ要求したが一つも認められずに、451年に百濟をはずして、加羅が追加された新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓の軍事権を認められ、479年に百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓の軍事権を宋に要求し、百濟を除いた残りを認められた。そうであるなら、実際に5世紀当時の倭軍はそこに列挙された諸国家に対する軍事権を持っておりそれを国際的に公認されたのであろうか。その性格は何かということである。

ここでの論争点は上記の‘諸軍事号’が各国の軍事権に対する(1)実際の反映であるのか、(2)単純な倭王の意図による反映か、(3)ただの日本列島の対内用の嘘の爵号であるのか、(4)あるいは日本列島内の様々な種族(いわゆる‘渡来人’)に対する統帥権であるかという諸点にある。

(1)の主張は倭軍が実際に朝鮮半島南部に進出したことによって、南部の軍事権所有と安東大將軍号の獲得を宋へ要求したとすることで、これを任那日本府説の主要な根拠に置く<sup>245</sup>。あるいは、倭王が百濟を追加することは認可されなかったが、実際に新羅や任那・加羅などはすべて倭の軍事領域に編入され、後の479年に加羅王荷知が輔国將軍に除授された際は、任那以下が自称号から除外されたともみなした<sup>246</sup>。

(2)の主張を考察すると、南朝が自国支配の地域に対しては現地の実力者の主張をできるだけそのまま認めようとする方針を持っていたために同一地域の軍事権や行政権を確立しなかったとしても自称する事ができ、任命されもしたという<sup>247</sup>。そのため、中国皇帝の冊封や官爵が当時の国際関係上で、どの程度の効力を持っていたのかは疑問ということである<sup>248</sup>。

麗・百濟一)、『한일역사공동연구보고서(日韓歴史共同研究報告書)』第1巻、韓日歴史共同研究委員會。

<sup>243</sup> 『南齊書』卷58、列伝39 高麗国「宋末 高麗王樂浪公高璉爲使持節散騎常侍都督營平二州諸軍事車騎大將軍開府儀同三司。太祖建元元年 進號驃騎大將軍。」

<sup>244</sup> 『南齊書』卷58、列伝39 倭国「建元元年 進新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓(慕韓)六國諸軍事安東大將軍倭王武 號爲鎮東大將軍。」

<sup>245</sup> 末松保和、1949、前掲書。

藤間生大、1968『倭の五王』、岩波新書。

吉村武彦、2006「ヤマト王権と律令制国家の形成」、『列島の古代史8古代史の流れ』、岩波書店。

<sup>246</sup> 平野邦雄、1980「金石文の史実と倭五王の通交」、『岩波講座日本歴史』1(原始・古代1)、岩波書店。

<sup>247</sup> 坂元義種、1978『古代東アジアの日本と朝鮮』、吉川弘文館。

<sup>248</sup> 江畑武、1968「四～六世紀の朝鮮三国と日本—中国との冊封をめぐる—」、『朝鮮史研究会論文集』4。

あるいは倭王の都督諸軍事号に含まれる朝鮮半島の地名とは、実際に現地の王あるいは首長を通じて軍丁・軍資の徴発が可能な有力な国であるため、倭王は朝鮮半島内部での潜在的軍事行動権を要求したのだとした<sup>249</sup>。あるいは倭王武の祖禰の時代に倭が朝鮮半島の95国を平定したことは、過去に倭王の朝鮮半島における軍事活動を示唆するものだが、武の時代に朝鮮半島南部の都督号を自称していても倭王の現実的な支配を反映していると言うには難しいとした<sup>250</sup>。

また、もう少し明確に、倭王は高句麗の領域を除外した大部分の地域に対する軍政権承認を宋王朝に要請したが、これは倭国が実際にこの地域を支配したということの意味することではなく、この時期の百濟や新羅は明らかに独立国であり、加耶の諸小国も決して倭の支配化にあったのではないので、倭王の官爵を通じて倭王のが朝鮮半島南部を軍事支配したというのは、軽率な考えと言った<sup>251</sup>。また、これを容認して都督諸軍事号は基本的に該当地域に対する軍事権を意味するものと理解しても良いであろうが、この称号を受けたとしても、その領域に対して実質的な支配をしたということの意味するものではないと見る見解もある<sup>252</sup>。

しかし、これらの主張は倭王の朝鮮半島‘支配’ではないとしても倭王の相対的‘優位’は認めている。例を挙げるなら、5世紀に倭は新羅と百濟から複数の証拠に質を取ったのであるので、また、倭国と新羅・百濟との関係は上下服属関係にあり、その活動の場は朝鮮半島南部一帯に及んだと考えられるので、倭王の諸軍事号は実質の伴わない虚構のものではないということである<sup>253</sup>。あるいは4世紀後半以後の倭国と朝鮮半島諸国の関係は基本的に対等な関係であったが、加耶諸国は小国であったために倭国との間にある程度依存・保護関係が形勢され、倭は百濟・新羅に対しても状況により軍事力の提供に対する対価として王族出身の質を要求し、政治的介入もしたので、倭王が高句麗を除外した朝鮮半島地域の軍政権を宋に要請したことは、倭王こそが反高句麗勢力の盟主であることを示したものであり、そうした地位を国際的に確立しようとしたものであったとする<sup>254</sup>。すなわちこれは倭王の朝鮮半島南部諸国に対する実質的な支配までは想定することができないとしても、倭王はこれを意図していたのであり、朝鮮半島南部地域での倭軍の軍事的活動活動、政治的介入などの事例から、倭王の主張には相当な根拠があったとみられるのである。

(2)を主張する中であって、韓国側の見解では、倭王が宋に要求した將軍号が百濟が受けた鎮東大將軍より低いということは、倭王みずからが百濟王より下位であることを認めたのであるから、百濟が含まれた都督諸軍事号を根拠に据え、倭が朝鮮半島を軍事的に支配したとみるのは、疑問であるという<sup>255</sup>。また中国側の見解では、倭王の珍、濟、武が朝鮮半島南部諸国に対する軍事支配権を要求したことは歴史上初めてであるが、これは個人的な要求に過ぎず、百濟、新羅、加羅などを含む自称号を反復し

<sup>249</sup> 山尾幸久、1989『古代の日朝関係』、塙書房。

<sup>250</sup> 鈴木英夫、1996『古代の倭国と朝鮮諸国』、青木書店。

<sup>251</sup> 熊谷公男、2001『日本の歴史03 大王から天皇へ』、講談社。

<sup>252</sup> 石井正敏、2005「5세기의 일한관계 —왜의 오왕과 고구려·백제—(5世紀の日韓関係—倭の五王と高句麗・百濟—)」、『한일역사공동연구보고서(日韓歴史共同研究報告書)』第1巻、韓日歴史共同研究委員會。

<sup>253</sup> 坂元義種、前掲書。

<sup>254</sup> 熊谷公男、前掲書。

<sup>255</sup> 延敏洙、1998『고대 한일 관계사(古代日韓關係史)』、慧眼。

て要請したこと自体が、倭が朝鮮半島南部を統治した事実がないものを示しているとした<sup>256</sup>。

(3)の主張では、朝鮮半島諸国が含まれた倭王の自称号は対外的には百済を中心とした百済—新羅—加耶—倭の連合という、対高句麗外交網に参加した倭が連合勢力の主軸を置き、百済と競争するために意図的に称したものであり、体的に日本列島の統合を推進しつつ、朝鮮半島諸国との交易権を掌握して、これを様々な諸豪族へ見せるための手段として称することで、宋から認められ信頼性を付加しようとしたものであり、よってこれは倭が朝鮮半島諸国を支配した事実を見せるものではないとした<sup>257</sup>。

(4)の主張では当時の日本列島内に朝鮮半島系統の小国や移住民が多く実在したことを根拠として、倭王が日本列島内の諸勢力を総括するために、該当の小国や移住民たちの本拠地を羅列したものに過ぎないとした。すなわち、6国ないし7国中の最初の位置に置かれた‘倭’は畿内地方の大和国であり、その残りは日本の大和地方付近の朝鮮半島系統の諸小国にすぎない<sup>258</sup>、あるいは、中国の南朝や百済で移住民系列の諸人物に自分の統治が行き渡らない地域の爵号を与えたり容認された事と同様に、倭も朝鮮半島の南部からの移住民(‘渡来人’)にその本拠地の爵号を与え、倭王はこれを統括する権威を獲得しようとしたものと考えた<sup>259</sup>。

こうしてみると日本の学者は大体(1)、(2)を主張しており、韓国の学者は(3)、(4)を主張している。その中で(1)と(4)は若干行き過ぎた主張であり、問題の解答は(2)と(3)の間にあるように思われる。そうであるとすれば、倭王の‘諸軍事号’は朝鮮半島南部各国の軍事的支配に対する実際を反映したり、また日本列島内の様々な種族に対する統帥権を示すものではなく、単純な倭王の希望事項を反映、あるいは日本列島統治のための対内的爵号に過ぎないといえる。

よって倭の五王が中国の皇帝から朝鮮半島南部地域を含んだ諸軍事号を認定されたことと、倭王が実際に朝鮮半島南部地域で軍事権を発揮する事ができたのかはまったく別個の問題であり、朝鮮半島の南部の文献資料や考古学資料からはそうした根拠は見出せない。もしこの事実を言及せず、『宋書』に出てくる倭王が諸軍事号の認定記事のみを強調すれば、歴史記述として間違っただけでなく、歴史的な事実を誤導する憂慮があり、厄介である。なぜならそうした場合に専門的な知識がない人々が、倭が実際に朝鮮半島南部の軍事権を掌握していたと誤解する可能性があるためである。倭の五王の諸軍事号は一種の外交行為に過ぎず、朝鮮半島南部の状況に影響を及ぼす事はできないということ、すなわち実効性のないものであった。

### 3. 倭王武の上表文と首長統合体の形成

中国南朝の宋、順帝の昇明2年(478)に倭王武が送った上表文中に次のような句節が見える。

本国[倭]は遠く離れておりつつ冊封を受け海外の諸侯国になりました。昔、祖父と父[祖禰]の時から、

<sup>256</sup> 王健群、1992「임나일본부와 왜의 오왕(任那日本府と倭の五王)」、『加耶文化』5輯。

<sup>257</sup> 盧重國、2005「5세기 한일관계사 —“송서” 왜국전의 검토—(5世紀の日韓関係史—“宋書”倭国伝の検討—)」、『한일역사공동연구보고서(日韓歴史共同研究報告書)』第1巻、韓日歴史共同研究委員會。

<sup>258</sup> 金錫亨、1966『초기조일관계연구(初期朝日関係研究)』、社會科學出版社。

<sup>259</sup> 李永植、1988「5세기 倭王 稱號의 해석을 둘러싼 一視角(5世紀倭王称号の解釈をめぐる一視角)」、『史叢』34、ソウル;1993、『加耶諸国と任那日本府』、吉川弘文館。



みずから鎧と兜を付け、山を越え、川を渡り、平安に休む時はありませんでした。東は毛人55国を征服し、西では衆夷66国を服属させ、海の北の95国を渡り平定しました<sup>260</sup>。

上の記録から倭王武の祖禰が平定したという海の北の95国がどこであるかという点が問題である。ここでの論争点は海の北の95国が(1)朝鮮半島南部であり実際に平定したと見るのか<sup>261</sup>、(2)朝鮮半島南部であったり、実際より誇張した表現でもって、倭王の希望事項を表したと見るのか<sup>262</sup>、(3)朝鮮半島と関係ない九州地方に過ぎないのか<sup>263</sup>といういくつかの点に分けられる。

山尾幸久の研究によれば、この上表文は文章の修飾が酷いので‘征’、‘服’、‘平’などの文字を文字通りそのまま客観視する事は不可能だと言う。当時大和王権が、日本列島や朝鮮半島で何かの直接的接触を持っていた地域集団を‘潜在的軍事行動権’と関連させて意味を付与したものであり、このような意味を持つ‘平’の字により、過去の大和王権の任那支配を客観視、または、実体視する理由にはならないとした<sup>264</sup>。

すでに倭王武の上表文に関連して(1)のように実際に倭が朝鮮半島南部地域を征伐し、支配したと考える人は見出しがたい。(2)の主張のように倭王の意図された計算であるか、(3)の主張のような後世の学者たちの地名考証の錯誤であるか、5世紀の倭王が朝鮮半島南部を軍事的に統率していたということを中国から認可されようとした事実であることもできるが、最も重要なことはそれが実効性のないものであったという点である。少なくとも近来の韓日の学界はこうした程度で共通した認識を有している。

その上表文でより重視すべきことは、倭王武の自負心として、彼は日本列島の各地域首長を統合する最高権力者という事実に対する、言明と把握しなければならないということである。埼玉県と熊本県から出土した鉄剣銘を通じて、獲加多支鹵大王、すなわち倭王武(雄略)の統治範囲が関東から九州へ至る地域であったことを確認できる。しかし、この段階において地方の首長層は直接畿内の大王に奉仕したのではなく、大王の下で、特定の職掌を分担する中央豪族とその職掌を通じて繋がっており、その地方の首長の独立性は強固に維持されたと思われる。

#### 4. 湖南西部地域の前方後円墳問題

5世紀の韓日関係をめぐって近来新たな問題が提議されたが、それは全羅南道榮山江流域で発見された10余基の‘前方後円墳’である。これを羅列すると、全羅北道高敞郡孔音面七岩里古墳、全羅南道靈光郡法聖面月山里月桂1・2号墳、咸平郡月也面礼德里新徳1号墳、咸平邑長年里長鼓山古墳、

<sup>260</sup> 『宋書』卷97、列伝 第五十七 夷蛮伝 東夷「順帝昇明二年 遣使上表曰 封國偏遠 作藩于外。自昔祖禰 躬擐甲冑 跋涉山川 不遑寧處。東征毛人五十五國 西服衆夷六十六國 渡平海北九十五國。」

<sup>261</sup> 末松保和、1949、前掲書。

平野邦雄、1980、前掲論文。

鬼頭清明、1994『大和朝廷と東アジア』、吉川弘文館。

<sup>262</sup> 山尾幸久、1989、前掲書。

鈴木英夫、1996、前掲書。

熊谷公男、2001、前掲論文。

石井正敏、2005、前掲論文。

<sup>263</sup> 盧重國、2005、前掲論文。

<sup>264</sup> 山尾幸久、1989『古代の日朝関係』、塙書房、226頁。

霊巖郡始終面泰澗里チャラボン古墳、海南郡北日面方山里長鼓峰古墳、龍頭里古墳、光州市光山区月溪洞1・2号墳などを挙げることができる。

日本列島の前方後円墳と類似した性格を帯びる諸古墳が全羅南道海岸および栄山江流域から出土した事実について、その築造勢力の性格に対してこれらを(1)在地首長と見る見解と(2)倭人と見る見解に大別される。その中で(1)群に属する見解としては①栄山江流域の在地首長の対倭親縁性の主張によるものとみる独立的在地首長説<sup>265</sup>と②百済王権との連繫下に在地首長が前方後円墳を墓制として採択したものとみる百済連繫在地首長説<sup>266</sup>が存在する。(2)群に属する見解はもう少し複雑で①鉄の交易のために九州または倭王権から栄山江流域に送り入れた集団移住民とみる移住倭人説(=慕韓説<sup>267</sup>)、②栄山江流域から在地人化していた倭人とみる在地化倭人説<sup>268</sup>、③百済が南方開削のために倭人を受け入れ定着させたものとみる倭系百済官僚説<sup>269</sup>、④朝鮮半島から日本列島へ渡った移住民が

- <sup>265</sup> 岡内三真、1996「前方後円形墳の築造モデル」、『韓国の前方後円墳』、雄山閣。  
土生田純之、2000「韓・日前方後圓墳의 比較検討(韓・日前方後圓墳の比較検討)」、『韓國의 前方後圓墳(韓國の前方後圓墳)』、忠南大出版部;2006『古墳時代の政治と社会』、吉川弘文館。  
申敬澈、2000「고대의 낙동강, 영산강, 그리고 왜(古代の洛東江、栄山江、そして倭)」、『한국의 전방후원분(韓國の前方後圓墳)』、忠南大出版部。  
朴淳發、2000「백제의 남천과 영산강유역 정치체의 재편(百済の南遷と栄山江流域政治体の再編)」、『한국의 전방후원분(韓國の前方後圓墳)』、忠南大出版部;2001「栄山江流域における前方後円墳の意義」、『朝鮮学報』179;2002再収録、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社;2003「百済の南遷と倭」、『検証古代日本と百済』、大巧社。  
申大坤、2001「栄山江流域の前方後円墳」、『飛鳥の王権と加賀の渡来人』、金澤:石川県立歴史博物館。  
田中俊明、2001「韓國の前方後円形古墳の被葬者-造墓集団に対する私見」、『朝鮮学報』179;2002再収録、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。  
柳澤一男、2002「全南地方の栄山江型石室の系譜と前方後円墳」、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。  
李暎澈、2006「前方後円形古墳と墳周土器」、『海を渡った日本文化』、鑛脈社。  
辻秀人、2006「榮山江流域의 前方後圓墳과 倭國 周緣地域의 前方後圓墳(榮山江流域の前方後円墳と倭国周縁地域の前方後円墳)」、『百済研究』44、大田:忠南大學校百済研究所;2007「榮山江流域の前方後円墳と倭国周縁地域の前方後円墳」、『歴史と文化』42、東北学院大学。
- <sup>266</sup> 禹在柄、2004「榮山江流域 前方後圓墳의 出現과 그 背景(榮山江流域前方後円墳の出現とその背景)」、『湖西考古學』10、湖西考古學會。
- <sup>267</sup> 東潮、1995「榮山江流域と慕韓」、『展望考古学』、考古学研究会40周年紀念論叢;2001「倭と栄山江流域—倭韓の前方後円墳をめぐる—」、『朝鮮学報』179、天理:朝鮮学会;2002「倭と栄山江流域」、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。  
柳澤一男、2008「韓國の前方後円墳と九州」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。  
李鎔賢、2008「韓國古代における全羅道と百済・加耶・倭」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。  
鈴木英夫、2008「韓國の前方後円墳と倭の史的動向」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- <sup>268</sup> 土生田純之、2008「前方後円墳をめぐる韓と倭」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- <sup>269</sup> 朱甫暎、2000「백제의 영산강유역 지배방식과 전방후원분 피장자의 성격(百済の栄山江流域の支配方式と前方後円墳被葬者の性格)」、『한국의 전방후원분(韓國の前方後円墳)』、忠南大出版部。  
山尾幸久、2001「五、六世紀の日朝関係—韓國の前方後円墳の一解釈—」、『朝鮮学報』179、朝鮮学会。  
西谷正、2002「韓國の前方後円墳をめぐる諸問題」、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。  
朴天秀、2002「고고자료를 통해 본 고대 한반도와 일본열도의 상호작용(考古資料を通じて見る古代朝鮮半島と日本列島)」、『韓國古代史研究』27、韓國古代史學會;2002「榮山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」、『考古学研究』49-2、岡山:考古学研究会;2003「榮山江流域と加耶地域における倭系古墳の出現過程とその背景」、『熊本古墳研究』1、熊本:熊本古墳研究会;2003「榮山江流域における前方後円墳の出現の歴史的背景」、『東アジアの古代文化』117、東京:大和書房;2004「榮山江流域における前方後円墳が提起する諸問題」、『歴史と地理』577、東京:山川出版社;2007「加耶と倭韓半島と日本列島の考古学」、講談社;2007『새로 쓰는 고대 한일교섭사(新しい古代日韓交渉史)』、ソウル:社会評論;2008「榮山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。

前方後円墳の築造技術を持って戻り、造ったという帰郷倭人説<sup>270</sup>、⑤羅州潘南地域にいた独自の政権が百濟に対抗するために倭人を受け入れたと見る倭系潘南官僚説<sup>271</sup>などに分けられ、多様な異説を表明して対立している。

どちらの方からみても、ともかく、全羅南道榮山江流域が5世紀後半ないし6世紀前半に、日本列島と深い関係を有してした事は否認しがたい。この問題に対する論争は進行の最中であり、いまだにどの説も優位に立つことができないでいる。しかし、これを『日本書紀』の文献記録に見える‘任那’問題と直接関連付ける見解は、見られないのが実状である。

主張している人々の数字で見ると初期には(1)－①の独立的在地首長説が最も多く支持を得た。これは全羅南道地域の前方後円墳の築造方式や出土遺物が日本列島のものと相違する点が多いとする点から主張された。引用および論文掲載数で見れば、(2)－③の倭系百濟官僚説もかなりの関心を惹いている。榮山江流域の前方後円墳が、周辺の在地首長系列とまったく関係無く突然出現し、それらが意図的に分散されて配置され、その中の一部に百濟の威信財が副葬された点などは百濟官僚説の大きな長所とすることができる。

(2)－①・②の移住倭人説は初期には微弱であったが、最近になって突然台頭してきており、特に土生田純之と柳沢一男は(1)－①を主張したがこれを変えたという点において注目される。こうした研究動向から、前方後円墳の築造主体を全羅南道地域の在地首長とみる見解より倭人と見る見解がより強くなっている趨勢を把握できる。しかし、百濟の影響力を重視する倭系百濟官僚説では、その築造時期を6世紀前半とみて、日本列島の選択を重視する移住倭人説では、これを5世紀後半と把握しているので、編年の問題も残っている状態である。

しかし、『南齊書』百濟国伝永明8年(490)条<sup>272</sup>と建武2年(495)条<sup>273</sup>に現われる記録をみると、百濟の地方官に対する王・侯の爵号の冊封は全国的に設定されたものではなく、5世紀後半から末期にかけて全羅南道西部一帯が百濟の直轄領域として編入され生まれた過渡期的な現象であり、王・侯号保有者はこの地域に分封された恒久的支配者ではなく5年内に交替するという地方官としての性格を帯びている。そうであるとすれば、少なくとも5世紀末当時に榮山江流域前方後円墳の被葬者は王侯制と関連した地方官本人ではなく、むしろその地方官に服従していた者と見るしかない<sup>274</sup>。どの説を取っても、この

<sup>270</sup> 林永珍、1997「湖南地域 石室墳과 백제의 관계 (湖南地域石室墳と百濟の関係)」、『湖南考古學의 제문제 (湖南考古學の諸問題)』、第21回韓國考古學會發表要旨、韓國考古學會。

<sup>271</sup> 林永珍、2000「영산강유역 석실봉토분의 성격 (榮山江流域石室封土墳の性格)」、『영산강유역 고대사회의 새로운 조명 (榮山江流域古代社会の新しい照明)』、木浦:歴史文化學會・木浦大博物館;2003「百濟の成長と馬韓勢力、そして倭」、『檢証古代日本と百濟』、大巧社。

<sup>272</sup> 『南齊書』卷58、列伝39 百濟国「報功勞勤 実存名烈。假行寧朔將軍臣姐瑾等四人 振竭忠効 攘除國難 志勇果毅 等威名將 可謂扞城 固蕃社稷 論功料勤 宜在甄顯。今依例輒假行職。伏願恩愍 聽除所假。寧朔將軍・面中王姐瑾 歷贊時務 武功竝列 今假行冠軍將軍・都將軍・都漢王。建威將軍・八中侯餘古 弱冠輔佐 忠効夙著 今假行寧朔將軍・阿錯王。建威將軍餘歷 忠款有素 文武列顯 今假行龍驤將軍・邁盧王。廣武將軍餘固 忠効時務 光宣國政 今假行建威將軍・弗斯侯。」

<sup>273</sup> 前掲書、建武2年「牟大遣使上表曰 (中略) 今假沙法名行征虜將軍・邁羅王 贊首流爲行安國將軍・辟中王 解禮昆爲行武威將軍・弗中侯 木干那 前有軍功 又拔臺舫 爲行廣威將軍・面中侯。伏願天恩特愍聽除。(中略) 詔可 竝賜軍號。」

<sup>274</sup> 金泰植、2008「고대 한일관계사의 새로운 지평 —朴天秀, 2007. 11. “새로 쓰는 고대 한일교섭사”, 사회평론— (古代日韓關係史の新しい地平—朴天秀, 2007. 11. “新しい古代日韓交渉史”, 社会評論)」、『韓國古代史研究』50、韓國古代史學會。

点は重視するべきであろう。

百済の東城王は自分が中国や朝鮮半島および倭から国際的に認可された勢力であることを立証するために外交的に様々な努力をした。全羅南道地域に対しては、統治可能な所に地方官を派遣し、これを中国から容認してもらおうとした。東城王の484年・486年<sup>275</sup>と490・495年の四度にわたる南齊朝貢とその中の490年代の二度の王・侯の爵号仮称はこれと密接な関連がある。また、日本の九州、熊本県江田船山古墳の百済系統金銅冠や金銅飾履および環頭大刀のような副葬品に見られるように、百済は日本列島各地にも先進文物を波及させ、自身との連繫の必要性を立証して見せたりもした。東城王が481年に加耶と一緒に新羅に援兵を送って高句麗軍を撃退し、485年に新羅に使臣を送り、礼訪したことや<sup>276</sup>、493年に新羅に婚姻を要請し結婚同盟を結んだことも<sup>277</sup>、そうした外交の一環である。一方で498年に耽羅を引き金にして武珍州(今の光州広域市)まで進撃し武力示威を行ったりもしたのである<sup>278</sup>。百済のこうした諸々の努力の結果、湖南西部の栄山江流域は6世紀初までは百済の直接的な支配領域として編入された見ることができる。

### 第3章 百済・倭の連結と新羅の加耶併合

#### 第1節 加耶をめぐる百済と新羅の競争

##### 1. 百済の復興と湖南東部地域の併合

5世紀末以後6世紀に入っても高句麗は継続的に百済との戦争を起こしていた。『三国史記』高句麗本紀の記録では<sup>279</sup>、495年から512年の間の戦地は北は水谷城(黄海新溪郡多栗面)や高木城(京畿道漣川郡漣川邑)から、南は漢城(ソウル松坡区)、または円山城(忠清北道陰城)に至るまで変化しておりこれが事実なら、当時両国の攻防が非常に熾烈で領土所有の変化が酷かったことが分かる。

しかし、475年の慰礼城陥落以後、漢江と錦江の間の領土、すなわち、忠清北道清原南城谷遺跡と大田月坪洞遺跡およびソウル市松坡区夢村土城などに対する高句麗の占有期間はそう長くなかったものと推定されるが、一方で高句麗が営んだ漢江以北の峨嵋山第4堡塁の土器類は製作技法や形態上

<sup>275</sup> 『三国史記』卷26、百済本紀4 東城王6年「春二月 王聞南齊祖道成 冊高句麗巨璉爲驃騎大將軍 遣使上表請内屬 許之。秋七月 遣内法佐平沙若思 如南齊朝貢 若思至西海中 遇高句麗兵 不進。」

同王8年「三月 遣使南齊朝貢。」

<sup>276</sup> 前掲書、東城王7年「夏五月 遣使聘新羅。」

<sup>277</sup> 前掲書、東城王15年「春三月 王遣使新羅請婚 羅王以伊滄比智女 歸之。」

<sup>278</sup> 前掲書、東城王20年「八月 王以耽羅不修貢賦 親征至武珍州。耽羅聞之 遣使乞罪 乃止。[耽羅 卽耽牟羅。]」

<sup>279</sup> 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 文咨明王4年(495)「八月 遣兵圍百濟雉壤城。百濟請救於新羅。羅王命將軍德智率兵來援 我軍退還。」

同王12年(503)「冬十一月 百濟遣達率優永 率兵五千 來侵水谷城。」

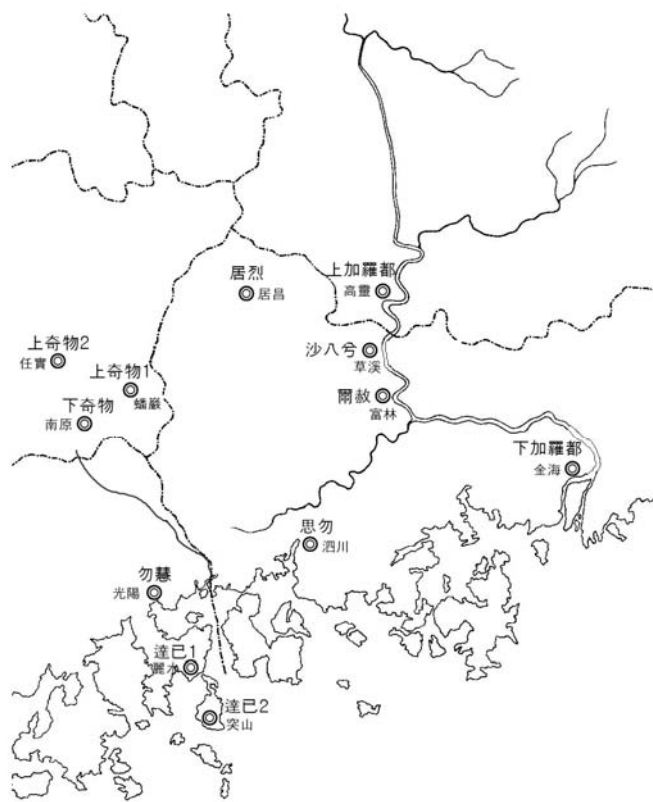
同王15年(506)「冬十一月 遣將伐百濟 大雪 士卒凍斃而還。」

同王16年(507)「冬十月 遣使入魏朝貢。王遣將高老 與靺鞨謀 欲攻百濟漢城 進屯於橫岳下。百濟出師逆戰 乃退。」

同王21年(512)「秋九月 侵百濟 陷加弗・圓山二城 虜獲男女一千餘口。」

の特徴から、その中心年代が6世紀頃と推定される<sup>280</sup>。そうであるなら、6世紀初は百濟が反撃し、高句麗軍が退却することにより両国の戦線が漢江下流に近接したと見ることができよう。521年に百濟武寧王が中国の梁に使臣を送り、“何度も高句麗を撃破し、今ようやく通好するようになった。”と言ったことは<sup>281</sup>、これを示すものである。さらに前節で言及したように百濟は6世紀初まで湖南西部の榮山江流域を大部分領域に編入した。

こうした成功した雰囲気の中で百濟武寧王が倭との直接交易のためには良い港が必要だと言う点を名分に立てて<sup>282</sup>、加耶勢力圏にあった湖南東部を貫通する蟾津江流域およびその河口を蚕食して侵入した。『日本書紀』継体6年(512)条から10年(516)条までに見える百濟の任那4県および己汶・帶沙の攻略はこれを示している。



<地圖 9> 于勒 12曲内 加耶諸國の位置

そこでの任那4県と己汶などを倭王が6世紀初に百濟王に‘割讓’したといい、既存説では、そこが元来倭王が支配する任那に属したと把握した<sup>283</sup>。この地域に対する地名の比定は今西龍が己汶を慶尚北

<sup>280</sup> 金泰植、2006「5～6세기 高句麗와 加耶의 관계 (5～6世紀高句麗と加耶の関係)」、『北方史論叢』11号、高句麗歴史財團、141～142頁。

<sup>281</sup> 『梁書』卷54、列伝48 諸夷 百濟伝「普通二年(521) 王餘隆始復遣使奉表稱 累破句驪 今始與通好 而百濟更爲強國。」

<sup>282</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇23年3月「百濟王謂下哆唎國守穗積押山臣曰 夫朝貢使者 恒避嶋曲[謂海中嶋曲崎岸也。俗云美佐祁。] 每苦風波。因茲 濕所齋 全壞无色。請 以加羅多沙津 爲臣朝貢津路。是以 押山臣爲請聞奏。」

<sup>283</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、大八洲出版;1956再版、吉川弘文館、120～123頁。

道開寧と見たが<sup>284</sup>、全羅北道の南原に修正し<sup>285</sup>、鮎貝房之進が任那4県を高山、珍山、尚州、龍潭に各々比定したのを<sup>286</sup>、末松保和が全羅北道の高敞と全羅南道西部の靈光、咸平、務安(ここまで牟婁)、光州、靈岩などの地(ここまで哆唎)および全羅南道東部の求礼(娑陀)などに修正して<sup>287</sup>以後、日本では今も概してこれを土台に歴史地図が描かれている。

しかし任那4県および己汶を上哆唎=麗水、下哆唎=突山、娑陀=順天、牟婁=光陽、己汶=南原と比定する説<sup>288</sup>が出された後、韓国学界は大概これを支持しており<sup>289</sup>、その性格についても倭王の任那割譲という側面ではない百済と大加耶の紛争による加耶連盟領土の縮小という観点から扱っている<sup>290</sup>。その前提の一つは、大加耶の楽師である于勒の12曲の名前の中に上奇物、下奇物、達已、勿慧があらわれるが、これは任那4県の中の上・下多唎、牟婁および己汶と音が相似するので、この地域の諸小国は後期加耶連盟に属するというものである<sup>291</sup>。

また2006年に全羅南道順천시西面雲坪里1号墳から、5世紀末ないし6世紀初葉の高霊様式の有蓋長頸壺と器台が出土したことは<sup>292</sup>、これを傍証する考古学的な証拠である。これをもって5世紀後半から6世紀初までの後期加耶連盟の最大範囲に湖南東部地域の6~7国、すなわち、上己汶(全羅北道長水蟠巖あるいは任実)、下己汶(全羅北道南原)、娑陀(全羅南道順天)、牟婁(全羅南道光陽)、上哆唎(全羅南道麗水)、下哆唎(突山)などがあったという仮説は重要な根拠を獲得した<sup>293</sup>。

<sup>284</sup> 今西龍、1919「加羅疆域考」、『史林』4-3-4;1970『朝鮮古史の研究』、国書刊行会、再収録。

<sup>285</sup> 今西龍、1922「己汶伴跋考」、『史林』7-4;1970『朝鮮古史の研究』、国書刊行会、再収録。

<sup>286</sup> 鮎貝房之進、1937『雜攷』7、下巻、32~44頁。

<sup>287</sup> 末松保和、1956、前掲書、120~123頁。

<sup>288</sup> 全榮來、1985「百濟南方境域의 變遷」、『千寛宇先生還曆紀念韓國史學論叢』、146頁。

<sup>289</sup> 順天大學校博物館、韓國上古史學會、2008『전남동부지역의 가야문화(全南東部地域の加耶文化)』、第36回韓國上古史學會學術發表大會、2008年11月14日、順天大學校70周年記念館2階大會議室。

この日発表者のなかに金泰植、李東熙、朴天秀、權五榮は6世紀初まで任那4県として推定される全南東部地域が加耶の領域であったという観点に同意して文章を発表しており、田中俊明だけは末松説を一部修正して任那4県を湖南西部の榮山江に比定した。

<sup>290</sup> 金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史1巻)』、푸른역사(プルンヨクサ)、182~183頁;同書2巻、187頁。

<sup>291</sup> 金泰植、1997「百濟의 加耶地域 關係史: 交渉과 征服(百濟の加耶地域關係史: 交渉と征服)」、『百濟의 中央과 地方(百濟の中央と地方)』、忠南大學校百濟研究所、58~60頁。

<sup>292</sup> 李東熙、2006『順天 雲坪里 古墳 發掘調査 諮問委員會 資料』、全羅南道・順천시・順天大學校博物館。

<sup>293</sup> 金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史 1巻)』、푸른역사(プルンヨクサ)、182~183頁;同書2巻、187頁。

李東熙、2004「전남동부지역 가야계 토기와 역사적 성격(全南東部地域加耶系土器と歴史的 성격)」、『韓國上古史學報』46

郭長根、2004「호남동부지역의 가야세력과 그 성장과정(湖南東北地域の加耶勢力とその成長過程)」、『湖南考古學報』20

朴天秀、2006「임나사현과 기문·대사를 둘러싼 백제와 대가야(任那四県と己汶・帶沙をめぐる百濟と大加耶)」、『가야, 낙동강에서 영산강으로(加耶、洛東江から榮山江へ)』、第12回加耶史國際學術會議發表資料集、金海市。



〈地圖 10〉任那 4縣 및 己汶, 帶沙의 位置

繼體紀6年条の記事によれば、512年12月に百濟が倭に朝貢し任那国の上哆唎、下哆唎、婁陀、牟婁の4県を渡すように要求し、哆唎国守である穗積臣押山がこれに賛成する意見を倭国朝廷に出し、結局倭はその土地を百濟に与えたという<sup>294</sup>。ここで穗積臣押山は、はじめ倭の使臣として百濟に来たが、哆唎国に駐在しつつ百濟の利益を代弁することから、すでに倭系百濟官僚になったと見てもよいほどの人物である。また、麗水・順天の百濟山城の下にある諸古墳はもともと加耶系の石槨であったが、6世紀前半に百濟の文物に傾倒し、百濟系石槨に変化して行った<sup>295</sup>。これは、該当地域が加耶の小国であったが、すぐに百濟の領土に転換して行ったことを意味する。よって倭の‘任那4県割讓’という観念はその前にはその土地が倭王の所有だったのではなく<sup>296</sup>、遠く離れた交易対象者である倭王の呼応を受け、加耶の領土の一部を奪おうとした百濟の外交的修辭に幻惑されて生まれた幻想にすぎない。

その翌年に大加耶と百濟は‘己汶’をめぐって領域を争うようになるが、この事実は繼體紀7年条の記事に見える。それによると百濟が513年6月に姐弥文貴將軍と州利即爾將軍を倭に使臣として送り、“伴

<sup>294</sup> 『日本書紀』卷17、繼體天皇6年「夏四月 辛酉朔丙寅 遣穗積臣押山 使於百濟。仍賜筑紫國馬卅匹。冬十二月 百濟遣使貢調。別表請任那國上哆唎・下哆唎・婁陀・牟婁 四縣。哆唎國守穗積臣押山奏曰 此四縣 近連百濟 遠隔日本。且暮易通 鷄犬難別。今賜百濟 合爲同國 固存之策 無以過此。然縱賜合國 後世猶危。況爲異場 幾年能守。大伴大連金村 具得是言 同謀而奏。(中略) 由是 改使而宣勅 付賜物并制旨 依表賜任那四縣。」

<sup>295</sup> 李東熙、2007「백제의 전남 동부 지역 진출의 고고학적 연구(百濟の全南東部地域進出の考古学的研究)」、『韓國考古學報』64輯、103頁。

<sup>296</sup> 森公章、2006『東アジアの動乱と倭国』、吉川弘文館、117頁では繼體紀6年12月条の‘任那4県’関連記事について、「もちろん倭国が朝鮮半島に領地を有したことは無かった。」と叙述した。

跋国が百済の地である己汶を攻撃して奪ったのでこれを返してほしい。”と倭王に要請し<sup>297</sup>、倭は11月に己汶と帶沙を百済に渡したという<sup>298</sup>。

ここで己汶(全羅北道南原、任実、蟠巖)がもともと百済の土地であったなら、これを伴跋、すなわち大加耶が奪ったとして倭王にその返還を要請するのは非常識的であり、倭王がこれを返す権限もないのである。これは、やはり倭との交易を口実にして、加耶連盟の諸小国を蚕食し侵入してくる百済の外交方式を示している<sup>299</sup>。倭と己汶国は先進文物の側面から大加耶よりも優越した百済の誘引に従わざるをえなかったのである<sup>300</sup>。百済の外交的名分に同意して領土拡張を手助けをした倭に百済は513年、516年に五経博士の段楊爾、漢高安茂などを送り儒学を伝授した<sup>301</sup>。その結果、百済が湖南地域をすべて領有するようになり、加耶と百済は小白山脈を自然的境界とするようになった。

その後の状況を伝える史料に『梁職貢図』がある。それによると、梁の普通2年(521)に百済王が首都を固麻(忠清南道公州)に置き、地方には22檐魯を置き、統治したが、隣接した小国に叛波、卓、多羅、前羅、斯羅、止迷、麻連、上己文、下枕羅などがそれに付属していたという<sup>302</sup>。ここで斯羅、すなわち新羅が百済に付属していたり、あるいは加耶連盟の有力な小国である叛波(慶尚北道高靈)、卓(慶尚南道昌原)、多羅(陝川)、前羅(咸安)が百済に付属していたことは誇張した表現である。しかし、それ以下の止迷(全羅南道海南)、麻連(光陽)、上己文(全羅北道任実、蟠巖)、下枕羅(済州道)などが百済に付属したとしてもそれまで小国として存在していたことは重要である。止迷、麻連などが独立を維持できたことは加耶との隣接性のためであろう。そうであるとすれば、521年段階にも湖南東部の幾つかの勢力は政治的に百済に服属したが、まだ地方官が派遣され、郡県として編制されたわけではないので、独立性をそのまま維持していたといえよう。

<sup>297</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇7年6月「百済遣姐彌文貴將軍・州利即爾將軍 副穗積臣押山[百済本記云 委意斯移麻岐彌] 貢五経博士段楊爾。別奏云 伴跋國略奪臣國己汶之地。伏願天恩 判還本屬。」

<sup>298</sup> 前掲書、継体天皇7年11月 辛亥朔 乙卯「於朝廷 引列百済姐彌文貴將軍・斯羅汶得至・安羅辛已奚及賁巴委佐・伴跋既殿奚及竹汶至等 奉宣恩勅。以己汶・滯沙 賜百済國。是月 伴跋國 遣戡支 獻珍寶 乞己汶之地。而終不賜。」

<sup>299</sup> 金泰植、2002、前掲書1巻、188頁。

<sup>300</sup> 位置や状況上の正確な説明はできないが日本の吉田連の家系伝承にもこの地域が元来三己汶の広い地域であり、任那に属していたが、結局自発的に百済に帰属されたという内容が見える。『新撰姓氏録』左京皇別下吉田連条および『續日本後紀』卷6仁明天皇承和4年6月壬辰朔己未条参照。

<sup>301</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇7年(513)「夏六月 百済遣姐彌文貴將軍・州利即爾將軍 副穗積臣押山[百済本記云 委意斯移麻岐彌] 貢五経博士段楊爾。別奏云 伴跋國略奪臣國己汶之地。伏願天恩 判還本屬。」同書、継体天皇10年(516)「秋九月 百済遣州利即次將軍 副物部連來 謝賜己汶之地。別貢五経博士漢高安茂 請代博士段楊爾。依請代之。」

<sup>302</sup> 『梁職貢図』百済国使 図経「普通二年 其王餘隆 遣使奉表云 累破高麗。所治城曰固麻。謂邑檐魯 於中國郡縣。有二十二檐魯 分子弟宗族爲之。旁小國有叛波・卓・多羅・前羅・斯羅・止迷・麻連・上己文・下枕羅等附之。」





<地圖 11> 梁職貢圖 百濟國使傳 '旁小國'의 位置

## 2. 新羅王権の成長と中央集権体制の整備

新羅は6世紀に入り智証麻立干が王権を強化し、'新羅国王'の尊号を採択し(503)、その後、国内の州郡県制を制定し(505)、于山国を征伐し、阿尸村(慶尚北道義城郡安溪面)に小京を設置するなど(514)、徐々に発展しはじめた<sup>303</sup>。それに続いて法興王は兵部の設置(517)、律令の頒布と百官公服および位階の設定(520)、仏教公認(528)、上大等の任命(531)、金官国の併合(532)、建元年号制定(536)などと一緒に中央集権体制を大きく整備した<sup>304</sup>。

<sup>303</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 智証麻立干4年(503)「冬十月 羣臣上言 始祖創業已來 國名未定 或稱斯羅 或稱斯盧 或言新羅。臣等以爲 新者德業日新 羅者網羅四方之義 則其爲國號宜矣。又觀自古有國家者 皆稱帝稱王 自我始祖立國 至今二十二世 但稱方言 未正尊號。今羣臣一意 謹上號新羅國王。王從之。」  
同王6年(505)「春二月 王親定國內州郡縣。置悉直州 以異斯夫爲軍主。軍主之名 始於此。」  
同王13年(512)「夏六月 于山國歸服 歲以土宜爲貢。于山國在溟州正東海島 或名鬱陵島 地方一百里 恃嶮不服。伊飡異斯夫爲何瑟羅州軍主 謂 于山人愚悍 難以威來 可以計服。乃多造木偶師子 分載戰船 抵其國海岸 誑告曰 汝若不服 則放此猛獸踏殺之。國人恐懼 則降。」  
同王15年(514)「春正月 置小京於阿尸村。秋七月 徙六部及南地人戶 充實之。」

<sup>304</sup> 前掲書、法興王4年(517)「夏四月 始置兵部。」  
同王7年(520)「春正月 頒示律令 始制百官公服 朱紫之秩。」  
同王15年(528)「肇行佛法。(中略) 不復非毀佛事。」  
同王18年(531)「夏四月 拜伊飡哲夫爲上大等 摠知國事。上大等官 始於此 如今之宰相。」  
同王19年(532)「金官國主金仇亥 與妃及三子 (中略) 以國帑寶物來降。」

一方、589年に滅亡した梁の史書である『梁書』新羅伝には5個の官等のみ現われ<sup>305</sup>、618年に滅亡した隋の史書である『隋書』新羅伝に至って、17個の官等がすべて現われるため<sup>306</sup>、一部の学者たちは6世紀後半まで新羅には5個、または6個の京位のみ存在した<sup>307</sup>、あるいは法興王代の官僚制を身分制と関連した衣冠制と同じ初歩的なものと考えてきた<sup>308</sup>。しかし、迎日冷水里碑(503)と蔚珍鳳坪碑(524)が発見されて以後、17官等の大部分が法興王の時に存在したことが確認された<sup>309</sup>。

その他に学者たちは幾つかの点をさらに確認した。すなわち、法興王11年(524)当時の6部が独自の単位政治体から単純な王京の行政区域に変化して行く過渡期的な性格のものであり、中古期の新羅王室は喙部と沙喙部を直接的に支配基盤としていたということである<sup>310</sup>。また、官等として干支のみを称した存在達とは、それが冠称した部の支配者であり、新羅の中央官等制に編入されていなかったとする研究も出された<sup>311</sup>。

王室ではない沙喙部に所属する人物たちが中央官等を有していることは、沙喙部を形成する支配層が首都に居住し、中央朝廷中心の17官等体系に編入されていたことを意味する。そうであるなら、524年まで、たんに‘干支’のみを称した岑喙部、本彼部、斯彼部などは新羅王室の連合集団として認められ、中央の諸干支会議に参加する権利を付与されていたが、まだその支配層の中央移住は行っていない勢力とすることができる<sup>312</sup>。

しかし、その後、仏教が公認され、531年に貴族会議議長として上大等が任命されたことは、新羅の王権が超越的な地位へ昇格した事を示す。各部支配層の中央移住は強化された新羅王権を土台にして行われ、部長の家族は真骨貴族、または6頭品に編入されたのである<sup>313</sup>。そして首都に居住する王と貴族たちによる中央集権貴族支配が完成された。

---

同王23年(536)「始稱年號 云建元元年。」

<sup>305</sup> 『梁書』卷54、列伝48 新羅「其官名 有子賁早支 齊早支 謁早支 壹告支 奇貝早支。」

<sup>306</sup> 『隋書』卷81、列伝46 新羅国「其官有十七等 其一曰伊罰干 貴如相國 次伊尺干 次迎干 次破彌干 次大阿尺干 次阿尺干 次乙吉干 次沙咄干 次及伏干 次大奈摩干 次奈摩 次大舍 次小舍 次吉土 次大鳥 次小鳥 次造位。」

<sup>307</sup> 曾野寿彦、1955「新羅の十七等の官位成立の年代についての考察」、『古代研究』II、東京大教養学部、116頁。

宮崎市定、1959「三韓時代の位階制について」、『朝鮮学報』14、163～164頁。

<sup>308</sup> 武田幸男、1974「新羅法興王代の律令と衣冠制」、『古代朝鮮と日本』、85～93頁。

<sup>309</sup> 盧泰敦、1989「蔚珍鳳坪新羅碑와 新羅의 官等制(蔚珍鳳坪新羅碑と新羅の官等制)」、『韓國古代史研究』2、183頁。

<sup>310</sup> 李文基、1989「蔚珍鳳坪新羅碑와 中古期の 六部問題(蔚珍鳳坪新羅碑と中古期の六部問題)」、『韓國古代史研究』2、170頁。

<sup>311</sup> 全徳在、1996『新羅六部體制研究』、一潮閣。

<sup>312</sup> 金泰植、2003「初期 古代國家論」、『강좌 한국고대사(講座韓國古代史)第2卷:고대국가의 구조와 사회(1)(古代國家の構造と社会(1))』、駕洛國史蹟開發研究院、67頁。

<sup>313</sup> 鳳坪碑の人物配置は官等の順序どおりになっているが、本彼部の口夫智干支と岑喙部の美昕智干支が沙喙部の而粘智太阿干支よりも上位に位置している点から、彼らはその後真骨へ編入された可能性がある。すなわち、本彼部と岑喙部の長はいまだに中央官等に編入されていないながらも、真骨のみの官等である第5等の大阿飡より序列が高かったのである。しかし、その後の王権強化過程で6部支配層の身分が1段階格が下がっている可能性もある。王妃の父であった朴英失角干がいた牟梁部を除いた本彼・習比・漢祇部人の場合、530年代以後の碑文や文献記録で大阿飡以上の官等を持つ官吏が一人も発見されていないので、喙部と沙喙部を除いた4部の人々は6頭品に編成されたと見る見解がある。全徳在、2000「7세기 중반 관직에 대한 관등규정의 정비와 골품제의 확립(7世紀中盤官職に対する官等規制の整備と骨品制の確立)」、河一植外5人共著、『한국 고대의 신분제와 관등제(韓國古代の身分制と官等制)』、アカネット、309～311頁。

532年に新羅軍隊の攻撃で滅亡した金海の金官国は6部に属していないにもかかわらず、その支配者である仇亥王一家は新羅の首都へ移住し、沙喙部に所属し、真骨として編入された<sup>314</sup>。これは、常道に反した特惠として新羅が金官国の王家を優待することで、その他の加耶諸国の敵愾心を和らげる一種の宣伝術であった<sup>315</sup>。

首都内に行政区域での6部の居所が用意されたとして、地方の5部の中心勢力は状況により順次移住して来たようである。大邱、釜山地方などでは、5世紀末ごろに封土の直径が20m以上になる大きな古墳群がなくなり、梁山、昌寧地方などでは6世紀前半にそうした現象が起きる。これは部の支配層やその他の小国の支配層の中央集住と関連があると考えられる<sup>316</sup>。

### 3. 大加耶の古代国家形成と南部地域の一部の喪失

『日本書紀』継体8年(514)条の記事によれば、伴跋(慶尚北道高霊の大加耶)は子吞(慶尚南道晋州)と帯沙(慶尚南道河東)に城を築き満奚(全羅南道光陽)に連なるようにし、烽燧台と邸宅を設置し、百濟および倭国に備えた。また、爾列比(慶尚南道宜寧郡富林面)と麻須比(慶尚南道昌寧郡靈山面)に城を築き、麻且奚(慶尚南道三浪津)および推封(慶尚南道密陽)にまで伸張し士卒と兵器を集め新羅を圧迫したという<sup>317</sup>。

ここで伴跋が城を築いた位置が高霊から遠くはなれていた点や士卒と兵器を集めたという表現から大加耶国は連盟の首都のみではなく、周辺の他の地方からも労働力や軍隊を動員したものと見える。そうであるなら、この記事は大加耶の王権が強化され、広大な領域に武力を独占した事実を反映していると把握してもよいであろう。これは大加耶が百濟との領域の争いの過程で加耶の北部地域にかけて古代国家を成立させたことを意味する。

この当時の大加耶領域は今の高霊郡を中心として西側に居昌郡、咸陽郡、山清郡、晋州市西部、河東郡一帯を含み、南側に陝川郡と宜寧郡東部の一部、昌寧郡南部の一部を含む地域であった。こうした範囲は6世紀初に高霊様式土器類型が流行した地域と<sup>318</sup>ほぼ一致する。よって加耶は遅くとも510年代にはこの地域に対する統制力を強化し、初期古代国家段階に至ったといえる。

しかしこの範囲は加耶の小国連盟体と見られる地域の2分の1程度に過ぎず、残りの宜寧西部、晋州東部、咸安、泗川、固城、馬山、昌原、金海などの勢力は大加耶に統合されず、そのまま加耶連盟の小

<sup>314</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王19年「金官國主金仇亥 與妃及三子 長曰奴宗 仲曰武徳 季曰武力 以國帑寶物來降。王禮待之 授位上等 以本國爲食邑。子武力仕至角干。」

<sup>315</sup> 朱甫暎、1982「加耶滅亡問題에 대한 一考察 —新羅의 膨脹과 關聯하여—(加耶滅亡問題に対する一考察—新羅の膨張と関連して—)」、『慶北史學』4。

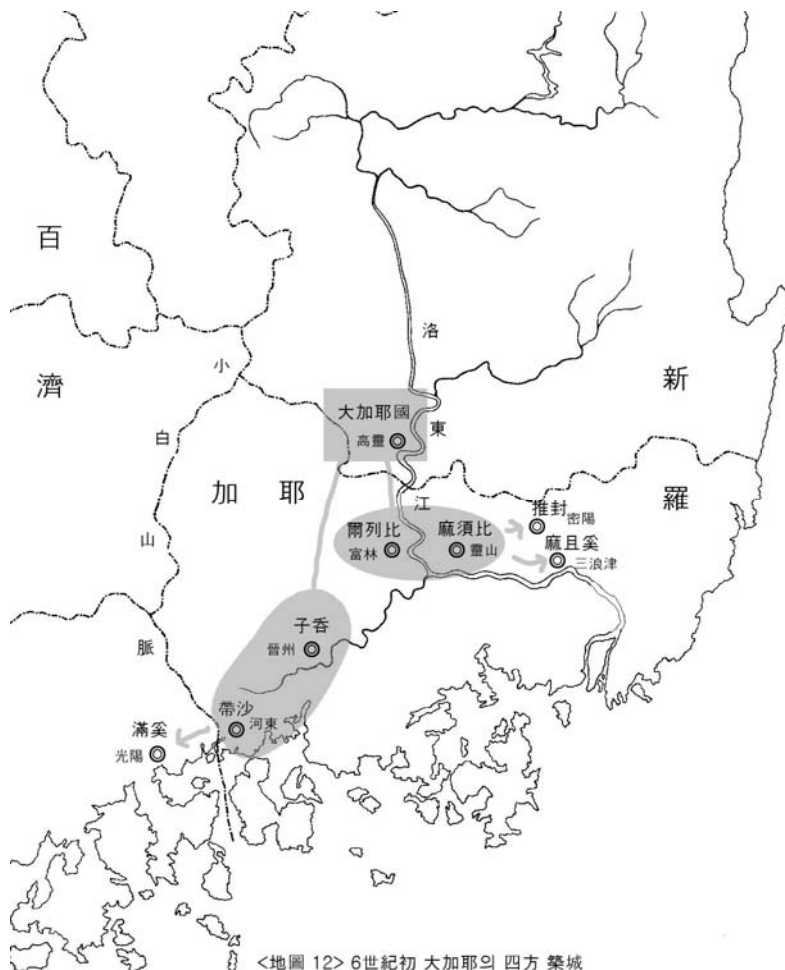
<sup>316</sup> 普通直径10m以下の古墳群は地方を問わず、その後も継承されるがこれは勢力が弱化した土着村主勢力たちの墓であろう。

<sup>317</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇8年3月「伴跋築城於子吞・帯沙 而連滿奚 置烽候邸閣 以備日本。復築城於爾列比・麻須比 而緮麻且奚・推封。聚士卒兵器 以逼新羅。駟略子女 剝掠村邑。凶勢所加 罕有遺類。夫暴虐奢侈 惱害侵凌 誅殺尤多 不可詳載。」

地名の考証については、金泰植、1997「百濟의 加耶地域 關係史: 交渉과 征服(百濟の加耶地域關係史:交渉と征服)」、『百濟의 中央과 地方(百濟の中央と地方)』、忠南大學校百濟研究所、61~67頁;2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史1巻)』、푸른역사(ブルンヨクサ)、188~192頁参照。

<sup>318</sup> 朴天秀、1998「대가야의 역사와 유적(大加耶の歴史と遺跡)」、『가야문화도록(加耶文化図録)』、慶尚北道、14頁。

国を形成する地位にあったとできる。その地域は土器文化圏から見れば、咸安様式(咸安、馬山、宜寧西部)、<sup>319</sup>固城—晋州様式(固城、泗川、晋州、山清)、<sup>320</sup>金海様式(金海、昌原)土器類型などに再区分できる。



繼體紀9年(516)条には倭国の使臣物部連と水軍500名が帶沙江に留まってから6日にして伴跛が軍隊を起し、彼らを攻撃し撃退したという記事がみられる<sup>321</sup>。これは伴跛、すなわち高靈の大加耶が軍隊を起し、帶沙江、つまり河東付近の蟾津江流域まで来て、倭国の使臣一行を攻撃した事件である。これは高靈地方に中心をおく大加耶王権の武力が遠く河東地方まで及んでいた事を現すものであり、加耶王権の武力独占の事例として追加できよう。

そのうえで大加耶はより大きな権威を持ち、新羅と結婚同盟を結んだ。つまり、522年に高靈大加耶の

<sup>319</sup> 金正完、1997「신라와 가야토기의 발생 및 변화과정(新羅と加耶土器の発生および変化過程)」、『한국고대의 토기(韓国古代の土器)』、國立中央博物館、58頁。

<sup>320</sup> 尹貞姬、1997「소가야토기의 성립과 전개(小加耶土器の成立と展開)」、慶南大學校大學院碩士學位論文。しかし晋州、山清地方には、固城—晋州様式の土器と高靈様式の土器が共存する様相を見せている。

<sup>321</sup> 『日本書紀』卷17、繼體天皇9年「是月 到于沙都嶋 傳聞 伴跛人 懷恨銜毒 恃強縱虐。故物部連 率舟師五百 直詣帶沙江。文貴將軍 自新羅去。夏四月 物部連於帶沙江停住六日。伴跛興師往伐 逼脫衣裳劫掠所齎 盡燒帷幕。物部連等 怖畏逃遁 僅存身命 泊汶慕羅。[汶慕羅 嶋名也。]」

異腦王が新羅に請婚し、法興王が伊滄比助夫の妹を送り、結婚が成立した<sup>322</sup>。やがて大加耶に嫁いだ新羅王女は月光太子を産み、結婚2年後である524年には新羅国王が南部の境界に目を向け土地を開削したが、加耶国王が来て出会ったという<sup>323</sup>。これは加耶連盟の代表勢力である高靈大加耶の王が新羅法興王と洛東江方面で出会い、領土の境界を相互確認するのに会談したことを記録したものと考えられる。

しかし、新羅法興王の計画した策動により、何年か後に同盟は破綻するに至り、それにより加耶連盟内部には分裂の兆候が見え出した。これを捕捉した新羅は、529年を前後して武力攻勢を通じて喙己吞国(慶尚南道昌寧郡靈山面)からの降伏を受け、続いて532年に金官国(=南加羅国、金海市)、530年代後半に卓淳国(昌原)も新羅に投降した。その間に百濟も、安羅国(咸安)周辺の乞毛城と久礼牟羅城(漆原)などを侵攻して軍隊を駐屯させるようになった<sup>324</sup>。このように520年代後半以後に、加耶連盟が分裂の兆候とともに一部の諸小国が滅亡して弱勢を見せることによって、湖南東部地域の最後の小国である麻連と上己文なども百濟に統合され郡県に編成されたものと推定される。

#### 4. 磐井の乱と交流パターンの変化

百濟が湖南東部地域を占領した6世紀前半以後、朝鮮半島南部地域で倭との交易を担当していた大加耶の役割は弱化した。これは百濟が加耶を媒介にせずとも倭と直接交易を行うことができる経路を整備したためである。一方、日本列島では527年に筑紫国造磐井が九州北部に勢力を張っており、新羅の賄賂を受け反乱を起こし、朝鮮半島各地から来る船などを主導して誘致し<sup>325</sup>、翌年に中央貴族の物部倭鹿火の討伐軍に鎮圧された<sup>326</sup>事件が起きた。

ここで九州北部の豪族が倭国の中央政權に反旗を翻したことは、加耶および新羅の計策と関連があるとみえ、これは百濟と倭国中央の緊密な交流関係を妨害するためのものであったと推定される。倭国の中央政權がこれを鎮圧したことは、朝鮮半島と日本列島間の交流で九州の倭人の中間的役割が無力化されたことを意味する。結果的に510年および520年代を経て古代韓日交流のパターンは既存の百濟－加耶－九州倭－近畿倭を経る形式から百濟－近畿倭へ直結する形式が優勢になったのである。

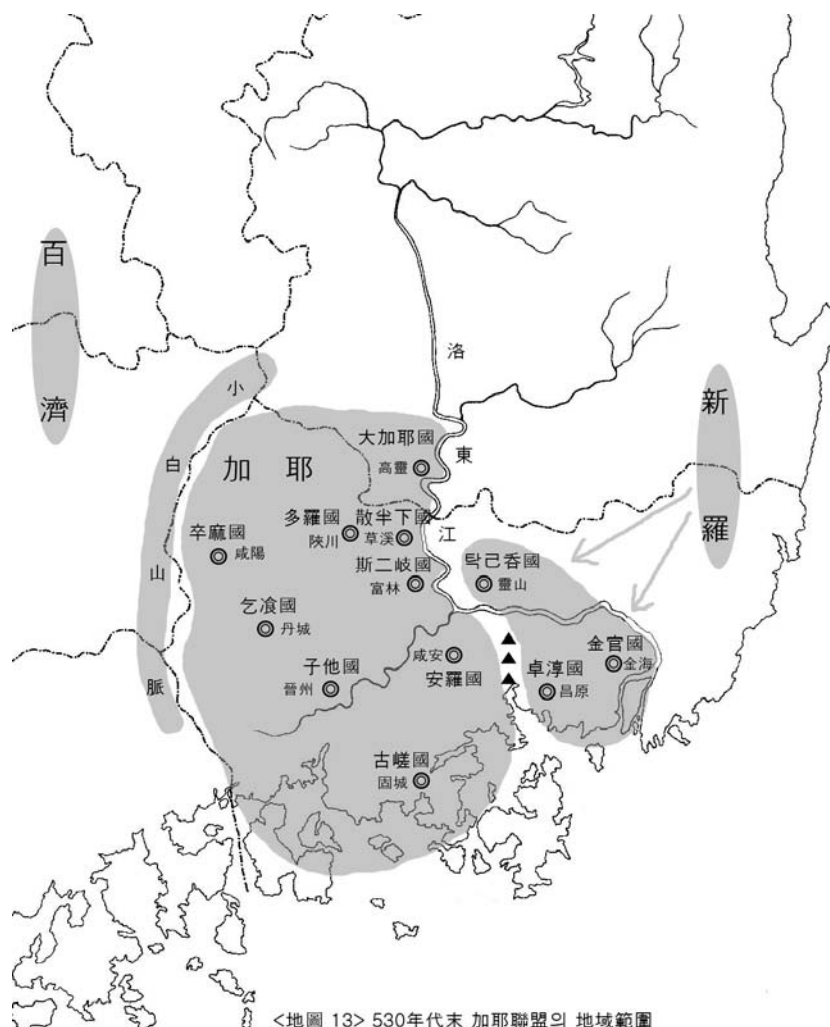
<sup>322</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王9年「春三月 加耶國王遣使請婚 王以伊滄比助夫之妹送之。」  
『新增東国輿地勝覽』卷29、高靈県 建置沿革 引用 稷順応伝「大伽倻國月光太子 乃正見之十世孫。父曰異腦王。求婚于新羅 迎夷黎比枝輩之女 而生太子 則異腦王 乃惱室朱日之八世孫也。然亦不可考。」

<sup>323</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王11年9月「王出巡南境拓地。加耶國王來會。」

<sup>324</sup> 金泰植、1988「6세기 전반 加耶南部諸國의 소멸과정 고찰(6世紀前半加耶南部諸国の消滅過程の考察)」、『韓國古代史研究』1、韓國古代史研究會。

<sup>325</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇21年6月 壬午朔 甲午「近江毛野臣 率衆六萬 欲住任那 爲復興建新羅所破南加羅・喙己吞 而合任那。於是 筑紫國造磐井 陰謀叛逆 猶預經年。恐事難成 恒伺間隙。新羅知是 密行貨賂于磐井所 而勸防遏毛野臣軍。於是 磐井掩據火豊二國 勿使修職。外邀海路 誘致高麗・百濟・新羅・任那等國年貢職船。内遮遣任那毛野臣軍。」

<sup>326</sup> 前掲書、継体天皇22年11月 甲寅朔 甲子「大將軍物部大連麤鹿火 親與賊帥磐井 交戰於筑紫御井郡。旗鼓相望 埃塵相接 決機禰之間 不避萬死之地。遂斬磐井 果定疆場。」



しかし、大加耶が湖南東部地域で百濟との対決から敗北した後、加耶南部地域の固城郡松鶴洞1号墳B号石室、宜寧郡景山里1号墳、雲谷里1号墳などでは倭系の石室構造を持ち、大加耶様式の土器、馬具、青銅盃などの副葬品を備えた諸古墳が発見されている。この古墳構造は主に日本の九州福岡県と熊本県などで見られ、該当時期の北九州地域でも高靈様式の耳飾と土器、固城様式の土器などが見られるので、よって両地域間の緊密な関係が想定される<sup>327</sup>。これは遠距離仲介能力を喪失した加耶と九州倭の両者の間に、伝統的な交流経路が逆に強化されていたことを反映するものである。

## 第2節 新羅の膨脹と加耶の消滅

### 1. 加耶の南北分裂

6世紀中葉の加耶地域の遺跡状況を考察すると、高靈、陝川、居昌、晋州などの大加耶文化圏には横穴式石室墳および三足器など百濟文物の諸要素が若干追加される。反面、咸安、固城、泗川などの加耶西南部地域は依然として既存の文化基盤を維持、発展させるのみで、相対的に百濟文物の影響

<sup>327</sup> 朴天秀、2007『새로 쓰는 古代 韓日交渉史(新しい古代日韓交渉史)』、ソウル:社會評論、242～243頁。

が希薄である<sup>328</sup>。また加耶地域全体の古墳の分布状況を通観すれば、個々の封墳および古墳群の規模が最も大きいものは高霊池山里古墳群と咸安末山里・道項里古墳群である。ここから高霊と咸安の支配勢力が、加耶末期に文化的性格の区別される加耶北部および南部地域の中心勢力であったことを確認できる。

こうした勢力編成は高霊の大加耶国の覇権が動揺し、咸安の安羅国が加耶連盟内で強化され、現われた現象である。520年代後半に卓淳国が新羅から攻撃を受けその渦中で喙己呑国が新羅に併合され、加耶連盟内の南部諸国はそれを阻止できない大加耶に不信を抱くようになった。これらの国々は自救策で自国内の団結を図ったが、咸安の安羅国がこれを主導した。つまり安羅が高い建物を作り新たな政治的合議体の盟主としての様相を呈し、百濟、新羅、倭などの使臣を招聘して国際会議、すなわち安羅会議を開催したことは<sup>329</sup>これを反映する。

百濟はこうした動きに反発して531年に安羅へ侵攻し乞毛城を領有し<sup>330</sup>、さらには534年に卓淳国北方の久礼牟羅(漆原)に城を築き、軍隊を駐屯させた<sup>331</sup>。その結果、安羅およびその西南部の加耶諸小国は百濟の政治的影響力の下に置かれた。しかし百濟から持続的に抑圧を受けていた昌原の卓淳国王が538年頃に新羅軍を引き入れて反対集団を掃討し、みずから新羅に編入し<sup>332</sup>、新羅は一步進めて久礼山城(漆原)に駐屯した百濟兵士を追い払った<sup>333</sup>。

そこで百濟は加耶地域最大の勢力である大加耶とそれに同調する加耶北部地域に先進文物を分け与え、積極的に包摂した。そうした過程で加耶北部の大加耶側の諸小国は、新羅の背反と南部地域の諸小国の独立的態度に対応するため、親百濟的な性向に傾いたので高霊、居昌、陝川など大加耶文化圏の一部に現われる百濟系文物の要素はその反映と言えよう。また加耶北部の小国間に百濟の権威が通用し、大加耶の統合力は小国連盟体の水準に弱化した。

反面、加耶南部地域には、安羅国が主導する自主的性格の連盟体が形成された。久礼牟羅城を新羅が領有するようになり、安羅は新羅と協調せずには存続できない状況に変化した。安羅は新羅および倭国との親交をふかめることで百濟に対してもう少し独自の姿勢を取るようになり、対外的には大加耶に劣らない加耶連盟の中心勢力の一つに台頭した。こうした安羅の台頭を基に、加耶連盟は南北に分裂して大加耶－安羅の二元体制へ突入した。

530年代にかけて加耶は連盟全体が南北に分裂し、540年代には百濟および新羅の侵攻に備え、独

<sup>328</sup> 金泰植、1993『加耶聯盟史』、一潮閣、251～253頁。

<sup>329</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇23年3月「是月 遣近江毛野臣 使于安羅。勅勸新羅 更建南加羅・喙己呑。百濟遣將軍君尹貴・麻那甲背・麻鹵等 往赴安羅 式請詔勅。新羅恐破蕃國官家 不遣大人 而遣夫智奈麻禮・奚奈麻禮等 往赴安羅 式請詔勅。於是 安羅新起高堂 引昇勅使。國主隨後昇階。國內大人 預昇堂者一二。百濟使將軍君等 在於堂下。凡數月再三 謨謀乎堂上。將軍君等 恨在庭焉。」

<sup>330</sup> 前掲書、継体天皇25年12月条細注の百濟本記引用文「太歳辛亥三月 軍進至于安羅 營乞毛城。」

<sup>331</sup> 前掲書、継体天皇24年9月「於是 阿利斯等 知其細碎爲事 不務所期 頻勸歸朝 尚不聽還。由是 悉知行迹 心生翻背。乃遣久禮斯己母 使于新羅請兵 奴須久利 使于百濟請兵。毛野臣聞百濟兵來 迎討背評[背評地名 亦名能備己富里也] 傷死者半。百濟則捉奴須久利 柁械枷鎖 而共新羅圍城。責罵阿利斯等曰 可出毛野臣。毛野臣 嬰城自固。勢不可擒。於是 二國圖度便地 淹留弦晦 築城而還。號曰久禮牟羅城。還時觸路 拔騰利枳牟羅・布那牟羅・牟雌枳牟羅・阿夫羅・久知波多枳 五城。」

<sup>332</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月「其卓淳 上下携貳 主欲自附 内應新羅。由是見亡。」  
同王5年3月「至於卓淳 亦復然之。假使卓淳國主 不爲内應新羅招寇 豈至滅乎。」

<sup>333</sup> 前掲書、欽明天皇5年3月「新羅春取喙淳 仍擯出我久禮山戍 而遂有之。」

立的に生存するための対策を模索した。当時百済と新羅は高句麗の南進に共同して対応する羅済同盟を結んでいながらも、加耶地域の併合のためには互いに競争していた。よって、加耶連盟体が生存するためには、百済と新羅との競争関係を適切に利用するしかなかった。こうして後期加耶連盟は、高霊大加耶国と咸安安羅国中心の南北二元体制に分裂した状態にもかかわらず、7、～8カ国の執事たちで構成された対外交渉団体を整備し、百済と新羅両側との外交交渉を図った。

## 2. 百済の統治体制再整備と外交的成功

百済の聖王は526年に熊津城(忠清南道公州)を修理し沙井柵(大田広域市中区沙井洞)を建て<sup>334</sup>、首都周辺の防御を固め、これを土台に538年に泗泚(忠清南道扶余)へ遷都し国号を南扶余と変えるなど<sup>335</sup>、中興を図り内外の官庁を22部へ拡大し、首都と地方を5部と5坊に整備した<sup>336</sup>。彼はこうした統治体制の再整備を土台にして積極的な対外関係を展開した。百済は541年に梁へ毛詩博士と涅槃経義および工匠と画師などを請い<sup>337</sup>、新羅に和解を要請し<sup>338</sup>、一方では加耶連盟の会議要請を受け入れた。

541年4月と544年11月の二度にわたり安羅(慶尚南道咸安)、加羅(慶尚北道高霊)、卒麻(慶尚南道咸陽)、散半奚(陝川郡草溪面)、多羅(陝川)、斯二岐(宜寧郡富林面)、子他(晋州市)、久嗟(固城)<sup>339</sup>など加耶連盟7、8個の小国の早岐などが百済の首都に集まった<sup>340</sup>。

第1次泗泚会議で加耶連盟の使臣団は、自分たちの独立の保障および新羅の攻撃に対する憂慮などを表明した<sup>341</sup>。これに対して百済の聖王は安易な姿勢で加耶連盟を付属させようとしたため、相互間の具体的な要求事項が潜伏した状態で、別段の成果をあげられなかった。

3年後に開かれた第2次泗泚会議で、百済聖王は3つの計策を提示したが、その内容は(1)加耶連盟および倭の協調の下で加耶の辺境に6つの城を築造しこれを基に新羅の久礼山の5城を討ち回復し、(2)安羅中心の独自勢力推進集団を無力化させ(3)任那の下韓に派遣した百済の郡令・城主はそのま

<sup>334</sup> 『三国史記』卷26、百済本紀4 聖王4年(526)「冬十月 修葺熊津城 立沙井柵。」

<sup>335</sup> 『三国史記』卷26、百済本紀4 聖王16年(538)「春 移都於泗泚[一名所夫里] 國號南扶餘。」

<sup>336</sup> 『北史』卷94、列伝82 百済「其都曰居拔城 亦曰固麻城。其外更有五方 中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城。(中略) 各有部司 分掌衆務。内官有前内部・穀内部・内掠部・外掠部・馬部・刀部・功德部・薬部・木部・法部・後官部。外官有司軍部・司徒部・司空部・司寇部・點口部・客部・外舍部・綱部・日官部・市部。長吏三年一交代。都下有萬家 分爲五部 曰上部・前部・中部・下部・後部 部有五巷 土庶居焉。部統兵五百人。五方各有方領一人 以達率爲之 方佐貳之。方有十郡 郡有將三人 以德率爲之。統兵一千二百人以下 七百人以上。城之内外人庶及餘小城 咸分隸焉。」

<sup>337</sup> 『三国史記』卷26、百済本紀4 聖王19年「王遣使入梁朝貢 兼表請毛詩博士・涅槃等經義并工匠・畫師等 從之。」

<sup>338</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王2年「百済遣使請和 許之。」

<sup>339</sup> 地名の比定については金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 제2권(未完の文明七百年加耶史第2卷)』、200～204頁参照。

<sup>340</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇2年(541)4月「安羅次早岐夷吞奚・大不孫・久取柔利 加羅上首位古殿奚 卒麻早岐 散半奚早岐兒 多羅下早岐夷他 斯二岐早岐兒 子他早岐等 與任那日本府吉備臣[闕名字] 往赴百済 俱聽詔書。」

同王5年(544)11月「日本吉備臣 安羅下早岐大不孫・久取柔利 加羅上首位古殿奚 卒麻君 斯二岐君 散半奚君兒 多羅二首位訖乾智 子他早岐 久嗟早岐 仍赴百済。」

<sup>341</sup> 前掲書、欽明天皇2年4月「任那早岐等對曰(中略) 夫建任那者 爰在大王之意。祇承教旨 誰敢間言。然任那境接新羅 恐致卓淳等禍。[等謂 喙己吞・加羅。言卓淳等國 有敗亡之禍。]」



ま維持するといふものであった<sup>342</sup>。聖王が提示したものは加耶領土に対する漸進的な侵奪政策に過ぎず、加耶のための譲歩はほぼ存在しなかったために加耶連盟の執事たちはその提案を婉曲して拒絶した<sup>343</sup>。

そこで百濟は545年から3年にわたり、文物贈与を通じて加耶連盟の心を慰み、倭国に対しても百濟文物の優秀性を立証することで、その対価として既存の3つの計策を貫こうと努力した<sup>344</sup>。その結果百濟と加耶連盟諸国および倭へつながる外交－交易網が構築され、546年に倭は馬70匹と船10艘を送り<sup>345</sup>、548年には倭の兵士を送ることを約束した<sup>346</sup>。

これに対して安羅国は危機意識を感じ、高句麗に百濟征伐を要請した。しかし独山城、すなわち馬津城(忠清南道礼山郡礼山邑)の戦闘が新羅の参戦により高句麗の敗北に終わり、高句麗と安羅の間の密通が発覚した<sup>347</sup>。そのため安羅の上層部は百濟に対抗する計策に窮し、無力化した。結局百濟の説得と文物の贈与により、百濟の意向が貫かれ、550年を前後して加耶連盟は百濟に従属的に連合されることになった。

### 3. 新羅の漢江流域併合

外交的に大きな成果を収めた百濟の聖王は551年にその権威をもって、新羅と同盟し、高句麗の南部を討ち、漢江流域を回復した。『日本書紀』の記事によると百濟の聖王が新羅と任那(=加耶)の軍隊を率いて高句麗を討ち、漢江下流域の漢城と平壤の旧地である6郡を回復したと記録している<sup>348</sup>。

一方、新羅の真興王は制度を整備し、王権を強化して仏教教団を育成し<sup>349</sup>、思想的統合を図り、四方に軍主を派遣して<sup>350</sup>、領土の膨張を図った。550年には高句麗の道薩城(忠清北道槐山郡道安面)と百濟金峴城(忠清北道鎮川)を奪い<sup>351</sup>、551年には高句麗が領有していた漢江流域を百濟の聖王とともに

<sup>342</sup> 前掲書、欽明天皇5年(544)11月「竊聞 新羅・安羅兩國之境 有大江水 要害之地也。吾欲據此 修繕六城。謹請天皇三千兵士 每城充以五百 并我兵士 勿使作田 而逼惱者 久禮山之五城 庶自投兵降首。卓淳之國 亦復當興。所請兵士 吾給衣糧。欲奏天皇 其策一也。猶於南韓 置郡令・城主者 豈欲違背天皇・遮斷貢調之路。唯庶剋濟多難 殲撲強敵。凡厥凶黨 誰不謀附。北敵強大 我國微弱。若不置南韓 郡領・城主 修理防護 不可以禦此強敵 亦不可以制新羅。故猶置之 攻逼新羅 撫存任那。若不爾者 恐見滅亡 不得朝聘。欲奏天皇 其策二也。又吉備臣・河内直・移那斯・麻都 猶在任那國者 天皇雖詔建任那 不可得也。請 移此四人 各遣還其本邑。奏於天皇 其策三也。」

<sup>343</sup> 前掲書、欽明天皇5年11月「於是 吉備臣・早岐等曰 大王所述三策 亦協愚情而已。今願 歸以敬諮日本大臣[謂在任那日本府之大臣也]・安羅王・加羅王 俱遣使同奏天皇。此誠千載一會之期 可不深思而熟計歟。」

<sup>344</sup> 前掲書、欽明天皇6年(545)9月「百濟遣中部護德菩提等 使于任那 贈吳財於日本府臣及諸早岐 各有差。」同王7年(546)6月「百濟遣中部奈率掠葉禮等獻調。」

同王8年(547)4月「百濟遣前部德率真慕宣文・奈率奇麻等 乞救軍。仍貢下部東城子言 代德率汶休麻那。」

<sup>345</sup> 前掲書、欽明天皇7年(546) 正月「百濟使人中部奈率已連等罷歸。仍賜以良馬七十匹・船一十隻。」

<sup>346</sup> 前掲書、欽明天皇9年(548) 正月「百濟使人前部德率真慕宣文等請罷。因詔曰 所乞救軍 必當遣救。宜速報王。」

<sup>347</sup> 前掲書、欽明天皇9年4月「百濟遣中部杆率掠葉禮等奏曰(中略)然馬津城之役[正月辛丑 高麗率衆 圍馬津城] 虜謂之曰 由安羅國與日本府招來勸罰。以事准況 寔當相似。然三廻欲審其言 遣召而並不來 故深勞念。」

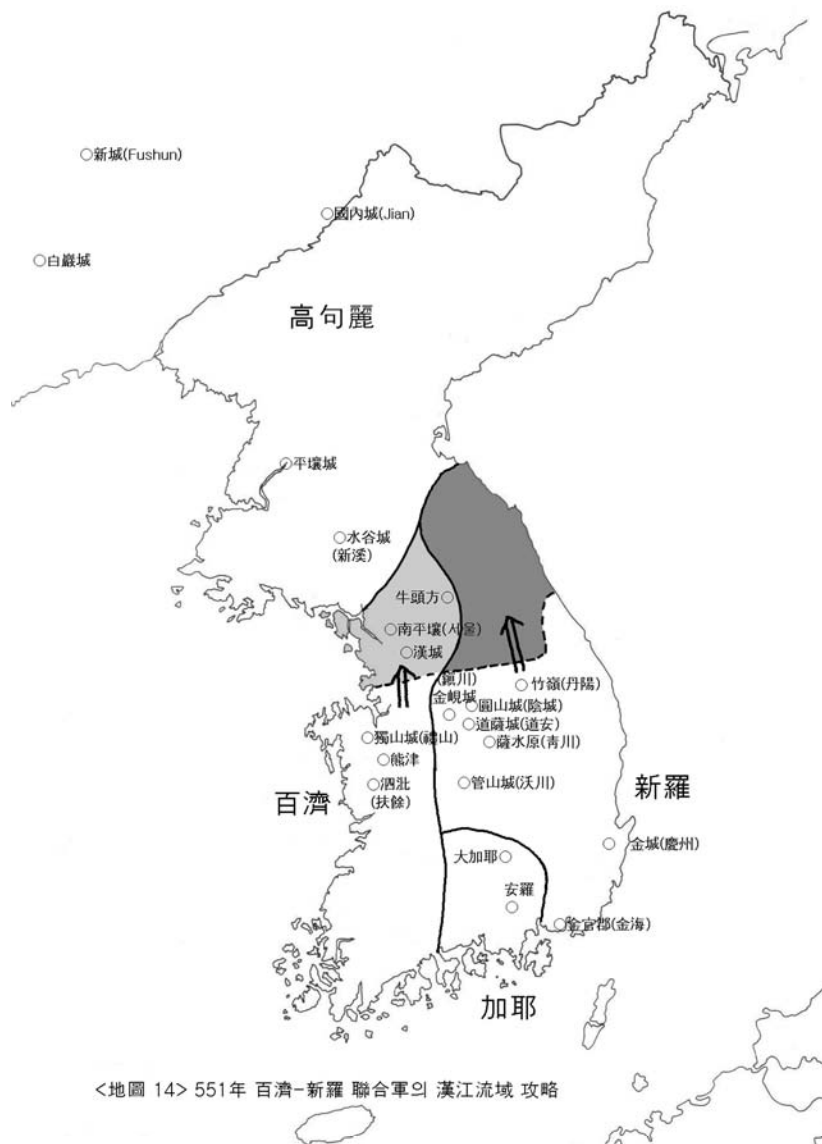
<sup>348</sup> 前掲書、欽明天皇12年(551)「是歲 百濟聖明王 親率衆及二國兵[二國謂新羅・任那也] 往伐高麗 獲漢城之地。又進軍討平壤。凡六郡之地 遂復故地。」

<sup>349</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王5年「春二月 興輪寺成 三月 許人出家爲僧尼 奉佛。」

<sup>350</sup> 『昌寧真興王拓境碑』(561)「四方軍主。比子伐軍主 沙喙 登口口智 沙尺干。漢城軍主 喙 竹夫智 沙尺干。碑利城軍主 喙 福登智 沙尺干。甘文軍主 沙喙 心麥夫智 及尺干。」

<sup>351</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王11年(550)「春正月 百濟拔高句麗道薩城。三月 高句麗陷百濟金峴城。」

に攻撃した。『三国史記』新羅本紀には“王が居柒夫などに命じて高句麗に侵入させたが、勝利の氣勢に乗じて10個の郡を奪った。”<sup>352</sup>とし、居柒夫列伝には“百済の人々がまず平壤を撃破し、居柒夫などは勝利の氣勢に乗じ、竹嶺の外、高峴以内の10郡を取った。”<sup>353</sup>とした。こうして見るに、当時百済—加耶連合軍は漢江下流地域を討ち、漢城と平壤(=南平壤、現在のソウル)をはじめとして6郡を回復し、新羅軍は漢江上流地域を討ち、竹嶺(忠清北道丹陽)と高峴の間の10郡を取ったことがわかる。



<地圖 14> 551年 百濟-新羅 聯合軍の 漢江流域 攻略

王乘兩國兵疲 命伊滄異斯夫 出兵擊之 取二城增築 留甲士一千戍之。」

<sup>352</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 眞興王12年(551)「王命居柒夫等 侵高句麗 乘勝取十郡。」

<sup>353</sup> 『三国史記』卷44、列伝4 居柒夫「十二年辛未 王命居柒夫及仇珍大角滄·比台角滄·耽知迺滄·非西迺滄·奴夫波珍滄·西力夫波珍滄·比次夫大阿滄·未珍夫阿滄等八將軍 與百濟侵高句麗。百濟人先攻破平壤 居柒夫等 乘勝取竹嶺以外高峴以内十郡。」

百濟－加耶－新羅の連合軍による高句麗攻撃および漢江流域占領は百濟と新羅の分占で終えることなく、2年後に劇的な発展を見せた。すなわち『三国史記』によれば、553年7月に新羅が百濟の東部辺を奪い新州(京畿道河南市)を設置したため<sup>354</sup>である。しかし、同じ事件について『日本書紀』では552年是歳条に“百濟が漢城と平壤を捨てたために、入り居住した。”<sup>355</sup>と記録した。

この事件で新羅が漢城を占領した時期は編年資料の性格上『三国史記』側に従い553年と見るのが妥当である。その原因については新羅の一方向的な百濟への攻撃による漢江下流の占領・侵奪と見るよりも552年や553年初に高句麗と新羅の和約による百濟挾攻とみるのが一般的である<sup>356</sup>。その時、高句麗はすでに喪失した漢江流域とともに咸興平野一帯を新羅に渡し、代わりに両国が和平関係を結んだことがこの主な内容であったと推測される<sup>357</sup>。



<地圖 15> 553年 新羅の膨脹

<sup>354</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 眞興王14年「秋七月 取百濟東北鄙 置新州 以阿漚武力爲軍主。」  
<sup>355</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇13年「是歳 百濟棄漢城與平壤 新羅因此入居漢城。今新羅之牛頭方・尼彌方也。[地名未詳]」  
<sup>356</sup> 盧泰敦、1976「高句麗의 漢水流域 喪失의 原因에 대하여 (高句麗の漢水流域喪失の原因について)」、『韓國史研究』13、韓國史研究會;1999『고구려사 연구 (高句麗史研究)』、ソウル:四季節、429~433頁。  
<sup>357</sup> 前掲書、433頁。

#### 4. 加耶の滅亡

漢江下流域地域をめぐる百済と新羅の間の葛藤により、120年の間続いて来た羅済同盟(433～553)が破綻に至った。百済の聖王は倭と直接的な関係を一層強化したが、これは伝統的な倭との交易を仲介した加耶を孤立させ、倭の軍事物資及び軍事力を動員して新羅との戦争に動員するためのものであった。そこで百済は552年に倭に仏教を伝授し、554年には儒学と暦法および医薬などを伝え、倭は百済の要請に従って馬・矢と援軍1000名を送った<sup>358</sup>。

そこで百済は554年に加耶および倭の援軍を率いて新羅へ攻め入り、管山城(忠清北道沃川)の戦いを起こした。この戦争は『三国史記』の記録のように百済と加耶が新羅を侵すことで誘発したものであり、その連合軍が敗北し軍士29600名が戦死する大規模なものであった<sup>359</sup>。ところで『日本書紀』の記録によれば、百済は554年6月に九州の倭軍1000名を受け、12月9日に函山城、すなわち管山城を攻撃し、また百済は軍士10000名を送り、任那を助けたとする<sup>360</sup>。そうであるなら、この戦争で戦死した29600名の中の18600名以上が任那側の軍隊であり、管山城の戦いの主力部隊が加耶軍ということになる。

言わば、百済は百済—加耶—倭連合軍の大部分を加耶人として構成し、新羅に対して攻撃に出たのである。しかし、百済の聖王がその戦闘を指揮していた彼の息子餘昌のために久陀牟羅塞(忠清北道沃川)へ向かい、新羅軍に捕まり、想定外の死を遂げるや<sup>361</sup>、百済—加耶—倭の連合軍は士気が落ち、急激に敗退していった。その結果、百済に頼った加耶連盟諸国は独立を維持するのが難しくなった。その後、新羅は555年から558年にかけて漢江流域経営を終えた後<sup>362</sup>、加耶連盟を併合し始めた。よって560年頃に阿羅加耶(=安羅国、咸安)が先に新羅に投降するなど<sup>363</sup>、衰退の雰囲気が続いたが、大加耶(=加羅国、高靈)は最後の力を振絞って新羅に屈服しない姿勢を現した。これに新羅は大軍を出

<sup>358</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇13年(552)10月「百済聖明王[更名聖王]遣西部姬氏達率怒唎斯致契等 獻釋迦佛金銅像一軀・幡蓋若干・經論若干卷。」

同王14年(553)6月「遣内臣[闕名]使於百済。仍賜良馬二匹・同船二隻・弓五十張・箭五十具。勅云 所請軍者 隨王所須。別勅 醫博士・易博士・曆博士等 宜依番上下。今上件色人 正當相代年月。宜付還使相代。又ト書・曆本・種種藥物 可付送。」

同王15年(554)「春正月(中略)於是 内臣奉勅而答報曰 即令遣助軍數一千・馬一百匹・船卅隻。(中略)夏五月 丙戌朔戊子 内臣率舟師 詣于百済。」

<sup>359</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 眞興王15年7月「百済王明禮與加良 來攻管山城。軍主角干于德・伊滄耽知等 逆戰失利。新州軍主金武力 以州兵赴之。及交戰 裨將三年山郡高干都刀 急擊殺百済王。於是 諸軍乘勝大克之 斬佐平四人・士卒二萬九千六百人 匹馬無反者。」

<sup>360</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇15年12月「而天皇遣有至臣 帥軍以六月至來。臣等深用歡喜。以十二月九日 遣攻斯羅。臣先遣東方領物部莫奇武連 領其方軍士 攻函山城。有至臣所將來民竹斯物部莫奇委沙奇 能射火箭。蒙天皇威靈 以月九日酉時 焚城拔之。故遣軍使馳船奏聞。(中略)伏願 速遣竹斯嶋上諸軍士 來助臣國 又助任那 則事可成。又奏 臣別遣軍士萬人 助任那。」

<sup>361</sup> 前掲書、欽明天皇15年12月「餘昌謀伐新羅。耆老諫曰 天未與 懼禍及。餘昌曰 老矣 何怯也。我事大國 有何懼也。遂入新羅國 築久陀牟羅塞。其父明王憂慮 餘昌長苦行陣 久廢眼食。父慈多闕 子孝希成。乃自往仰慰勞。新羅聞明王親來 悉發國中兵 斷道擊破。是時 新羅謂佐知村飼馬奴苦都[更名谷智]曰 苦都賤奴也。明王名主也。今使賤奴殺名主。冀傳後世 莫忘於口。已而苦都 乃獲明王(中略)苦都斬首而殺 掘坎而埋。」

<sup>362</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 眞興王16年(555)「冬十月 王巡幸北漢山 拓定封疆。十一月 至自北漢山 敎所經州郡 復一年租調 曲赦 除二罪 皆原之。」

同王18年(557)「以國原爲小京。廢沙伐州 置甘文州 以沙滄起宗爲軍主。廢新州 置北漢山州。」

同王19年(558)「春二月 徙貴戚子弟及六部豪民 以實國原。奈麻身得作砲弩上之 置之城上。」

<sup>363</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇22年(561)「故新羅築城於阿羅波斯山 以備日本。」

同王23年(562)「一本云 廿一年(560) 任那滅焉。」

動させ、大加耶を征服した(562)。

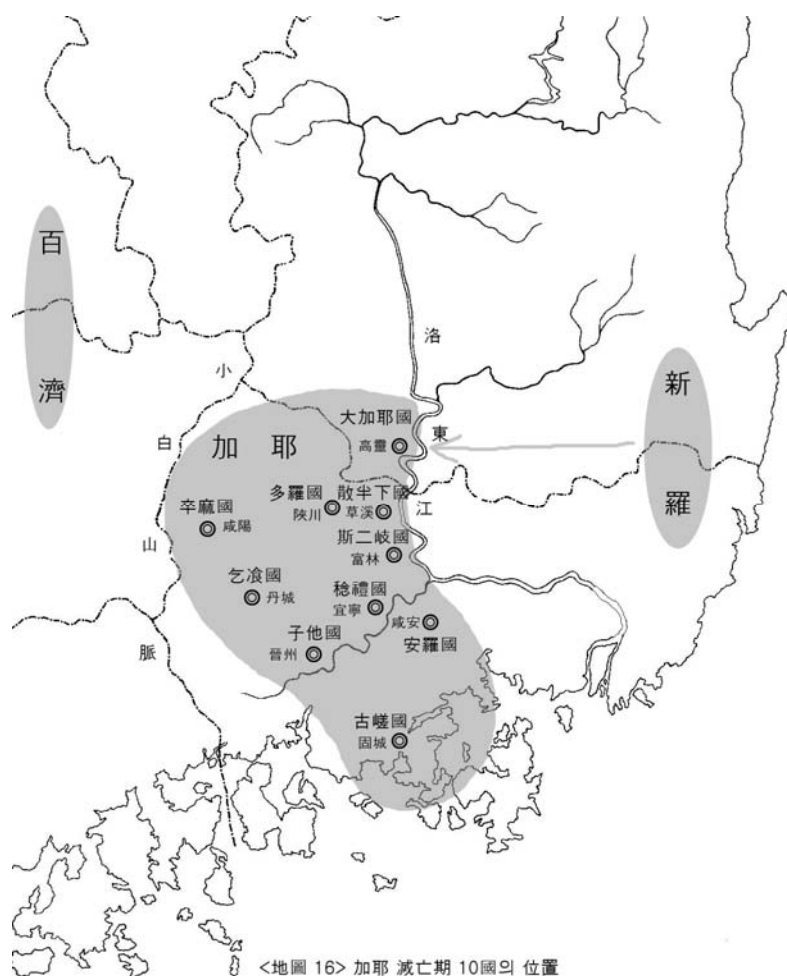
任那日本府説では西暦562年を任那日本府の滅亡として扱っている。これは『日本書紀』欽明23年条の記事を土台にしたものである。ところでその記事は本文で“新羅打滅任那官家”と叙述し、その細注で“一本云 廿一年 任那滅焉。總言任那 別言 加羅國 安羅國 斯二岐國 多羅國 卒麻國 古嵯國 子他國 散半下國 乞滄國 稔禮國 合十國。”としたので、これは細注の任那滅亡記事を土台にして、『日本書紀』の撰者が‘任那官家’という言葉を作成して挿入し変形したものである。ここで‘官家(みやけ)’は単純に名目上の貢納国という意味であるので<sup>364</sup>、8世紀『日本書紀』の撰者の認識を表現したのみで、歴史的な実体が存在したのではなく、新羅が滅ぼしたという‘任那’は加耶連盟の全域に対する総称と言えよう。その細注に‘全て正しく言えば、任那であり、別に言うと加羅国(高靈)、安羅国(咸安)、斯二岐国(富林)、多羅国(陝川)、卒麻国(咸陽)、古嵯国(固城)、子他国(居昌)、散半下国(草溪)、乞滄国(丹城)、稔礼国(宜寧)などを合わせて10国である。’と言う言葉で代弁できるのである<sup>365</sup>。

これは『三国史記』新羅本紀・真興王23年条の記事と同じく真興王が異斯夫に命じて加耶を討伐させ、斯多含が補佐して結局陥落させたという事件<sup>366</sup>を示すものである。結局562年9月大加耶の滅亡をおわりに加耶10国に表象される最後の時期の加耶連盟は滅亡した。

<sup>364</sup> 『日本書紀』で官家は屯倉と同じ‘みやけ’と発音するが、実際には屯倉、すなわち日本列島内部にある大和朝廷の課税地区としての直轄農業経営地をしめすのではなく、大部分が百濟や加耶諸国自体を示し、大和朝廷に対する貢納国の意味で使われている。坂本太郎外3人、1965『日本書紀』下、日本古典文学大系68、岩波書店、551頁補注参照。

<sup>365</sup> 地名の比定については金泰植、2002『미완의 문명 7백년 가야사 제2권 (未完の文明七百年加耶史第2巻)』、200～204頁参照。

<sup>366</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王23年「九月 加耶叛 王命異斯夫討之 斯多含副之 斯多含領五千騎先馳 入梅檀門 立白旗 城中恐懼 不知所爲 異斯夫引兵臨之 一時盡降。」



### 第3節 所謂‘任那日本府’の性格

#### 1. ‘任那日本府’理解の基準

任那日本府説と関連する6世紀韓日関係史の争点は『日本書紀』に見える‘任那日本府’は何かという点である。‘任那日本府’という用語は、541年から544年までの記録に5回出てくるのみであり、‘日本府’とのみ出てくるものを含むと464年から552年まで35回現れ、その中の2つは‘安羅日本府’とも現れる。そのため近來の‘任那日本府’関連の専門研究では任那日本府の成立時期を4世紀や5世紀とみる見解はほぼなく、大概6世紀前半の問題として接近している。

しかし大部分の‘日本府’関連記事とはかけ離れている『日本書紀』雄略8年(464)条に見える‘日本府’関連の句節は、前の第2章第2節で論議したように‘任那日本府’関連資料として利用することはできない。残りの‘日本府’関連諸資料は、すべて『日本書紀』欽明2年から13年の間の記録に出てくるものである。この諸資料を検討すると、幾つかの基準を整理することができる。

第一に、いわゆる‘任那日本府’というものは541年から552年の間に存在し、その前後で幾年か追加している可能性がある。

第二に、この時期の‘任那日本府’または‘安羅日本府’は咸安の安羅国に設置されていた。

第三に、‘任那日本府’は卿＝大臣(的臣)、臣(吉備臣)および下級官人(河内直、移那斯、麻都)などで構成されており、これらは倭人や倭系の血統との関連性が存在した。

第四に‘任那日本府’の官人は加耶各国の支配者である任那執事とともに加耶連盟体の対外政策決定に参与し、またその方向は加耶連盟の独立的発展のためのものであった。

『日本書紀』に見える任那日本府とはただ言葉それだけなのに、既存の任那日本府説ではこれを時間的に空間的に酷く拡大解釈したのである。6世紀中葉の安羅にあった‘任那日本府’はその存在が認められるが、この問題は分裂相を見せた加耶末期の政治状況と関連して解釈する必要がある。

任那日本府の性格については、大きく(1)任那支配説と(2)外交交易説に分かれる。任那支配説は、加耶ではない外部勢力が軍事的征伐、またはその他の方式を通じて加耶地域を支配していたという学説であり、外交交易説は、加耶の独立性を認めるうえで加耶と外部勢力間の外交または交易関係を重視したという学説である。そのなかで(1)群に属する学説は4種で、①倭の任那支配説、②大和の日本列島内任那支配説、③百濟の加耶支配説、④倭系任那豪族説などがあり、(2)群に属する学説も4種で、①交易機関説、②使臣団説、③外交機関説、④安羅倭臣館説などがある。

## 2. 任那支配説の4種

(1)－①の倭の任那支配説は通常任那日本府説、倭の出先機関説、または南韓経営論とも呼ばれるものであり、倭が任那を369年から562年まで統治したことを言う。これは8世紀初の『日本書紀』の撰者の意を受け日本の江戸時代の国学者たちが、継承して19世紀末から20世紀初の文献史学者である菅政友、那珂通世、今西龍、鮎貝房之進などの見解を、末松保和が総合したものであり、その後にも様々な概説的論考で反復的に記述された<sup>367</sup>。

1980年代以後には、任那支配期間を縮小し、第1期である5世紀の50年代から70年代までは百濟の一つの権臣が任那を直接支配し、第2期の5世紀後半(480～490年代)には倭王権がこれを‘直接経営’し、第3期の6世紀前半には倭王権が百濟王を間に挟んでこれを‘間接経営’したと見たりもする<sup>368</sup>。

あるいはその期間を532年から562年の間の30年に縮小し、任那日本府は新羅と百濟からの独立を願う任那諸国の期待の下で、532年に大和朝廷が安羅へ出兵し、官人を派遣して現地の日系勢力を統一して設置した出先機関であり、また日本府は任那諸国全体の合議機関に参与して強い影響力を行使することで任那支配を実現したとみる見解もある<sup>369</sup>。

また、さらに倭の任那支配期間を530年から531年の間の1年に縮小し、任那日本府は530年から531年にかかる非常に短い期間の間、加耶在地支配層の政治秩序に依拠して活動した倭王権の官人および軍事的集団であり、軍事力の提供を媒介にした倭王権と安羅の間には一種の臣従関係が認められ、531年百濟の安羅進駐以後‘在安羅諸倭臣’はすでに加耶諸国の盟主の地位にあった百濟王の統制

<sup>367</sup> 末松保和、1949『任那興亡史』、大八洲出版、1956、再版、吉川弘文館、69頁。

石母田正、1962「古代史概説」、『岩波講座日本歴史』1、東京：岩波書店。

八木充、1963「任那支配の二形態」、『山口大学大会誌』14-2、1964「大伴金村の失脚—官家支配から日本府支配へ—」、『日本書紀研究』1、71～74頁。

<sup>368</sup> 山尾幸久、1983『日本古代王権形成史論』、岩波書店、216～219頁。

<sup>369</sup> 大山誠一、1980「所謂‘任那日本府’の成立について」上・中・下、『古代文化』32-9-11-12、京都：古代学協会、537～548頁。

に服属し、倭王権の派遣軍は百済の‘傭兵’的性格へ変質したと把握したものもある<sup>370</sup>。

しかし『日本書紀』の記事からは、‘任那日本府’官人たちは加耶連盟の早岐などととも会議に参加する様子は見えるが加耶連盟の王や早岐たちへ命令を下したり、支配をする姿は全くない。加耶支配のための警察や軍事力の存在もみられない。そうであるなら、その官人たちは倭系の人物と推定できるとしても、‘任那日本府’を倭の任那支配機構としては認めがたい。

(1)－②の大和の日本列島内任那支配説は分国説とも言えるもので、‘倭の任那支配’を容認しながらも、その支配対象である‘任那’の位置を日本列島内に求め、任那日本府は吉備地方の任那小国に設置された近畿大和の統治機関と把握した<sup>371</sup>。

この学説は既存の任那日本府説へ安住していた日本学界の反省を促す成果を収めることにもなった。しかし『日本書紀』をはじめとする文献史料を利用する際に無理な憶測が多く、その反論としての分国説自体もさほど有力な結論を出せなかったようである<sup>372</sup>。

(1)－③の百済の加耶支配説は、百済軍司令部説とも言えるもので、‘任那支配説’の観点に立ちながらも、その支配の主体を倭ではなく、百済と見て『日本書紀』の史料を再整理した。すなわち、4世紀後半から6世紀中葉まで百済が加耶地域を支配し、いわゆる‘任那日本府’は百済の加耶支配のための派遣軍司令部だったというものである<sup>373</sup>。

あるいはこの観点を継承・発展させた傭兵説も存在する。百済はその直轄領である‘任那’に軍事指揮者である郡令・城主を送り統括し、そこに百済軍を駐屯させて本国から百姓も送り込んで生活するようにし、‘任那日本府’はそれを統轄した機関名とした。百済は新羅との国際関係上、そこに部分的に大和王権から日(本)人傭兵を受けて配置し、日系百済官僚を送り、彼らを指揮するようにしたというのである<sup>374</sup>。

ところで『日本書紀』の諸記事を見る時、‘任那日本府’の官人たちは概して百済に反対し、新羅側に加担したり高句麗に百済侵攻を誘うなどの行為をした。これは‘任那日本府’の実像が百済の派遣軍司令部、または百済直轄領の統轄機関とは考え難くするような資料である。

(1)－④の倭系任那豪族説は偽倭自治集団説とも、または‘加耶居住倭人説’ともするもので、任那日本府は新羅・百済との接触地帯にあった‘日本府の郡県’を統治する機関であったとした。‘任那経営’の実態は、倭人と称する任那の地方豪族が日本の中央貴族や地方豪族と関係を持つことにより、任那諸国の連合組織に深く入り込み、その勢力を拡大して外交権を統制することができたというものである<sup>375</sup>。また南韓地域にある程度倭人が居住しており、任那日本府には吉備・河内・為哥(伊賀)など、倭国中央・地方の豪族名を詐称する者がいたが、この倭人の政治集団と大和朝廷との直接的な関係は存在しないと、よって全く‘偽倭’のみ存在したのではなく、そこには‘加耶居住倭人集団’が含まれて

<sup>370</sup> 鈴木英夫、1987「加耶・百済と倭—任那日本府論—」、『朝鮮史研究会論文集』24、83～87頁；1996『古代倭国と朝鮮諸国』、青木書店。

<sup>371</sup> 金錫亨、1966『초기조일관계연구(初期朝日関係研究)』、社會科學院出版社；1988『초기조일관계사(하)(初期朝日関係史(下))』、社會科學出版社、209頁。

<sup>372</sup> 金泰植、1991「書評:조희승·김석형著、『초기조일관계사』(상)·(하) (書評:チョ・フィスン・金錫亨著『初期朝日関係史』(上)·(下))」、『韓國古代史論叢』1、駕洛國史蹟開發研究院。

<sup>373</sup> 千寛宇、1977「復元加耶史」中、『문학과 지성(文学と知性)』29、925頁；1991『加耶史研究』、一潮閣、33頁。

<sup>374</sup> 金鉉球、1985『大和政権の対外関係研究』、吉川弘文館；1993『任那日本府研究』、一潮閣、218～233頁。

<sup>375</sup> 井上秀雄、1966「任那日本府の行政組織」、『日本書紀研究』2；1973『任那日本府と倭』、東出版、82～89頁。



いたと考える<sup>376</sup>。

これは余他の任那支配説とは違って軍事征伐を想定していないが、倭人または倭人を自称する豪族が加耶地域に居住し、その一部を統治していたとみる点では任那支配説の一種として把握することができる。しかし任那日本府が加耶地域の1つの独立小国であるとし、その中心地は安羅王が統治した安羅国にあって領域は加耶の辺境地帯にあったとして特異な形態を想定している。いわゆる‘任那日本府の郡県’という概念も元来大和朝廷が加耶諸国の要請を受け入れ、その外郭の百濟・新羅との紛争地帯に設置した直轄領としたものであるが<sup>377</sup>、その史料的根拠が不透明である。

一方、倭系任那豪族説は近来若干性格を違え、加耶に居住する倭人集団をもう少し俯角させる方向へ変化している。それによると‘日本府’とは5世紀代の倭と朝鮮半島との関係、または地方豪族の独自の通交などにより、加耶地域、特に昔から倭と関連が深かった安羅に居住した倭人の一団であり、加耶諸国と共通の理解を持ってほぼ対等な関係で彼らと接し、主に外交交渉に協同して従事していたとする<sup>378</sup>。

これは‘安羅居住倭人集団説’としてこそ正しいようで、井上説よりは客観的な表現に見えるが、5世紀から存在したという彼らの存在がどうして540年代に入り浮上するのか、彼らが安羅王とどのような関係にあったのかに対する説明が必要である。

### 3. 外交交易説の4種

(2)－①の加耶と倭の間の交易機関説は韓国側でまず出された見解である。‘任那府’は後世の倭館官吏のようなもので、元来倭国が加耶諸国との貿易関係のために設置した公的商館であるが、のちに加耶諸国が新羅の圧力に勝てず倭人の援助を求めたために、これが多少その役割の中心になったようだとした<sup>379</sup>。

あるいは日本側でも似たような研究が出され、4世紀以来加耶地域は倭の各地の諸勢力に対する鉄素材および生産技術の供給地だったが、次第に畿内勢力が日本列島で国家形成の主体勢力として登場するようになるや、彼らは当時の加耶諸国連合が維持していた会議体に自分の官僚を参与させ、より多くの先進文物を独占的に受容しようと努力したのであり、それがまさに任那問題の基本的性格であるとした。よって彼らが派遣した官僚で構成された任那日本府は、加耶に対する統治機関や軍政機関ではなく、交易機関であったということである<sup>380</sup>。

またこれを日本の九州の問題と関連させ、『三国志』の3世紀の邪馬台国や『宋書』の5世紀‘倭の五王’は九州の倭と見なければならず、‘任那日本府’は5世紀以前の九州倭王朝と関連のある文物受容の経路であったのであり、6世紀初の継体朝以後に、国際的に登場し始めた大和勢力とは関連性を持たないとみる見解もある<sup>381</sup>。

<sup>376</sup> 井上秀雄、1973、前掲書、109～110頁。

<sup>377</sup> 井上秀雄、1959「いわゆる任那日本府について」、『國史論叢』1;1973、前掲書、7～12頁。

<sup>378</sup> 森公章、2006『東アジアの動乱と倭国』、吉川弘文館、164～165頁。

<sup>379</sup> 李丙燾、1937「三韓問題의 新考察(三韓問題의 新考察)」(六)、『震檀學報』7、113頁;1976『韓國古代史研究』、ソウル:博英社、305頁。

<sup>380</sup> 吉田晶、1975「古代国家の形成」、『岩波講座日本歴史』2、54～57頁。

<sup>381</sup> 李根雨、1994「日本書紀에 引用된 百濟三書에 관한 研究(日本書紀に利用された百濟三書に関する研

(2)－②の倭の使臣団説は‘任那日本府’という用語の理解に重視し、いわゆる‘日本府’の語義は日本の官庁と言う意味だが、その訓は‘やまとのみこともち’で倭宰の意であり、宰はすなわち‘御事持’で、天皇の命令を受けて仕事を執行するために派遣された者だとした。よって任那日本府は倭が加耶諸国との外交交渉のために臨時に派遣した使臣、官人またはその集団に過ぎないとした<sup>382</sup>。

これは‘任那日本府’の成立の原因で軍事行動を前提とせず、その性格に対する見解として韓日の研究者の間に無難に受け入れられている。しかし‘みこともち’は大和王権の命令を受け、他の地域へ行き、言葉を伝えることのみ行う単純な使臣に留まることなく、‘国司’‘国守’と同じく該当地域を支配するために派遣された地方長官を含み、また『日本書紀』の用例としても‘日本府’という用語は大部分が機関としての用例で使われているため、‘みこともち’の用語に基盤を置いた使臣(団)説に安住することはできないという反論がある<sup>383</sup>。さらに『日本書紀』の記事でその官人たちを倭王権が派遣した痕跡が明確でなく、彼らは倭王権の見解の通り動いていない独自性をみせているため問題が残る。

そして‘任那日本府’は倭から安羅に派遣された特殊な外交使臣として執事一卿一大臣などの職制を持ったり、安羅に半永久的に居住して安羅の政策に従っているために、実際には安羅国所属の‘倭系安羅官僚’とみても良いという折衷的な見解が存在する<sup>384</sup>。あるいは大和政権の中央集権能力を問題にして、任那日本府は大和政権と別個の政治主体としての倭から派遣された外交官人たちの残存形態と見る見解も存在する<sup>385</sup>。

(2)－③の加耶と倭の間の外交機関説ではその設置の主体を倭ではなく加耶側に移し、いわゆる‘任那日本府’の設置の主体が任那諸国であったと見る見解が有力である<sup>386</sup>。これに加えて‘任那日本府’は530年代以後国家的な危機に置かれていた安羅が、自国の独立保存のために組織した外交機構として、ここでは安羅と利害関係を同じくする己汶国系亡命勢力、西日本の豪族、日本系安羅人まで参与したとみて、論点をもう少し明確にした見解もある<sup>387</sup>。ある人は6世紀前半の安羅国が親新羅的な外交を通じて独自性を維持しようとするや、大和朝廷がそこに倭系の人物を派遣し、安羅国の親新羅的な外交活動に同調したものとし、任那日本府を安羅国と倭国の合作機関と把握した<sup>388</sup>。

あるいはその性格を百済と倭王権の中間者的外交機関とみる見解もある。それによると、金官加耶の

究)」、韓国精神文化研究院韓国學大學院文學博士學位論文、43頁。

<sup>382</sup> 請田正幸、1974「六世紀前期の日朝関係—任那’日本府’を中心として—」、『朝鮮史研究会論文集』11、197頁。

鈴木靖民、1985「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」、『岩波講座日本歴史』1(原始・古代1)。

李永植、1990「古代日本の任那派遣氏族の研究—的臣・吉備臣・河内直を中心として—」、富士ゼロックス・小林節太郎記念基金1989年度研究助成論文、48～49頁；1993『加耶諸国と任那日本府』、吉川弘文館、274頁。

<sup>383</sup> 李在碩、2004「소위 任那問題의 過去와 現在 —문헌사학의 입장에서—(いわゆる任那問題の過去と現在—文献史学の立場から—)」、『全南史學』23、64～74頁。

<sup>384</sup> 白承忠、2003「'임나일본부'와 '왜계백제관료'('任那日本府'と'倭系百済官僚')」、『강좌 한국고대사(講座韓國古代史)』第4卷、駕洛國史蹟開發研究院、178頁。

<sup>385</sup> 鬼頭清明、1974「加羅諸国の史的発展について」、『古代朝鮮と日本』、龍溪書舎、251頁。

<sup>386</sup> 奥田尚、1976「任那日本府と新羅倭典」、『古代国家の形成と展開』、吉川弘文館、123頁。

<sup>387</sup> 延敏洙、1990「任那日本府論—소위 日本府官人の 出自을 中心으로—(任那日本府論—いわゆる日本府官人の出自を中心に—)」、『東國史學』24、동국사학회、124頁；1998『고대한일관계사(古代日韓關係史)』、慧眼、267～268頁。

<sup>388</sup> 이·윤심ム、2004「임나일본부의 성격 재론(任那日本府の性格再論)」、『지역과 역사(地域と歴史)』14、釜慶歴史研究所、160頁。

‘倭宰’に所属して通訳機能を中心に外交と海上交易を担当した人物達たちが532年に金官加耶が滅亡したことに抗拒し、安羅と対馬島などに散り任那復興と韓日海域世界の秩序を取り戻そうと努力したという。彼らは各国に所属しない‘中間的存在’として倭王権が公式的な外交人力を要請できない状態で海上を通じた外交と交易システムの管理を委任されたものとした<sup>389</sup>。

(2)－④安羅倭臣館説はうえの交易機関説と使臣団説を合わせ、加耶連盟体末期の政治状況と連動させた。それによると、‘任那日本府’というものは加耶末期である530年代後半から550年代まで存在し、外形上は‘倭国使節駐在館’という名分を持つ。しかし実際には530年代後半の設立初期には百濟が親百濟倭人官僚を安羅へ送り設置した‘百濟の対倭貿易仲介所’のようなものであり、新羅の卓淳国併合とともに安羅に対する百濟の軍事的影響力が消滅した540年代以後には、南部加耶連盟の盟主である安羅王がこの人員を親安羅倭人官僚に再編して、安羅国の外交を支援する‘安羅の特殊外務官署’のような性格に変貌させることになったと把握した<sup>390</sup>。

#### 4. 安羅倭臣館の性格とその官人たちの行跡

上記で議論したように一般的に任那日本府説と認識されてきた(1)－①の倭の任那支配説はすでに大部分の学者が否定する説となった。‘任那日本府’と言う単語は『日本書紀』にのみ見える。しかしその朝鮮半島との関連諸記事はだ大部分が百濟側に根拠を持つ原典を土台に据えているため、百濟の主観が強く反映されており、これを『日本書紀』編纂者たちがもう一度歪曲して表現することで、7～8世紀古代日本の上層部の認識も含まれている。

結局問題になることは、いわゆる‘任那日本府’というものの実態である。しかし‘日本’という言葉は倭が7世紀後半から国名として標榜したものであるため、よって‘任那日本府’というものは該当時期の用語ではない。反面、欽明紀15年(554)12月条記事にはこれらを‘在安羅諸倭臣’、すなわち‘安羅にいる様々な倭臣’という用語で呼ばれており、これが当時の実在の用語に近いものであったと考えられる。よって本稿では実在しなかったのみならず、間違った先入観で汚された‘任那日本府’という用語を‘安羅倭臣館’と変えて呼ぶようにしたのである。

現在、学界の研究動向を見れば、韓国と日本を網羅して(1)群の任那支配説の4種よりは(2)群の外交交易説の4種に多くの研究者が集まっており、(2)群の見解がより説得力を持っていると見える。その中でも(2)－②の使臣団説と(2)－③の外交機関説に多くの研究者が同調しており、外交機関説はその性格や設立主体をどう見るかによって多様に変異する。(2)－④の安羅倭館説は大きく外交機関説に属しながらも、加耶連盟内部の政治状況を連動させた点に特色がある。

540～550年代、安羅倭臣館の性格を考察するためには何よりもその官人たちがどのように行動していたのかを整理することが近道であると考えられる。前で整理したように大臣と呼ばれる安羅倭臣館卿は的臣であり、執事である安羅倭臣館臣は吉備臣であり、倭臣館に所属した下級官人としては河内直、移那斯、麻都などが存在した。史料上に現れる彼らの活動を摘記すれば次のとおりである。

<sup>389</sup> 鄭孝雲、2005「6世紀東アジア政勢と任那日本府」、『日語日文學』27、大韓日語日文學會;2007「중간자적 존재로서의 '임나일본부'(中間者的存在としての‘任那日本府’)」、『東北亞文化研究』13。

<sup>390</sup> 金泰植、1993『加耶聯盟史』、一潮閣、229～250頁;2002『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史1卷)』、푸른역사(プルンヨクサ)、216～217頁。

(3)－①吉備臣は541年4月と544年11月に任那の早岐(執事)たちとともに百済に行き喙己吞・南加羅・卓淳3国滅亡以後の対策を議論した。(欽明紀2年4月条<sup>391</sup>、5年11月条<sup>392</sup>)

(3)－②541年～544年の間に倭王が使臣の印奇臣を新羅に送り、津守連を百済に送り、彼らが新羅や百済に行く途で加耶地域に寄った時、的臣が人を送りその訪問の趣旨を尋ねた。(欽明紀5年2月条の的臣の発言<sup>393</sup>)

(3)－③的臣と河内直などは541年7月前後に新羅へ往来し安羅の耕作問題などを議論した。(欽明紀2年7月条、<sup>394</sup>5年3月条に引用された倭王の国書<sup>395</sup>)

(3)－④543年11月と544年正月に百済が使臣を送り任那執事と倭臣館執事を呼んだが、的臣が倭王の意図を言い訳して彼らを百済へ送らなかつた。(欽明紀4年12月条<sup>396</sup>、5年正月条<sup>397</sup>、5年2月条<sup>398</sup>)

(3)－⑤548年正月の馬津城の戦いで捕まった高句麗の捕虜を通じて、安羅国と倭臣館の延那斯と麻都が高句麗に分らないように使臣を送って百済を罰するのを誘ったことが分かった。(欽明紀9年4月条<sup>399</sup>、10年6月条<sup>400</sup>)

このような諸資料からの的臣、吉備臣、河内直、移那斯、麻都などの安羅倭臣館の官人たちは安羅に留まりつつ、倭国と関連した用事に関与していたことがわかる。(3)－①では百済に行き、加耶連盟全体の将来を議論したのに参加し、(3)－③では新羅に行き安羅の耕作問題を議論し、(3)－⑤では高句麗に使臣を送り百済攻撃を誘った。安羅倭臣館の官人たちはその中で(3)－①では加耶連盟全体の使臣団の一員として行き、(3)－⑤では安羅だけのために単独で行ったものと判断される。(3)－③では‘安羅日本府’とも現れ、百済が‘使于安羅召到新羅任那執事’したというのを見るに、倭臣館官人たちが任那執事、すなわち加耶連盟の早岐(執事)たちとともに新羅に行ったものと推定されるが、倭臣館の官人が議論したことは主に安羅の耕作問題だったことから、彼らは対外的に安羅の利益のために行

<sup>391</sup> 安羅次早岐夷吞奚・大不孫・久取柔利 加羅上首位古殿奚 卒麻早岐 散半奚早岐兒 多羅下早岐夷他 斯二岐早岐兒 子他早岐等 與任那日本府吉備臣[闕名字] 往赴百濟 俱聽詔書。

<sup>392</sup> 百濟遣使 召日本府臣・任那執事曰 遣朝天皇 奈率得文・許勢奈率奇麻・物部奈率奇非等 還自日本。今日本府臣及任那國執事 宜來聽勅 同議任那。日本吉備臣 安羅下早岐大不孫・久取柔利 加羅上首位古殿奚 卒麻君 斯二岐君 散半奚君兒 多羅二首位訖乾智 子他早岐 久嗟早岐 仍赴百濟。

<sup>393</sup> 會聞印奇臣使於新羅 乃追遣問天皇所宣。詔曰 日本臣與任那執事 應就新羅 聽天皇勅。而不宣就百濟聽命也。後津守連遂來過此。謂之曰 今余被遣於百濟者 將出在下韓之百濟郡令城主。

<sup>394</sup> 百濟聞安羅日本府與新羅通計。遣前部奈率鼻利莫古・奈率宣文・中部奈率木苧昧淳・紀臣奈率彌麻沙等 [紀臣奈率者 蓋是紀臣娶韓婦所生 因留百濟 爲奈率者也。未詳其父。他皆效此也] 使于安羅 召到新羅任那執事 謾建任那。別以安羅日本府河内直通計新羅 深責罵之。[百濟本記云 加不至費直・阿賢移那斯・佐魯麻都等 未詳也]。

<sup>395</sup> 於是 詔曰 的臣等[等者 謂吉備弟君臣・河内直等也] 往來新羅 非朕心也。曩者 印支彌[未詳]與阿鹵早岐在時 爲新羅所逼 而不得耕種。百濟路迥 不能救急。由的臣等往來新羅 方得耕種 朕所曾聞。

<sup>396</sup> 是月 乃遣施德高分 召任那執事與日本府執事。俱答言 過正且而往聽焉。

<sup>397</sup> 百濟國遣使 召任那執事與日本府執事。俱答言 祭神時到 祭了而往。是月 百濟復遣使 召任那執事與日本府執事。日本府・任那 俱不遣執事 而遣微者。由是 百濟不得俱謀建任那國。

<sup>398</sup> 日本府答曰 任那執事不赴召者 是由吾不遣 不得往之。吾遣奏天皇 還使宣曰 朕當以印奇臣[語訛未詳] 遣於新羅 以津守連遣於百濟。汝待聞勅際 莫自勞往新羅百濟也。(中略) 唯聞此說 不聞 任那與日本府會於百濟 聽天皇勅。故不往焉 非任那意。

<sup>399</sup> 然馬津城之役[正月辛丑 高麗率衆 圍馬津城] 虜謂之曰 由安羅國與日本府招來勸罰。

<sup>400</sup> 因詔曰 延那斯・麻都 陰私遣使高麗者 朕當遣問虛實。所乞軍者 依願停之。

動したことがわかる。

また(3)－②では新羅や百済に行く倭の使臣を迎えてその目的を確認したが、(3)－④ではその際、得た倭王の意図に対する情報を基盤にして加耶連盟の執事たちが百済王の主導する会議に参加しない名分を提供した。ここから倭臣館官人たちは倭王権と直接的な関係を結んでいなかったが、朝鮮半島に長く居住した<sup>401</sup>倭人、あるいは倭系の人物であったため、日本語疎通能力を土台に日本列島の情報を採り出し、加耶連盟が他国と対外関係を樹立するのに重要な役割を果たしたと推定される。

よって史料上に見える倭臣館官人たちは加耶連盟体、その中でも特に安羅国の独立性の維持、および対外交渉のために活動したことが確認できる。現在の研究傾向からみるに、すでに6世紀の‘任那日本府’問題は、倭王権との関係はそう大きくなく、むしろ百済史や加耶史と密接と関連を持っていたと考えざるを得なくなった。それにしたがって考えれば、安羅倭臣館は540年代に加耶連盟が大加耶中心の連盟体を維持しつつ周囲の中央集権的古代国家である新羅と百済の服属の圧力を受けていた時期に加耶連盟の第2人者であった安羅国が自国を中心にした連盟体を図るために運営した機構であった。その官人たちの活動を土台に考えるに彼らが属した安羅倭臣館は実質的に安羅の外務官署であったとしても過言ではない。

## 第4節 三国の鼎立と倭

### 1. 三国の安定と統治体制の補完

6世紀後半の朝鮮半島は高句麗、百済、新羅の三国が定立して競争的に中国の南北朝と交渉してしばらく平和を維持した。高句麗の平原王は中国の北齊および周、陳、隋へ朝貢し<sup>402</sup>、586年には都を長安城に移して<sup>403</sup>繁栄を謳歌した。百済の威徳王は管山城の敗戦直後の危機を収拾して北齊および北周、隋、陳に朝貢し<sup>404</sup>、安定を追求した。

<sup>401</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇2年7月「日本卿等 久住任那之國 近接新羅之境 新羅情狀 亦是所知。毒害任那 謨防日本 其來尙矣 匪唯今年。」

<sup>402</sup> 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王2年(560)「春二月 北齊廢帝封王爲使持節領東夷校尉遼東郡公高句麗王。」

同王3年(561)「冬十一月 遣使入陳朝貢。」

同王4年(562)「春二月 陳文帝詔授王寧東將軍。」

同王6年(564)「遣使入北齊朝貢。」

同王7年(565)「春正月 立王子元爲太子。遣使入北齊朝貢。」

同王8年(566)「冬十二月 遣使入陳朝貢。」

同王12年(569)「冬十一月 遣使入陳朝貢。」

同王13年(570)「春二月 遣使入陳朝貢。」

同王15年(573)「遣使入北齊朝貢。」

同王16年(574)「春正月 遣使入陳朝貢。」

同王19年(577)「王遣使入周朝貢 周高祖拜王爲開府儀同三司大將軍遼東郡開國公高句麗王。」

同王23年(581)「十二月 遣使入隋朝貢。高祖授王大將軍遼東郡公。」

同王24年(582)「春正月 遣使入隋朝貢。冬十一月 遣使入隋朝貢。」

同王25年(583)「春正月 遣使入隋朝貢。(中略)夏四月 遣使入隋朝貢。冬 遣使入隋朝貢。」

同王26年(584)「春 遣使入隋朝貢。夏四月 隋文帝宴我使者於大興殿。」

同王27年(585)「冬十二月 遣使入陳朝貢。」

<sup>403</sup> 前掲書、平原王28年(586)「移都長安城。」

<sup>404</sup> 『三国史記』卷27、百済本紀5 威徳王14年(567)「秋九月 遣使入陳朝貢。」

同王17年(570)「高齊後主 拜王爲使持節侍中車騎大將軍帶方郡公百済王。」

新羅真興王は553年に漢江下流地域を占領し、562年に加耶を併合した後、564年に北齊、566年以後に陳へ使臣を送り朝貢したことで<sup>405</sup>、中国との直接交渉に先じた。新羅は中国に土産物を送り、北齊が真興王を‘使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王’に封じたとし、陳が仏教の經論1700余巻を送ったとしたので<sup>406</sup>、6世紀中葉の新羅が望んだことは国際社会での地位獲得と仏教のような高級精神文化の輸入であったと思われる。

また真興王は領土が膨張するによりこれを管理するために各地に州を追加し、軍主を派遣して統治した。そうして漢江流域には新州(553)、北漢山州(557)、南川州(568)を交代で設置し、旧加耶地域には完山州(555)、大耶州(565)、新羅北部地域には沙伐州に代えて甘文州(557)、高句麗東南部地域には比列忽州(556)、達忽州(568)を代わる代わる設置しており<sup>407</sup>、国原(忠清北道忠州)を小京として富裕層の人々を移民させ、充実させた<sup>408</sup>。真興王は自身が確保した領域を省みて慶尚南道昌寧(561)、ソウル北漢山、咸鏡南道の黄草嶺、磨雲嶺(すべて568)に巡狩碑を建て、そうした一連の過程で年号を開国(551)、大昌(568)、鴻濟(572)などに変え<sup>409</sup>、国家の面貌を一新しようとした。また従来の村落共同体内部にあった青年組織を中央に一括吸収して花郎徒を創設し<sup>410</sup>、仏教を奨励して祇園寺、実

---

同王18年(571)「高齊後主 又以王爲使持節都督東青州諸軍事東青州刺史。」

同王19年(572)「遣使入齊朝貢。」

同王24年(577)「秋七月 遣使入陳朝貢。(中略) 十一月 遣使入宇文周朝貢。」

同王25年(578)「遣使入宇文周朝貢。」

同王28年(581)「王遣使入隋朝貢 隋高祖詔 拜王爲上開府儀同三司帶方郡公。」

同王29年(582)「春正月 遣使入隋朝貢。」

同王30年(583)「冬十一月 遣使入陳朝貢。」

同王33年(586)「遣使入陳朝貢。」

<sup>405</sup> 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王25年(564)「遣使北齊朝貢。」

同王27年(566)「春二月 (中略) 遣使於陳貢方物。」

同王28年(567)「春三月 遣使於陳貢方物。」

同王29年(568)「夏六月 遣使於陳貢方物。」

同王31年(570)「夏六月 遣使於陳獻方物。」

同王32年(571)「遣使於陳貢方物。」

同王33年(572)「三月 王太子銅輪卒。遣使北齊朝貢。」

<sup>406</sup> 前掲書、真興王26年(565)「春二月 北齊武成皇帝詔 以王爲使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王。(中略) 九月 (中略) 陳遣使劉思與僧明觀 來聘 送釋氏經論千七百餘卷。」

<sup>407</sup> 前掲書、真興王14年(553)「秋七月 取百濟東北鄙 置新州 以阿漚武力爲軍主。」

同王16年(555)「春正月 置完山州於比斯伐。」

同王17年(556)「秋七月 置比列忽州 以沙漚成宗爲軍主。」

同王18年(557)「廢沙伐州 置甘文州 以沙漚起宗爲軍主。廢新州 置北漢山州。」

同王26年(565)「九月 廢完山州 置大耶州。」

同王29年(568)「冬十月 廢北漢山州 置南川州。又廢比列忽州 置達忽州。」

<sup>408</sup> 前掲書、真興王18年(557)「以國原爲小京。」

同王19年(558)「春二月 徙貴戚子弟及六部豪民 以實國原。奈麻身得作砲弩上之 置之城上。」

同王26年(565)「秋八月 命阿漚春賦 出守國原。」

<sup>409</sup> 前掲書、真興王12年(551)「春正月 改元開國。」

同王29年(568)「改元大昌。」

同王33年(572)「春正月 改元鴻濟。」

<sup>410</sup> 前掲書、真興王37年(576)「春 始奉源花。初君臣病無以知人 欲使類聚羣遊 以觀其行義 然後舉而用之。遂簡美女二人 一曰南毛 一曰俊貞 聚徒三百餘人。二女爭媚相妬 俊貞引南毛於私第 強勸酒 至醉 曳而投河水以殺之。俊貞伏誅 徒人失和罷散。其後 更取美貌男子 粧飾之 名花郎以奉之。徒衆雲集 或相磨以道義 或相悅以歌樂 遊娛山水 無遠不至 因此知其人邪正 擇其善者 薦之於朝。」

際寺、皇龍寺を建て八關筵会を開催した<sup>411</sup>。

真平王は579年に王位に就くや対外的に中国の隋、唐と朝貢外交を行いつつ、体的には中央朝廷の官府設置に多くの努力を傾けた。そうして581年には文官人事を担当する位和府を設置し、583年には船舶に対する管理を行う船府を設置したが、584年には租税受取の業務を担当する調府、車と輿を作り管理する乗府を設置した<sup>412</sup>。586年には外交を担当する礼部を置き、591年には倭国の使臣の接待を管掌する領客府を置き<sup>413</sup>、広がる中国との外交交渉に備えた。

このように三国は各々内実を図って安定を維持していたが、589年に隋が陳を滅亡させ、中国を統一すると朝鮮半島で境界の動きが見え出した。百済の威徳王は隋の戦艦1艘が耽牟羅国(済州)に漂流し戻る時に必要な物資を与え使臣を送り陳の平定を祝った<sup>414</sup>。高句麗の平原王は陳の滅亡の消息を聞き大いに恐れ軍士を訓練し、軍糧を積み防護する計策を立てたが、590年に隋の高祖が高句麗に国書を送り“いくら藩国と称するとはいえ、精誠と礼節を果たしていない。”と脅迫し、両国の間には戦雲が立ち込めた<sup>415</sup>。

## 2. 百済の文化伝授と倭王権の成長

倭との交易中心は、6世紀前半ないし中葉以後に百済へ移ったので、奈良の飛鳥文化がまさにその反映といえる。当時百済は倭国の要請により高級精神文化を伝えた。そうして百済は513年、516年の五経博士段楊爾・漢高安茂に続いて554年に五経博士の馬丁安・王柳貴などを送り儒学を伝授した<sup>416</sup>。また百済は552年に怒唎斯致契などを送り、釈迦仏金銅像1軀と幡蓋を若干、経論若干巻を送り、577年には経論若干巻と律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造仏工、造寺工6人を送り、588年には仏舍利と僧侶、寺工、鑪盤博士、瓦博士、画工などを送り法興寺(飛鳥寺)を建てたので<sup>417</sup>日本の仏教と寺刹建築は実質的にこの時から始まったのである。また554年に百済が倭国に易博士、曆博士、医博士、採薬師、楽人などを送ったとしたので<sup>418</sup>、曆法および医薬なども百済から伝わったと言えよう。

倭国は百済から仏教と儒教をはじめとする精神文化を受け入れたが、552年に百済の聖王が送った

<sup>411</sup> 前掲書、真興王14年(553)「春二月 王命所司 築新宮於月城東 黃龍見其地。王疑之 改爲佛寺 賜號曰皇龍。」

同王27年(564)「春二月 祇園・實際二寺成。(中略) 皇龍寺畢功。」

同王33年(572)「冬十月二十日 爲戰死士卒 設八關筵會於外寺 七日罷。」

<sup>412</sup> 前掲書、真平王3年(581)「春正月 始置位和府 如今吏部。」

同王5年(583)「春正月 始置船府署 大監・弟監各一員。」

同王6年(584)「春二月 改元建福。三月 置調府令一員 掌貢賦。乘府令一員 掌車乘。」

<sup>413</sup> 前掲書、真平王8年(586)「春正月 置禮部令二員。」

同王13年(591)「春二月 置領客府令二員。」

<sup>414</sup> 『三国史記』卷27、百済本紀5 威徳王36年(589)「隋平陳 有一戰船 漂至耽牟羅國。其船得還 經于國界 王資送之甚厚 并遣使奉表 賀平陳。」

<sup>415</sup> 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王32年(590)「王聞陳亡大懼 治兵積穀 爲拒守之策 隋高祖賜王璽書 責以 雖稱藩附 誠節未盡。」

<sup>416</sup> 『日本書紀』卷17、継体天皇7・10年条、卷19 欽明15年条。

『日本書紀』応神天皇15年と16年条の百済の阿直岐と王仁、または『古事記』の和邇吉師が論語10巻と千字文1巻を伝えたとし、これが儒学の最初の伝播ともするが、どの程度の事実性を有しているのかは不明である。

<sup>417</sup> 『日本書紀』卷19、欽明天皇13年(552)10月条、卷20、敏達天皇6年(577)11月 庚午朔条、卷21、崇峻天皇元年(588) 是歳条。

<sup>418</sup> 前掲書、欽明天皇15年(554)2月条。

仏像をめぐる奉仏可否について蘇我氏と物部氏が対立するやこれを決定付けることができなかった。蘇我馬子は王室との外戚関係を篤くし、百済との友好関係を通じて仏教を受容しながら中央政権を強化し、推古期の596年には日本最初の寺刹である法興寺を完工するに至った。ここで崇仏を奨励し法興寺建立を主導した蘇我氏は朝鮮半島から移住して来た集団を背景に政界に頭角を現しており、彼らの祖先である蘇我満智は百済貴族木満致と同一人物である可能性がある<sup>419</sup>。一方敏達期に高句麗との正式国交が開始されたが、百済ほどの影響を及ぼすには至らなかった。

### 3. いわゆる‘任那調’の問題

『日本書紀』を見ると任那滅亡以後に日本は新羅の加耶領有を承認する代わりにいわゆる‘任那の調’を新羅から7世紀前半まで受け取ったとした。これに対しては『日本書紀』の撰者が大和政権の任那支配という史観に合わせるために造作したものという批判があり<sup>420</sup>、または任那の調は存在しない架空のものであり、その表現は6世紀末の推古朝以来高潮し始めた国家意識と、『日本書紀』編纂当時の新羅敵視観および蕃国観が融合して生まれた観念的虚像であるという研究が存在する<sup>421</sup>。

新羅は575年に多多羅・須奈羅・和陀・発鬼の4邑の調、すなわちいわゆる‘任那調’を送る事で倭国との和解を図ったが、その後もう一度新羅が威圧的な姿勢をみせ、一時期関係が断絶した。しかし610年以後には倭国に対してよく外交使節を送っており、その中で3、4回は任那使人と同行したという名目で、より多くの方物を伝達したものと推測される。任那の使臣は名前の前に喙部・習部のような新羅6部の名前と官等を付したが、同時に派遣した新羅使臣の官等の奈末より1等級低い大舎であったことから、新羅使節団の正使を補助する副使格の存在であったと思われる。新羅は7世紀の熾烈な三国戦争の中でその背後にいた倭国との外交を正常化するために彼らの要求により一時期新羅使節に任那使臣一行を追加したものであるため、これが倭国の新羅蕃国観を育てる要因になった可能性もある。

## 結論

ある者は古代韓日関係の史料がどうしてこのように日本側に有利に叙述されているのかと恨歎したりもする。すべて文字の記録をそのまま信じたい気持ちは純真なものだとしてすることができるが、これは史料の交渉と批判を先行しなければならない歴史学の根本を没覚したものである。韓日間の文献史料の依存状態をみると、韓国側は1145年に編纂された『三国史記』が最も古いものであるのに比べ、日本側は720年に編纂された『日本書紀』が韓日関係について多くの記事を残している。

ところで『三国史記』は新羅が古代文明の燦爛さを謳歌し、儂く崩れた後にそれに対する反省を基に成立した高麗時代の隆盛期に儒教的合理性と国際的均衡感を基盤にして、著述されたものであるのに、

<sup>419</sup> 山尾幸久、1978「任那に関する一試論—史料の検討を中心に—」、『古代東アジア史論集』下巻、末松保和博士古稀記念会。

<sup>420</sup> 金鉉球、1985『大和政権の対外関係研究』、東京：吉川弘文館。

<sup>421</sup> 延敏洙、1992「日本書紀の‘任那の調’関係記事の検討」、『九州史学』105。



自己の過去の文化に対する自慢や誇示のような叙述はみられない。それに『日本書紀』は日本が東アジアで最も遅く出発し、やっと古代国家を完成させた後の自信の中で編纂されたものであり、その中には、周辺国家を配慮しない稚気が滲んでいる。それに先立つ5世紀後半の『宋書』倭人伝に見える外交的な主張とは比較にならないほどである。

よって古代韓日関係史を叙述する時、関連史料のみをそのまま羅列し、何の論評をしないことは、特に多くの問題点を残す。上で言及したように韓日両国の関連諸史料の相当数は事実立脚した客観性を基にしたものではないためである。本稿は史料状態のこうした不均衡を解消し、正しい歴史認識を模索するのに重点を置いた。ここでは長編にわたる論文の要旨を簡略に要約することで結論に代えたい。

4世紀前半には中国の西晋の混乱に起因する東部都尉の没落、高句麗の楽浪・帶方郡の併合、これに伴う加耶連盟の東西分裂などのせいで朝鮮半島と日本列島の間の一元的な文化の流れが継続しなかった。よってこの時期には日本列島畿内中心の連盟体もあまり大きな機能を発揮できず、各地域が朝鮮半島南部の諸勢力と個別的な交渉を行った。

百済は4世紀中葉に大きく発展し、近肖古王は366年と368年に新羅に使臣を送り友好を打診し、369年に雉壤(黄海道白川)の戦いと371年の平壤城の戦闘で高句麗と戦い故国原王を殺害し、372年には東晋との公式的な交流を始めた。

『日本書紀』神功49年条の解釈を通して369年の倭の任那征伐を事実と認識する見解がある。これに対する感謝の表明で、3年後に百済が七支刀を倭に送ったとするが、その製作年度に対しては年号の文字が明確ではなくて確定できず、七支刀の模様、七子鏡との関連、多量の文字を金銀に象嵌した鉄剣類の流行時期などを考慮すると、5世紀後半ないし6世紀初のものである可能性が高い。神功紀の記事を欽明紀2年(541)条の聖王の回顧記事と比較する時、その実像は4世紀後半に百済が加耶と初めに親交を開き、これを土台に倭と繋がったものであり、神功紀49年条はこれを後代に歪曲した記事と言える。

高句麗は4世紀後半小獣林王代に成熟した古代国家体制を完備し、新羅に使臣を送り修好した。この時期朝鮮半島関連の国際情勢の基本は、高句麗と百済の兩大強国の対決構図であり、それに比べ朝鮮半島南部の新羅と加耶は付随的に連動して動く側面が強かった。そこへもう一つ考慮しなければならない事項が朝鮮半島南部に出没した倭の問題である。

広開土王陵碑文に見える倭軍の性格については大概日本畿内の大和勢力の派遣軍であり、対等な国際関係の中で入って来たものと把握している。彼らは加耶の意図により対新羅戦線に投入されたとしても、百済と加耶の交渉により高句麗との戦争に投入されたとも見るのが合理的である。さらに倭軍の武装状態が加耶に比べ貧弱であったという事実を考慮すれば、実際は広開土王陵碑に見える‘倭賊’または‘倭寇’とは加耶一倭の連合軍であり、その内部で倭軍は加耶軍に付属した存在であったと言える。

高句麗軍の400年の任那加羅の戦い、404年の帶方界の戦闘の勝利などにより百済は黄海道地域の領土とともに洛東江流域を仲介基地とする対倭交易網を喪失することになった。高句麗軍の南征は朝鮮半島四国の勢力版図を百済を主としたものから高句麗を主へと転換し、それに随伴して金海の金官

加耶中心の前期加耶連盟は大きな打撃を被り解体した。

5世紀以後の日本列島の古代文化には急激な変化が起きることになった。すなわち攻撃・防護の道具がすべて朝鮮半島系の実用武装へと革新され、攻撃力が高い長い首のついた鉄鍬、釘で繋ぐ甲冑の製作技法、馬具なども現れるようになった。また、金銅製の装身具類も多くなり、従来の竪穴住居にかまどが付設され、土器でも硬い須恵器生産が始まり、横穴式石室の埋葬施設が現れた。

4世紀末から5世紀初に日本列島に突然現れた各種の先進文物製作技術は韓日間の文化交流の結果と把握できるが、朝鮮半島系住民の移民とともに伝わったものとみる見解が多い。4～5世紀に該当すると見ることのできる『日本書紀』武烈紀以前の時期の日本の対外関係記事でも、朝鮮半島から日本列島への大量の移民を伝えている。その移民の性格に対しては任那経営による帰化人または渡来人説、騎馬民族征服説などがあるが、その実像は加耶からの援助工人と流亡民、すなわち加耶系移住民と見るのが妥当である。

高句麗の長寿王は427年に平壤に遷都して安定を図った。百済の腆支王は主に倭国と交渉したが、毗有王は倭国一辺倒の交渉から抜け出し中国南朝および朝鮮半島南方諸国のネットワークを構成しようと努力した。新羅は一時期高句麗の影響力に悩まされたが、訥祗王は中央集権能力を高めて行き、百済の和親要請を受諾した。

加耶地域は、高句麗—新羅連合軍の任那加羅征伐以後大きな打撃を被り弱化した。その中で高霊の伴跛国は鉄鉾山を開発して発展を主導した。5世紀中葉に伴跛国は大加耶へ国名を代え加耶連盟を復旧し、さらに小白山脈を西側に越え、湖南東部各地の諸勢力を連合した。それに力を得て、加羅王荷知は479年に中国南齊に朝貢し‘輔國將軍本國王’の爵号を受けた。

高句麗は東北アジアの中核的仲介交易者として成長し、479年(長寿王67)には柔然と謀議して地豆于の分割を試み、南側には漢江以南に対する南進政策を推進した。高句麗の攻撃により475年百済の首都慰礼城(ソウル松坡区)が陥落し、蓋鹵王が戦死するや、百済は熊津(忠清南道公州)へ遷都した。

また高句麗は481年に新羅の弥秩夫(慶尚北道浦項市興海)まで南侵した。これに対して、百済の東城王は援兵を送り高句麗軍の南侵を撃退し、493年に新羅と結婚同盟を結んだ。加耶も481年に新羅を救援し、496年に新羅に白雉を送った。当時の情勢は高句麗の南進に対処して百済—新羅—加耶が軍事同盟を結び防護する形局であった。該当時期の『日本書紀』には雄略紀と顕宗紀などに日本列島の一部中央貴族、または地方豪族などの家伝により、倭軍が高句麗軍と戦う、あるいは内通するなどの記事が現れるが、彼らは倭王の命令下で朝鮮半島南部に来て独自の活動する軍隊ではなかった。彼らの実体は、加耶との人的・物的交流の対価として日本列島の各地域から個別的に加耶へ動員されて来て、加耶軍に付属して動いた存在に過ぎなかった。

『宋書』百官志によると征東、鎮東、安東將軍号はすべて第3品に該当し、定員は1名である。昇進事例を考察する時、その間の序列は征東將軍、鎮東將軍、安東將軍の順序であったので征東將軍高句麗王が最も高く、その次が鎮東將軍百済王であり、その次が安東將軍の倭国王であった。そうした將軍号は国家間の国際的地位を反映する。

それにもかかわらず5世紀の韓日関係史の争点は『宋書』倭国伝に見える倭の五王が自称した七国

諸軍事号の性格が何かという点である。倭王の武が479年に送った上表文を通してみれば、彼は朝鮮半島南部を軍事的に統率できる権利を中国から認可してもらおうとしたようである。しかし、倭王の朝鮮半島南部の地域名が含まれる諸軍事号の認定の可否と、実際に朝鮮半島南部から軍事的指揮権を行使することのできたかの可否は別個の問題であり、そうした実体は文献史料や考古学的資料を通じては確認できない。よってもし『宋書』から倭王の諸軍事号関連記事を引用のみすれば、それ自体では叙述の誤謬ではないが、読者に史実を誤導する憂慮が存在するので、結果的には歴史の歪曲である。それは倭王の意図であるのみ、実効性がない行為であった点を必ず併記してこそ誤解の余地がなくなるのである。

5世紀後半ないし6世紀前半の韓日関係をめぐって、考古学界で新しい問題が提起されたが、それは全羅南道栄山江流域で発見された10余基の‘前方後円墳’である。その古墳の築造勢力の性格については、これを在り首長とみる見解と倭人と見る見解に大きく分かれるが、未だに全般的な証拠が不足して、どの学説がより優勢だと結論を下しがたい。しかし留意せねばならない問題は其中で百済系威信財が多数出土したという点であり、ここからその古墳群は被葬者の血統の可否とは関係無く、『三国史記』百済本紀や『宋書』百済伝に記録された百済の湖南西部地域の併合過程と関連があると見ることができる。

5～6世紀後期加耶の交易は前期ほど活発ではなかったが、倭との交易は金海に代わって高霊を中心に継続されて行った。加耶系統遺物の分布から見るに、大加耶は装身具、馬具、土器、鉄素材のような物品の流通圏を洛東江流域と蟾津江流域にかけて対内的に掌握する一方で、遠く海を渡って対倭交易の窓口を独占する様相を見せた。

6世紀に入り、百済武寧王は北側に錦江から漢江に至る領土を回復し、南側に倭との交易を回復するという名分の下で加耶勢力圏にあった‘任那4県’と己汶、すなわち湖南東部の蟾津江流域を蚕食して入り込んだ。新羅の智証王は州郡県制を制定して于山国を征伐し、それに続いて法興王は律令の頒布、仏教の公認などを通じて中央集権体制を完備した。

大加耶は百済に湖南東部地域を奪うや、子吞(慶尚南道晋州)、帶沙(河東)、爾列比(宜寧郡富林面)、麻須比(昌寧郡靈山面)などに城を築くことで(514)、中央政権的支配体制を強化した。この時期に大加耶は初期古代国家を成立させたとすることができる。そうしたうえに異腦王は、522年に新羅と結婚同盟を結んだ。しかし何年か後に加耶連盟から分裂が生じるや、新羅は加耶の喙己吞国(慶尚南道靈山)、南加羅国(金海)、卓淳国(昌原)を併合した。百済も安羅国(慶尚南道咸安)周辺の乞毛城と久礼牟羅城(漆原)などに軍隊を駐屯させた。

百済の武寧王は加耶を排除し、倭との直接的な交流を図り、513年と516年に五経博士を倭に送り、儒学を伝えた。この時期を前後して古代韓日交流のパターンは既存の百済—加耶—九州倭—近畿倭を経る形式から百済—近畿倭へ直結する形式が優勢になっていき、これによって加耶と九州倭は遠距離交易を中継することで、既存の利得を喪失することになった。527年に筑紫国造磐井が倭国中央朝廷に反旗を翻したことは、百済と倭国間の交流を防ぐための加耶および新羅の計策と関連性があると推定される。

530年代にわたって、後期加耶連盟は大加耶国と安羅国中心の南北二元体制へ分裂した状態であ

ったにもかかわらず、7～8カ国の執事たちで構成された対外交渉団体を整備し、百済・新羅両側との外交交渉を図った。

百済の聖王は538年に泗泚(忠清南道扶余)へ遷都し、中興を図って梁に方物を送り倭と文化交流をし、外交的に加耶連盟を付属させようとした。彼は、加耶連盟執事たちを二度にかけて呼びいれ、泗泚会議を開催して先進文物を贈与することで、結局550年を前後して加耶連盟を従属的に連合させた。

聖王は551年にその権威を持ち、新羅と同盟して高句麗を討ち、漢江下流地域を回復した。反面新羅の真興王は、百済聖王とともに高句麗を討って、漢江上流地域を占領したので、2年後の553年には百済が占領した下流地域まで奪取した。

当時百済は倭の仏教、儒学、暦法、医薬などを伝授した。その対価として倭が援軍1000名を送るや、百済は554年に新羅を侵攻して管山城(忠清北道沃川)の戦闘を起したが、百済—加耶—倭連合軍は敗退した。そうして560年に阿羅加耶(=安羅国、慶尚南道咸安)が新羅に投降し、大加耶(=加羅国、慶尚北道高靈)は562年に征服された。

任那日本府説と関連する6世紀韓日関係史の争点は『日本書紀』欽明紀に見える‘任那日本府’が何かという点である。その資料から重視しなければならないことは、いわゆる‘任那日本府’というものが541年から552年の間を前後した短い時期にのみ存在して、その官人たちは加耶連盟の執事たちとともに対外政策の決定に参加したのであり、彼らの政策の方向は加耶連盟の独立的発展のためのものであった点である。

‘任那日本府’の性格については大きく、任那支配説の4種と外交交易説の4種に分かれる。もはや倭の任那支配を論じた典型的な任那日本府付設は説得力を喪失したと見ても良い。そして関連史料の分析によって‘任那日本府’は4～5世紀には存続しておらず、6世紀にのみ存在したとみる。

さらにその6世紀の‘任那日本府’問題もすでに百済史と加耶史を排除しては考える事は不可能となった。それによる時、‘任那日本府’は6世紀当時の用語でもなく、間違った先入観を呼び起す用語であるため、より事実に近い安羅倭臣館という用語に交替するのが妥当である。そして安羅倭臣館は、540年代に加耶連盟が新羅と百済の服属の圧力を受けていた時期に、加耶連盟の第二人者であった安羅国が自身の王廷に倭系官僚を迎え入れ、倭国との対外関係を主導することで、安羅を中心にした連盟体制を図るために運営した外務官署のような性格の機構であった。しかし550年を前後して、この機構は相互間の同盟関係を強固にしていた百済と倭王権の不信任の中で解体された。

6世紀後半の朝鮮半島は高句麗、百済、新羅の三国が鼎立して、中国の南北朝に朝貢交渉をしつつ一時期平和を維持した。倭国は百済から仏教と儒教をはじめとする高級精神文化を受け入れ、国家体制を整備した。

この時期に新羅はいわゆる‘任那調’を送ることで(575)倭国との和解を図ったようだが、その後新羅が威圧的な姿勢を見せ、一時期関係が断絶した。しかし、610年以後には倭国に対して非常に外交使節を派遣し、その中の3、4回は任那使人と同行した。ここで任那使人というものは新羅使節団の正使を補助する副使格の存在であった。新羅は6世紀後半以後7世紀の熾烈な三国戦争の中でその背後にいた倭国を慰むために、彼らの要求に従い、一時期外交使節に任那使臣一行を追加したにすぎなかった。よって、‘任那調’の問題は新羅が日本の任那地域に対する縁故権を認めた証拠として受け入れること

はできない。

## 参考文献

[韓国史料]

『広開土王陵碑文』永樂6年丙申“王躬率水軍 討伐殘國。軍□□首 攻取壹八城 白模盧城 各模盧城 幹氏利城 □□城 閣弥城 牟盧城 弥沙城 □舍蔦城 阿旦城 古利城 □利城 雜珍城 奧利城 勾牟城 古模耶羅城 莫□□□□城 □而耶羅城 瑑城 於利城 農□城 豆奴城 沸□□利城 弥鄒城 也利城 大山韓城 掃加城 敦拔城 □□□城 婁賣城 散那城 那旦城 細城 牟婁城 于婁城 蘇灰城 燕婁城 析支利城 巖門□城 □城 □□□□□□利城 就鄒城 □拔城 古牟婁城 閏奴城 貫奴城 多穰城 曾□城 □□盧城 仇天城 □□□□□其國城。殘不服義 敢出迎戰。王威赫怒 渡阿利水 遣刺迫城 □□歸穴 □便圍城。而殘主困逼 獻□男女生口一千人 細布千匹 跪王自誓 從今以後 永爲奴客。太王恩赦先迷之愆 録其後順之誠。於是 得五十八城 村七百 將殘主弟并大臣十人 旋師還都。”

『広開土王陵碑』永樂9年 己亥 “百殘違誓 与倭和通。王巡下平穰。而新羅遣使白王云 倭人滿其國境 潰破城池 以奴客爲民 歸王請命。太王恩慈 矜其忠誠 特遣使還 告以密計。”

『広開土王陵碑文』永樂10年 庚子 “敎遣步騎五萬 往救新羅。從男居城 至新羅城 倭滿其中。官軍方至 倭賊退卻 乘背急追 至任那加羅從拔城 城即歸服 安羅人戍兵。拔新羅□農城 倭寇萎潰 城夫十九 盡煞抑徙 安羅人戍兵。師□□□□其□□□□□□言□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□辭□□□出□□□□□□殘□潰□□□城 安羅人戍兵。昔新羅寐錦 未有身來服事 □□□□廣開土境好太王□□□□寐錦□□僕勾□□□□朝貢。”

『広開土王陵碑文』永樂14年 甲辰 “而倭不軌 侵入帶方界 □□□□石城 □連船□□□。王躬率□□ 從平穰 □□□鋒相遇。王幢要截濫刺 倭寇潰敗 斬煞無數。”

『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿尼師今26年 “遣衛頭入苻秦 貢方物。苻堅問衛頭曰 卿言海東之事與古不同 何耶。答曰 亦猶中國 時代變革 名號改易 今焉得同。”

『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿尼師今37年 “春正月 高句麗遣使。王以高句麗强盛 送伊淦大西知子實聖爲質。”

『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿麻立干37年 “春正月 高句麗遣使。王以高句麗强盛 送伊淦大西知子實聖爲質。”

『三国史記』卷3、新羅本紀3 奈勿麻立干46年 “秋七月 高句麗質子實聖還。”

『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干即位年 “奈勿王三十七年 以實聖質於高句麗。及實聖還爲王 怨奈勿質已於外國 欲害其子以報怨 遣人招在高句麗時相知人 因密告 見訥祗則殺之。遂令訥祗往 逆於中路 麗人見訥祗 形神爽雅 有君子之風 遂告曰 爾國王使我害君 今見君 不忍賊害。乃歸。訥祗怨之 反弑王自立。”

『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干2年 “春正月 親謁始祖廟 王弟卜好 自高句麗 與堤上奈麻還來。秋 王弟未斯欣 自倭國逃還。”

- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干18年 “春二月 百濟王送良馬二匹。秋九月 又送白鷹。冬十月 王以黃金明珠 報聘百濟。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干34年 “秋七月 高句麗邊將 獵於悉直之原。何瑟羅城主 三直 出兵掩殺之。麗王聞之怒 使來告曰 孤與大王 修好至歡也 今出兵殺我邊將 是何義耶。乃興師侵我西邊。王卑辭謝之。乃歸。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干38年 “八月 高句麗侵北邊。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 訥祗麻立干39年 “冬十月 高句麗侵百濟 王遣兵救之。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干6年 “春二月 倭人侵 歆良城 不克而去。王命伐智·德智 領兵伏候於路 要擊大敗之。王以倭人屢侵疆場 緣邊築二城。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干11年 “春 高句麗與靺鞨 襲北邊悉直城。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干12年 “春正月 定京都坊里名。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干13年 “築三年山城。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干14年 “春二月 築苺老城。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干17年 “秋七月 高句麗王巨連 親率兵攻百濟。百濟王慶 遣子文周求援。王出兵救之 未至百濟已陷 慶亦被害。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 慈悲麻立干17年 “築一牟·沙尸·廣石·沓達·仇禮·坐羅等城。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干3年 “三月 高句麗與靺鞨入北邊 取狐鳴等七城 又進軍 於彌秩夫 我軍與百濟·加耶援兵 分道禦之 賊敗退 追擊破之泥河西 斬首千餘級。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干8年 “春正月 拜伊滄實竹爲將軍 徵一善界丁夫三千 改築三年·屈山二城。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干9年 “春二月 置神宮於奈乙 奈乙始祖初生之處也。三月 始置四方郵驛 命所司修理官道。”
- 『三国史記』卷3、新羅本紀3 炤知麻立干18年 “春二月 加耶國送白雉 尾長五尺。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 智証麻立干4年 “冬十月 羣臣上言 始祖創業已來 國名未定 或稱斯羅 或稱斯盧 或言新羅。臣等以爲 新者德業日新 羅者網羅四方之義 則其爲國號宜矣。又觀自古有國家者 皆稱帝稱王 自我始祖立國 至今二十二世 但稱方言 未正尊號。今羣臣一意 謹上號新羅國王。王從之。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 智証麻立干6年 “春二月 王親定國內州郡縣。置悉直州 以異斯夫爲軍主。軍主之名 始於此。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 智証麻立干13年 “夏六月 于山國歸服 歲以土宜爲貢。于山國在溟州正東海島 或名鬱陵島 地方一百里 恃嶮不服。伊滄異斯夫爲何瑟羅州軍主 謂 于山人愚悍 難以威來 可以計服。乃多造木偶師子 分載戰船 抵其國海岸 誑告曰 汝若不服 則放此猛獸踏殺之。國人恐懼 則降。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 智証麻立干15年 “春正月 置小京於阿尸村。秋七月 徙六部及南地 人戶 充實之。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王4年 “夏四月 始置兵部。”

- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王7年 “春正月 頒示律令 始制百官公服 朱紫之秩。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王9年 “春三月 加耶國王遣使請婚 王以伊滄比助夫之妹送之。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王11年9月 “王出巡南境拓地。加耶國王來會。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王15年 “肇行佛法。（中略）不復非毀佛事。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王18年 “夏四月 拜伊滄哲夫爲上大等 摠知國事。上大等官 始於此 如今之宰相。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王19年 “金官國主金仇亥 與妃及三子（中略）以國帑寶物來降。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王19年 “金官國主金仇亥 與妃及三子 長曰奴宗 仲曰武德 季曰武力 以國帑寶物來降。王禮待之 授位上等 以本國爲食邑。子武力仕至角干。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 法興王23年 “始稱年號 云建元元年。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王2年 “百濟遣使請和 許之。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王5年 “春二月 興輪寺成 三月 許人出家爲僧尼 奉佛。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王11年 “春正月 百濟拔高句麗道薩城。三月 高句麗陷百濟金峴城。王乘兩國兵疲 命伊滄異斯夫 出兵擊之 取二城增築 留甲士一千戍之。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王12年 “春正月 改元開國。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王12年 “王命居柒夫等 侵高句麗 乘勝取十郡。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王14年 “春二月 王命所司 築新宮於月城東 黃龍見其地。王疑之 改爲佛寺 賜號曰皇龍。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王14年 “秋七月 取百濟東北鄙 置新州 以阿滄武力爲軍主。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王15年7月 “百濟王明禮與加良 來攻管山城。軍主角干于德·伊滄耽知等 逆戰失利。新州軍主金武力 以州兵赴之。及交戰 裨將三年山郡高干都刀 急擊殺百濟王。於是 諸軍乘勝 大克之 斬佐平四人·士卒二萬九千六百人 匹馬無反者。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王16年 “冬十月 王巡幸北漢山 拓定封疆。十一月 至自北漢山 敎所經州郡 復一年租調 曲赦 除二罪 皆原之。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王16年 “春正月 置完山州於比斯伐。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王17年 “秋七月 置比列忽州 以沙滄成宗爲軍主。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王18年 “以國原爲小京。廢沙伐州 置甘文州 以沙滄起宗爲軍主。廢新州 置北漢山州。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王19年 “春二月 徙貴戚子弟及六部豪民 以實國原。奈麻身得 作砲弩上之 置之城上。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王23年 “九月 加耶叛 王命異斯夫討之 斯多含副之 斯多含領 五千騎先馳 入梅檀門 立白旗 城中恐懼 不知所爲 異斯夫引兵臨之 一時盡降。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王25年 “遣使北齊朝貢。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王26年 “春二月 北齊武成皇帝詔 以王爲使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王。（中略）九月（中略）陳遣使劉思與僧明觀 來聘 送釋氏經論千七百餘卷。”

- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王26年 “秋八月 命阿漚春賦 出守國原。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王26年 “九月 廢完山州 置大耶州。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王27年 “春二月 祇園・實際二寺成。(中略) 皇龍寺畢功。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王27年 “春二月 (中略) 遣使於陳貢方物。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王28年 “春三月 遣使於陳貢方物。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王29年 “改元大昌。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王29年 “夏六月 遣使於陳貢方物。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王29年 “冬十月 廢北漢山州 置南川州。又廢比列忽州 置達忽州。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王31年 “夏六月 遣使於陳獻方物。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王32年 “遣使於陳貢方物。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王33年 “春正月 改元鴻濟。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王33年 “三月 王太子銅輪卒。遣使北齊朝貢。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王33年 “冬十月二十日 爲戰死士卒 設八關筵會於外寺 七日罷。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真興王37年 “春 始奉源花。初君臣病無以知人 欲使類聚羣遊 以觀其行義 然後舉而用之。遂簡美女二人 一曰南毛 一曰俊貞 聚徒三百餘人。二女爭媚相妬 俊貞引南毛於私第 強勸酒 至醉 曳而投河水以殺之。俊貞伏誅 徒人失和罷散。其後 更取美貌男子 粧飾之 名花郎以奉之。徒衆雲集 或相磨以道義 或相悅以歌樂 遊娛山水 無遠不至 因此知其人邪正 擇其善者 薦之於朝。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真平王3年 “春正月 始置位和府 如今吏部。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真平王5年 “春正月 始置船府署 大監・弟監各一員。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真平王6年 “春二月 改元建福。三月 置調府令一員 掌貢賦。乘府令一員 掌車乘。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真平王8年 “春正月 置禮部令二員。”
- 『三国史記』卷4、新羅本紀4 真平王13年 “春二月 置領客府令二員。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 故国原王12年 “十一月 眇自將勁兵四萬 出南道 以慕容翰・慕容霸爲前鋒 別遣長史王寓等 將兵萬五千 出北道以來侵。(中略) 諸軍乘勝 遂入丸都 王單騎走入斷熊谷。將軍慕輿<sub>ハ</sub> 追獲王母周氏及王妃而歸。會王寓等 戰於北道 皆敗沒。由是 眇不復窮追 遣使招王 王不出。(中略) 眇從之 發美川王墓 載其尸 收其府庫累世之寶 虜男女五萬餘口 燒其宮室 毀丸都城而還。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 故国原王39年 “秋九月 王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 故国原王41年 “冬十月 百濟王率兵三萬 來攻平壤城。王出師拒之 爲流矢所中。是月二十三日 薨。葬于故國之原。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 故国壤王8年 “春 遣使新羅修好 新羅王遣姪實聖爲質。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王元年 “秋七月 南伐百濟 拔十城。”



- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王元年 “九月 北伐契丹 虜男女五百口 又招諭本國陷沒民口一萬而歸。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王2年 “秋八月 百濟侵南邊 命將拒之。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王3年 “秋七月 百濟來侵 王率精騎五千 逆擊敗之 餘寇夜走。八月 築國南七城 以備百濟之寇。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王4年 “秋八月 王與百濟戰於湏水之上 大敗之 虜獲八千餘級。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王9年2月 “燕王盛 以我王禮慢 自將兵三萬襲之 以驃騎大將軍慕容熙爲前鋒 拔新城·南蘇二城 拓地七百餘里 徙五千餘戶而還。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王11年 “王遣兵攻宿軍 燕平州刺史慕容歸 棄城走。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王13年 “冬十一月 出師侵燕。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王14年 “春正月 燕王熙來攻遼東城 且陷 熙命將士 ‘毋得先登 俟剗平其城 朕與皇后乘輦而入。’ 由是 城中得嚴備 卒不克而還。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 廣開土王15年 “冬十二月 燕王熙襲契丹 至陁北 畏契丹之衆 欲還。遂棄輜重 輕兵襲我。燕軍行三千餘里 士馬疲凍 死者屬路 攻我木底城 不克而還。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長壽王15年 “移都平壤。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長壽王24年 “夏四月 魏攻燕白狼城 克之。王遣將葛盧·孟光 將衆數萬 隨陽伊至和龍 迎燕王。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長壽王38年 “新羅人襲殺邊將 王怒 將舉兵討之 羅王遣使謝罪 乃止。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長壽王42年 “秋七月 遣兵侵新羅北邊。”
- 『三国史記』卷18、高句麗本紀6 長壽王56年 “春二月 王以靺鞨兵一萬 攻取新羅悉直州城。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 文咨明王4年 “八月 遣兵圍百濟雉壤城。百濟請救於新羅。羅王命將軍德智 率兵來援 我軍退還。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 文咨明王12年 “冬十一月 百濟遣達率優永 率兵五千 來侵水谷城。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 文咨明王15年 “冬十一月 遣將伐百濟 大雪 士卒凍斃而還。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 文咨明王16年 “冬十月 遣使入魏朝貢。王遣將高老 與靺鞨謀 欲攻百濟漢城 進屯於橫岳下。百濟出師逆戰 乃退。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 文咨明王21年 “秋九月 侵百濟 陷加弗·圓山二城 虜獲男女一千餘口。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王2年 “春二月 北齊廢帝封王爲使持節領東夷校尉遼東郡公 高句麗王。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王3年 “冬十一月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王4年 “春二月 陳文帝詔授王寧東將軍。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王6年 “遣使入北齊朝貢。”

- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王7年 “春正月 立王子元爲太子。遣使入北齊朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王8年 “冬十二月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王12年 “冬十一月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王13年 “春二月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王15年 “遣使入北齊朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王16年 “春正月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王19年 “王遣使入周朝貢 周高祖拜王爲開府儀同三司大將軍遼東郡開國公高句麗王。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王23年 “十二月 遣使入隋朝貢。高祖授王大將軍遼東郡公。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王24年 “春正月 遣使入隋朝貢。冬十一月 遣使入隋朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王25年 “春正月 遣使入隋朝貢。(中略)夏四月 遣使入隋朝貢。冬 遣使入隋朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王26年 “春 遣使入隋朝貢。夏四月 隋文帝宴我使者於大興殿。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王27年 “冬十二月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王28年 “移都長安城。”
- 『三国史記』卷19、高句麗本紀7 平原王32年 “王聞陳亡大懼 治兵積穀 爲拒守之策 隋高祖賜王璽書 責以 雖稱藩附 誠節未盡。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 古爾王13年8月 “魏幽州刺史毋丘儉與樂浪太守劉茂·朔方太守王遵 伐高句麗。王乘虛遣左將眞忠 襲取樂浪邊民。茂聞之怒。王恐見侵討 還其民口。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 責稽王13年9月 “漢與貊人來侵 王出禦爲敵兵所害薨。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 汾西王7年 “春二月 潛師襲取樂浪西縣。冬十月 王爲樂浪太守所遣刺客賊害薨。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王21年3月 “遣使聘新羅。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王23年3月 “遣使新羅 送良馬二匹。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王24年 “秋九月 高句麗王斯由帥步騎二萬 來屯雉壤 分兵侵奪民戶 王遣太子以兵徑至雉壤 急擊破之 獲五千餘級 其虜獲分賜將士。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王24年9月 “高句麗王斯由帥步騎二萬 來屯雉壤 分兵侵奪民戶。王遣太子以兵徑至雉壤 急擊破之 獲五千餘級 其虜獲分賜將士。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王26年 “高句麗舉兵來 王聞之 伏兵於湏河上 俟其至急擊之 高句麗兵敗北。冬 王與太子帥精兵三萬 侵高句麗 攻平壤城。麗王斯由力戰拒之 中流矢死。王引軍退 移都漢山。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王27年正月 “遣使入晉朝貢。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王28年2月 “遣使入晉朝貢。”
- 『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王30年 “秋七月 高句麗來攻北鄙水谷城陷之。王遣將拒之

不克 王又將大舉兵報之。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 近肖古王30年 “冬十一月 王薨。古記云『百濟開國已來 未有以文字記事 至是得博士高興 始有書記』然高興未嘗顯於他書 不知其何許人也。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 近仇首王2年 “冬十一月 高句麗來侵北鄙。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 近仇首王3年 “冬十月 王將兵三萬 侵高句麗平壤城。十一月 高句麗來侵。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 近仇首王3年10月 “王將兵三萬 侵高句麗平壤城。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 近仇首王5年3月 “遣使朝晉 其使海上遇惡風 不達而還。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 枕流王元年7月 “遣使入晉朝貢。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 枕流王元年9月 “胡僧摩羅難陀自晉至 王迎之致宮內 禮敬焉 佛法始於此。”

『三国史記』卷24、百濟本紀2 枕流王2年2月 “創佛寺於漢山 度僧十人。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 辰斯王3年 “秋九月 與靺鞨戰關彌嶺不捷。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 辰斯王5年 “秋九月 王遣兵侵掠高句麗南鄙。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 辰斯王6年 “九月 王命達率真嘉謨 伐高句麗 拔都坤城 虜得二百人。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 辰斯王8年 “秋七月 高句麗王談德 帥兵四萬 來攻北鄙 陷石峴等十餘城。王聞談德能用兵 不得出拒。漢水北諸部落多沒焉。冬十月 高句麗攻拔關彌城。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王2年 “秋八月 王謂武曰 關彌城者 我北鄙之襟要也。今爲高句麗所有 此寡人之所痛惜 而卿之所宜用心而雪恥也。遂謀將兵一萬 伐高句麗南鄙。武身先士卒 以冒矢石 意復石峴等五城 先圍關彌城。麗人嬰城固守 武以糧道不繼 引而歸。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王3年 “秋七月 與高句麗戰於水谷城下 敗績。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王4年 “秋八月 王命左將真武等 伐高句麗。麗王談德 親帥兵七千 陣於湏水之上拒戰。我軍大敗 死者八千人。冬十一月 王欲報湏水之役 親帥兵七千人 過漢水 次於青木嶺下 會大雪 士卒多凍死 廻軍至漢山城 勞軍士。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王6年 “夏五月 王與倭國結好 以太子腆支爲質。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王7年 “秋八月 王將伐高句麗 出師至漢山北柵。其夜 大星落營中有聲。王深惡之 乃止。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 阿莘王8年 “秋八月 王欲侵高句麗 大徵兵馬。民苦於役 多奔新羅 戶口衰滅。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 腆支王即位年 “阿莘在位第三年 立爲太子。六年 出質於倭國。十四年 王薨 王仲弟訓解攝政 以待太子還國。季弟磔禮殺訓解 自立爲王。腆支在倭聞訃 哭泣請歸。倭王以兵士百人衛送。既至國界 漢城人解忠來告曰 大王棄世 王弟磔禮殺兄自王 願太子無輕入。腆支留倭人自衛 依海島以待之。國人殺磔禮 迎腆支即位。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 腆支王5年 “倭國遣使 送夜明珠 王優禮待之。”

『三国史記』卷25、百濟本紀3 腆支王14年 “夏 遣使倭國 送白綿十四匹。”

- 『三国史記』卷25、百濟本紀3 毗有王14年 “冬十月 遣使入宋朝貢。”
- 『三国史記』卷25、百濟本紀3 毗有王2年 “倭國使至 從者五十人。”
- 『三国史記』卷25、百濟本紀3 毗有王3年 “秋 遣使入宋朝貢。”
- 『三国史記』卷25、百濟本紀3 毗有王4年 “夏四月 宋文皇帝 以王復修職貢 降使冊授先王映爵號。”
- 『三国史記』卷25、百濟本紀3 毗有王7年 “遣使入新羅請和。”
- 『三国史記』卷25、百濟本紀3 毗有王8年 “春二月 遣使新羅 送良馬二匹 秋九月 又送白鷹。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 文周王3年 “秋八月 兵官佐平解仇 擅權亂法 有無君之心 王不能制。九月 王出獵 宿於外 解仇使盜害之 遂薨。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 三斤王3年 “冬十一月 王薨。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 東城王6年 “春二月 王聞南齊祖道成 冊高句麗巨璉爲驃騎大將軍 遣使上表請內屬 許之。秋七月 遣內法佐平沙若思 如南齊朝貢 若思至西海中 遇高句麗兵 不進。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 東城王7年 “夏五月 遣使聘新羅。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 東城王8年 “三月 遣使南齊朝貢。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 東城王15年 “春三月 王遣使新羅請婚 羅王以伊滄比智女 歸之。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 東城王20年 “八月 王以耽羅不修貢賦 親征至武珍州。耽羅聞之 遣使乞罪 乃止。[耽羅 卽耽牟羅。]
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 聖王4年 “冬十月 修葺熊津城 立沙井柵。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 聖王16年 “春 移都於泗泚[一名所夫里] 國號南扶餘。”
- 『三国史記』卷26、百濟本紀4 聖王19年 “王遣使入梁朝貢 兼表請毛詩博士・涅槃等經義并工匠・畫師等 從之。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王14年 “秋九月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王17年 “高齊後主 拜王爲使持節侍中車騎大將軍帶方郡公百濟王。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王18年 “高齊後主 又以王爲使持節都督東青州諸軍事東青州刺史。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王19年 “遣使入齊朝貢。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王24年 “秋七月 遣使入陳朝貢。(中略) 十一月 遣使入宇文周朝貢。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王25年 “遣使入宇文周朝貢。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王28年 “王遣使入隋朝貢 隋高祖詔 拜王爲上開府儀同三司帶方郡公。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王29年 “春正月 遣使入隋朝貢。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王30年 “冬十一月 遣使入陳朝貢。”
- 『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王33年 “遣使入陳朝貢。”

『三国史記』卷27、百濟本紀5 威德王36年 “隋平陳 有一戰船 漂至耽牟羅國。其船得還 經于國界 王資送之甚厚 并遣使奉表 賀平陳。”

『三国史記』卷44、列伝4 居柒夫 “十二年辛未 王命居柒夫及仇珍大角滄·比台角滄·耽知迺滄·非西迺滄·奴夫波珍滄·西力夫波珍滄·比次夫大阿滄·未珍夫阿滄等八將軍 與百濟侵高句麗。百濟人先攻破平壤 居柒夫等 乘勝取竹嶺以外高峴以內十郡。”

『三国史記』卷45、列伝5 朴堤上傳 “及訥祗王即位 思得辯士 往迎之 聞水酒村干伐寶鞋·一利村干仇里迺·利伊村干波老三人有賢智 召問曰 吾弟二人 質於倭麗二國 多年不還 兄弟之故 思念不能自止 願使生還 若之何而可。三人同對曰 臣等聞歌良州干堤上 剛勇而有謀 可得以解殿下之憂。於是 徵堤上使前 告三臣之言而請行。堤上對曰 臣雖愚不肖 敢不唯命祗承。（下略）”

『三国史記』卷45、列伝5 朴堤上傳 “遂徑入倭國 若叛來者。倭王疑之。百濟人前入倭 讒言新羅與高句麗謀侵王國。倭遂遣兵邏戍新羅境外 會高句麗來侵 并擒殺倭邏人。倭王乃以百濟人言爲實。”

『三国遺事』第十八實聖王条 “王忌憚前王太子訥祗有德望 將害之 請高麗兵而詐迎訥祗。高麗人見訥祗有賢行 乃倒戈而殺王 乃立訥祗爲王而去。”

『新增東国輿地勝覽』卷29、高靈県 建置沿革 “按崔致遠釋利貞傳云 伽倻山神正見母主 乃爲天神夷毗訶之所感 生大伽倻王惱室朱日·金官國王惱室青齋二人 則惱室朱日爲夷珍阿歧王之別稱 青齋爲首露王之別稱。”

『新增東国輿地勝覽』卷29、高靈県 建置沿革 引用 釋順応伝 “大伽倻國月光太子 乃正見之十世孫。父曰異腦王。求婚于新羅 迎夷粲比枝輩之女 而生太子 則異腦王 乃惱室朱日之八世孫也。然亦不可考。”

『昌寧真興王拓境碑』 “四方軍主。比子伐軍主 沙喙 登□□智 沙尺干。漢城軍主 喙 竹夫智 沙尺干。碑利城軍主 喙 福登智 沙尺干。甘文軍主 沙喙 心麥夫智 及尺干。”

[日本史料]

『古事記』中卷、仲哀天皇 “故 備如教覺 整軍雙船 度幸之時 海原之魚 不問大小 悉負御船而渡。”

『古事記』中卷、仲哀天皇 “故是以新羅國者 定御馬甘 百濟國者 定渡屯家。”

『古事記』中卷、仲哀天皇 “於是其國王畏惶奏言 自今以後 隨天皇命而爲御馬甘 每年雙船 不乾船腹 不乾楫 共與天地 無退仕奉。”

『古事記』中卷、仲哀天皇 “爾 順風大起 御船從浪 故 其御船之浪瀾 押騰新羅之國 既到半國。”

『日本書紀』卷9、神功皇后即位前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔辛丑 “從和珥津發之。時飛廉起風、陽侯舉浪、海中大魚、悉浮扶船。”

『日本書紀』卷9、神功皇后即位前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔辛丑 “則大風順吹 帆船隨波 不勞櫓楫 便到新羅。時隨船湖浪 遠逮國中 卽知 天神地祇悉助歟。”

『日本書紀』卷9、神功皇后即位前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔辛丑 “新羅王 於是 戰戰慄慄 厝身

無所。(中略)因以叩頭之曰 從今以後 長與乾坤 伏爲飼部。其不乾船楫 而春秋獻馬梳及馬鞭。復不煩海遠 以每年貢男女之調。”

『日本書紀』卷9、神功皇后即位前紀 仲哀九年冬十月 己亥朔辛丑 “乃解其縛爲飼部 遂入其國中 封重寶府庫 收圖籍文書。(中略)於是 高麗·百濟二國王 聞新羅收圖籍 降於日本國 密令伺其軍勢 則知不可勝 自來于營外 叩頭而款曰 從今以後 永稱西蕃 不絕朝貢。故因以 定內宮家屯倉。是所謂之三韓也。皇后從新羅還之。”

『日本書紀』卷9、神功皇后摂政49年3月 “以荒田別鹿我別爲將軍 則與久氏等 共勒兵而度之 至卓淳國 將襲新羅。時或曰 兵衆少之 不可破新羅。更復奉上沙白蓋盧 請增軍士。即命木羅斤資沙沙奴跪[是二人 不知何姓人也。但木羅斤資者 百濟將也。]領精兵 與沙白蓋盧共遣之。俱集于卓淳 擊新羅而破之。因以平定比自埴南加羅喙國安羅多羅卓淳加羅七國。仍移兵 西廻至古奚津 屠南蠻枕彌多禮 以賜百濟。於是 其王肖古及王子貴須 亦領軍來會。時比利辟中布彌支半古四邑 自然降服。”

『日本書紀』卷9、神功皇后摂政50年 “夏五月 千熊長彦·久氏等 至自百濟。於是 皇太后歡之 問久氏曰 海西諸韓 既賜汝國 今何事以頻復來也。久氏等奏曰 天朝鴻澤 遠及弊邑。吾王歡喜 踊躍 不任于心。故因還使 以致至誠。雖逮萬世 何年非朝。皇太后勅云 善哉汝言。是朕懷也。增賜多沙城 爲往還路驛。”

『日本書紀』卷9、神功皇后摂政52年9月 丁卯朔丙子 “久氏等從千熊長彦詣之 則獻七枝刀一口·七子鏡一面 及種種重寶。仍啓曰 臣國以西有水 源出自谷那鐵山。其邈七日行之不及。當飲是水 便取是山鐵 以永奉聖朝。乃謂孫枕流王曰 今我所通 海東貴國 是天所啓。是以垂天恩 割海西而賜我。由是 國基永固。汝當善脩和好 聚斂土物 奉貢不絕 雖死何恨。自是後 每年相續朝貢焉。”

『日本書紀』卷9、神功皇后摂政62年 “新羅不朝。即年 遣襲津彦擊新羅。[百濟記云 壬午年 新羅不奉貴國。貴國遣沙至比跪 令討之。新羅人莊飾美女二人 迎誘於津。沙至比跪 受其美女 反伐加羅國。加羅國王己本旱岐 及兒百久至·阿首至·國沙利·伊羅麻酒·爾汶至等 將其人民 來奔百濟。百濟厚遇之。加羅國王妹既殿至 向大倭啓云 天皇遣沙至比跪 以討新羅。而納新羅美女 捨而不討 反滅我國。兄弟人民 皆爲流沈。不任憂思 故以來啓。天皇大怒 即遣木羅斤資 領兵衆來集加羅 復其社稷。(下略)]”

『日本書紀』卷10、応神天皇25年 “百濟直支王薨。即子久爾辛立爲王。王年幼。木滿致執國政 與王母相姪 多行無禮。天皇聞而召之。[百濟記云 木滿致者 是木羅斤資討新羅時 娶其國婦而所生也。以其父功 專於任那。來入我國 往還貴國。承制天朝 執我國政 權重當世。然天朝聞其暴 召之。]”

『日本書紀』卷14、雄略天皇5年 “夏四月 百濟加須利君[蓋鹵王也] 飛聞池津媛之所燔殺[適稽女郎也] 而籌議曰 昔貢女人爲采女 而既無禮 失我國名 自今以後不合貢女。乃告其弟軍君[昆支也]曰 汝宜往日本以事天皇。軍君對曰 上君之命不可奉違 願賜君婦而後奉遣。加須利君則以孕婦 既嫁與軍君曰 我之孕婦既當產月 若於路產 冀載一船 隨至何處速令送國。遂與辭訣 奉遣於朝。”

『日本書紀』卷14、雄略天皇8年“春二月 遣身狹村主青·檜隈民使博德 使於吳國。自天皇即位 至于是歲 新羅國背誕 苞苴不入 於今八年。而大懼中國之心 脩好於高麗。由是 高麗王遣精兵一百人 守新羅。有頃 高麗軍士一人 取假歸國。時以新羅人爲典馬[典馬 此云于麻柯比] 而顧謂之曰 汝國爲吾國所破 非久矣。[一本云 汝國果成吾土 非久矣。] 其典馬聞之 陽患其腹 退而在後。遂逃入國 說其所語。於是 新羅王乃知高麗僞守 遣使馳告國人曰 人殺家內所養鷄之雄者。國人知意 盡殺國內所有高麗人。惟有遺高麗一人 乘間得脫 逃入其國 皆具爲說之。高麗王即發軍兵 屯聚筑足流城[或本云 都久斯岐城] 遂歌舞興樂。(中略) 二國之怨 自此而生。[言二國者 高麗·新羅也。] 膳臣等謂新羅曰 汝以至弱 當至強。官軍不救 必爲所乘 將成人地 殆於此役。自今以後 豈背天朝也。”

『日本書紀』卷14、雄略天皇8年2月“於是 新羅王 夜聞高麗軍四面歌舞 知賊盡入新羅地。乃使人於任那王曰 高麗王征伐我國。當此之時 若綴旒然。國之危殆 過於累卵。命之脩短 太所不計。伏請救於日本府行軍元帥等。由是 任那王勸膳臣斑鳩[斑鳩 此云伊柯屢俄]吉備臣小梨難波吉士赤日子 往救新羅。膳臣等 未至營止。高麗諸將 未與膳臣等相戰 皆怖。膳臣等乃自力勞軍 令軍中 促爲攻具 急進攻之。與高麗相守十餘日 乃夜鑿險 爲地道 悉過輜重 設奇兵。會明 高麗爲膳臣等爲遁也 悉軍來追。乃縱奇兵 步騎夾攻 大破之。”

『日本書紀』卷15、顯宗天皇3年“是歲 紀生磐宿禰 跨據任那 交通高麗。將西王三韓 整脩官府 自稱神聖。用任那左魯那奇他甲背等計 殺百濟適莫爾解於爾林。[爾林 高麗地也] 築帶山城 距守東道 斷運粮津 令軍飢困。百濟王大怒 遣領軍古爾解·內頭莫古解等 率衆趣于帶山攻。於是 生磐宿禰 進軍逆擊 膽氣益壯 所向皆破 以一當百 俄而兵盡力竭 知事不濟 自任那歸。由是 百濟國殺佐魯那奇他甲背等三百餘人。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇6年“夏四月 辛酉朔丙寅 遣穗積臣押山 使於百濟。仍賜筑紫國馬卅匹。冬十二月 百濟遣使貢調。別表請任那國上哆唎·下哆唎·娑陀·牟婁 四縣。哆唎國守穗積臣押山奏曰 此四縣 近連百濟 遠隔日本。且暮易通 鷄犬難別。今賜百濟 合爲同國 固存之策 無以過此。然縱賜合國 後世猶危。況爲異場 幾年能守。大伴大連金村 具得是言 同謨而奏。(中略) 由是 改使而宣勅 付賜物并制旨 依表賜任那四縣。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇7年6月“百濟遣姐彌文貴將軍·州利即爾將軍 副穗積臣押山[百濟本記云 委意斯移麻岐彌] 貢五經博士段楊爾。別奏云 伴跛國略奪臣國己汶之地。伏願天恩 判還本屬。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇7年11月 辛亥朔 乙卯“於朝廷 引列百濟姐彌文貴將軍·斯羅汶得·安羅辛已奚及賁巴委佐·伴跛既殿奚及竹汶至等 奉宣恩勅。以己汶·滯沙 賜百濟國。是月 伴跛國 遣戡支 獻珍寶 乞己汶之地。而終不賜。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇8年3月“伴跛築城於子吞·帶沙 而連滿奚 置烽候邸閣 以備日本。復築城於爾列比·麻須比 而緮麻且奚·推封。聚士卒兵器 以逼新羅。駭略子女 剝掠村邑。凶勢所加 罕有遺類。夫暴虐奢侈 惱害侵凌 誅殺尤多 不可詳載。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇9年“是月 到于沙都嶋 傳聞 伴跛人 懷恨銜毒 恃強縱虐。故物部連率舟師五百 直詣帶沙江。文貴將軍 自新羅去。夏四月 物部連於帶沙江停住六日。伴跛興師

往伐 逼脱衣裳 劫掠所齋 盡燒帷幕。物部連等 怖畏逃遁 僅存身命 泊汶慕羅。[汶慕羅 嶋名也。]

『日本書紀』卷17、繼體天皇10年 “秋九月 百濟遣州利即次將軍 副物部連來 謝賜己汶之地。別貢五經博士漢高安茂 請代博士段楊爾。依請代之。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇21年6月 壬午朔 甲午 “近江毛野臣 率衆六萬 欲住任那 爲復興建新羅所破南加羅·喙己吞 而合任那。於是 筑紫國造磐井 陰謀叛逆 猶預經年。恐事難成 恒伺間隙。新羅知是 密行貨賂于磐井所 而勸防遏毛野臣軍。於是 磐井掩據火豐二國 勿使修職。外邀海路 誘致高麗·百濟·新羅·任那等國年貢職船。內遮遣任那毛野臣軍。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇22年11月 甲寅朔 甲子 “大將軍物部大連麤鹿火 親與賊帥磐井 交戰於筑紫御井郡。旗鼓相望 埃塵相接 決機兩陣之間 不避萬死之地。遂斬磐井 果定疆場。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇23年3月 “是月 遣近江毛野臣 使于安羅。勅勸新羅 更建南加羅·喙己吞。百濟遣將軍君尹貴·麻那甲背·麻鹵等 往赴安羅 式請詔勅。新羅恐破蕃國官家 不遣大人 而遣夫智奈麻禮·奚奈麻禮等 往赴安羅 式請詔勅。於是 安羅新起高堂 引昇勅使。國主隨後昇階。國內大人 預昇堂者一二。百濟使將軍君等 在於堂下。凡數月再三 謨謀乎堂上。將軍君等 恨在庭焉。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇23年3月 “百濟王謂下哆唎國守穗積押山臣曰 夫朝貢使者 恒避嶋曲 [謂海中嶋曲崎岸也。俗云美佐祁。] 每苦風波。因茲 濕所齋 全壞无色。請 以加羅多沙津 爲臣朝貢津路。是以 押山臣爲請聞奏。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇24年9月 “於是 阿利斯等 知其細碎爲事 不務所期 頻勸歸朝 尚不聽還。由是 悉知行迹 心生翻背。乃遣久禮斯己母 使于新羅請兵 奴須久利 使于百濟請兵。毛野臣聞百濟兵來 迎討背評 [背評地名 亦名能備己富里也] 傷死者半。百濟則捉奴須久利 柎械枷鎖 而共新羅圍城。責罵阿利斯等曰 可出毛野臣。毛野臣 嬰城自固。勢不可擒。於是 二國圖度便地 淹留弦晦 築城而還。號曰久禮牟羅城。還時觸路 拔騰利枳牟羅·布那牟羅·牟雌枳牟羅·阿夫羅·久知波多枳 五城。”

『日本書紀』卷17、繼體天皇25年12月 条細注の百濟本記引用文 “太歲辛亥三月 軍進至于安羅 營乞七城。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月 “安羅次早岐夷吞奚·大不孫·久取柔利 加羅上首位古殿奚 卒麻早岐 散半奚早岐兒 多羅下早岐夷他 斯二岐早岐兒 子他早岐等 與任那日本府吉備臣 [闕名字] 往赴百濟 俱聽詔書。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月 “聖明王曰 昔我先祖速古王貴首王之世 安羅加羅卓淳早岐等 初遣使相通 厚結親好 以爲子弟 冀可恒隆。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月 “其卓淳 上下携貳 主欲自附 內應新羅。由是見亡。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇2年4月 “任那早岐等對曰 (中略) 夫建任那者 爰在大王之意。祇承教旨 誰敢問言。然任那境接新羅 恐致卓淳等禍。 [等謂喙己吞·加羅。言卓淳等國 有敗亡之禍。]

『日本書紀』卷19、欽明天皇2年7月 “日本卿等 久住任那之國 近接新羅之境 新羅情狀 亦是所知。



毒害任那 謨防日本 其來尚矣 匪唯今年。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇5年3月 “新羅春取喙淳 仍擯出我久禮山戍 而遂有之。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇5年3月 “至於卓淳 亦復然之。假使卓淳國主 不爲內應新羅招寇 豈至滅乎。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇5年11月 “日本吉備臣 安羅下早岐大不孫·久取柔利 加羅上首位古殿 奚 卒麻君 斯二岐君 散半奚君兒 多羅二首位訖乾智 子他早岐 久嗟早岐 仍赴百濟。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇5年11月 “竊聞 新羅·安羅兩國之境 有大江水 要害之地也。吾欲據此 修繕六城。謹請天皇三千兵士 每城充以五百 并我兵士 勿使作田 而逼惱者 久禮山之五城 庶自投兵降首。卓淳之國 亦復當興。所請兵士 吾給衣糧。欲奏天皇 其策一也。猶於南韓 置郡令·城主者 豈欲違背天皇·遮斷貢調之路。唯庶剋濟多難 殲撲強敵。凡厥凶黨 誰不謀附。北敵強大 我國微弱。若不置南韓 郡領·城主 修理防護 不可以禦此強敵 亦不可以制新羅。故猶置之 攻逼新羅 撫存任那。若不爾者 恐見滅亡 不得朝聘。欲奏天皇 其策二也。又吉備臣·河內直·移那斯·麻都 猶在任那國者 天皇雖詔建成任那 不可得也。請 移此四人 各遣還其本邑。奏於天皇 其策三也。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇5年11月 “於是 吉備臣·早岐等曰 大王所述三策 亦協愚情而已。今願 歸以敬諮日本大臣[謂在任那日本府之大臣也]·安羅王·加羅王 俱遣使同奏天皇。此誠千載一會之期 可不深思而熟計歟。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇6年9月 “百濟遣中部護德菩提等 使于任那 贈吳財於日本府臣及諸早岐 各有差。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇7年正月 “百濟使人中部奈率己連等罷歸。仍賜以良馬七十匹·船一十隻。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇7年6月 “百濟遣中部奈率掠葉禮等獻調。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇8年4月 “百濟遣前部德率眞慕宣文·奈率奇麻等 乞救軍。仍貢下部東城子言 代德率汶休麻那。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇9年正月 “百濟使人前部德率眞慕宣文等請罷。因詔曰 所乞救軍 必當遣救。宜速報王。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇9年4月 “百濟遣中部杆率掠葉禮等奏曰 (中略) 然馬津城之役[正月辛丑 高麗率衆 圍馬津城] 虜謂之曰 由安羅國與日本府招來勸罰。以事准況 寔當相似。然三廻欲審其言 遣召而並不來 故深勞念。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇12年 “是歲 百濟聖明王 親率衆及二國兵[二國謂新羅·任那也] 往伐高麗 獲漢城之地。又進軍討平壤。凡六郡之地 遂復故地。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇13年 “是歲 百濟棄漢城與平壤 新羅因此入居漢城。今新羅之牛頭方·尼彌方也。[地名未詳]”

『日本書紀』卷19、欽明天皇13年10月 “百濟聖明王[更名聖王]遣西部姬氏達率怒喇斯致契等 獻釋迦佛金銅像一軀·幡蓋若干·經論若干卷。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇14年6月 “遣內臣[闕名] 使於百濟。仍賜良馬二匹·同船二隻·弓五十張

・箭五十具。勅云 所請軍者 隨王所須。別勅 醫博士・易博士・曆博士等 宜依番上下。今上件色人 正當相代年月。宜付還使相代。又卜書・曆本・種種藥物 可付送。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇15年 “春正月（中略）於是 内臣奉勅而答報曰 即令遣助軍數一千・馬一百匹・船卅隻。（中略）夏五月 丙戌朔戊子 内臣率舟師 詣于百濟。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇15年12月 “而天皇遣有至臣 帥軍以六月至來。臣等深用歡喜。以十二月九日 遣攻斯羅。臣先遣東方領物部莫奇武連 領其方軍士 攻函山城。有至臣所將來民竹斯物部莫奇委沙奇 能射火箭。蒙天皇威靈 以月九日酉時 焚城拔之。故遣單使馳船奏聞。（中略）伏願 速遣竹斯嶋上諸軍士 來助臣國 又助任那 則事可成。又奏 臣別遣軍士萬人 助任那。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇15年12月 “餘昌謀伐新羅。耆老諫曰 天未與 懼禍及。餘昌曰 老矣何怯也。我事大國 有何懼也。遂入新羅國 築久陀牟羅塞。其父明王憂慮 餘昌長苦行陣 久廢眼食。父慈多闕 子孝希成。乃自往仰慰勞。新羅聞明王親來 悉發國中兵 斷道擊破。是時新羅謂佐知村飼馬奴苦都[更名谷智]曰 苦都賤奴也。明王名主也。今使賤奴殺名主。冀傳後世 莫忘於口。已而苦都 乃獲明王（中略）苦都斬首而殺 堀坎而埋。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇22年 “故新羅築城於阿羅波斯山 以備日本。”

『日本書紀』卷19、欽明天皇23年 “一本云 廿一年 任那滅焉。”

#### [中国史料]

『建康實錄』南齊 高麗伝 “其官位加長史司馬參軍之屬。拜則申一脚 坐則跪 行則走 以爲恭敬。國有銀山 採爲貨並人參貂皮。重中國綵纈 丈夫衣之。亦重虎皮。”

『南齊書』卷58、列伝39 高麗国 “宋末 高麗王樂浪公高璉爲使持節散騎常侍都督營平二州諸軍事 車騎大將軍開府儀同三司。太祖建元元年 進號驃騎大將軍。”

『南齊書』卷58、列伝39 東南夷伝 東夷 “加羅國 三韓種也。建元元年 國王荷知使來獻。詔曰 量廣始登 遠夷洽化。加羅王荷知 款關海外 奉贄東遐。可授輔國將軍本國王。”

『南齊書』卷58、列伝39 百濟国 “建武 二年 牟大遣使上表曰（中略）今假沙法名行征虜將軍・邁羅王 贊首流爲行安國將軍・辟中王 解禮昆爲行武威將軍・弗中侯 木干那 前有軍功 又拔臺舫 爲行廣威將軍・面中侯。伏願天恩特愍聽除。（中略）詔可 竝賜軍號。”

『南齊書』卷58、列伝39 百濟国 “報功勞勤 實存名烈。假行寧朔將軍臣姐瑾等四人 振竭忠効 攘除國難 志勇果毅 等威名將 可謂扞城 固蕃社稷 論功料勤 宜在甄顯。今依例輒假行職。伏願恩愍 聽除所假。寧朔將軍・面中王姐瑾 歷贊時務 武功竝列 今假行冠軍將軍・都將軍・都漢王。建威將軍・八中侯餘古 弱冠輔佐 忠効夙著 今假行寧朔將軍・阿錯王。建威將軍餘歷 忠款有素 文武列顯 今假行龍驤將軍・邁盧王。廣武將軍餘固 忠効時務 光宣國政 今假行建威將軍・弗斯侯。”

『南齊書』卷58、列伝39 百濟国 “是歲 魏虜又發騎數十萬攻百濟 入其界。牟大遣將沙法名・贊首流・解禮昆・木干那 率衆襲擊虜軍 大破之。”

『南齊書』卷58、列伝39 倭国 “建元元年 進新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓(慕韓)六國諸軍

事安東大將軍倭王武 號爲鎮東大將軍。”

『梁書』卷54、列傳48 諸夷 百濟傳 “普通二年 王餘隆始復遣使奉表稱 累破句驪 今始與通好 而百濟更爲強國。”

『梁職貢圖』百濟國使 凶經 “普通二年 其王餘隆 遣使奉表云 累破高麗。所治城曰固麻。謂邑檐魯 於中國郡縣。有二十二 檐魯 分子弟宗族爲之。旁小國有叛波·卓·多羅·前羅·斯羅·止迷·麻連·上己文·下枕羅等附之。”

『北史』卷94、列傳82 百濟 “其都曰居拔城 亦曰固麻城。其外更有五方 中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城。(中略) 各有部司 分掌衆務。內官有前內部·穀內部·內掠部·外掠部·馬部·刀部·功德部·藥部·木部·法部·後宮部。外官有司軍部·司徒部·司空部·司寇部·點口部·客部·外舍部·綱部·日官部·市部。長吏三年一交代。都下有萬家 分爲五部 曰上部·前部·中部·下部·後部 部有五巷 士庶居焉。部統兵五百人。五方各有方領一人 以達率爲之 方佐貳之。方有十郡 郡有將三人 以德率爲之。統兵一千二百人以下 七百人以上。城之內外人庶及餘小城 咸分隸焉。

『北史』卷94、列傳82 室韋國(南室韋) “多猪·牛。(中略) 其國無鐵、取給於高麗。多貂。”

『宋書』卷97、列傳57 夷蠻傳 東夷 高句驪國 “高句驪王高璉 晉安帝義熙九年 遣長史高翼 奉表獻赭白馬。(中略) 璉每歲遣使 十六年 太祖欲北討 詔璉送馬、璉獻馬八百匹。(中略) 大明三年 又獻肅慎氏楛矢石弩。”

『宋書』卷97、列傳57 夷蠻傳 百濟國 “(元嘉)七年 百濟王餘毗 復修貢職 以映爵號授之。二十七年 毗上書獻方物 私假臺使馮野夫西河太守 表求易林·式占·腰弩 太祖並與之。”

『宋書』卷97、列傳57 百濟國 “毗死 子慶代立 世祖大明元年 遣使求除授 詔許。二年 慶遣使上表曰「臣國累葉 偏受殊恩 文武良輔 世蒙朝爵。行冠軍將軍右賢王餘紀等十一人 忠勤宜在顯進 伏願垂愍 並聽賜除。」仍以行冠軍將軍右賢王餘紀 爲冠軍將軍。以行征虜將軍左賢王餘昆·行征虜將軍餘暈 並爲征虜將軍。以行輔國將軍餘都·餘乂 並爲輔國將軍。以行龍驤將軍沐衿·餘爵 並爲龍驤將軍。以行寧朔將軍餘流·麋貴 並爲寧朔將軍。以行建武將軍于西·餘婁 並爲建武將軍。太宗泰始七年 又遣使貢獻。”

『宋書』卷97、列傳57 夷蠻傳 東夷 “倭國 在高驪東南大海中 世修貢職。高祖永初二年 詔曰 倭讚萬里修貢 遠誠宜甄 可賜除授。太祖元嘉二年 讚又遣司馬曹達 奉表獻方物。讚死 弟珍立 遣使貢獻。自稱使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王。表求除正。詔除安東將軍倭國王。珍又求除正倭隋等十三人平西征虜冠軍輔國將軍號。詔竝聽。二十年 倭國王濟 遣使奉獻。復以爲安東將軍倭國王。二十八年 加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王。(中略) 詔除武使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王。”

『宋書』卷97、列傳57 夷蠻傳 東夷 “順帝昇明二年 遣使上表曰 封國偏遠 作藩于外。自昔祖禰躬擐甲冑 跋涉山川 不遑寧處。東征毛人五十五國 西服衆夷六十六國 渡平海北九十五國。”

『隋書』卷81、列伝46 新羅国 “其官有十七等 其一曰伊罰干 貴如相國 次伊尺干 次迎干 次破彌干 次大阿尺干 次阿尺干 次乙吉干 次沙咄干 次及伏干 次大奈摩干 次奈摩 次大舍 次小舍 次吉土 次大烏 次小烏 次造位。”

『梁書』卷54、列伝48 新羅 “其官名 有子賁早支 齊早支 謁早支 壹告支 奇貝早支。”

『魏書』契丹国伝 太和 3年 “高句麗竊與蠕蠕謀 欲取地豆于以分之。契丹懼其侵軼 其莫弗賀勿于率其部車三千乘・衆萬餘口 驅徙雜畜 求入内附 止於白狼水東。”

『魏書』卷100、列伝88 百濟国 “延興二年 其王餘慶始遣使上表曰（下略）。”

『魏書』卷100、列伝88 高句麗 “後貢使相尋 歲致黄金二百斤 白銀四百斤。”

『資治通鑑』卷104、晋紀26 太元2年 “春 高句麗・新羅・西南夷 皆遣使入貢于秦。”

『晋書』卷9、帝紀9 簡文帝 咸安2年 “春正月辛丑 百濟・林邑王各遣使貢方物。（中略）六月 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍領樂浪太守。”

#### [論著]

岡内三真、1996. 「前方後円形墳の築造モデル」、『韓国の前方後円墳』、雄山閣。

江上波夫、1984. 「日本における国家の形成—倭人の国から大和朝廷へ—」、『東洋研究』72。

江上波夫、1992. 『江上波夫の日本古代史—騎馬民族説四十五年—』、東京：大巧社。

江畑武、1968. 「四～六世紀の朝鮮三国と日本—中国との冊封をめぐる—」、『朝鮮史研究会論文集』4。

姜鍾薰、2008. 「5세기 후반 고구려와 신라의 국경선(5世紀後半高句麗と新羅の国境線)」、『韓國古代 四國의 國境線(韓国古代四国の国境線)』、書景文化社。

慶星大學校博物館、2000. 『金海大成洞古墳群 I』、釜山：慶星大學校博物館。

高寛敏、1996. 「五世紀、新羅の北辺」、『三国史記の原典的研究』、雄山閣出版；1997. 『古代朝鮮諸国と倭国』、雄山閣出版。

高橋健自、1914. 「京畿旅行談」、『考古学雑誌』5-3。

古田武彦、1973. 『失われた九州王朝』、朝日新聞社。

郭長根、2004. 「호남동부지역의 가야세력과 그 성장과정(湖南東北地域の加耶勢力とその成長過程)」、『湖南考古學報』20。

菅政友、1907. 「大和国石上神宮寶庫所藏七支刀」、『菅政友全集』雜稿 1。

関晃、1956. 『帰化人』、至文堂。

関晃、1996. 『古代の帰化人』(関晃著作集 第三卷)、吉川弘文館。

橋本達也、2002. 「古墳時代甲冑の系譜—朝鮮半島との関係—」、『第5回 歴博国際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 発表要旨』、佐倉：国立歴史民俗博物館。

国立公州博物館・忠南大學校博物館、1999. 『大田 月坪洞遺蹟』。

宮崎市定、1959. 「三韓時代の位階制について」、『朝鮮学報』14。

宮崎市定、1982. 「七支刀銘文試釈」、『東方学』64。

宮崎市定、1983. 『謎の七支刀—五世紀の東アジアと日本—』、中央公論社。

- 宮崎市定, 1992. 『謎の七支刀』(文庫版)、中央公論社。
- 權五榮, 1999. 『북암리고분군(北岩里古墳群)』, 全南大博物館。
- 權五榮, 2003. 「백제의 對中交渉의 進展과 文化變動(百濟の對中交渉の進展と文化變動)」, 『강좌 한국고대사(講座韓國古代史)』 第4卷、駕洛國史蹟開發研究院。
- 權鶴洙, 1994. 「가야 제국의 상관관계와 연맹구조(加耶諸國의 相關關係と連盟構造)」, 『韓國考古學報』 31。
- 鬼頭清明, 1974. 「加羅諸國의 史的發展について」, 『古代朝鮮と日本』, 龍溪書舍。
- 鬼頭清明, 1994. 『大和朝廷と東アジア』, 吉川弘文館。
- 金琪燮, 2000. 『백제와 근초고왕(百濟と近肖古王)』, 學研文化社。
- 金斗喆, 2003. 「武器·武具 및 馬具를 통해 본 加耶의 戰爭(武器·武具および馬具を通じて見た加耶の戰爭)」, 『加耶考古學의 새로운 照明(加耶考古學의 新しい照明)』, 韓國民族文化研究所編, 서울: 慧眼。
- 金斗喆, 2004. 「加耶と倭の馬具」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』 110, 佐倉。
- 金斗喆, 2005. 「4세기 후반 ~ 5세기 초 고구려·가야·왜의 무기·무장체계 비교(4世紀後半~5世紀初高句麗·加耶·倭의 武器·武装体系의 比較)」, 『광개토대왕비와 한일관계(廣開土大王碑と韓日關係)』, 韓日關係史研究論集編纂委員會編, 景仁文化社。
- 今西龍, 1919. 「加羅疆域考」, 『史林』 4-3·4。
- 今西龍, 1922. 「己汶伴跋考」, 『史林』 7-4。
- 今西龍, 1970. 『朝鮮古史의 研究』, 国書刊行会。
- 金錫亨, 1963. 「삼한 삼국의 일본열도 내 분국에 대하여(三韓三國의 日本列島內分國について)」, 『歷史科學』 1963-1。
- 金錫亨, 1966. 『초기조일관계연구(初期朝日關係研究)』, 社會科學出版社。
- 金錫亨, 1988. 『초기조일관계사 (하)(初期朝日關係史(下))』, 社會科學出版社。
- 金世基, 1995. 「대가야 묘제의 변천(大加耶墓制의 變遷)」, 『가야사연구(加耶史研究)』, 慶尙北道。
- 金世基, 1997. 「加耶의 殉葬과 王權(加耶의 殉葬と王權)」, 『加耶諸國의 王權(加耶諸國의 王權)』, 新書苑。
- 金世基, 2003. 『고분 자료로 본 대가야 연구(古墳資料で見る大加耶研究)』, 學研文化社。
- 金世基, 盧重國, 朴天秀, 李明植, 李熙濬, 朱甫暎 編, 1998. 『가야문화도록(加耶文化函錄)』, 慶尙北道。
- 金英心, 1990. 「5~6세기 百濟의 地方統治體制(5~6世紀百濟의 地方統治体制)」, 『韓國史論』 22。
- 金元龍·李熙濬, 1987. 「서울 석촌동 3호분의 연대(서울石村洞3號墳의 年代)」, 『斗溪 李丙燾博士 九旬記念 韓國史學論叢』。
- 金在弘, 2006. 「大加耶地域의 鐵製農器具—小形鐵製農器具와 살포를 중심으로—(大加耶地域의 鐵製農器具—小形鐵製農器具とサルポを中心に—)」, 『大加耶의 成長과 發展(大加耶의 成長

- と発展』、高靈郡·韓國古代史学会。
- 金正完、1997. 「신라와 가야토기의 발생 및 변화과정(新羅と加耶土器の發生および變化過程)」、『한국고대의 토기(韓國古代の土器)』、國立中央博物館。
- 金廷鶴、1982. 「古代國家의 發達(加耶)(古代國家の發達(加耶))」、『韓國考古學報』 12、韓國考古學會。
- 金廷鶴、1987. 「加耶의 國家形成段階(加耶の國家形成段階)」、『精神文化研究』 32。
- 金昌錫、2004. 「高句麗 초·중기의 對中 교섭과 교역(高句麗初·中期の對中交渉と交易)」、『新羅文化』 24、東國大學校 新羅文化研究所。
- 金哲垞、1952. 「新羅 上代社會의 Dual Organization(新羅上代社會のDual Organization)」、『歷史學報』 12。
- 金泰植·宋桂鉉、2003. 『韓國의 騎馬民族論(韓國の騎馬民族論)』、果川: 韓國馬事會·馬事博物館。
- 金泰植外6人、2008. 『韓國 古代 四國의 國境線(韓國古代四國の國境線)』、書景文化社。
- 金泰植、1985. 「5세기 후반 大加耶의 발전에 대한 研究(5世紀後半大加耶の發展に対する研究)」、『韓國史論』 12、ソウル大學校國史學科; 1988. 再收録(日本語訳)、『先史·古代の韓國と日本』(齋藤忠·江坂輝彌編)、築地書館。
- 金泰植、1986. 「後期加耶諸國의 성장기반 고찰(後期加耶諸國の成長基盤の考察)」、『釜山史學』 11、釜山史學會。
- 金泰植、1988. 「6세기 전반 加耶南部諸國의 소멸과정 고찰(6世紀前半加耶南部諸國の消滅過程の考察)」、『韓國古代史研究』 1、韓國古代史研究會。
- 金泰植、1991. 「書評: 조희승·김석형著 『초기조일관계사』(상)·(하) (書評: チョ·フィスン·金錫亨著『初期朝日關係史』(上)·(下))」、『韓國古代史論叢』 1、駕洛國史蹟開發研究院。
- 金泰植著、淺井良純訳、1993. 「六世紀中葉加耶連盟의 滅亡過程」、『朝鮮學報』 146、天理: 朝鮮學會。
- 金泰植、1993. 『加耶聯盟史』、ソウル: 一潮閣。
- 金泰植、1994. 「廣開土王陵碑文의 任那加羅와 '安羅人戍兵'(廣開土王陵碑文の任那加羅と'安羅人戍兵'))」、『韓國古代史論叢』 6、ソウル: 駕洛國史蹟開發研究院。
- 金泰植、1994. 「咸安 安羅國의 成長과 變遷(咸安安羅國の成長と變遷)」、『韓國史研究』 86、ソウル: 韓國史研究會。
- 金泰植、1997. 「百濟의 加耶地域 關係史: 交渉과 征服(百濟の加耶地域關係史: 交渉と征服)」、『백제의 중앙과 지방(百濟の中央と地方)』、忠南大學校 百濟研究所。
- 金泰植、1998. 「日本書紀에 나타난 韓國古代史像(日本書紀に見える韓國古代史像)」、『韓國古代史研究』 14輯、韓國古代史學會。
- 金泰植、2002. 『미완의 문명 7백년 가야사 1권(未完の文明七百年加耶史 1卷)』、푸른역사(プルンヨクサ)。
- 金泰植、2002. 『미완의 문명 7백년 가야사 2권(未完の文明七百年加耶史 2卷)』、푸른역사(プル

- ンヨクサ)。
- 金泰植、2003. 「初期 古代國家論」、『講座 韓國古代史 제2권: 고대국가의 구조와 사회(1) (講座 韓國古代史第2卷: 古代國家の構造と社会(1))』、駕洛國史蹟開發研究院。
- 金泰植、2004. 「加耶史輕視論への批判」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集、佐倉: 国立歴史民俗博物館。
- 金泰植、2005. 「4世紀의 韓日關係史—廣開土王陵碑文의 倭軍問題를 中心으로—(4世紀の韓日關係史—廣開土王陵碑文の倭軍問題を中心に—)」、『韓日歴史共同研究報告書 第1卷』、韓日歴史共同研究委員會。
- 金泰植、2006. 「5~6세기 高句麗와 加耶의 관계(5~6世紀高句麗と加耶の關係)」、『北方史論叢』11号、高句麗歴史財團。
- 金泰植、2006. 「韓國 古代諸國의 對外交易—加耶를 中心으로—(韓國古代諸國の對外交易—加耶を中心に—)」、『震檀學報』101。
- 金泰植、2007. 「加耶와의 관계(加耶との關係)」、『百濟文化史大系 第9卷: 百濟의 對外交渉(百濟の對外交渉)』、公州: 忠清南道歴史文化研究院。
- 金泰植、2008. 「고대 한일관계사의 새로운 지평—박천수, 2007.11 “새로 쓰는 고대 한일교섭사”、사회평론—(古代韓日關係史の新しい地平—朴天秀, 2007. 11“新しい古代韓日交渉史”、社会評論)」、『韓國古代史研究』50、韓國古代史学会。
- 金鉉球、1985. 『大和政權の對外關係研究』、東京: 吉川弘文館。
- 金鉉球、1993. 『任那日本府研究』、一潮閣。
- 旗田巍、1975. 「三国史記新羅本紀にあらわれた倭」、『日本文化と朝鮮』2。
- 吉田晶、1975. 「古代國家の形成」、『岩波講座日本歴史』2。
- 吉村武彦、2006. 「ヤマト王權と律令制國家の形成」、『列島の古代史8 古代史の流れ』、岩波書店。
- キム・ビョンナム、2002. 「백제 웅진시대의 북방 영역(百濟熊津時代の北方領域)」、『白山學報』64。
- キム・ビョンナム、2004. 「백제 웅진 천도 초기의 북방영역 관련 지명 분석(百濟熊津遷都初期の北方領域関連地名の分析)」、『韓國上古史學報』52。
- キム・ヨングァン、2000. 「백제의 웅진천도의 배경과 한성경영(百濟の熊津遷都の背景と漢城經營)」、『忠北史學』11、12合。
- 南在祐、2003. 『安羅國史』、慧眼。
- 盧重國、1988. 『百濟政治史研究』、一潮閣。
- 盧重國、1991. 「百濟의 檐魯制 實施와 編制基準(百濟의 檐魯制의 實施と編制基準)」、『啓明史學』2。
- 盧重國、1995. 「大加耶의 政治·社會構造(大加耶の政治·社会構造)」、『加耶史研究』、慶尚北道。
- 盧重國、2005. 「5세기 한일관계사—“宋書” 倭國傳의 검토—(5世紀의 韓日關係史—“宋書”倭國傳의 檢討—)」、『韓日歴史共同研究報告書』第1卷、韓日歴史共同研究委員會。
- 盧重國、2006. 「5~6세기 고구려와 백제의 관계(5~6世紀高句麗と百濟の關係)」、『北方史論叢』

11、高句麗歴史財團。

- 盧泰敦、1975。「三國時代の '部'에 관한 研究—成立과 構造를 中心으로—(三国時代の'部'に関する研究—成立と構造を中心に—)」、『韓國史論』2、ソウル: ソウル大學校國史學科。
- 盧泰敦、1976。「高句麗의 漢水流域 喪失의 原因에 대하여(高句麗の漢水流域喪失の原因について)」、『韓國史研究』13、韓國史研究會。
- 盧泰敦、1982。「三韓에 대한 認識의 變遷(三韓に対する認識の変遷)」、『韓國史研究』38、韓國史研究會。
- 盧泰敦、1989。「蔚珍鳳坪新羅碑와 新羅의 官等制(蔚珍鳳坪新羅碑と新羅の官等制)」、『韓國古代史研究』2。
- 盧泰敦、1999。『고구려사 연구(高句麗史研究)』、ソウル: 四季節。
- 盧泰敦、2000。「초기 고대국가의 국가구조와 정치운영(初期古代国家構造と政治運営)」、『韓國古代史研究』17。
- 大山誠一、1980。「所謂'任那日本府'の成立について」上・中・下、『古代文化』32-9・11・12、京都: 古代学協会。
- 大場磐雄、1929。『石上神宮宝物誌』、吉川弘文館。
- 大沢正己、2004。「金屬組織学からみた日本列島と朝鮮半島の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。
- 都出比呂志、1967。「農具鉄製化の二つの劃期」、『考古学研究』13卷 3号。
- 東潮、1995。「栄山江流域と慕韓」、『展望考古学』、考古学研究会40周年紀念論叢。
- 東潮、2001。「倭と栄山江流域—倭韓の前方後円墳をめぐる—」、『朝鮮学報』179、天理: 朝鮮学会。
- 東潮、2002。「倭と栄山江流域」、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。
- 東潮、2004。「弁辰と加耶の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告 110 —第五回歴博国際シンポジウム: 古代東アジアにおける倭と加耶の交流—』、佐倉: 国立歴史民俗博物館。
- 藤間生大、1968。『倭の五王』、岩波新書。
- 藤間生大、1968。「七支刀」、『倭の五王』、岩波新書。
- 藤尾慎一郎、2004。「弥生時代の鉄」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。
- 柳沢一男、2002。「全南地方の栄山江型石室の系譜と前方後円墳」、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。
- 柳沢一男、2008。「韓国の前方後円墳と九州」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- 末松保和、1936。「新羅六部考」; 1954。『新羅史の諸問題』、再収録。
- 末松保和、1949。『任那興亡史』大八洲出版; 1956。再版、吉川弘文館。
- 末永雅雄、1941。「象嵌銘文を有する銚—七支刀」、『日本上代の武器』、弘文堂。
- 木村誠、2000。「百濟史料としての七支刀銘文」、『人文学報』第306号、東京都立大学人文学部。
- 武末純一、2002。「日本の九州および近畿地域における韓国系遺物—土器・鉄器生産関係を中心に—」、『古代 東亞細亞와 三韓・三國의 交渉(古代東亞細亞と三韓・三國の交渉)』、釜山: 福泉博物



館。

武田幸男、1974. 「新羅法興王代の律令と衣冠制」、『古代朝鮮と日本』。

武田幸男、1985. 「四・五世紀の朝鮮諸国」、『シンポジウム好太王碑』、三上次男外、東京：東方書店。

文安植・イ・デソク、2004. 『한국고대의 지방사회—영산강유역의 역사와 문화를 중심으로—(韓國古代の地方社会—榮山江流域の歴史と文化を中心に—)』、慧眼。

朴淳發、1997. 「漢城百濟의 中央과 地方(漢城百濟の中央と地方)」、『백제의 중앙과 지방(百濟の中央と地方)』、忠南大學校百濟研究所。

朴淳發、2000. 「百濟의 南遷과 榮山江流域 政治體의 再編(百濟の南遷と榮山江流域政治体の再編)」、『韓國의 前方後圓墳(韓國の前方後円墳)』、忠南大學校出版部。

朴淳發、2001. 「榮山江流域における前方後円墳の意義」、『朝鮮學報』 179; 2002. 再収録、『前方後円墳と古代日朝關係』、朝鮮学会編、同成社。

朴淳發、2003. 「百濟の南遷と倭」、『檢証古代日本と百濟』、大巧社。

朴升圭、1993. 「慶南 西南部地域 陶質土器에 대한 研究(慶南西南部地域陶質土器に対する研究)」、『慶尙史學』 9、晋州：慶尙大學校。

朴燦圭、1991. 「백제 웅진초기 북경문제(百濟熊津初期の北境問題)」、『史學志』 24。

朴天秀、1995. 「渡來系文物에서 본 加耶와 倭에서의 政治的 變動(渡來系文物から見た加耶と倭における政治的變動)」、『待兼山論叢』(史學編29)、大阪：大阪大学文学部。

朴天秀、1996. 「大加耶의 古代國家 形成(大加耶の古代国家形成)」、『碩晤尹容鎮教授停年退任紀念論叢』。

朴天秀、1996. 「日本 속의 加耶文化(日本の中の加耶文化)」、『加耶史의 새로운 理解(加耶史の新しい理解)』(發表要旨)、韓國古代史研究會。

朴天秀、1997. 「政治體의 相互關係로 본 大加耶王權(政治体の相互關係で見た大加耶王權)」、『加耶諸國의 王權(加耶諸国の王權)』、仁濟大加耶文化研究所編、新書苑。

朴天秀、1998. 「대가야의 역사와 유적(大加耶の歴史と遺跡)」、『加耶文化圖錄』、慶尙北道。

朴天秀、1999. 「器臺를 통하여 본 加耶勢力의 動向(器臺を通じて見た加耶勢力の動向)」、『加耶의 그릇받침(加耶の器台)』、國立金海博物館。

朴天秀、2002. 「考古資料를 통해 본 古代 韓半島와 日本列島의 相互作用(考古資料を通じて見る古代朝鮮半島と日本列島)」、『韓國古代史研究』 27、韓國古代史學會。

朴天秀、2002. 「榮山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」、『考古學研究』 49-2、岡山：考古學研究会。

朴天秀、2003. 「榮山江流域と加耶地域における倭系古墳の出現過程とその背景」、『熊本古墳研究』 1、熊本：熊本古墳研究会。

朴天秀、2003. 「榮山江流域における前方後円墳の出現の歴史的背景」、『東アジアの古代文化』 117、東京：大和書房。

朴天秀、2004. 「榮山江流域における前方後円墳が提起する諸問題」、『歴史と地理』 577、東京：山川出版社。

- 朴天秀、2006. 「임나사현과 기문·대사를 둘러싼 백제와 대가야(任那四県と己汶・帶沙をめぐる百済と大加耶)」、『가야, 낙동강에서 영산강으로(加耶, 洛東江 から 榮山江 へ)』、第12回加耶史國際學術會議發表資料集、金海市。
- 朴天秀、2007. 『加耶と倭 韓半島と日本列島の考古学』、講談社。
- 朴天秀、2007. 『새로 쓰는 古代 韓日交渉史(新しい古代韓日交渉史)』、ソウル: 社會評論。
- 朴天秀、2008. 「榮山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- 朴漢濟、1988. 『中國中世胡漢體制研究』、一潮閣。
- 白石太一郎、2000. 『古墳と古墳群の研究』、塙書房。
- 白石太一郎、2002. 「倭国誕生」、『倭国誕生』(日本の時代史1)、吉川弘文館。
- 白石太一郎、2006. 「倭国の形成と展開」、『古代史の流れ: 列島の古代史8』、岩波書店。
- 白承玉、2003. 『加耶 各國史 研究』、慧眼。
- 白承忠、1995. 『加耶 地域聯盟史 研究』、釜山大博士学位論文。
- 白承忠、2003. 「‘임나일본부’와 ‘왜계백제관료’(‘任那日本府’と‘倭系百済官僚’)」、『강좌 한국고대사(講座韓国古代史)』 第4卷、駕洛國史蹟開發研究院。
- 白承忠、2005. 「日本書紀 神功紀 소재 한일관계 기사의 성격(日本書紀神功紀所在韓日關係記事の性格)」、『광개토대왕비와 한일관계(廣開土王碑と韓日關係)』、韓日關係史研究論集編纂委員會編、景仁文化社。
- 福山敏男、1951. 「石上神宮の七支刀 補考」、『美術研究』 162。
- 福山敏男、1951. 「石上神宮の七支刀」、『美術研究』 158。
- 福山敏男、1952. 「石上神宮の七支刀 再補」、『美術研究』 165。
- 福山敏男、1969. 『日本建築史研究』。
- 福山敏男、1971. 『論集日本文化の起源』 第二卷、平凡社。
- 樞本社人、1952. 「石上神宮の七支刀と其銘文」、『朝鮮學報』 3、天理: 朝鮮学会。
- 濱田耕策、2005. 「4世紀의 日韓關係(4世紀の日韓關係)」、『韓日歷史共同研究報告書』 第1卷、韓日歷史共同研究委員會。
- 山崎雅稔、2002. 「廣開土王時代の高句麗の南進と倭王権の展開」、『廣開土太王斗 高句麗 南進政策(廣開土太王と高句麗の南進政策)』、高句麗研究會 編、學研文化社。
- 山尾幸久、1978. 「任那に関する一試論—史料の検討を中心に—」、『古代東アジア史論集』 下卷(末松保和博士古稀記念會編)、吉川弘文館。
- 山尾幸久、1983. 『日本古代王権形成史論』、岩波書店。
- 山尾幸久、1989. 『古代の日朝關係』、塙書房。
- 山尾幸久、2001. 「五、六世紀の日朝關係—韓国の前方後円墳の一解釈—」、『朝鮮學報』 179、朝鮮学会。
- 森公章、2006. 『東アジアの動乱と倭国』、吉川弘文館。
- 三品彰英、1962. 『日本書紀 朝鮮關係記事 考証』 上卷、東京: 吉川弘文館。

- 三品彰英、1962. 「石上神宮の七支刀」、『日本書紀朝鮮関係記事考証』上、吉川弘文館。
- 上田正昭、1965. 『帰化人—古代国家の成立をめぐる一』、東京：中央公論社。
- 上田正昭、1971. 「石上神宮と七支刀」、『日本なかの朝鮮文化』9。
- 西谷正、2002. 「韓国の前方後円墳をめぐる諸問題」、『前方後円墳と古代日朝関係』、朝鮮学会編、同成社。
- 西田長男、1956. 「石上神宮の七支刀の銘文」、『日本古典の史的研究』、理想社。
- 石母田正、1962. 「古代史概説」、『岩波講座日本歴史』1、東京：岩波書店。
- 石母田正、1973. 『日本古代国家論』、岩波書店；1989. 『石母田正著作集』4。
- 石井正敏、2005. 「5世紀의 日韓關係—倭의 五王과 高句麗·百濟—(5世紀の日韓關係—倭の五王と高句麗·百濟)」、『韓日歴史共同研究報告書』第1巻、韓日歴史共同研究委員會。
- 星野恒、1892. 「七枝刀考」、『史学雑誌』37、東京。
- 小島憲之、1962. 『上代日本文学と中国文学』上、塙書房。
- 孫永鐘、1983. 「백제 7지도의 명문해석에서 제기되는 몇 가지 문제(百濟七支刀の銘文解釈で提起されるいくつかの問題)」(1)、『歴史科學』1983-4。
- 宋桂鉉、2000. 「토론 요지: 금관가야의 성립과 연맹의 형성(討論要旨: 金官加耶の成立と連盟の形成)」、『가야 각국사의 재구성(加耶各国史の再構成)』、釜山大學校民族文化研究所編、ソウル: 慧眼。
- 宋桂鉉、2004. 「加耶古墳の甲冑の変化と韓日關係」、『国立歴史民俗博物館研究報告』110、佐倉。
- 松木武彦、1999. 「古墳時代の武装と戦闘」、『戦いのシステムと対外戦略』、東京：東洋書林。
- 松下見林、1688. 『異称日本伝』卷下、東国通鑑卷之一 新羅始祖八年条 註釈 “仍齎赤絹一百疋 賜任那王 然新羅人遮之於道而奪焉 其二國之怨 始起於此際矣 終至神功皇后得征之 蓋爲任那征之也 (中略) 於是 韓地置日本府 任宰以治之 新羅當親戴我與天地不變 而時逆天昔孟 違我恩義 數侵任那 至欽明天皇二十三年 新羅遂滅任那 自神功皇后以來五百九十三年 任那之存如此永久也 此非神功皇后之大神餘烈乎。”
- 順天大學校博物館、韓國上古史學會、2008. 『전남동부지역의 가야문화(全南東部地域の加耶文化)』、第36回韓國上古史学会學術發表大会、2008年11月14日、順天大學校70周年記念館2階大會議室。
- 申敬澈、1994. 「가야 초기마구에 대하여(加耶の初期馬具について)」、『釜大史學』18。
- 申敬澈、2000. 「고대의 낙동강, 영산강, 그리고 왜(古代の洛東江、榮山江、そして倭)」、『한국의 전방후원분(韓国の前方後円墳)』、忠南大出版部。
- 申敬澈、2000. 「금관가야의 성립과 연맹의 형성(金官加耶の成立と連盟の形成)」、『가야 각국사의 재구성(加耶各国史の再構成)』、釜山大學校 韓國民族文化研究所編、ソウル: 慧眼。
- 申大坤、2001. 「榮山江流域의 前方後円墳」、『飛鳥の王權と加賀の渡来人』、金沢: 石川県立歴史博物館。
- 神保公子、1981. 「七支刀銘文の解釈をめぐる一」、『東アジア世界における日本古代史講座』3。
- 辻秀人、2006. 「榮山江流域의 前方後圓墳과 倭國 周緣地域의 前方後圓墳(榮山江流域의 前方後

- 円墳と倭国周縁地域の前方後円墳」、『百濟研究』44、大田：忠南大學校百濟研究所。
- 辻秀人、2007。「栄山江流域の前方後円墳と倭国周縁域の前方後円墳」、『歴史と文化』42、東北学院大学。
- 安在皓・宋桂鉉、1986。「古式陶質土器에 관한 약간의 고찰—義昌 大坪里出土品을 통하여—(古式陶質土器に関する若干の考察—義昌大坪里出土品を通じて—)」、『嶺南考古學』1、大邱：嶺南考古學會。
- 安在皓、1997。「鐵鎌의 변화와 劃期(鐵鎌の変化と画期)」、『加耶考古學論叢』2、ソウル：駕洛國史蹟開發研究院。
- 梁起錫、2005。「5~6세기 백제의 북계 —475~551 백제의 한강유역 영유문제를 중심으로—(5~6世紀百濟の北界—475~551百濟の漢江流域領有問題を中心に—)」、『博物館紀要』20、檀國大學校 昔宙善記念博物館。
- 余昊奎、1995。「3세기 고구려의 사회변동과 통치체제의 변화(3世紀高句麗の社会變動と統治体制の変化)」、『역사와 현실(歴史と現実)』15、韓國歷史研究會。
- 余昊奎、1999。「高句麗 中期의 武器體系와 兵種構成(高句麗中期の武器体系と兵種構成)」、『韓國軍事史研究』2号、ソウル：國防軍史研究所。
- 余昊奎、2000。「4세기 동아시아 국제질서와 고구려 대외정책의 변화—對前燕關係를 중심으로—(4世紀東アジア国際秩序と高句麗對外政策の变化—對前燕關係を中心に—)」、『역사와현실(歴史と現実)』36、ソウル：歴史批評社。
- 延敏洙、1990。「六世紀前半 加耶諸國을 둘러싼 百濟·新羅의 動向 —소위 '任那日本府'說의 究明을 위한 序章—(6世紀前半加耶諸國をめぐる百濟·新羅の動向—いわゆる'任那日本府'說の究明のための序章—)」、『新羅文化』7、東國大學校新羅文化研究所。
- 延敏洙、1990。「任那日本府論—소위 日本府官人의 出自을 中心으로—(任那日本府論—いわゆる日本府官人の出自を中心に—)」、『東國史學』24、東國史學會。
- 延敏洙、1992。「日本書紀의 '任那의 調'關係記事의 檢討」、『九州史學』105。
- 延敏洙、1994。「七支刀銘文의 再檢討—年号の問題と製作年代を中心に—」、『年報 朝鮮學』第4号。
- 延敏洙、1998。『古代韓日關係史』、慧眼。
- 鈴木英夫、1987。「加耶·百濟と倭—'任那日本府'論—」、『朝鮮史研究会論文集』24。
- 鈴木英夫、1996。『古代倭国と朝鮮諸国』、青木書店。
- 鈴木英夫、2008。「韓國の前方後円墳と倭の史的動向」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- 鈴木靖民、1983。「石上神宮七支刀銘についての一試論」、『坂本太郎頌寿記念日本史學論集』上。
- 鈴木靖民、1985。「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」、『岩波講座日本歴史』1(原始・古代1)。
- 鈴木靖民、1988。「好太王碑の倭の記事と倭の実体」、『好太王碑と集安の壁画古墳』、讀賣テレビ放送編、東京：木耳社。
- 鈴木靖民、2002。「倭国と東アジア」、『日本の時代史2 倭国と東アジア』、東京：吉川弘文館。
- 奥田尚、1976。「'任那日本府'と新羅倭典」、『古代国家の形成と展開』、吉川弘文館。

- 王健群著、林東錫訳、1985. 『廣開土王碑研究』、ソウル: 역민사(ヨクミンサ)。
- 王健群、1984. 『好太王碑研究』、吉林出版社。
- 王健群、1992. 「임나일본부와 왜의 오왕(任那日本府と倭の五王)」、『加耶文化』5輯。
- 禹在柄、2004. 「榮山江流域 前方後圓墳의 出現과 그 背景(榮山江流域前方後円墳の出現とその背景)」、『湖西考古學』10、湖西考古學會。
- 熊谷公男、2001. 『日本の歴史03 大王から天皇へ』、講談社。
- 윤·손요ン、1997. 「고구려 귀족회의의 성립과정과 그 성격(高句麗貴族會議の成立過程とその性格)」、『韓國古代史研究』11、韓國古代史研究會。
- 尹龍九、1989. 「樂浪前期 郡縣支配勢力의 種族系統과 性格(樂浪前期の郡縣支配勢力の種族系統と性格)」、『歷史學報』126、歷史學會。
- 尹日寧、1990. 「關彌城位置考 一廣開土王碑文·三国史記·大東地志를 바탕으로—(關彌城位置考 一廣開土王碑文·三国史記·大東地志をもとに—)」、『北岳史論』2、國民大史學科。
- 尹貞姬、1997. 「小加耶토기의 성립과 전개(小加耶土器の成立と展開)」、慶南大學校大學院碩士學位論文。
- 栗原朋信、1970. 「七支刀の銘文よりみた日本と百濟 東晋の關係」、『歷史教育』18-4。
- 李根雨、1994. 「日本書紀에 인용된 百濟三書에 관한 연구(日本書紀に引用された百濟三書に関する研究)」、『韓國精神文化研究院韓國學大學院文學博士學位論文』。
- 李基白、1978. 「웅진시대 백제의 귀족세력(熊津時代百濟の貴族勢力)」、『百濟研究』9、忠南大百濟研究所。
- 李蘭映·金斗喆、1999. 『韓國의 馬具(韓國の馬具)』、果川: 韓國馬事會 馬事博物館。
- 李道學、1995. 『百濟古代國家研究』、ソウル: 一志社。
- 李東熙、2004. 「전남동부지역 가야계 토기와 역사적 성격(全南東部地域加耶系土器と歴史的 성격)」、『韓國上古史學報』46。
- 李東熙、2006. 『順天 雲坪里 古墳 發掘調査 諮問委員會 資料』、全羅南道·順天市·順天大學校博物館。
- 李東熙、2007. 「백제의 전남 동부 지역 진출의 고고학적 연구(百濟의 全南東部地域進出의 考古学的研究)」、『韓國考古學報』64輯。
- 李文基、1981. 「金石文資料를 통하여 본 新羅의 六部(金石文資料を通じて見た新羅の六部)」、『歷史教育論集』2。
- 李文基、1989. 「蔚珍鳳坪新羅碑와 中古期の 六部問題(蔚珍鳳坪新羅碑と中古期の六部問題)」、『韓國古代史研究』2。
- 李丙燾、1937. 「三韓問題의 新考察(六)」、『震檀學報』7。
- 李丙燾、1974. 「百濟七支刀考」、『震檀學報』38、ソウル: 震檀學會。
- 李丙燾、1976. 『韓國古代史研究』、ソウル: 博英社。
- 李丙燾、1976. 「加羅諸國의 聯盟體(加羅諸國の連盟體)」、『韓國古代史研究』、博英社。
- 李盛周、1999. 「考古學을 통해 본 阿羅加耶(考古學を通じて見た阿羅加耶)」、『考古學을 통해 본

- 加耶(考古学を通じて見た加耶)』(第23會韓國考古學全國大會發表要旨)、韓國考古學會。
- イ・ヨンシム、2004。「임나일본부의 성격 재론(任那日本府の性格再論)」、『지역과 역사(地域と歴史)』14、釜慶歴史研究所。
- 李永植、1985。「加耶諸國의 國家形成問題—加耶聯盟說의 再檢討와 戰爭記事分析을 중심으로—(加耶諸國の國家形成問題—加耶連盟說の再檢討と戦争記事分析を中心に—)」、『白山學報』32。
- 李永植、1988。「5세기 倭王 稱號의 해석을 둘러싼 一視角(5世紀倭王称号の解釈をめぐる一視角)」、『史叢』34、ソウル。
- 李永植、1990。「古代日本の任那派遣氏族の研究—的臣・吉備臣・河内直を中心として—」、富士ゼロックス・小林節太郎記念基金1989年度研究助成論文。
- 李永植、1993。『加耶諸國と任那日本府』、吉川弘文館、東京。
- 李永植、1995。「百濟의 加耶進出過程(百濟の加耶進出過程)」、『韓國古代史論叢』7、韓國古代社會研究所編、ソウル: 駕洛國史蹟開發研究院。
- 李暎澈、2006。「前方後円形古墳と墳周土器」、『海を渡った日本文化』、鉾脈社。
- 李鎔賢、1997。「五世紀末における加耶の高句麗接近と挫折」、『東アジアの古代文化』90。
- 李鎔賢、1999。『加耶と東アジア諸國』、日本 國學院大學大学院博士学位論文。
- 李鎔賢、2008。「韓國古代における全羅道と百濟・加耶・倭」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- 李在碩、2004。「소위 任那問題의 過去와 現在—문헌사학의 입장에서—(いわゆる任那問題の過去と現在—文献史学の立場から—)」、『全南史學』23。
- 李正鎬、1999。「영산강유역의 고분 변천과정과 그 배경(榮山江流域の古墳の変遷過程とその背景)」、『榮山江流域의 古代社會(榮山江流域の古代社会)』、崔盛洛編著、學研文化社。
- 李鍾旭、1980。「新羅上古時代의 六村과 六部(新羅上古時代の六村と六部)」、『震檀學報』49。
- 李進熙、1987。「日本にある百濟の金石史料」、『馬韓百濟文化研究の成果と課題』(第九回馬韓百濟文化國際學術會議)、圓光大學校 馬韓百濟文化研究所。
- 李漢祥、1995。「5~6세기 新羅의 邊境支配方式(5~6世紀新羅の辺境支配方式)」、『韓國史論』33、ソウル大學校國史學科。
- 李賢惠、1988。「4세기 加耶社會의 交易體系의 變遷(4世紀加耶社会の交易体系の変遷)」、『韓國古代史研究』1、韓國古代史研究會。
- 李賢惠、2000。「4~5세기 영산강 유역 토착세력의 성격(4~5世紀榮山江流域の土着勢力の性格)」、『歷史學報』166。
- 李炯基、2009。『大加耶의 形成과 發展 研究(大加耶の形勢と發展の研究)』、景仁文化社。
- 李熙濬、1995。「토기로 본 대가야의 권역과 그 변천(土器で見る大加耶の圏域とその変遷)」、『加耶史研究』、慶尚北道。
- 李熙濬、2007。『新羅考古學研究』、社會評論。
- 韓日歴史共同研究委員会、2005。『韓日歴史共同研究報告書 第1分科篇』、東京: 日韓歴史共同研究委員会。

- 林起煥、1995. 「4세기 고구려의 樂浪·帶方地域 경영 (4世紀高句麗の樂浪・帶方地域經營)」、『歷史學報』147、歷史學會。
- 林起煥、1995. 「高句麗 集權體制 成立過程의 研究 (高句麗集權體制成立過程の研究)」、慶熙大學校大學院博士学位論文。
- 林起煥、2004. 『고구려 정치사 연구 (高句麗政治史研究)』、ソウル: 한나래 (한나래)。
- 林起煥、2004. 「고구려와 낙랑의 관계 (高句麗と樂浪の關係)」、『韓國古代史研究』34、韓國古代史學會。
- 林永珍、1997. 「湖南地域 石室墳과 백제의 관계 (湖南地域石室墳と百濟の關係)」、『湖南考古學의 제문제 (湖南考古學의諸問題)』、第21回韓國考古學會發表要旨、韓國考古學會。
- 林永珍、2000. 「영산강유역 석실봉토분의 성격 (榮山江流域石室封土墳의 성격)」、『영산강유역 고대사회의 새로운 조명 (榮山江流域古代社會의 새로운 照明)』、木浦: 歷史文化學會·木浦大博物館。
- 林永珍、2003. 「百濟의 成長と馬韓勢力、そして倭」、『檢証古代日本と百濟』、大巧社。
- 全德在、1992. 「新羅 6部體制의 變動過程 研究 (新羅6部體制의變動過程研究)」、『韓國史研究』77。
- 全德在、1996. 『新羅六部體制研究』、一潮閣。
- 全德在、2000. 「7세기 中盤 관직에 대한 관등규정의 정비와 골품제의 확립 (7世紀中盤官職に對する官等規制の整備と骨品制の確立)」、河一植外5人共著、『한국 고대의 신분제와 관등제 (韓國古代의身分制と官等制)』、アカネット。
- 全榮來、1985. 「百濟南方境域의 變遷 (百濟南方境域의變遷)」、『千寬宇先生還曆紀念 韓國史學論叢』。
- 田中俊明、1992. 『大加耶連盟의 興亡と‘任那’』、吉川弘文館。
- 田中俊明、2001. 「韓國의 前方後円形古墳의 被葬者·造墓集團에 對する私見」、『朝鮮學報』179; 2002. 再收錄、『前方後円墳と古代日朝關係』、朝鮮學會編、同成社。
- 田中晋作、1990. 「百舌鳥·古市古墳群의 被葬者의 性格에 對하여」、『古代學研究』122、古代學協會。
- 田中晋作、2000. 「巴形銅器에 對하여」、『古代學研究』151。
- 田中晋作、2004. 「古墳時代의 軍事組織에 對하여」、『國立歷史民俗博物館研究報告』110、佐倉。
- 鮎貝房之進、1937. 「日本書紀朝鮮地名考」、『雜攷』7 下卷。
- 井上秀雄、1959. 「いわゆる任那日本府에 對하여」、『國史論叢』1。
- 井上秀雄、1966. 「任那日本府의 行政組織」、『日本書紀研究』2。
- 井上秀雄、1973. 『任那日本府と倭』、東出版。
- 鄭孝雲、2005. 「6世紀東亞政勢と‘任那日本府’」、『日語日文學』27、大韓日語日文學會。
- 鄭孝雲、2007. 「중간자적 존재로서의 ‘임나일본부’ (中間者的存在としての‘任那日本府’)」、『東亞文化研究』13。
- 趙榮濟、1986. 「西部慶南 爐形土器에 對하여 一考察 (西部慶南爐形土器에 對する一考察)」、『慶尙

- 史學』2、晉州：慶尙大學校。
- 佐伯有清、1977. 『七支刀と廣開土王碑』、吉川弘文館。
- 朱甫暎、1982. 「加耶滅亡問題에 대한 一考察—新羅의 膨脹과 關聯하여—(加耶滅亡問題に対する一考察—新羅の膨脹と関連して—)」、『慶北史學』4。
- 朱甫暎、1992. 「三國時代의 貴族과 身分制(三国時代の貴族と身分制)」、『韓國社會發展史論』、一潮閣。
- 朱甫暎、1995. 「序說—加耶史의 새로운 定立을 위하여(序說—加耶史の新しい定立のために—)」、『加耶史研究』、慶尙北道。
- 朱甫暎、2000. 「백제의 영산강유역 지배방식과 전방후원분 피장자의 성격(百濟の榮山江流域の支配方式と前方後円墳被葬者の性格)」、『한국의 전방후원분(韓國の前方後円墳)』、忠南大出版部。
- 酒井清治、2001. 「倭における初期須恵器の系譜と渡来人」、『4～5世紀 東亞細亞 社會와 加耶(4～5世紀東亞細亞社会と加耶)』、第7回 加耶史國際學術會議發表要旨、金海。
- 中村潤子、1991. 「騎馬民族說の考古学」、『考古学その見方と解釈』、筑摩書房；森浩一 編、1993. 『馬の文化叢書 第一卷 古代—埋もれた馬文化』、馬事文化財団、横浜、再収録。
- 曾野寿彦、1955. 「新羅の十七等の官位成立の年代についての考察」、『古代研究』Ⅱ、東京大教養学部。
- 直木孝次郎、1988. 「神功皇后伝説の成立」、『古代日本と朝鮮·中国』、講談社學術文庫。
- 千寛宇、1976. 「三韓의 국가형성(三韓の国家形成)」、『韓國學報』3、一志社。
- 千寛宇、1977-1978. 「復元加耶史」上·中·下、『문학과 지성(文学と知性)』28-29-31。
- 千寛宇、1991. 『加耶史研究』、一潮閣。
- 千賀久、2002. 「加耶と倭の馬文化」、『第5回 歷博國際シンポジウム 古代東アジアにおける倭と加耶の交流 發表要旨』、佐倉、国立歴史民俗博物館。
- 千賀久、2004. 「日本出土の‘非新羅系’馬装具の系譜—大加耶圈の馬具との比較を中心に—」、『国立歴史民俗博物館研究報告 110 —第五回歷博國際シンポジウム：古代東アジアにおける倭と加耶の交流—』、佐倉：国立歴史民俗博物館。
- 請田正幸、1974. 「六世紀前期の日朝關係—任那‘日本府’を中心として—」、『朝鮮史研究会論文集』11。
- 村上英之助、1978. 「考古学から見た七支刀の製作年代」、『考古学研究』25-3。
- 崔秉鉉、1992. 『新羅古墳研究』、一志社。
- 崔秉鉉、1992. 「考古學的으로 본 加耶와 日本의 관계(考古学的に見た加耶と日本の関係)」、『韓國史市民講座』11、一潮閣、ソウル。
- 崔在錫、1987. 「新羅의 六村·六部(新羅の六村·六部)」、『韓國古代社會史研究』、一志社。
- 忠北大學校博物館、2004. 『清源 南城谷 高句麗遺蹟』。
- 土生田純之、2000. 「韓·日 前方後圓墳의 比較檢討(韓·日前方後円墳の比較檢討)」、『韓國의 前方後圓墳(韓國の前方後円墳)』、忠南大出版部；2006. 『古墳時代の政治と社会』、吉川弘文館。



- 土生田純之、2008. 「前方後円墳をめぐる韓と倭」、『古代日本の異文化交流』、勉誠出版。
- 樋口隆康、1972. 「武寧王陵出土鏡と七子鏡」、『史林』 55-4。
- 坂本太郎外3人、1965. 『日本書紀』 下、日本古典文学大系 68、岩波書店。
- 坂元義種、1978. 『古代東アジアの日本と朝鮮』、吉川弘文館。
- 坂元義種、1978. 「古代東アジアの日本と朝鮮—大王の成立をめぐる—」、『古代東アジアの日本と朝鮮』、吉川弘文館。
- 八木充、1963. 「任那支配の二形態」、『山口大学大学会誌』 14-2。
- 八木充、1964. 「大伴金村の失脚—官家支配から日本府支配へ—」、『日本書紀研究』 1。
- 平野邦雄、1980. 「金石文の史実と倭五王の通交」、『岩波講座 日本歴史』 1(原始・古代1)、岩波書店。
- 咸舜燮、2002. 「신라와 가야의 冠에 대한 序說(新羅と加耶の冠に対する序說)」、『大加耶와 周邊諸國(大加耶と周辺諸国)』、高靈郡・韓國上古史學會。
- 穴沢義功、2004. 「日本古代の鉄生産」、『国立歴史民俗博物館研究報告』 110、佐倉。
- 喜田貞吉、1918. 「石上神宮の神宝七枝刀」、『民族と歴史』 1-1。